

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第155集

# 高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書

猿ヶ石川中小河川改修関連発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

高野湖Ⅰ 遺跡図 正 訂 更 正

頁	行	誤	正
目次(3)	30	基本Ⅰ層図	基本土層図
目次(3)	32	基本Ⅰ層観察地点	基本土層観察地点
目次(5)	17	Ⅱ-19~21号土構・遺構	Ⅱ-19~21号土坑・遺構
目次(5)	21	Ⅱ-33~58号土構・遺構	Ⅱ-33~58号土坑・遺構
目次(6)	22	Ⅱ-5号住居跡あるいは坑張 の土器観察表	Ⅱ-5号住居跡坑張以前ある いは坑張時の土器観察表
78	31	I-6・12土坑	I-6・12号土坑
94	1	底面 <u>は</u> から外傾し	底面から外傾し
96	8	最大21である。	最大21 <u>cm</u> である。
96	14	時期 <u>の</u> 不明である。	時期 <u>は</u> 不明である。
99	1	ピットを伴う船跡状を	ピットを伴 <u>い</u> 船跡状を
102	31	やや南西 <u>方</u> へ傾斜する。	やや南西 <u>方</u> へ傾斜する。

# 高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書

猿ヶ石川中小河川改修関連発掘調査

## 序

広大な面積を有する本県は、縄文時代の遺跡を中心とした数多くの埋蔵文化財包蔵地が分布し、7,600カ所を越える遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保存していくことは、われわれ県民に課せられた責務であります。

現代生活を豊かにし、快適な生活を送るための地域開発も県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相いれない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的な課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設の趣旨にもとづき、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむをえず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告の遠野市高瀬Ⅰ遺跡は、遠野盆地の中央に舌状に張り出した台地に立地し、昭和63年・平成元年の発掘調査によって縄文時代の狩り場跡や平安時代の集落跡であることが明らかになりました。特に、集落跡は北上川中流域と沿岸部にかかわる歴史を解明するうえで貴重な資料となるものであります。

この報告書が研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりますが、これまでの発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜りました関係各位に衷心より謝意を表します。

平成2年8月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村直

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県遠野市松崎町駒木地内に所在する高瀬<sup>たかみ</sup>I遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 発掘調査は、猿ヶ石川中小河川改修に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査であり、野外調査は、昭和63年8月1日～10月28日、平成元年7月17日～10月13日に実施した。調査面積はそれぞれ3,000㎡、2,700㎡である。
3. 発掘調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構32基、土坑2基、平安時代の住居跡16棟、住居跡状遺構2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑82基、溝跡3条、焼土2基、古代以降の溝跡2条、近世以降の墓墳7基などが検出された。出土遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品、土師器、須恵器、金属製品、鉄滓、炭化材、種子などである。
4. 遺物は実測図、拓影図及び写真に掲載することを原則としたが、小破片や同一個体の破片は割愛した。
5. 遺物番号は遺物の種類に関係なく、遺構毎に連番を付して遺物番号とした。  
例：34II 5 住 8 → 図版第34図、II - 5号竪穴住居跡、No 8
6. 土層の色調観察は、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」による。
7. 調査及び本報告書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1の地形図、岩手県遠野土木事務所作成の千分の1の地形図を使用した。また、標高は東日本測量設計株式会社作成の成果表による。
8. 各種鑑定にあたっては、下記の方々に依頼した。(敬称略)  
石 質 鑑 定 佐藤 二 郎 (佐藤地質工学研究所)  
火 山 灰 の 分 析 三辻 利 一 (奈良教育大学)  
炭化材の材質鑑定 早坂 松次郎 (岩手県木炭協会)  
墨 書 解 読 平川 南 (国立歴史民俗博物館)  
墨 書 解 読 武田 夏 実
9. 野外調査は、初年度が小田野哲憲、斎藤博司、次年度が平井進、斎藤實、斎藤博司が担当した。室内整理及び報告書の執筆は斎藤博司が担当した。
10. 野外調査にあたっては、遠野市教育委員会及び地元の方々の協力を得た。
11. 本遺構から出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

# 目 次

序

例 言

## 本 文

I. 調査に至る経過	2	3. 中世以降の遺物	170
II. 遺跡の立地と環境	3	VI. まとめ	173
III. 調査方法と室内整理	10	1. 平安時代	173
IV. 検出された遺構と遺構内出土遺物	17	(1) 遺構の分布	173
1. 竪穴式住居跡	17	(2) 竪穴住居跡	173
2. 住居状遺構	80	(3) 掘立柱建物跡	178
3. 掘立柱建物跡	84	(4) 土坑	181
4. 土坑	90	(5) 溝跡	182
5. 陥し穴状遺構	123	(6) 集落の構成	182
6. 焼土遺構	147	(7) 出土遺物	185
7. 溝跡	149	(8) まとめ	200
8. 墓塚	160	2. 縄文時代	202
V. 遺構外の出土遺物	166	(1) 陥し穴状遺構	202
1. 古代の遺物	166	(2) まとめ	203
2. 縄文時代の遺物	170		
付篇 1. 高瀬 I 遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	204		
2. その他の遺跡出土火山灰の蛍光 X 線分析	207		
3. 高瀬 I 遺跡出土土器の蛍光 X 線分析	209		
4. 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告	211		

## 図 版

第 1 図 地形図	4	第 4 図 基本工層図	7
第 2 図 地質図	5	第 5 図 遺構・土器実測図凡例	12
第 3 図 基本工層観察地点	6	第 6 図 遺跡の位置図	13

第7图	高瀬I遺跡遺構配置図……………15	第39图	II-8号住居跡・遺構……………55
第8图	II-1号住居跡・遺構……………18	第40图	II-8号住居跡・遺物(1)……………56
第9图	II-1号住居跡・遺物(1)……………19	第41图	II-8号住居跡・遺物(2)……………57
第10图	II-1号住居跡・遺物(2)……………20	第42图	II-8号住居跡・遺物(3)……………58
第11图	II-1号住居跡・遺物(3)……………21	第43图	II-9号住居跡・遺構(1)……………60
第12图	II-4号住居跡・遺構……………23	第44图	II-9号住居跡・遺物(1)……………61
第13图	II-4号住居跡・遺物(1)……………24	第45图	II-9号住居跡・遺物(2)……………62
第14图	II-4号住居跡・遺物(2)……………25	第46图	II-10号住居跡・遺構……………63
第15图	II-4号住居跡・遺物(3)……………26	第47图	II-10号住居跡・遺物(1)……………64
第16图	II-6号住居跡・遺構……………28	第48图	II-10号住居跡・遺物(2)……………65
第17图	II-6号住居跡・遺物(1)……………29	第49图	II-12号住居跡・遺構……………67
第18图	II-6号住居跡・遺物(2)……………30	第50图	II-12号住居跡・遺物……………68
第19图	II-2号住居跡・遺構……………31	第51图	II-13号住居跡・遺構……………70
第20图	II-2号住居跡・遺物(1)……………33	第52图	II-13号住居跡・遺物……………71
第21图	II-2号住居跡・遺物(2)……………34	第53图	II-14号住居跡・遺構……………72
第22图	II-5号住居跡・遺構(1)……………36	第54图	II-14号住居跡・遺物……………73
第23图	II-5号住居跡・遺構(2)……………37	第55图	II-16号住居跡・遺構……………74
第24图	II-5号住居跡・遺物(1)……………39	第56图	II-16号住居跡・遺物……………75
第25图	II-5号住居跡・遺物(2)……………40	第57图	I-1号住居跡・遺構……………76
第26图	II-5号住居跡・遺物(3)……………41	第58图	I-1号住居跡・遺物……………77
第27图	II-5号住居跡・遺物(4)……………42	第59图	I-2号住居跡・遺構……………79
第28图	II-5号住居跡・遺物(5)……………43	第60图	I-2号住居跡・遺物……………79
第29图	II-5号住居跡・遺物(6)……………44	第61图	III-1号住居跡・遺構・遺物……………81
第30图	II-7号住居跡・遺構(1)……………46	第62图	II-17号住居状遺構……………82
第31图	II-7号住居跡・遺構(2)……………47	第63图	II-17号住居状遺構・遺物……………82
第32图	II-7号住居跡・遺物(1)……………48	第64图	I-3号住居状遺構……………83
第33图	II-7号住居跡・遺物(2)……………49	第65图	I-3号住居状遺構・遺物……………84
第34图	II-7号住居跡・遺物(3)……………50	第66图	II-2号獨立柱建物跡・遺物……………85
第35图	II-7号住居跡・遺物(4)……………51	第67图	II-1・2号獨立柱建物跡 ・遺構(1)……………86
第36图	II-7号住居跡・遺物(5)……………52	第68图	II-1・2号獨立柱建物跡 ・遺構(2)……………87
第37图	II-7号住居跡・遺物(6)……………53		
第38图	II-7号住居跡・遺物(7)……………54		

第69图	II-4~7号土坑·遺構	91	第98图	II-9·10号陷し穴状遺構	135
第70图	II-6号土坑·遺物	92	第99图	II-11号陷し穴状遺構·遺物	136
第71图	II-8·9号、I-1号土坑 ·遺構	93	第100图	II-11~13号陷し穴状遺構	137
第72图	I-1号土坑·遺物	94	第101图	II-14·15号陷し穴状遺構	139
第73图	I-2·4·6号土坑·遺構	95	第102图	II-16~18号陷し穴状遺構	141
第74图	I-6号土坑·遺物	96	第103图	II-19~21号陷し穴状遺構	143
第75图	I-7号土坑·遺物	97	第104图	II-22·23号陷し穴状遺構	145
第76图	I-7~11号土坑·遺構	98	第105图	II-24·25号陷し穴状遺構	146
第77图	I-11号土坑·遺物	99	第106图	II-1号焼土·遺構	147
第78图	I-12、III-1·3号土坑·遺構	101	第107图	II-1号焼土·遺物	148
第79图	III-4·5、II-10~12号土坑·遺構	103	第108图	I-1号焼土·遺構	149
第80图	II-13·14号土坑·遺構	104	第109图	I-1号焼土·遺物	149
第81图	II-12号土坑·遺物	105	第110图	II-1号溝跡·遺物(1)	150
第82图	II-15~18号土坑·遺構	107	第111图	II-1号溝跡·遺構	151
第83图	II-20号土坑·遺物	108	第112图	II-1号溝跡·遺物(2)	153
第84图	II-19~21号土構·遺構	109	第113图	II-1号溝跡·遺物(3)	154
第85图	II-22~25号土坑·遺構	111	第114图	II-1号溝跡·遺物(4)	155
第86图	II-26~28号土坑·遺構	113	第115图	II-2号溝跡·遺物	156
第87图	II-29~32、I-14号土坑·遺構	115	第116图	II-2·3号溝跡·遺構	157
第88图	II-33~58号土構·遺構	119	第117图	II-5号溝跡·遺物	160
第89图	II-45号土坑·遺物	120	第118图	I-1号墓塚·遺構	160
第90图	II-59~72号土坑·遺構	121	第119图	II-4·5号溝跡·遺構	161
第91图	II-1~3号陷し穴状遺構	124	第120图	II-2号溝跡·遺物	163
第92图	II-4号陷し穴状遺構	125	第121图	III-1号墓塚·遺物	164
第93图	I-1号陷し穴状遺構·遺物	126	第122图	I-2·3、III-1~4号 墓塚·遺構	165
第94图	I-1、III-1·2号 陷し穴状遺構	127	第123图	遺構外出土遺物(1)	167
第95图	III-3·4号陷し穴状遺構	129	第124图	遺構外出土遺物(2)	168
第96图	III-5·6、II-5号 陷し穴状遺構	131	第125图	遺構外出土遺物(3)	169
第97图	II-6~8号陷し穴状遺構	133	第126图	遺構外出土遺物(4)	170
			第127图	遺構外出土遺物(5)	171
			第128图	遺構外出土遺物(6)	172



第129図	調査範囲 模式図	173	第142図	甕類集成図(2)	195
第130図	長辺の規模別分布	174	第143図	黒書土器集成図(1)	198
第131図	住居跡床面積分布	174	第144図	黒書土器集成図(2)	199
第132図	カマドの長軸方位の分布	174	第145図	陥し穴状遺構の長軸径・短軸径・ 深さの分布	202
第133図	カマドの位置分布	175			
第134図	掘立柱建物跡	179			
第135図	土坑の長軸径・短軸径・深さの分布	181			
第136図	集落の構成	183			
第137図	器高・底径指数	189			
第138図	環類集成図(1)	190			
第139図	環類集成図(2)	191			
第140図	環類集成図(3)	192			
第141図	甕類集成図(1)	194			

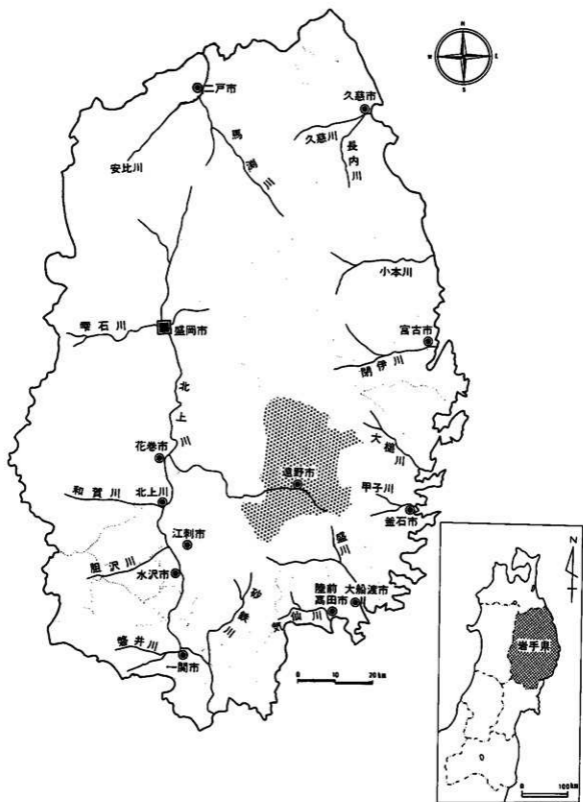
## 表

表1	周辺の遺跡一覧表(1)	8	表15	I-1号陥し穴状遺構・石器計測表	126
表2	周辺の遺跡一覧表(2)	9	表16	II-11号陥し穴状遺構・石器計測表	136
表3	II-5号住居跡・石器計測表	38	表17	遺構外石器計測表	170
表4	II-5号住居跡・鉄線計測表	38	表18	接合遺物一覧表	176
表5	II-5号住居跡あるいは拡張の 土器観察表	39	表19	遺構別遺物分類一覧表	187
表6	II-7号住居跡・石器計測表	45	表20	黒書土器一覧表	197
表7	II-10号住居跡・石器計測表	66			
表8	II-12号住居跡・石器計測表	68			
表9	II-16号住居跡・石器計測表	75			
表10	II-1号掘立柱建物跡・規模形態表	89			
表11	II-2号掘立柱建物跡・規模形態表	89			
表12	I-1号土坑・石器計測表	94			
表13	II-35-58号土坑・規模形態表	117			
表14	II-59-72号土坑・規模形態表	118			

## 写真図版

- 写真図版1 遺跡遠景 .....215
- 写真図版2 遺跡近景 .....216
- 写真図版3 II-1号住居跡・遺構.....217
- 写真図版4 II-4号住居跡・遺構.....218
- 写真図版5 II-6号住居跡・遺構.....219
- 写真図版6 II-2号住居跡・遺構.....220
- 写真図版7 II-5号住居跡・遺構.....221
- 写真図版8 II-7号住居跡・遺構.....222
- 写真図版9 II-8号住居跡・遺構.....223
- 写真図版10 II-9号住居跡・遺構.....224
- 写真図版11 II-10号住居跡・遺構.....225
- 写真図版12 II-12・16号住居跡・遺構...226
- 写真図版13 II-13号住居跡・遺構.....227
- 写真図版14 II-14号住居跡・遺構.....228
- 写真図版15 I-1号住居跡・遺構.....229
- 写真図版16 I-2、III-1号住居跡・遺構 230
- 写真図版17 II-17号住居状遺構 .....231
- 写真図版18 I-3号住居状遺構 .....232
- 写真図版19 II-1・2号壘立柱建物跡  
・遺構.....233
- 写真図版20 II-4~6号土坑・遺構.....234
- 写真図版21 II-7、III-1・3号  
土坑・遺構.....235
- 写真図版22 II-8・71・72号土坑・遺構236
- 写真図版23 III-4・5、II-9号  
土坑・遺構.....237
- 写真図版24 II-10~12号土坑・遺構.....238
- 写真図版25 II-13・14・16号土坑・遺構239
- 写真図版26 II-15・17号土坑・遺構.....240
- 写真図版27 II-18~20号土坑・遺構.....241
- 写真図版28 II-23・24号土坑・遺構.....242
- 写真図版29 II-21・22・25号土坑・遺構...243
- 写真図版30 II-26~28号土坑・遺構.....244
- 写真図版31 II-29~31号土坑・遺構.....245
- 写真図版32 II-59~62号土坑・遺構.....246
- 写真図版33 II-63~66号土坑・遺構.....247
- 写真図版34 II-67~70号土坑・遺構.....248
- 写真図版35 I-1・4・7号土坑・遺構...249
- 写真図版36 I-9・11、II-32号土坑  
遺構・基本土層.....250
- 写真図版37 I-2・14号土坑・遺構.....251
- 写真図版38 I-6・12号土坑・遺構.....252
- 写真図版39 II-1~3号  
陥し穴状遺構.....253
- 写真図版40 II-4、III-1・2号  
陥し穴状遺構.....254
- 写真図版41 II-5~7号  
陥し穴状遺構.....255
- 写真図版42 II-8~10号  
陥し穴状遺構.....256
- 写真図版43 II-11~13号  
陥し穴状遺構.....257
- 写真図版44 II-14~16号  
陥し穴状遺構.....258
- 写真図版45 II-17・18、III-6号  
陥し穴状遺構.....259
- 写真図版46 II-19~21号  
陥し穴状遺構.....260
- 写真図版47 II-22~24号  
陥し穴状遺構.....261

写真図版48	II-25、I-1号 陥し穴状遺構……………262	写真図版71	II-9号住居跡・遺物(2) II-10号住居跡・遺物(1)……………285
写真図版49	III-3~5号 陥し穴状遺構……………263	写真図版72	II-10号住居跡・遺物(2) II-12号住居跡・遺物……………286
写真図版50	II-1、I-1号焼土 II-1号溝跡……………264	写真図版73	II-13号住居跡・遺物 II-14号住居跡・遺物(1)……………287
写真図版51	II-2・3号溝跡……………265	写真図版74	II-14号住居跡・遺物(2) II-16号住居跡・遺物
写真図版52	II-4・5号溝跡……………266		I-1号住居跡・遺物……………288
写真図版53	I-1・2号墓墳……………267	写真図版75	I-1号焼土、 I-2・3、III-1、II-17号住居跡、 II-2号埋立柱建物跡、 II-6、I-1・6・7号土坑・遺物289
写真図版54	I-3、III-1号墓墳……………268		
写真図版55	II-1号住居跡・遺物(1)……………269	写真図版76	I-11、II-12・20・45号土坑、 I-1、II-11号陥し穴状遺構、 II-1号焼土、 II-1号溝跡・遺物(1)……………290
写真図版56	II-1号住居跡・遺物(2) II-4号住居跡・遺物(1)……………270		
写真図版57	II-4号住居跡・遺物(2)……………271		
写真図版58	II-6号住居跡・遺物 II-2号住居跡・遺物(1)……………272	写真図版77	II-1号溝跡・遺物(2)……………291
写真図版59	II-2号住居跡・遺物(2)……………273	写真図版78	II-1号溝跡・遺物(3)……………292
写真図版60	II-2号住居跡・遺物(3) II-5号住居跡・遺物(1)……………274	写真図版79	II-1号溝跡・遺物(4) II-2号溝跡・遺物……………293
写真図版61	II-5号住居跡・遺物(2)……………275		
写真図版62	II-5号住居跡・遺物(3)……………276	写真図版80	II-5号溝跡、 I-2、III-1号墓墳・遺構294
写真図版63	II-5号住居跡・遺物(4)……………277		
写真図版64	II-5号住居跡・遺物(5) II-7号住居跡・遺物(1)……………278	写真図版81	遺構外の遺物(1)……………295
写真図版65	II-7号住居跡・遺物(2)……………279	写真図版82	遺構外の遺物(2)……………296
写真図版66	II-7号住居跡・遺物(3)……………280	写真図版83	遺構外の遺物(3)……………297
写真図版67	II-7号住居跡・遺物(4)……………281		
写真図版68	II-7号住居跡・遺物(5)……………282		
写真図版69	II-7号住居跡・遺物(6) II-8号住居跡・遺物(1)……………283		
写真図版70	II-8号住居跡・遺物(2) II-9号住居跡・遺物(1)……………284		



岩手県全図

## I. 調査に至る経過

猿ヶ石川中小河川改修事業は、猿ヶ石川の支流である早瀬川との合流点から上流側5.8kmのほか、支川の小島瀬川および五日市川の改修であり、昭和53年度から着手している治水事業である。

これにかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で協議がなされた。協議の経過は、昭和58年9月19日付け「河第437号」により岩手県土木部河川課長から岩手県教育委員会文化課長あて猿ヶ石川中小河川改修事業にかかわる遺跡の分布調査について依頼があり、岩手県教育委員会は昭和58年10月19日～21日に分布調査を実施した。その後、さらに岩手県教育委員会は県営ほ場整備事業にかかる遠野市松崎地区の分布調査および試掘調査を実施し、昭和62年11月9日付け「教文432号」により岩手県土木部に対して高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査が必要である旨回答し協議を重ねた。その結果、県営ほ場整備事業および市道関連遺跡の調査は遠野市教育委員会の事業とし、猿ヶ石川中小河川改修に関連する調査は岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

これにより、当埋蔵文化財センターは高瀬Ⅰ遺跡の4,900㎡について、昭和63年7月1日付け委託契約により調査に着手することとなった。しかし、用地内の墓地移転が未了であり、さらに設計変更に伴う調査範囲の拡大等のため、昭和63年度は3,000㎡についてのみ調査を終了した。調査未了および調査面積拡大区域を含む2,700㎡については、平成元年度の継続調査となり、平成元年7月1日付け委託契約にもとづいて調査したものである。

## II. 遺跡の立地と環境

### 1. 位置

高瀬Ⅰ遺跡は岩手県遠野市松崎町第19地割字松木田28-1ほかに所在する。東日本旅客鉄道釜石線遠野駅の北東3.3km、国道340号線からは遠野市指定史跡「追分の碑」より北0.9km付近に位置する。

本遺跡の所在する遠野市は、北上山地中南部の遠野盆地にあたり、夏は暑く冬は寒冷な地である。そして沿岸部と内陸部を結ぶ交易の要所でもある。市境は東が大槌町・釜石市、南が住田町・江刺市、西が宮守村・東和町、北は川井村・大迫町に接し、面積は661.93km<sup>2</sup>である。本遺跡は遠野盆地の中央部に立地する。

### 2. 地形と地質

遠野市の地形は壮年期の形態をとり、遠野盆地の周囲には北上山地を構成する東に六角牛山(1,294m)、南に物見山(917m)・貞任山(884m)、西に高清水山(797m)・石上山(1,038m)、北に天ヶ森(756m)・薬師岳(1,645m)のなだらかな山陵が並ぶ。北方には北上山地の主峰早池峰山の姿が望まれる。北上山地は火山性活動が退化し基盤は安定している。当地域は花崗岩の分布域で「遠野・土淵花崗岩」と称される。花崗岩は深層風化が進み砂質化している。

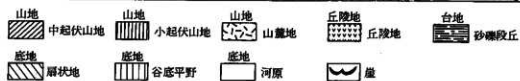
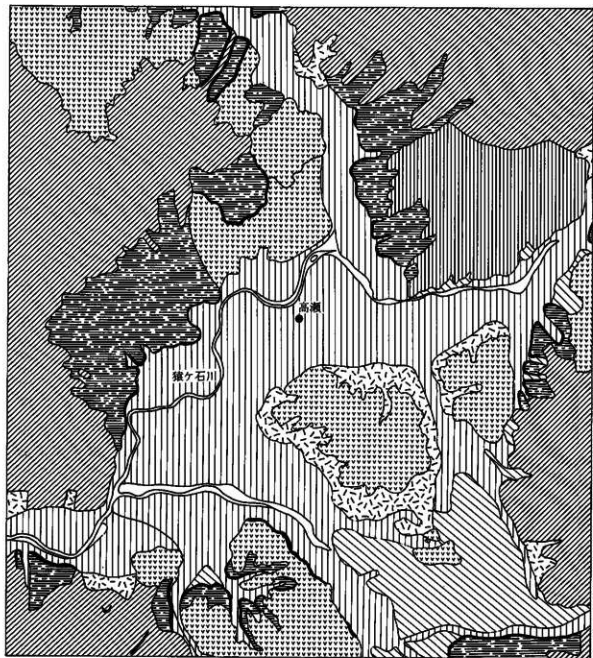
遠野盆地を北東から南西に流れる猿ヶ石川は、小河川を合流し盆地の抜け道ともいえる物見山と高清水山の谷底から流路を西に変えて北上川に注ぎ、北上川水系中流域の1つを構成している。猿ヶ石川水系は小河川の集合する谷底平野及び台地状地形を形成し、これらの河川は扇状地状の地形を発達させ、周囲の谷底平野との間に幾らかの比高がある。猿ヶ石川流域は昭和22・23年のキャサリン台風・アイオン台風で相当の被害をうけている。本遺跡の対岸、高清水山の裾野も例外にもれず、上松崎橋上流の堤防が決壊し大きな被害をうけた折、本遺跡は洪水からまぬがれている。

遠野盆地にみられる地形は、猿ヶ石川流域の谷底平野と開析扇状地が主なものである。地域一帯は灰色低位土壌で、分布は狭いが水田としての生産力が高い。

調査区内の標高は269～273m、猿ヶ石川との比高は5mである。また、調査区内には十和田a火山灰や安家火山灰の降下が認められる。遺跡の現況は畑である。



第1図 地形図



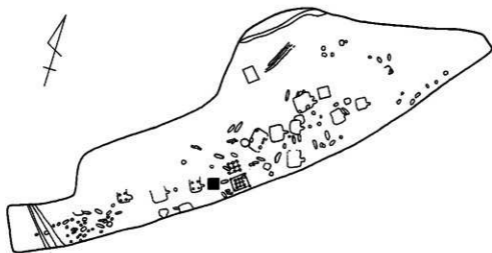
第2図 地質図



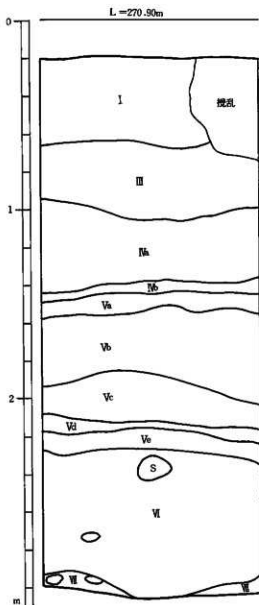
### 3. 基本層序

基本層序の概略は、以下のとおりである。

第Ⅰ層	7.5YR2/2	黒褐色	耕作土。層厚20~25cm。
第Ⅱ層	7.5YR2/1	黒色	猿ヶ石川側沿いになるにつれて堆積が厚く、部分的に安家火山灰を挟む。層厚20~100cm。
第Ⅲ層	10 YR5/8	黄褐色	シルト質でやや粘性があり、しまりがある。透構検出面で耕作痕が残る。また水田造成時に上部が攪乱をうける。層厚30~50cm。
第Ⅳa層	10 YR6/6	明黄褐色	砂。第Ⅳ層としては部分的にⅣb層のように粘土を挟む。層厚20~50cm。
第Ⅳb層	10 YR5/6	黄褐色	砂質シルト。Ⅳa層とⅤa層の混じりがみられ、しまりがある。層厚0~20cm。
第Ⅴa層	10 YR6/4	にぶい黄橙色	粘土。しまりがある。層厚8~12cm。
第Ⅴb層	10 YR6/6	明黄褐色	砂。固くしまる。層厚30~50cm。
第Ⅴc層	10 YR5/3	にぶい黄褐色	砂。かなり固くしまる。層厚15~30cm。
第Ⅴd層	10 YR6/2	灰黄褐色	粘土。Ⅴe層が混じり、しまりがある。層厚0~10cm。
第Ⅴe層	10 YR5/3	にぶい黄褐色	砂。微粒でしまりがある。層厚0~10cm。
第Ⅵ層	10 YR5/2	黄褐色	粘土。川の氾濫による堆積である。層厚60~80cm。
第Ⅶ層			礫層。



第3図 基本土層観察地点



第4図 基本土層図

基本層序の観測地点は調査区中央部とした。水田造成時に第III層上部が攪乱をうる。

第II層は3区の豫ヶ石川沿いに厚く堆積し、土層観測地点には認められない。また、地点によっては第II層に5,000年前に降下した安家火山灰を挟む所も認められ、検出された遺構の埋土上部に厚く堆積する。遺構の多くは第III層で検出されている。竪穴住居跡の多くは第IV層を床面とし、陥し穴状遺構のなかにはこれを貫いているものもある。

第V層のa-e層は礫が表れるまで粘土と砂の互層である。中でもVb層とVc層はかなりしりまりがある。礫が表れると旧川床となる。

層の逆転は認められない。

#### 4. 周辺の遺跡

岩手県教育委員会の遺跡台帳に登録されている遠野市内の遺跡数は233ヵ所である。

これを種類別にみると、館跡が全体の4分の1を占める。集落跡の7遺跡はすべて縄文時代に所属し、そのうち古代と複合するのは3遺跡である。しかし、近年調査された蓮田遺跡、高瀬II遺跡をみると、今後集落跡が増加す

るものと推測される。その他は洞穴遺跡3、寺院跡など3、製鉄跡1、塚1である。

全遺跡数の7割を占める散布地の内訳をみると、半数以上が縄文時代に所属する。時期は全般にわたっているが、早期・前期が主体である。これらのうち、古代の遺物は18遺跡で確認さ

れ、縄文時代との複合は9遺跡である。遠野盆地は、古く縄文時代から人間の活動が活発になされていたと推察される。

占地別にみると、全遺跡数の4分の1を占める館跡が盆地を巡る丘陵に張り出した裾野に立地している。集落跡は7遺跡すべてが猿ヶ石川沿いに、そのうち6遺跡が盆地内に立地している。発掘調査が少ないため詳しいことは不明であるが、集落跡は猿ヶ石川の高位段丘面と丘陵裾野の緩斜面に立地している傾向が認められる。縄文時代と複合する古代の集落跡は前者に属する。

表1 周辺の遺跡一覧表(1)

No	遺跡名	種別	遺物等	No	遺跡名	種別	遺物等
1	大萩 I	散布地	石神	30	薬研淵II	散布地	土師器
2	大萩 II	散布地	縄文土器	31	薬研淵I	散布地	土師器
3	荒屋 I	散布地	敲石	32	蓬田	散布地	縄文(後・晩期)・土師器
4	荒屋 III	散布地		33	町田	散布地	
5	坂本	散布地		34	谷地	散布地	縄文
6	南村	散布地	土器	35	高瀬 II	散布地	土師器
7	松崎矢崎	散布地	土器	36	高瀬 I	集落跡	縄文・土師器・蕨手刀
8	松崎館	館跡		37	駒木高瀬	散布地	
9	松崎館跡	館跡		38	中田	散布地	縄文・土師器
10	荒川 II	散布地	石斧	39	谷地 II	散布地	縄文
11	宮代 III	散布地	縄文	40	谷地山館	館跡	
12	宮代 II	散布地	縄文	41	五日市館	館跡	
13	宮代 I	散布地	縄文	42	向野	散布地	
14	高場	散布地		43	阿部館	館跡	
15	東館	館跡		44	中土淵	散布地	縄文・土師匠
16	上ノ山	集落跡	縄文	45	蓬地	集落跡	縄文・土師器
17	横田城	館跡		46	下似貝	散布地	
18	金ヶ沢 I	集落跡	縄文	47	八幡沢館	館跡	
19	金ヶ沢 II	集落跡	縄文	48	駒木海上	散布地	土器
20	天神 I	散布地	縄文	49	阿曾沼館	館跡	
21	天神 IV	散布地	縄文	50	上駒木	散布地	石槍
22	天神 II	散布地	縄文	51	駒木小田沢	散布地	土器
23	天神 III	散布地	縄文	52	和山	散布地	土器・石匙
24	光興寺館	館跡		53	小倉	散布地	土器
25	角鼻館	館跡		54	火渡館	館跡	
26	上宮野目	散布地	土師器・須恵器	55	栃内西内 I	散布地	土器・石器・土偶
27	下柳 I	散布地		56	火の鼻	散布地	土器
28	大柳	集落跡	縄文・土師器	57	火鼻館	館跡	
29	畑中	散布地	土師器	58	栃内新田	散布地	土器

表2 周囲の遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	種別	遺物等	No	遺跡名	種別	遺物等
59	棚内下の渡	散布地	石斧	79	安戸	散布地	
60	棚内館	館跡		80	善応寺	散布地	土器
61	棚内山崎I	散布地	土器・石刀・石斧・石鏃	81	天王	散布地	
62	棚内山崎II	散布地	土器・石鏃	82	長谷場	散布地	
63	林崎	散布地	鏃	83	八幡	散布地	土器
64	沢の口館	館跡		84	相田	散布地	土器
65	角城(久手)	館跡		85	鎌倉城跡	館跡	
66	棚内太櫓	散布地	土器・石刀	86	新里愛宕裏	散布地	土器
67	棚内鐘突堂	散布地		87	新里五器洗場	散布地	土器
68	山口館	館跡		88	巫子塚	散布地	土器・石棒・石斧・飾石
69	山口I	散布地		89	罫沢館	館跡	
70	山口II	散布地	土器・石鏃・石棒・石槍	90	西風館	館跡	
71	柏崎館	館跡		91	西風館	館跡	
72	高室I	散布地	土器	92	崎蝦夷岩	洞穴	縄文(中・後・晩期)土器
73	大将館	館跡		93	寒風II	散布地	縄文(早or前期)土器
74	権現前	散布地	土器	94	寒風III	散布地	縄文(早or前期)土器・石鏃
75	飛鳥田II	散布地	石皿	95	寒風I	散布地	縄文(早期)土器
76	飛鳥田I	散布地	土器・石鏃	96	寒風V	散布地	縄文(前期)土器
77	鼻(花)館	館跡		97	宮野目I	散布地	縄文(早期)土器
78	沢田	散布地	土器石鏃石槍石匙石鏃				

### III. 調査方法と室内整理

#### 1. 調査方法

##### (1)グリッドの設定

グリッドのメッシュは公共座標の軸線に合わせた。グリッドは1辺を5mとし、調査区全体が入るように北から南に向かってA・B・C……、東から西に向かって1・2・3……とした。グリッド設定の原点は調査区内の東に任意の1点をとり、その点から公共座標に合わせてメッシュを組んだものである。基準点1・2・3の測量成果は以下のとおりである。

基準点1 X-71295.899m Y+61955.352m H 273.720m

基準点2 X-71295.899m Y+61905.000m

基準点3 X-71368.547m Y+61955.352m

なお、調査が两年にわたることと、調査区の標高差を考慮してグリッドと並行して、調査区をⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の名称で大別し、Ⅰ区：調査区東側、Ⅱ区：調査区中央部から西側、Ⅲ区：調査区北西部とした。

##### (2)粗掘り・遺構検出

遺構検出までの土層除去は、人力及び重機によって実施した。検出された遺構は、「Ⅱ-7号住居跡」のように調査区毎に検出された順序に命名したため、精査により遺構にならなかったものは欠番とした。

##### (3)精査・実測

遺構の精査は原則として4分法及び2分法とし、精査の各段階において必要な図面作成や写真撮影を実施した。出土遺物の取上げについては、遺構内のは遺構名・出土位置・レベルを記録し、遺構外のは地区名と層位を記入したうえ取り上げた。

実測は、簡易造り方によって行った。実測図は20分の1の縮尺を基本とした。遺構のレベル計測は50cm間隔で行った。

##### (4)写真撮影

撮影には35mm判2台（モノクロ・カラーリバーサル）と6×7判1台を使用した。

#### 2. 室内整理

##### (1)室内整理

遺構図面の点検・合成、第2原図作成、トレース、遺構図版・写真図版作成、遺物注記、復元、登録、拓本、実測、トレース、写真撮影、遺物図版作成を平行してすすめ、さらに写真図

版作成、遺物台帳作成を行った。

(2)図版

遺構配置図は野外調査時に作成した個々の遺構図面を合成し、縮小したものである。各遺構図面は60分の1を原則とし、これに該当しないものにはスケールを付した。方位は真北を示している。

遺物の縮尺は3分の1を原則とし、これに該当しないものには縮尺を付した。

図面中に使用したスクリントーン及び作図の表現法は凡例に示したとおりである。遺構名は野外調査時に使用した遺構名を用いることを原則にしたが、変更したものがある。

## 凡 例

1. 土器観察における略号は、以下のとおりとした。

<p>・種類    H：土師器           S：須恵器           A：あかやき土器</p> <p>・登録番号    住：竪穴住居跡                   建：掘立柱建物跡                   坑：土坑                   陥：陥し穴状遺構                   溝：溝跡                   墓：墓墳                   焼：焼土遺構</p>	<p>・調整    yn：ヨコナデ           c：カキメ           h：ハケメ           k：ヘラケズリ           m：ヘラミガキ           n：ヘラナデ           t：タタキメ           r：再調整           l：ロクロ使用</p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. その他の略号・スクリーンは、以下のとおりとした。

s            石  
土器・△△ 土器  
P、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub> 柱穴・ピット



焼土



攪乱



粘土



調査区外



地山

外面黒色処理

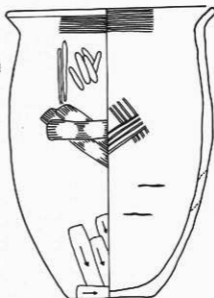
内面黒色処理



ヘラケズリ調整

ヘラミガキ調整

ヨコナデ



ヘラミガキ調整

ヘラナデ調整

ハケメ調整

輪積痕

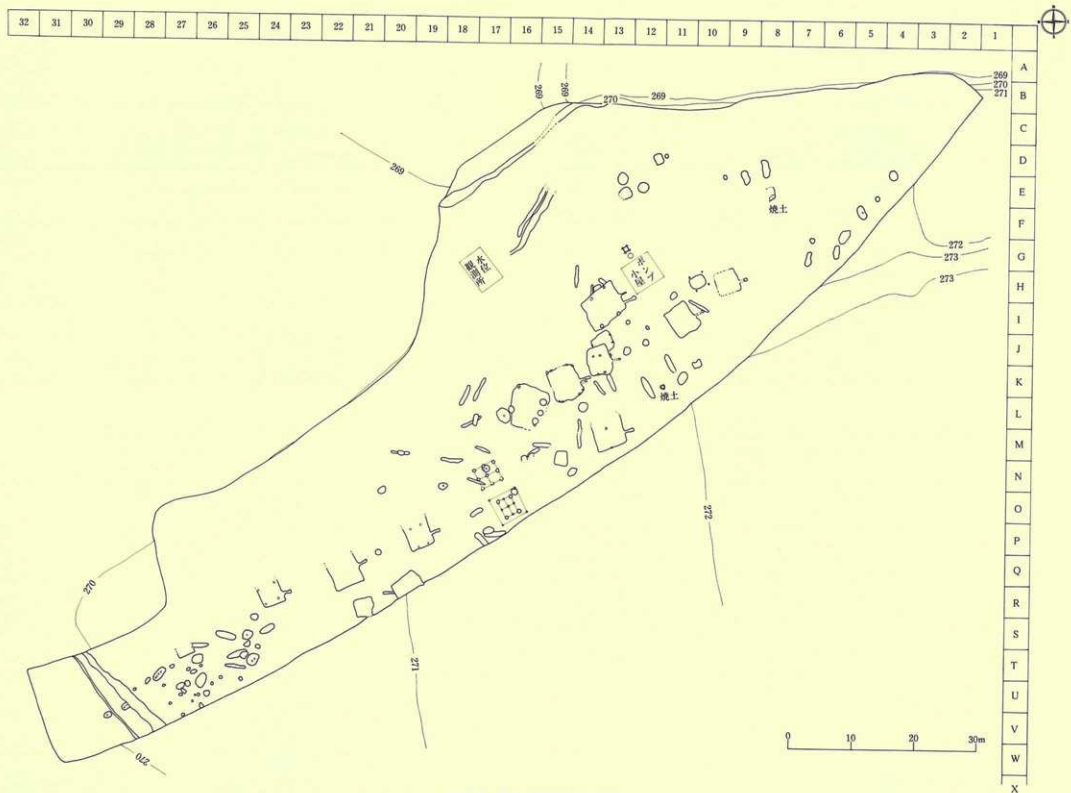
ヘラケズリ調整

第 5 図 遺構・土器実測図凡例



第 6 図 遺跡の位置図





第7図 高瀬I遺跡遺構配置図

## IV. 検出された遺構と遺構内出土遺物

本遺跡から検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡16棟、住居状遺構2棟、掘立柱建物跡2棟、土坑84基、陥し穴状遺構32基、墓墳7基、溝跡5条、焼土遺構2基である。

### 1. 竪穴住居跡

#### II-1号竪穴住居跡

〈遺構〉(第8図、写真図版3)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の中心部に位置し、II-4・5・7号竪穴住居跡と隣接する。表土を除去したところ褐色土面に黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。II-1号陥し穴状遺構・II-6号竪穴住居跡と重複し、本遺構がII-1号陥し穴状遺構の北端及びII-6号竪穴住居跡のカマド(煙道部から煙出し部)の一部をきって構築されている。

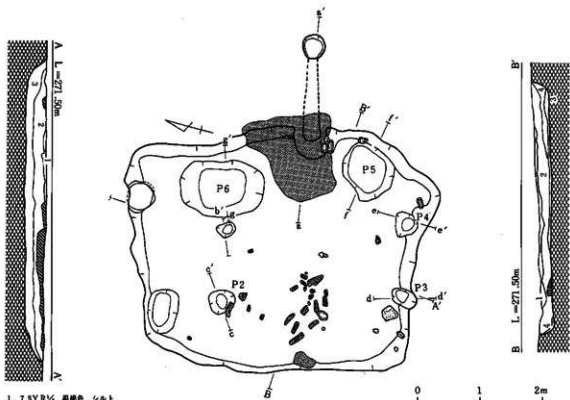
遺構の形態と規模は東西の長軸方向が410cm、短軸が355cmで、西辺が東辺に比して短く歪んだ隅丸長方形を呈する。カマドの主軸方向は真東から17度北偏する。壁高は東壁28cm、南壁30cm、西壁27cm、北壁30cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の3層に大別される。本遺構は埋土下部に多量の炭化材片や焼土が混入し、焼失廃棄されたものである。層位状況から自然堆積と推定される。

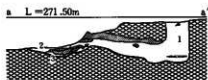
床面は基本層序第IV層で黄色砂層である。平坦であるが、東から西へ10cmほど傾斜する。主柱穴は4本検出され、2本が南壁に接している。床面からの深さは45～54cmである。北壁に接して2本の柱穴が検出されている。床面からの深さは20cmである。入口とも推定されるが、II-6号住居跡と重複する部分でもあり、明確ではない。床面は堅くしまり、周溝や貼床は認められない。

カマド臨北側と南側床面から土坑が検出されている。北側土坑の平面形は開口部が135cm×85cmの楕円形、底部が75cm×60cmの歪んだ長方形を呈する。床面からの深さは最大24cmである。底面は平坦で、壁は南北壁が緩やかに、東西壁が直立気味に立ち上がる。埋土は炭化材や焼土を含み、堅めておらず掘り込まれたものである。用途は不明である。南側土坑の平面形は開口部が径84cm、底部が径62cmほどの不整形を呈する。床面からの深さは最大33cmである。底面は中央付近が凹み、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は褐色土、黄褐色土で構成される。本土坑は貯蔵穴と推定される。

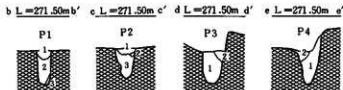
カマドは東壁中央南寄りに構築され、遺存状態は良好である。規模は袖部から煙出し部まで200cm前後で、煙道の幅が最大26cm、袖部の幅が80cmである。袖部には袖材の一部として使用さ



1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$  暗褐色 シルト
  2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$  暗褐色 シルト
  3. 7.5Y R $\frac{1}{2}$  褐色 砂質シルト
  4. 10Y R $\frac{1}{2}$  黄褐色 地山の砂質土を多く含む
- 部分的に炭化物が混じる  
炭化物、土器片を多く含む

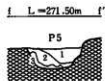


1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$  暗褐色
2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$  濃い褐色 炭化物が多い
3. 地山、やや成成を受けている



- |    |                                  |
|----|----------------------------------|
| P1 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 砂質シルト |
|    | 3. 10Y R $\frac{1}{2}$ 黄褐色 砂     |
| P2 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
|    | 3. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 砂質シルト |
| P3 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 砂質シルト |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
| P4 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 砂質シルト |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
| P5 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 シルト   |
|    | 3. 10Y R $\frac{1}{2}$ 黄褐色 シルト   |
| P6 | 1. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色 砂     |
|    | 2. 7.5Y R $\frac{1}{2}$ 褐色       |
|    | 3. 10Y R $\frac{1}{2}$ 黄褐色       |

焼土や土器片が混入  
褐色土のブロック、炭化物や焼土を含む  
床面と同じ。混めていない。



第8図 II-1号住居跡

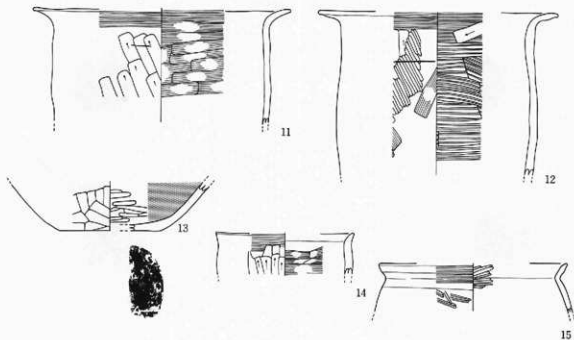


〈出土遺物〉(第9~11図、写真図版55・56)

遺物は床面直上とカマド、埋土、P5・6・8から出土する。器種は坏、甕、壺、鉢、鉢、長頸壺で構成され、坏と甕が主体である。II-4・6号堅穴住居跡出土遺物と接合する土器が3点ある(以下、複数遺構の接合遺物は床面直上出土の住居跡に記述する)。土器以外では鉄製品・銅製品が出土する。

坏形土器はすべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りが主体である。3(BI1b類)・4(BI1c類)・8(BI2c類)などわずかであるが、体部下端及び底部に手持ち篋削りと回転篋削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面黒色処理が施され、2と6(BI1a類)が二次的加熱をうけている。7(BI1a類)は底部に「メ」の篋による条痕が認められる。

甕形土器は土師器がロクロ不使用で輪積痕や木葉痕をもつ大型のものが多い。須恵器は体部



15 S=1/4

土器観察表

大図号	写真図版	種別	分類	法 量			外 面 調 整			内 面 調 整			成形	焼成	色調	その他		
				口径	底径	高さ	口縁部	体部(下端)	底部	口縁部	体部	底部						
30	1	11	11	2	甕	A 1.4	28.0	—	20	△	—	20	△	—	滑ロクロ	—	57K	輪積痕
30	1	12	12	1	甕	A 1.4	28.5	—	20	△-△	—	20	△	—	滑ロクロ	—	57K	輪積痕
30	1	13	13	16	甕	A	—	2.0	—	△	△	—	△	△	滑ロクロ	—	7.57K	輪積痕
30	1	14	14	12	甕	A 1.5	31.0	—	20	△	—	20	△	—	滑ロクロ	—	7.57K	輪積痕
30	1	15	15	6	甕	A 1.4	28.0	—	20	△	—	20	△	—	滑ロクロ	—	7.57K	輪積痕

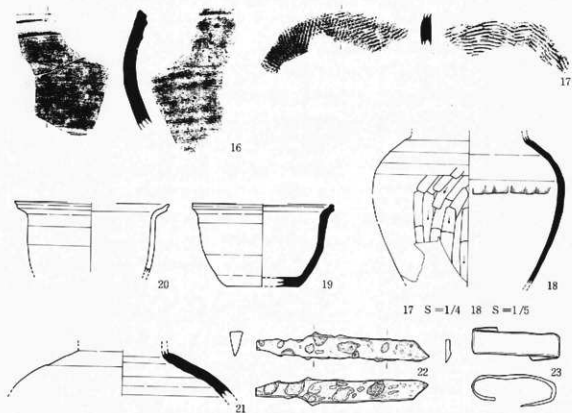
第10図 II-1号住居跡出土遺物(2)

片が多く大型である。希にあかやき土器の甕も認められる。

壺形土器は須恵器だけにみられ、21はロクロ使用成形による長頸壺である。

鉢形土器はロクロ使用成形の薄手で小型である。

土器以外では22が両端を欠く刀子と推測される。現存長9.1cm、刃部幅1.2cm、重さ9.18gである。23は長さ9.2cm、幅1.2cm、厚さ0.1cm、重さ8.7gの銅製品で、現存の形態は帯状のものが4.5cm×1.3cmの楕円状を呈する。その他少量であるが、歯や貝殻、食滓が埋土から出土する。また、山桃と推測される種子が10数個まとまって貯蔵穴と推定される土坑から出土する。



17 S=1/4 18 S=1/5

土器観察表

実測図	写真図	種類	器種	分類	数量		外面調整		内面調整		成形	色調	その他
					口縁部	器底	口縁部	器底	口縁部	器底			
11-1-1	16	16	S	壺	片	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	17	17	S	壺	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	18	18	S	鉢	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	19	19	S	鉢	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	20	20	S	鉢	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	21	21	S	壺	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	22	22	S	刀子	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—
11-1-1	23	23	S	銅製品	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—

第11図 II-1号住居跡出土遺物(3)

## II-4号竪穴住居跡

〈遺構〉(第12図、写真図版4)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の南側に位置し、II-1・2号竪穴住居跡と隣接する。表土を除去したところ褐色土面に黒色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構は水道管埋設により北壁が切られている。

遺構の形態と規模は南北の長軸方向が480cm、短軸が470cmで方形を呈する。カマドの主軸方向は真東から16.5度北偏する。壁高は東壁30cm、南壁29cm、西壁43cm、北壁49cmである。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の3層に大別される。2層の一部には十和田A降下火山灰が混入し、埋土全体が堅くしまり、層位状況から自然堆積と推定される。

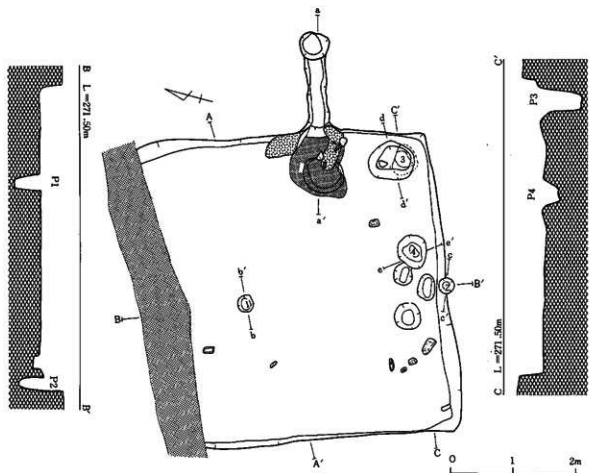
床面は基本層序第IV層で黄色砂層である。平坦で堅くしまっている。主柱穴は2本検出され、1本が南壁に接している。床面からの深さは34~41cmである。床面の南側に3本の柱穴が検出されている。床面からの深さは14~20cmである。床面は堅くしまり、周溝や貼床は認められない。

カマド脇南側とカマドの南西側床面から土坑が検出されている。南側土坑の平面形は開口部が74cm×60cmの楕円形、底部が30cm×24cmの卵形を呈する。床面からの深さは最大70cmである。底面は平坦で壁は北壁と西壁が緩やかに外傾して立ち上がり、東壁が直立気味で南壁が大きく内湾し床面近くで直立する。埋土は堅くしまり、土器が混入する。本土坑は貯蔵穴と推定される。南西側土坑の平面形は開口部が54cm×46cm、底部が30cm×24cmの楕円状を呈する。床面からの深さは最大30cmである。底面は中央付近が凹み、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は土器が混入する。用途は不明である。

カマドは東壁の中央部南寄りに構築され、遺存状態は上半が削平をうけやや不良である。規模は袖部から煙出し部まで220cm前後で、煙道の幅が底部付近で最大22cm、袖部の幅が90cmである。袖部には芯材の一部として使用されたと推測される礎が残っている。両袖には粘土が貼られている。燃燒部は径90cm×76cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は上半の大部分が削平されているものの、底面が煙出し部に向かって下がった後、垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径42cmの円筒形で検出面からの深さは23cmである。本遺構は降下火山灰などから平安時代に属するものと推定される。

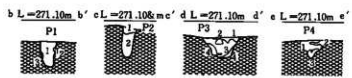
〈出土遺物〉(第13~15図、写真図版57・58)

遺物は床面直上、カマド、埋土、P5・6、貯蔵穴から出土する。器種は坏、甕、壺で構成され、坏と甕が主体である。II-1・2・6号竪穴住居跡出土遺物と接合する土器が3点ある。土器以外では土製品と鉄滓が出土する。



- |    |                           |            |
|----|---------------------------|------------|
| 1. | 黒色シルト                     | 灰土         |
| 2. | 明黄褐色砂                     | 水田造成時の盛土   |
| 3. | 10Y R 1/2 黒色              |            |
| 4. | 10Y R 1/2 暗褐色             | 辺物が混入      |
| 5. | 10Y R 1/2 明黄褐色            | 壁の脱落土、無辺物  |
| 6. | 10Y R 1/2 2.0-3.0mm 砂質シルト | 4・5の混じったもの |
| 7. | 10Y R 1/2 2.0-3.0mm 砂質シルト | 辺物が多く混入    |

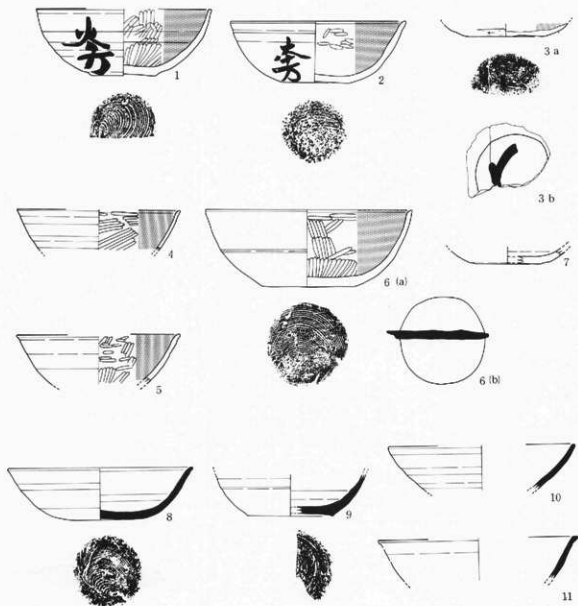
- |    |                    |            |
|----|--------------------|------------|
| 1. | 10Y R 1/2 褐色シルト    | 粘土が混じる     |
| 2. | 10Y R 1/2 褐色砂質シルト  | 粘土が混じる     |
| 3. | 10Y R 1/2 黄褐色砂質シルト |            |
| 4. |                    | 焼成を繰り返している |



- |    |                   |       |        |
|----|-------------------|-------|--------|
| P1 | 1. 10Y R 1/2 暗褐色  | 砂質シルト |        |
|    | 2. 10Y R 1/2 褐色   | 砂質シルト |        |
|    | 3. 10Y R 1/2 黄褐色  | 砂     |        |
| P2 | 1. 10Y R 1/2 暗褐色  | 砂質シルト |        |
|    | 2. 10Y R 1/2 褐色   | 砂     | 土器片が混入 |
| P3 | 1. 10Y R 1/2 褐色   | シルト   |        |
|    | 2. 10Y R 1/2 褐色   | 砂質シルト |        |
|    | 3. 10Y R 1/2 暗褐色  | シルト   | 土器片が混入 |
|    | 4. 10Y R 1/2 黄褐色  | 砂質シルト |        |
| P4 | 1. 10Y R 1/2 暗褐色  | シルト   | 土器片が混入 |
|    | 2. 10Y R 1/2 明黄褐色 |       |        |
|    | 3. 10Y R 1/2 黄褐色  | 砂質シルト |        |

第12図 II-4号住居跡





土器観察表

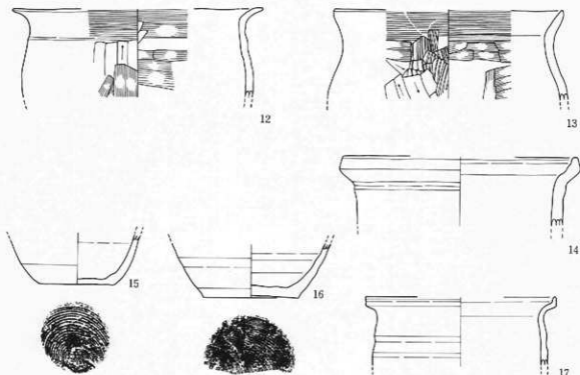
土器図	写高	口径	底径	器種	分類	法 量			外形調整			内面調整			成形	器型	色調	その他
						口徑	底径	器高	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部				
11	4	21	24	20	杯	計1.14	2.0	2.3	1	1	—	無	無	無	コブ目	赤褐色	内底、黒帯「金」。	
12	4	19	15	16	杯	計1.14	1.4	1.5	1	1	—	無	無	無	コブ目	赤褐色	内底、黒帯「金」。口縁下方	
13	4	19	16	22	杯	計1.14	—	—	—	—	—	—	—	—	コブ目	赤褐色	内底、黒帯。体部下縁部至全周下縁へ2道	
14	4	19	17	27	杯	計1.14	13.0	—	1	1	—	無	無	—	コブ目	赤褐色	内底、蓮子	
15	4	19	15	20	杯	計1.14	13.0	—	1	1	—	無	無	—	コブ目	赤褐色	内底(2次の黒帯)	
16	4	19	16	25	杯	計1.14	14.0	1.5	1	1	—	無	無	無	コブ目	赤褐色	内底、黒帯「金」。口縁下方	
17	4	17	20	21	杯	計1.24	—	—	1	1	—	1	1	1	コブ目	赤褐色	内底、黒帯「金」。体部へ2道「ノ」状	
18	4	19	13	24	杯	計1.14	11.0	1.4	1	1	—	1	1	1	コブ目	赤褐色	1道(口縁下縁へ7割)	
19	4	19	17	26	杯	計1.14	—	—	1	1	—	1	1	1	コブ目	赤褐色	1道	
20	4	19	14	25	杯	計1.14	—	—	1	1	—	1	1	1	コブ目	赤褐色	1道(口縁下縁へ7割)	
21	4	19	14	25	杯	計1.14	—	—	1	1	—	1	1	1	コブ目	赤褐色	1道	

第13図 II-4号住居跡出土遺物(1)

環形土器はすべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転系切りが主体である。6(B I I b類)・3(B I I c類)・8(B II b類)などわずかであるが、体部下端及び底部に手持ち篋削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面に黒色処理が施され、5が二次的加熱を受けている。6は体部外面に「メ」の篋による条痕が認められる。黒書あるいは黒痕が認められるものは4点あり、6「一」と1「卒万」あるいは「卒可」・2「卒」(B I I a類)が読め、3は不明である。7(B I 2 a類)はあかやき土器の坏である。

甕形土器はロクロ使用と不使用の割合がほぼ同じで、前者は大型、後者が小型の傾向を示す。須恵器は体部片が大半である。19は頸部に山形の櫛引き状の沈線が施される。

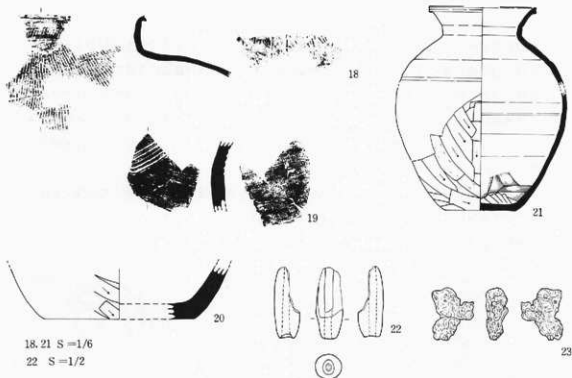
壺形土器はロクロ使用成形による須恵器1点で、内面に指圧痕が認められる。



土器観察表

発掘区	写真	高さ	口径	底径	容積	土質	外観調査				内観調査			成形	施装	色調	その他				
							口縁	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部					口縁部			
14	4	12	35	109	11	須	A 1 a	20.6	—	卍	卍	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	199	II-4住居出土遺物と結合
14	4	13	38	54	11	須	A 1 a	19.2	—	卍	卍	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	199	—
14	4	14	27	52	11	須	B 1 b	18.6	—	1	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	199	—
14	4	15	29	69	11	須	B 1 a	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	あめ	199	—
14	4	16	39	61	11	須	B 1 b	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	ロクロ	あめ	199	—
14	4	17	49	55	11	須	B 1 b	14.8	—	1	1	—	—	—	—	—	—	ロクロ	—	199	指子

第14図 II-4号住居跡出土遺物(2)



18. 21 S=1/6

22 S=1/2

土器観察表

実測図	写真	厚	径	形	種	時期	法		外面調整			内面調整			成形	底層	色調	その他
							口	底	口縁部	外周(下部)	底層	口縁部	内面	底層				
18. 21	4	113	5	壺	前期	—	—	/	/	—	/	/	—	ロアロ	—	1978	内面にて瓦板、口縁部出土遺物と適合	
19. 19	4	42	78	5	壺	前期	—	—	/	—	—	/	—	ロアロ	1978	内面にて瓦板		
19. 20	4	43	86	5	壺	前期	—	22. 46	—	2	2	—	—	/	ロアロ	1978		
19. 21	4	44	114	5	壺	前期	27. 2		/	2. 2	2	/	2. 2	2	ロアロ	1978	内面にて瓦板、口縁部出土遺物と適合	

第15図 II-4号住居跡出土遺物(3)

土器以外では一部欠損した土鍬22がある。長さ3.8cm、径1.4cmの紡錘状で長軸の中心に円孔が貫通し、表面はナデられている。鉄鍬23は重さ17.8gである。

### II-6号竪穴住居跡

〈遺構〉(第16図、写真図版5)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群のほぼ中心に位置し、II-2・7号竪穴住居跡と隣接する。II-1号竪穴住居跡の精査中に北側壁面の一部に本遺構の断面がわかり、褐色土面に黄褐色土が長方形に広がっていたことから、本遺構の存在を確認した。II-1号竪穴住居跡と重複し、本遺構の南東壁面の一部とカマドの煙道部から煙出し部がII-1号竪穴住居跡に切られ

て構築されている。

遺構の形態と規模は北東—南西方向の長軸が300cm、短軸が235cmで、南西辺が北東辺に比して短く歪んだ隅丸長方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から67度南偏する。壁高は北東壁53cm、南東壁45cm、南西壁34cm、北西壁48cmである。壁は床面から外傾して立ち上がるが、南西壁は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黄褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。南西隅の埋土下部に焼土が混入する。層位状況から自然堆積後、人為的に埋め戻されたものと推定される。

床面は基本層序第IV層で黄色砂層である。東西の床面はそれぞれ平坦であるが、東側から中央部付近にかけて10cmほど傾斜する。主柱穴は3本検出され、2本が北東壁に、1本が南西壁に接する。3本の主柱穴は水平レベルからの内角が62～66度で立ち上がり、床面からの深さは22～23cmである。4本目の主柱穴として南西壁の隅が推測されるが、壁の立ち上がりが浅いことから削平による消滅の可能性がある。また、主柱穴の傾斜角度が三角の頂点を向いていることから推測すると、当初から3本であった可能性も推定される。床面は堅くしまり、溝濶や貼床は認められない。

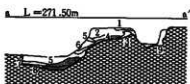
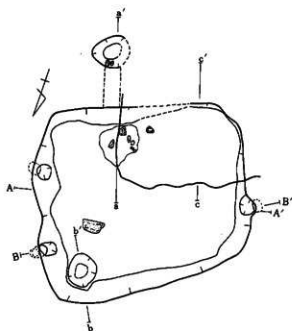
北側隅から土坑が検出されている。平面形は開口部が50cm×46cmの円形、底部が24cm×21cmの円形を呈する。床面からの深さは最大19cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は褐色土で炭化材片が混入する。

カマドは南東壁の東寄りに構築され、遺存状態はやや不良である。規模は煙道部から煙出し部まで140cm前後であり、煙道の幅が最大26cmである。袖部はII-1号竪穴住居跡による削平をうけているが、袖材の一部として使用されたと推測される焼成をうけた礫がカマドの西側に散在する。燃焼部は径61cm×64cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚17cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は割り貫き式で煙出し部に向かって緩やかに上がった後、煙出し部で最大18cm垂直に落ち込む。煙出し部の掘り込みは径50～60cmの円筒形で検出面からの深さは65cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

#### 〈出土遺物〉(第17・18図、写真図版58)

遺物は床面と埋土、煙出し部から出土する。II-1号竪穴住居跡に切られているためか、他の住居跡と比べて遺物量が少ない。器種は環形と梨形土器のみで構成される。II-5号竪穴住居跡、II-1号溝跡出土遺物と接合する土器が2点ある。土器以外では鉄器が出土する。

環形土器はすべてロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りが主体である。I(B I I b 類)は完形土器で外面に汁痕が付着し、体部下端及び一部底部に手持ち笥割りの再調整が施されている。その他、B II a 類やB I 2 a 類の糸切り無調整のものが多く認められる。土師器はすべて内面黒色処理が施されている。



1. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
2. 10YR 5/6 暗赤褐色 砂質シルト
3. 5YR 5/6 暗赤褐色 砂質シルト 土器片が混入
4. 10YR 5/6 褐色 シルト
5. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト 土器片が混入
6. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
8. 2.5Y R 5/6 暗赤褐色 砂
9. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト

b L=271.50m b'



1. 10YR 5/6 暗褐色 水鏡が混入



1. 10YR 5/6 黄褐色 砂 土器片が混入
2. 10YR 5/6 黄褐色 砂 土器片や磁器が混入
3. 10YR 5/6 黄褐色 シルト 土器片が混入
4. 7.5Y R 5/6 褐色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 暗赤褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 褐色 砂
7. 10YR 5/6 黄褐色 粘性シルト
8. 10YR 5/6 暗褐色 粘性シルト 焼土が混入
9. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト

c L=271.50m c'



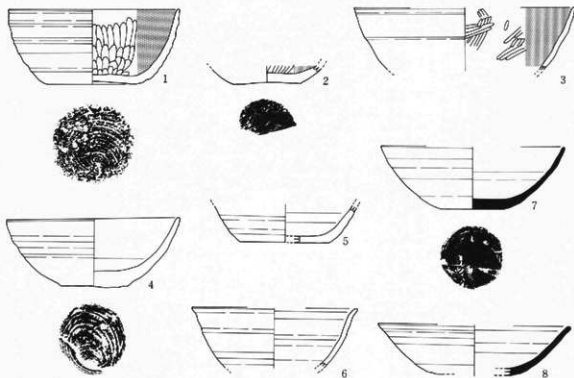
1. 7.5Y R 5/6 褐色 砂質シルト 焼土が混入
2. 10YR 5/6 褐色 シルト
3. 10YR 5/6 黄褐色 砂
4. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 暗赤褐色 砂



第16図 II-6号住居跡

甕形土器は土師器はロクロ不使用で輪積痕をもつものが小型で、ロクロ使用のものは大型の傾向が認められる。その他、須恵器の体部片が数点出土する。

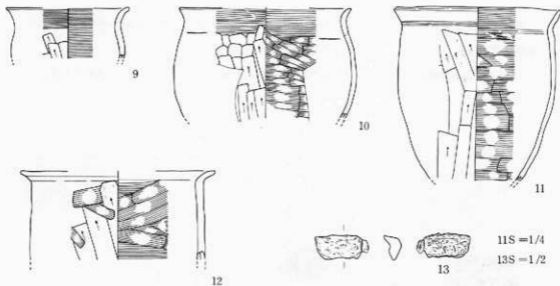
土器以外では鉄器13が出土する。現存長2.8cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、重さ6.4gである。



土器観察表

実測図	寸法	器種	分類	法量			外面測定			内面測定			底径	底厚	色調	その他		
				口縁径	底径	高さ	口縁高	体高	底高	口縁高	体高	底高						
17 II 6 器 1	47	102	H	器	第11号	33.3	7.8	5.9	2	2	r	m	m	m	ロクロ	赤褐色	3.YR 内面(2法の加飾)。計成存	
17 II 6 器 2	48	94	H	器	第11号	-	5.0	-	-	-	-	-	-	m	ロクロ	赤褐色	3.YR 内面	
17 II 6 器 3	49	93	H	器	第11号	27.5	-	-	2	2	l	-	m	m	-	ロクロ	-	3.YR 内面
17 II 6 器 4	50	109	A	器	第12号	23.5	5.1	2.4	2	2	l	2	l	l	ロクロ	赤褐色	3.YR 石炭粒子多量に含む	
17 II 6 器 5	51	95	A	器	第12号	-	7.0	-	2	-	-	l	2	l	ロクロ	赤褐色	3.YR	
17 II 6 器 6	52	96	A	器	第12号	20.2	-	-	2	2	-	2	l	l	ロクロ	赤褐色	3.YR	
17 II 6 器 7	53	122	S	器	第13号	31.6	15.0	15.0	2	2	-	l	2	2	ロクロ	赤褐色	3.YR 口・5.0、口・1.5縁部土層物に含む	
17 II 6 器 8	54	97	S	器	第13号	15.0	15.0	-	2	2	-	l	2	2	ロクロ	赤褐色	2.5Y	

第17図 II-6号住居跡出土遺物(1)



土器観察表

土器種	宇治	宇治	宇治	宇治	宇治	宇治	注		外観調整		内面調整		成形	造形	色調	その他			
							口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部					口縁部	口縁部	
18	6	10	30	30	30	30	A 1b	—	20	A	—	20	a	—	赤クワ	—	2.123	輪郭破	
18	6	10	36	36	36	36	A 1b	—	20	A	—	20	a	—	赤クワ	—	2.123	輪郭破	
18	6	11	37	37	37	37	B 1b	30.0	—	20	A	—	20	a	—	赤クワ	—	195	
18	6	12	38	38	38	38	A 1b	33.0	—	20	A-a	—	20	a	—	赤クワ	—	195	

第18図 II-6号住居跡出土遺物(2)

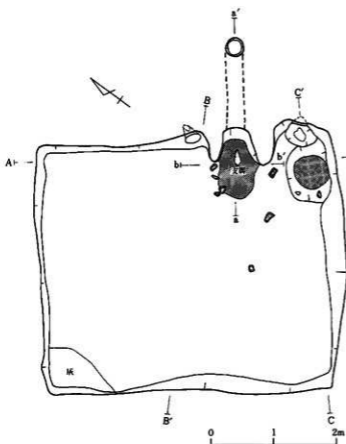
### II-2号竪穴住居跡

〈遺構〉(第19図、写真図版6)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の東側に位置し、II-7号竪穴住居跡、I-3号住居跡遺構と隣接する。用水路の土盛りを除いたところ、褐色上面に黒色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構はII-17号陥し穴状遺構と重複し、本遺構の煙出し部がII-17号陥し穴状遺構の東端を切って構築されている。

遺構の形態と規模は北西—南東方向の長軸が448cm、短軸が383cmの長方形を呈する。カマドの主軸方向は真東から36度北偏する。壁高は北東壁37cm、南東壁33cm、南西壁35cm、北西壁52cmである。壁は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、暗褐色土、黒褐色土の3層に大別される。本遺構は埋土上部に十和田a降下火山灰を含む。層位状況から自然堆積と推定される。



1. 10YR 5/6 褐色 シルト 焼土が混じる
2. 5YR 5/6 暗赤褐色 シルト 焼土が混じる
3. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト 焼土がブロック状に混じる
4. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト 焼土が混じる
5. 5YR 5/6 暗赤褐色 焼土
6. SとBの混土
7. 5YR 5/6 暗赤褐色 焼土
8. 5YR 5/6 暗赤褐色 焼土
9. 10YR 5/6 褐色 シルト 焼土混じる
10. 5YR 5/6 暗赤褐色 シルト しまりなし
11. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト 焼土ブロック状に混じる
12. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト 焼土混じる



1. 7.5YR 5/6 暗褐色 カマド構築土
2. 2.5YR 5/6 4.5-7暗色 地山(内れている)
3. 2.5YR 5/6 暗赤褐色 焼土
4. 5YR 5/6 暗褐色 焼土
5. 7.5YR 5/6 2.5YRの混土 焼土
6. 5YR 5/6 暗赤褐色

A L=272.10m A'



1. 10YR 5/6 褐色 シルト
- 1'. 1と2の混り
2. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
3. 10YR 5/6 暗褐色 シルト 砂が混じる
- 3'. 10YR 5/6 褐色 シルト 3より砂が多い
4. 10YR 5/6 褐色 シルト 2と砂が混じったもの
- 4'. 10YR 5/6 暗褐色 シルト 4に2が混じったもの
5. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
6. 10YR 5/6 褐色 シルト
7. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
8. 2.5YR 5/6 暗赤褐色 焼土

B L=272.10m B'



C L=272.10m C'



第18図 II-2号住居跡



床面は基本層序第Ⅲ層の黄褐色土層であり、平坦である。主柱穴や周溝、貼床は認められない。

カマドの横に土坑と柱穴が検出されている。土坑の平面形は開口部が90cm×68cmの楕円形、底部が40cm×36cmの円形を呈する。床面からの深さは最大27cmである。底面は平坦で中央が凹み、壁は南東壁が直立気味で他は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土に焼土を含む。本土坑は貯蔵穴と推定される。柱穴の平面形は開口部が46cm×50cmの歪んだ円形、底部が14cm×20cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大39cmである。埋土に焼土を多量に含む。その他、西隅床面に灰の塊が62cm×100cmの範囲に認められる。

カマドは東壁中央の南寄りに構築され、遺存状態は良好である。規模は袖部から煙出し部まで203cm前後で、煙道の幅が最大27cm、袖部の幅が103cmである。袖部は地山を削り出して作られたものと推定される。燃焼部は径62cm×96cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚7cmでレンズ状に赤色変化している。燃焼部のほぼ中央に柱状の礫が焼土を貫いて縦長に検出されている。焼土より出ている部分は焼成を強くうけており、支脚と推定される。煙道は割り貫き式で煙出し部に向かって緩やかに下がった後、垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径36cmの円筒形で検出面からの深さは79cmである。本遺構は出土する遺物や降下火山灰から平安時代に属するものと推定される。

#### 〈出土遺物〉(第20・21図、写真図版59・60)

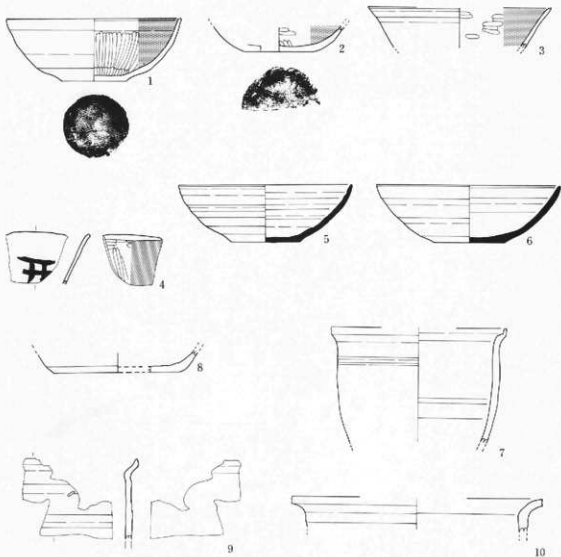
遺物は床面直上、カマド、貯蔵穴から出土する。器種は土師器、須恵器、縄文土器で構成され、環形と甕形土器が主体である。土器以外では鉄器が出土する。

環形土器はすべてロクロ使用成形で、底部切り離しは回転系切りが主体である。2(B I I b類)・5(B II b類)などわずかであるが、体部下端及び底部に手持ち寛削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面に黒色処理が施され、2が二次的加熱をうけている。墨書あるいは墨痕が認められるものは2点あり、4「井」(B I I類)が読め、他は不明である。あかやき土器の環形土器が認められる。

甕形土器では土師器はロクロ不使用が3分の2を占め、大型が大半である。ロクロ使用は大型と小型がほぼ同率と推定される。9(B I b類)は体部外面に種子痕が認められる。8(B I類)は一部底部に手持ち寛削りによる再調整が認められる。須恵器は体部片が多く大型である。

縄文土器はいずれも埋土から出土する深鉢の口縁部片と体部片で、貝殻沈線文が施されている。早期の物見台式に比定される。

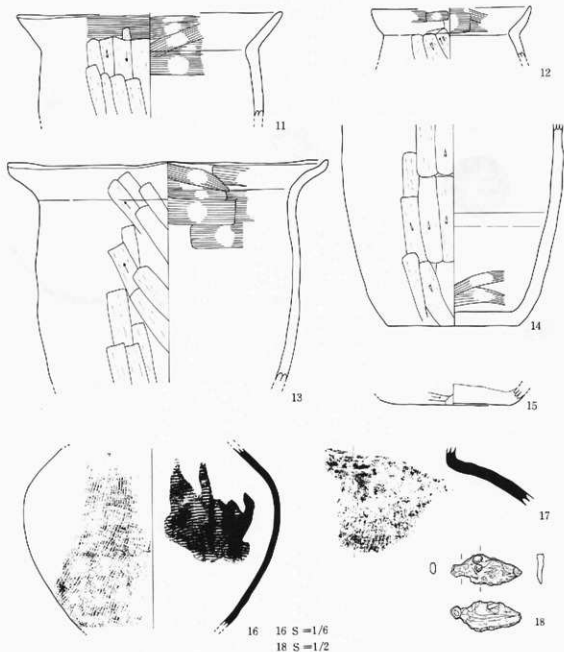
土器以外では床面直上から鉄器18が出土する。現存長3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ2.1gである。



土器観察表

発掘期	写真登録番号	種類	器種	分類	法量				外面調整			内面調整			成形	土質	その他	
					口径	高さ	口径	高さ	口径	高さ	口径	高さ	口径	高さ				
20	1	1	30	鉢	口径	11.0	2.2	4.3	ノ	ノ			ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底
20	2	2	30	鉢	口径	11.8	—	—	ノ	ノ	ノ		ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底に「フ」の文字あり、外面下部に「卍」の文字あり、口縁に「フ」の文字あり
20	3	3	45	鉢	口径	11.1	14.6	—	ノ	ノ	ノ		ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	4	4	42	鉢	口径	11.1	—	—	ノ	ノ			ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	5	5	43	鉢	口径	11.0	14.8	1.8	ノ	ノ	ノ	ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	6	6	44	鉢	口径	11.7	13	1.8	ノ	ノ	ノ	ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	7	7	45	鉢	口径	11.5	14.5	—	ノ	ノ		ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	8	8	46	鉢	口径	—	19.0	—	ノ	ノ	ノ	ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	9	9	47	鉢	口径	11.5	—	—	ノ	ノ	ノ	ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平
20	10	10	48	鉢	口径	11.0	19.0	—	ノ	ノ	ノ	ノ	ss	ss	ss	ロウロ	赤褐色	内底、底平

第20図 II-2号住居跡出土遺物(1)



16 16 S = 1/6  
18 S = 1/2

土器観察表

実測図	写真	発見地	器種	分製	法量	外面調整			内面調整			底形	底面	色調	その他		
						口縁	底	器底(下部)	口縁	体	底						
21	11	60	281	Ⅲ	A 1 a	21.1	—	滑	滑	—	滑	滑	—	21B			
21	12	70	279	Ⅲ	A 1 b	22.5	—	粗	粗	—	滑	滑	—	21B	輪縁		
21	13	71	260	Ⅲ	A 1 c	22.8	—	粗	粗	—	滑	滑	—	21B			
21	14	72	265	Ⅲ	A 1 d	—	18.4	—	滑	滑	—	滑	滑	—	21B		
21	15	73	284	Ⅲ	A 1 e	—	9.4	—	滑	滑	—	滑	滑	—	21B		
21	16	74	283	S	Ⅲ	—	—	滑	滑	—	滑	滑	—	21C			
21	17	75	283	S	Ⅲ	—	—	滑	滑	—	滑	滑	—	21C			

第21図 II-2号住居跡出土遺物(2)

## II-5号竪穴住居跡

〈遺構〉(第22・23図、写真図版7)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群のほぼ中心に位置し、II-1・6、III-1号竪穴住居跡と隣接する。初年度に煙道部が検出され、次年度は表土を除いたところ褐色土面に暗褐色土が歪んだ方形状に広がっていたことから、遺構の存在を再確認した。本遺構は重複関係がみられず、拡張して構築されている。

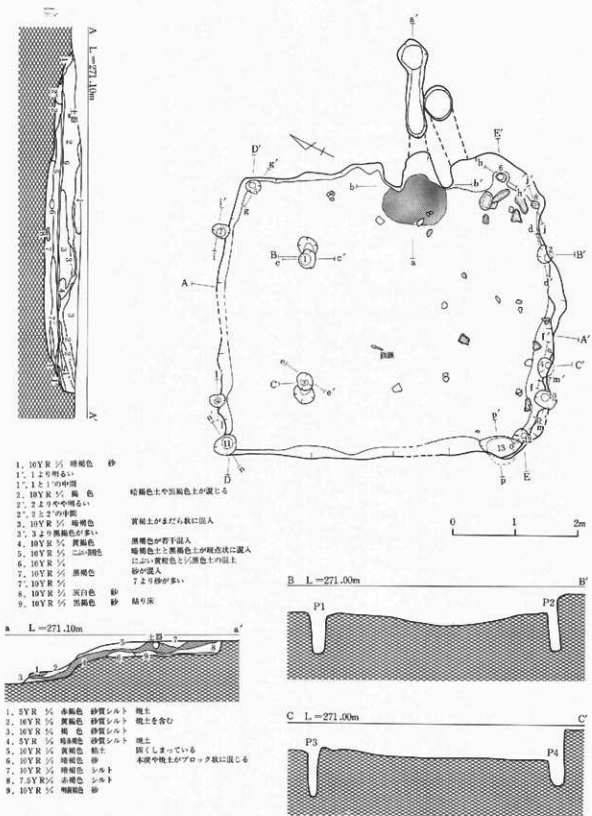
遺構の形態と規模は拡張以前が440cm前後の方形と推定され、拡張以後は北西-南東の長軸方向が486cm、短軸が440cmで、北西壁のみを拡張した隅丸長方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から25度北偏する。拡張以前のカマドの長軸方向はわずかであるがこれよりさらに北偏する。壁高は北東壁51cm、南東壁40cm、南西壁36cm、北西壁35cmである。壁は北西壁が床面から緩やかに、他は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色、黒褐色の4層に大別される。本遺構は各層に土器片や焼土粒が多量に混入する。層位状況から一部分に自然堆積がみられるものの、大部分が人為的に埋め戻されたものと推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層である。平坦であるが、北から南へ8cmほど傾斜する。支柱穴は12本検出され、4本が拡張以前の支柱穴で2本が南東壁に接し、拡張された側の他の2本には抜き取り痕が認められる。床面からの深さは40-64cmである。拡張以後の支柱穴は8本あり、いずれも壁に接し2本ずつ4組が対応する。床面からの深さは22-48cmである。周溝は拡張の前後共認められないが、貼床は拡張時のものと推定される。

南側隅の床面から土坑が検出されている。平面形は開口部が60cm×34cmの楕円形、底部が43cm×43cmの不整形を呈する。床面からの深さは最大20cmである。床面は平坦で、壁は床面から直立気味に立ち上がるが、西壁は内湾して立ち上がる。埋土には土器片や焼土を多量に含む。

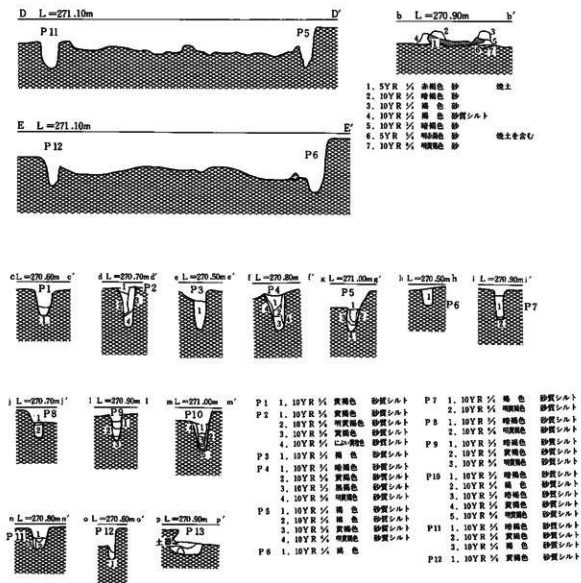
拡張以前のカマドは東壁中央南寄りに構築され、遺存状態は不良である。規模は煙道部から煙出し部まで125cm前後で、煙道の幅が最大33cmである。袖部や燃焼部については不明である。煙道は割り貫き式である。煙出し部の掘り込みは径35cmの円筒形で検出面からの深さは23cmである。拡張以後のカマドは東壁中央やや南寄りに構築され、遺存状態は良好である。規模は袖部から煙出し部まで240cm前後で、煙道の幅が最大31cm、袖部の幅が108cmである。燃焼部は径66cm×90cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚9cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は割り貫き式で煙出し部に向かって緩やかに上がった後、直立気味に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径47cmの円筒形で、検出面からの深さは22cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。



第22図 II-5号住居跡(1)

〈出土遺物〉(第24～29図、写真図版61～64)

遺物は床面直上とカマド、埋土、貯蔵穴、拡張時に構築された貼床の下と畑出しから出土する。器種は坏、高台付坏、甕、壺、鉢、長頸壺で構成され、坏と甕が主体である。II-7・16号竪穴住居跡、II-1号溝跡出土遺物と接合する土器が4点ある。土器以外では鉄製品と砥石がある。本遺構はII-7号竪穴住居跡、II-1号溝跡とともに多量の遺物が出土する。



第23図 II-5号住居跡(2)

環形土器は土師器の2点15・16を除き、すべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りが主体と推定される。環形土器42%に再調整が認められ、体部下端及び底部全面あるいは一部底部に手持ち篋削りや回転篋削り、篋ミガキが認められる。再調整が認められる環形土器の3分の2以上はB I I c類である。土師器はすべて内面に黒色処理が施され、1(B I I b類)と12(B I I a類)が二次的加熱をうけている。墨書あるいは墨痕が認められるものは5点である。10「林」(B I I c類)・8「エ」(B I I b類)・18「林」(B I I b類)が認め、他の2点は不明である。また、底部に「ム」や「一」の篋による条痕が認められるものや体部内外面に汁痕の付着が目立つ。

高台付坏は高台部のみで、貯蔵穴から出土する。

甕形土器では土師器はロクロ不使用が半分以上を占め小型のものが多く、ロクロ使用は大型のものが大半である。

壺形土器は須恵器だけに認められ、すべてロクロ使用成形である。34は底部全面に手持ち篋削りによる再調整が認められる。37と36は長頸壺である。

鉢形土器は33の1点である。内面は黒色処理が施され、厚手である。

土器以外では砥石42が床面から出土する。両端を欠き、表面には10条近くの鋭利な線刻が、側面には幅1.2cm、深さ0.5cmほどの湾曲した凹みが認められ、側面は丸い棒状のものを研いだものと推定される。

38は鉄鏃で(1)・(2)・(3)が重なって出土し、(3)が拡張住居跡の貼床直上にあたり、裏面の3分の2以上に繊維質のものが付着する。3個体の分離処理は困難なため実測、写真など一括して扱っている。全体の重さは65gである。(1)は大部分を欠損しているが、出土状況から(2)・(3)と同一形態と推定される。(2)は平根有茎腸袂三角形式の大型鉄鏃ではほぼ完形である。(3)は(2)と同一形式のものであるが、基部の先端を欠く。

表3 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
29II 5 位42	119	砥石	7.9	6.8	2.5	100	流紋岩	奥羽山地 新第三系	使用面4

表4 鉄鏃計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	形式	身体各部(長さ部)・(基部)						全体の重さ	
			長さ	幅	長さ	幅	断面	長さ		断面
29II 5 位38	115						2.3	1.1×0.3の長方形	1.0×0.5×0.4の方形	65
29II 5 位38	115	平根有茎腸袂三角形式	4.5	4.3	1.1	33.4	1.8×0.5の長方形	10.4×0.5×0.6の方形		
29II 5 位38	115	平根有茎腸袂三角形式	4.5	4.3	1.2	28.1	1.7×0.5の長方形	7.10×0.4×0.4の方形		

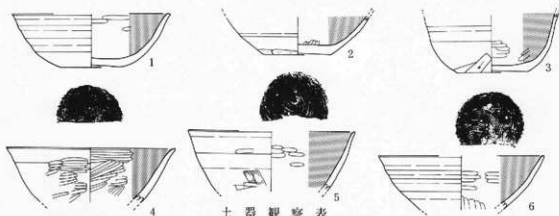
41は床面から出土し、現存長2.9cm、重さ2.15gの両端を欠く刀子である。身幅1.4cm・厚さ0.2cm、基部幅0.8cm・厚さ0.3cmの両面平造りである。39は床面から出土し、両端を欠く棒状鉄製品である。現存長4.9cm、重さ4.2g、断面は径0.4~0.5cmの円形である。

40は床直から出土する用途不明の鉄製品である。現存長6.7cm、重さ7.55gである。先端部は幅2.4cm、厚さ0.3cmで、中央に0.2~0.4cmの孔が貫通し、表面に木片が付着する。片面は刃部状を呈し、先端が三角形状で鋭い。末端は雁股状に開き一方を欠く。

拡張以前あるいは拡張時に関連する遺物が8点あげられる。拡張時の貼り床の下と煙出しから出土する。

表5 拡張以前あるいは拡張時の土器観察表

種類	炭形土器			坯形土器	
焼成	H			S	H
ロクロ	不使用			使用	
分類	A I	A I a	A I b	B II	B I c
出土数	1	3	2	1	1
出土地点	拡張時貼床下	2号煙出し	拡張時貼床下 2号煙出し	拡張時貼床下	拡張時貼床下と 拡張以後のカマド との接合
備考		木炭痕 木炭痕	輪積痕		黒書

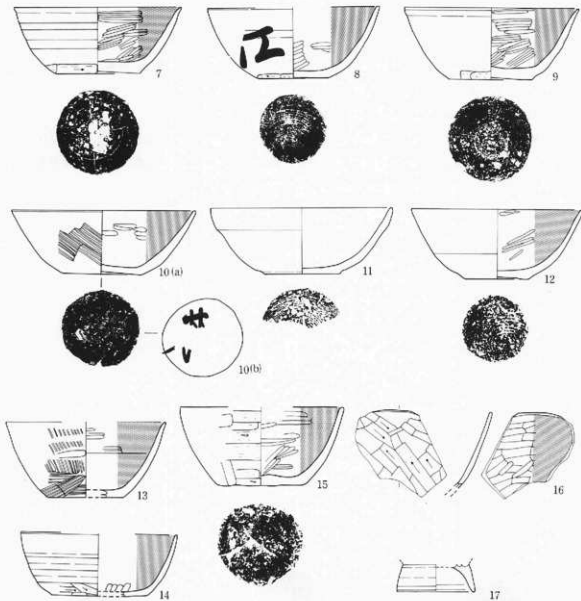


土器観察表

実測図	写真	器種	器形	分類	法量		外面調整			内面調整			底形	底面	色調	その他							
					口縁	底	口縁	体部(下地)	底面	口縁	体部	底面											
24	45	1	78	346	H	厚	数1	1.36	0.05	5.0	4.2	r	r	r	ss	ss	ss	ロクロ	赤褐色	2.5VR	内装(2次焼成済)。底面全縁手粉へ塗り		
24	45	2	79	352	H	厚	数1	1.16	—	5.1	—	r	r	r	—	ss	ss	ss	ロクロ	赤褐色	2.5VR	内装、体部下地—微成粉手粉へ塗り	
24	45	3	80	344	H	厚	数1	1.26	0.26	5.5	4.41	ss	r	r	r	ss	ss	ss	ロクロ	赤褐色	2.5VR	内装、体部下地—微成粉手粉へ塗り	
24	45	4	81	352	H	厚	数1	1.1	0.2	—	4.3	r	ss	ss	—	ss	ss	—	ロクロ	—	2.5VR	内装	
24	45	5	82	349	H	厚	数1	1.02	0.26	—	ss	ss	ss	ss	—	ss	ss	—	ロクロ	—	2.5VR	内装(2次焼成済)	
24	45	6	83	348	H	厚	数1	1.02	0.26	—	r	r	—	ss	ss	—	ss	ss	—	ロクロ	—	2.5VR	内装、口縁縁土遺物と接合

第24図 II-5号住居跡出土遺物(1)

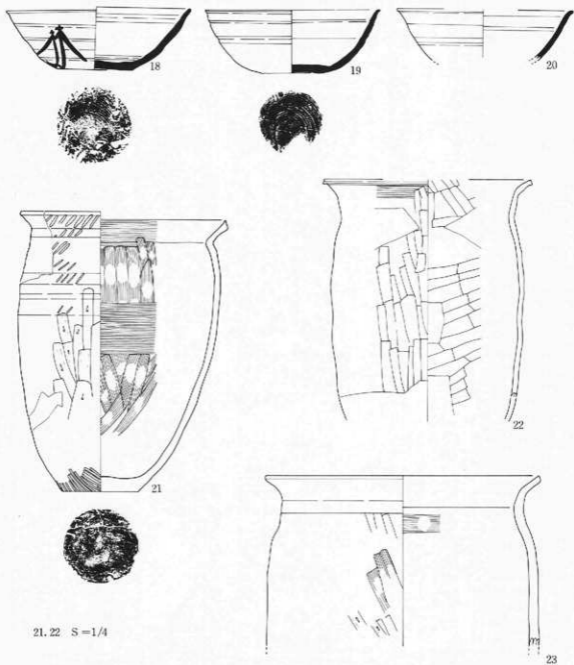




土器観察表

実測図	写真	種類	形	群	分類	法		外面調整				内面調整				底面	底脚	色調	その他		
						打	磨	砥	石	砥	砥	砥	砥	砥	砥					砥	砥
25	13	81	7	81	261	Ⅱ	5	1	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚へラによる「メ」痕
25	13	81	8	85	263	Ⅱ	5	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚以上、体部下部回転へラ痕
25	13	81	9	86	264	Ⅱ	5	1	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚、体部へラによる「メ」痕
25	13	81	10	87	262	Ⅱ	5	1	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚「メ」、底脚全面へラによる
25	13	81	11	88	247	Ⅱ	5	1	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内外面調整
25	13	81	12	89	257	Ⅱ	5	1	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚「メ」による「メ」痕
25	13	81	13	90	256	Ⅱ	5	1	1	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚全面手磨へラ痕
25	13	81	14	91	245	Ⅱ	5	1	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚全面手磨へラ痕
25	13	81	15	92	258	Ⅱ	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底、底脚全面手磨へラ痕
25	13	81	16	93	258	Ⅱ	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底
25	13	81	17	94	279	Ⅱ	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	内底
25	13	81	17	94	279	Ⅱ	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅱ	底面部分のみ

第25図 II-5号住居跡出土遺物(2)

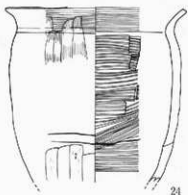


21.22 S=1/4

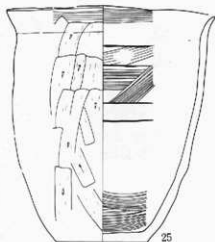
土器観察表

実測図	学名	登録番号	器種	分組	数量	外面調査			内面調査			成形	添加	色澤	その他				
						口縁部	器底	器壁(下部)	器底	器壁	器底								
26-41	S	22	36	298	S	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	642	2773	器底「林」、一部底縁手付へ字刺
26-41	S	22	36	121	S	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	642	507	底部へ字による「一」刺
26-41	S	22	36	389	S	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	—	377	器底平延
26-41	S	21	38	313	H	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	—	378	—
26-41	S	22	39	315	H	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	—	378	—
26-41	S	22	393	334	H	窯	口縁部	2	1	1	1	1	1	1	1	コテコテ	—	377	口縁部手付と縁部

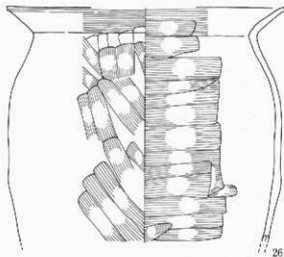
第26図 II-5号住居跡出土遺物(3)



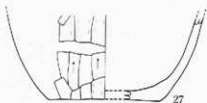
24



25



26



27



29



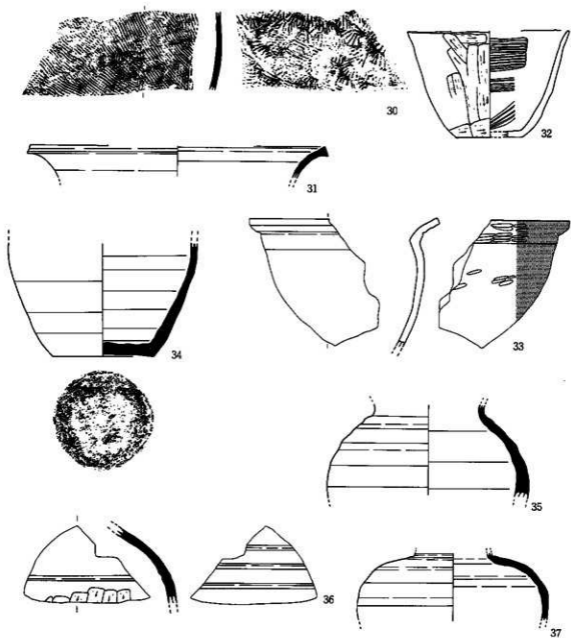
28



## 土器観察表

実測区	写真	見出し	種類	形状	寸法	外面調整			内面調整			成形	焼成	色調	その他				
						口縁	体部	底	口縁	体部	底								
27	Ⅱ	5	01	24	Ⅱ	A 15	34.0	—	33.0	30	20.5	—	20	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ	輪轉成
27	Ⅱ	5	01	25	Ⅱ	A 15	34.5	7.6	34.4	20	5	—	20	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ	輪轉成
27	Ⅱ	5	01	26	Ⅱ	A 14	32.2	—	20	5	—	20	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ		
27	Ⅱ	5	01	27	Ⅱ	A	—	30.6	—	5	—	—	20	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ	
27	Ⅱ	5	01	28	Ⅱ	A 14	—	6.2	—	2→20	5	—	20	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ	木炭灰、目・2目・1目・0目・土成分
27	Ⅱ	5	01	29	Ⅱ	A 14	—	34.4	—	—	5	—	—	5	—	白クマ	—	7.5Ⅱ	木炭灰

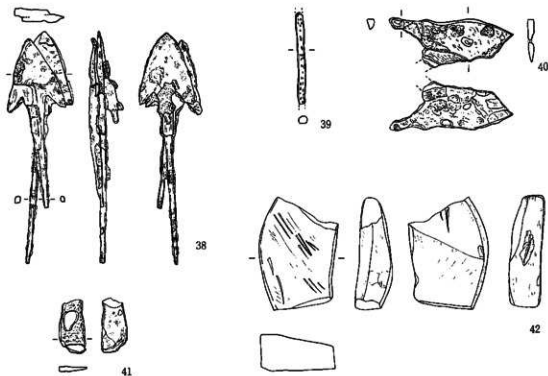
第27図 Ⅱ-5号住居跡出土遺物(4)



土器観察表

宝篋洞	写真(左)	地層	器種	分製	法量			外面測定			内面測定			成割	焼割	色調	その他	
					口徑(上)	口徑(下)	高さ	口縁部(下部)	底面	口縁部	底面	底面						
28	12	25	189	272	S	腰	赤土	—	—	/	—	—	/	—	ロアロ	—	1.5V	
29	11	25	31	188	263	S	腰	赤土	25.4	—	/	—	/	—	ロアロ	—	1.5V	II-I層内上遺物と結合
30	11	25	32	187	230	H	腰	22.4(2.3)	8.5	A	B	A	A	A	ロアロ	—	2.5IV	
31	11	25	33	188	317	H	腰	35a	—	/	B	—	B	—	ロアロ	—	2.5IV	内側
32	11	25	34	173	287	S	腰	—	8.8	—	/	F	/	/	ロアロ	—	2.5IV	縁部全周手輪へラ削
33	11	25	35	173	295	S	腰	—	—	—	/	—	/	—	ロアロ	—	2.5IV	
34	11	25	36	153	115	S	腰(口)	—	—	—	/	—	/	—	ロアロ	—	3V	
35	11	25	37	174	285	S	腰(口)	—	—	—	/	—	/	—	ロアロ	—	3V	

第28図 II-5号住居跡出土遺物(5)



第29図 II-5号住居跡出土遺物(6)

### II-7号竪穴住居跡

〈遺構〉(第30・31図、写真図版8)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の北側に位置し、II-1・6号竪穴住居跡と隣接する。南壁内側の暗褐色土を掘り下げ、床面から調査がすすめられる中で本遺構の全体を確認した。II-16号竪穴住居跡、II-18・25号陥し穴状遺構と重複し、本遺構がII-16号竪穴住居跡及びII-18・25号陥し穴状遺構の南半を切って構築されている。

遺構の形態と規模は北東-南西方向の長軸が617cm、短軸が482cmで、北西辺が南東辺に比して短く歪んだ長方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から31度北偏する。壁高は北東壁48cm、南東壁60cm、南西壁12cm、北西壁13cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土の2層に大別される。本遺構は埋土下部に土器が大量に混入する。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層で、平坦である。支柱穴は4本検出され、いずれも壁に接する。床面からの深さは50～67cmである。周溝や貼床は認められない。

北隅と西隅床面から土坑が検出されている。北隅の土坑の平面形は開口部が214cm×113cmの楕円形、底部が190cm×86cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大19cmである。底面は凹凸で、壁は緩やかに外傾する。埋土は褐色シルトに砂や焼土粒を多量に含む。用途は不明である。西隅土坑の平面形は開口部が96cm×94cmの円形で、底部が78cm×70cmの円形を呈する。床面からの深さは最大21cmである。底面は平坦で、壁は直立気味である。その他、南東壁際床面に径34cm×22cmの範囲に灰の塊が認められる。床面中央に焼土がみられ、平面形が楕円形で、径78cm×52cmの範囲に焼成をうけている。最大層厚7cmでレンズ状に赤色変化している。

カマドは作り替えが行なわれている。作り替え以前のカマドは東壁中央南寄りに構築され、遺存状態は不良である。規模は煙道部から煙出し部まで250cm以上あり、煙道の幅が最大48cmである。袖部については不明である。燃焼部は径80cm×52cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚7cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は緩やかに下がった後、煙出し部で垂直に立ち上がる。煙出しは径70cmの円筒形で、検出面からの深さは28cmである。作り替え以後のカマドはほぼ東壁の中央に構築され、遺存状態は不良である。規模は煙道の幅が最大22cm、袖部の幅が88cmである。袖部には芯材の一部として使用されたと推測される礫が残っている。燃焼部は径74cm×42cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化している。煙出し部については不明である。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

#### <出土遺物> (第32～38図、写真図版65～69)

遺物は床面直上、カマド、埋土、2号カマドから出土する。器種は坏、高台付坏、甕、鉢、長頸甕で構成され、甕と坏が主体である。II-2・5・16号竪穴住居跡、II-5号竪穴住居跡の煙出しからの出土遺物と接合する土器が4点ある。土器以外では砥石と剃片石器がある。本遺構はII-5号竪穴住居跡、

表6 石器計測表

単位：cm, g

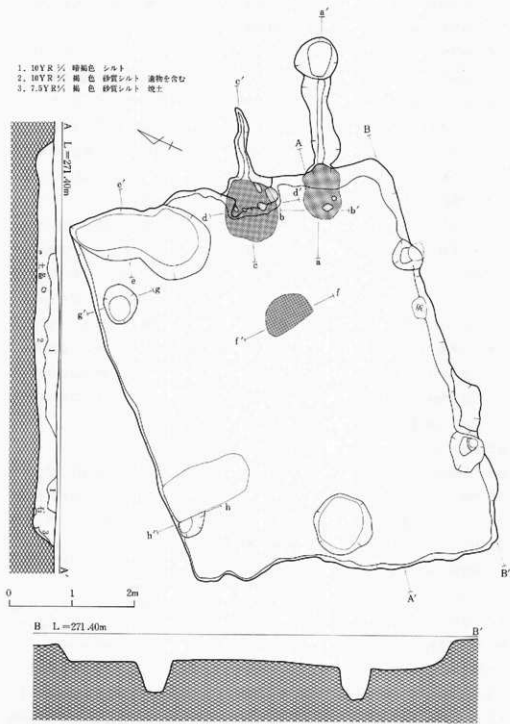
II-1号溝跡と並び多量の遺物が出土する。

坏形土器はすべてクロロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りが主体である。本遺構から出

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
38II 7 住46	168	砥石	4.4	5.4	1.6	70	流紋岩	奥羽山地 新第三系	御厨5 釜切油瓶 新第三系陶磁器形
38II 7 住47	169	剃片石器	3.3	1.9	0.3	2.25	珪質泥岩	奥羽山地新第三系	中新統

土する坏形土器37%に再調整が認められ、部位は体部下端、体部下半及び底部全面あるいは一部底部で、大半が手持ち篋削りである。再調整が認められる坏形土器の約2分の1がBI 1b類、3分の1がBI 1c類で、わずかであるがBI 2c類を含むことが注目される。土師器はすべて内面黒色処理が施され、1・3・4 (BI 1b類) と13 (BI 1c類) が二次的加熱をうけている。黒書

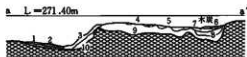
1. 10YR 〇〇 暗褐色 シルト
2. 10YR 〇〇 褐色 砂質シルト 遺物を含む
3. 7.5YR 〇〇 褐色 砂質シルト 焼土



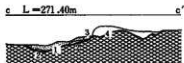
第30図 II-7号住居跡(1)

あるいは墨底が認められるものが6点ある。15「神」(BI Ic類)と7「林」・5「林」(BI Ib類)が読み、他は不明である。また、13は底部に「ψ」の筧による条痕が認められる。17(BI 2c類)はあかやき土器の坏で、内面2カ所に灯明の芯跡と推定されるものが認められる。23・22(BII a類)はいずれも還元不足の須恵器で体部内外面に十字の火罨が認められる。

高台付環形土器は高台部のみで埋土から出土する。



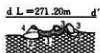
1. 7.5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト
2. 10Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト 焼土
3. 10Y R 5/6 褐色 砂質シルト 焼成をうけている
4. 10Y R 5/6 明黄褐色 砂
5. 7.5Y R 5/6 灰褐色 砂質シルト 固くしまる
6. 10Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト 焼成をうけている
- 7.
- 8.
9. 10Y R 5/6 明黄褐色



1. 焼土。焼成を強くうけている
2. 焼成が弱い



1. 5Y R 5/6 に近い褐色 砂 焼土
2. 7.5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト 木炭を含む
3. 7.5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト
4. 地山に暗褐色土や焼土粒が混じる



1. 5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト 焼土
2. 5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト 暗褐色土が混じる
3. 5Y R 5/6 に近い褐色 砂質シルト
4. 5Y R 5/6 明黄褐色 砂質シルト



1. 7.5Y R 5/6 褐色 シルト 砂や焼土が多量に混じる



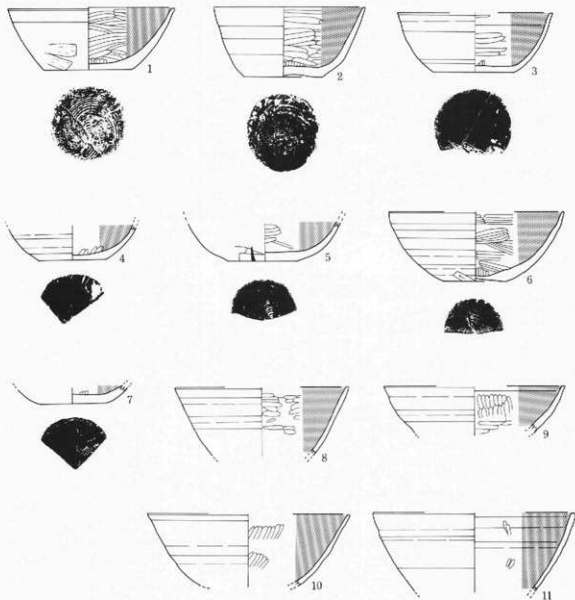
1. 10Y R 5/6 暗褐色 砂質シルト
2. 10Y R 5/6 褐色 シルト
3. 10Y R 5/6 黄褐色 砂



1. 5Y R 5/6 暗黄褐色 シルト

第31図 II-7号位層跡(2)





土器観察表

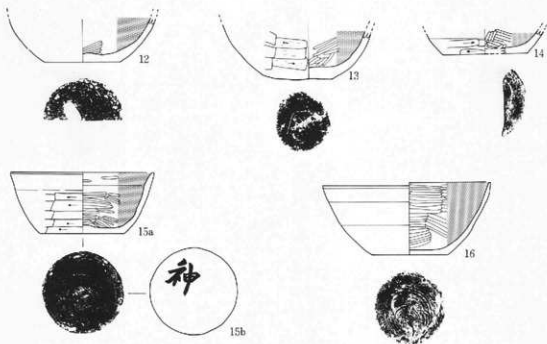
実測次	写真登録番号	種類	器種	分類	法量			外面調整			内面調整			成跡	製造地	その他		
					口縁径	底径	高さ	口縁	底	高さ	口縁	底	高さ					
33	7	1	123	483	杯	杯	口 1.15	13.2	7.0	1.0	1	1	1	1	1	1	1	内面(2次)的加飾
32	7	2	124	482	杯	杯	口 1.12	12.5	6.2	1.0	1	1	1	1	1	1	1	内面、外底下部—波状の字跡へ→加飾
30	7	3	125	477	杯	杯	口 1.10	12.2	6.2	1.2	1	1	1	1	1	1	1	内面(2次)的加飾、底面全面字跡へ→加飾
32	7	4	126	476	杯	杯	口 1.15	—	5.4	—	1	1	1	1	1	1	1	内面(2次)的加飾、底面全面字跡へ→加飾
32	7	5	127	487	杯	杯	口 1.15	—	5.1	—	1	1	1	1	1	1	1	内面、外底「跡」
32	7	6	128	482	杯	杯	口 1.20	14.0	5.9	2.2	1	1	1	1	1	1	1	内面、外底下部—波状の字跡へ→加飾
32	7	11	129	474	杯	杯	口 1.16	—	2.2	—	1	1	1	1	1	1	1	内面—波状の字跡、外底下部—波状の字跡へ→加飾
32	7	11	130	488	杯	杯	口 1.1	12.0	—	1	1	1	1	1	1	1	1	内面、外底下部—波状の字跡へ→加飾
32	7	11	131	471	杯	杯	口 1.1	14.4	—	1	1	1	1	1	1	1	1	内面
32	7	11	132	479	杯	杯	口 1.1	16.2	—	1	1	1	1	1	1	1	1	内面
32	7	11	133	469	杯	杯	口 1.1	16.2	—	1	1	1	1	1	1	1	1	内面

第32図 II-7号住居跡出土遺物(1)

甕形土器は出土遺物の半数以上を占める。土師器はロクロ不使用が56%を占め大型のものが多く、ロクロ使用が39%でほとんどが大型である。40 (A1b類) は頸部に1対と口縁部に1対の計4個の孔をもつ。須恵器は少なく数点の出土である。42は体部下半の破片で再利用の痕跡が認められ、10.5cm×8.5cmの範囲が磨かれている。41はあかやき土器の甕である。

壺形土器は須恵器だけにみられ、43はロクロ使用成形の長頸壺である。底部は手持ち篋削り後回転篋削りによる削り出し高台である。

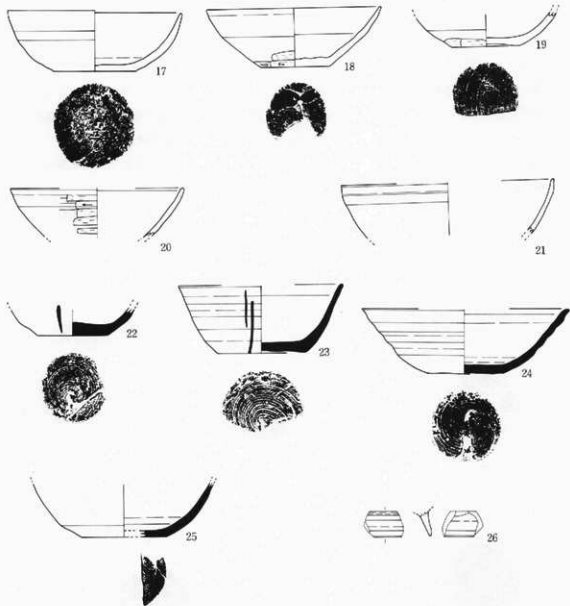
鉢形土器はいずれも内面黒色処理が施され、44は底部全面が手持ち篋削りによる再調整が認められる。



土器観察表

実測径	写尺径	種類	器種	分類	土質		外面調整		内面調整		焼成	焼色	その他
					ロクロ使用	手製	磨	磨	磨	磨			
10.5	7.8	12	134	472	II	赤	磨	1	1	赤	赤	赤	内面、磨き、底部全周手削り
10.5	7.8	13	135	481	II	赤	磨	1	1	赤	赤	赤	内面(2/3程度)、底部へ下による
10.5	7.8	14	136	493	II	赤	磨	1	1	赤	赤	赤	内面、磨き
10.5	7.8	15	137	493	II	赤	磨	1	1	赤	赤	赤	内面、磨き
10.5	7.8	16	138	494	II	赤	磨	1	1	赤	赤	赤	内面、磨き

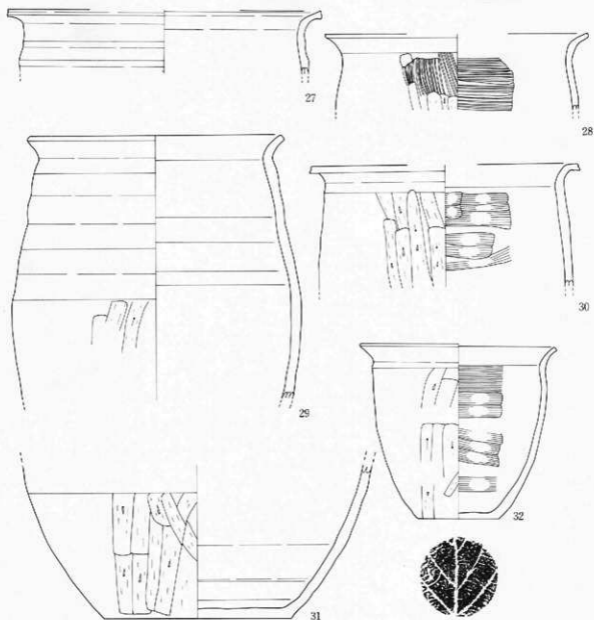
第33図 II-7号住居跡出土遺物(2)



土器観察表

実測図	写真	種類	形類	分類	法 量		外 面 測 量				内 面 測 量		底形	底形 時期	色調	その他					
					口径	高さ	口縁高	体高(下層)	底径	口縁径	体径	底高					口径	体高			
30	11	7	11	12	130	461	△	杯	群1 2a	11.9	6.5	1.9	/	/	/	/	/	/	11P	2.13B	内面外縁に施した凸状土遺物と適合
30	11	7	11	14	140	173	△	杯	群1 2a	11.7	10.3	4.2	/	/	/	/	/	/	11P	2.13B	体高下縁・底径全面手縁へ手取
30	11	7	11	19	141	174	△	杯	群1 2a	—	3.5	—	—	/	/	/	/	—	11P	2.13B	体高下縁・底径全面手縁へ手取
30	11	7	11	20	142	470	△	杯	群1 2	11.0	—	—	/	/	—	/	—	—	11P	2.13B	
30	11	7	11	21	143	479	△	杯	群1 2	11.0	—	—	/	/	—	/	—	—	11P	2.13B	
30	11	7	11	22	144	486	△	杯	群1a	—	5.5	—	—	/	—	/	—	—	11P	2.13B	体高内外面十字に手取。底径不足
30	11	7	11	23	145	466	△	杯	群1a	11.2	7.8	1.4	/	/	/	/	/	—	11P	2.13B	体高内外面十字に手取。底径不足
30	11	7	11	24	146	467	△	杯	群1a	11.0	6.9	1.1	/	/	/	/	/	—	11P	2.13B	口・体高内外面十字に手取。底径不足
30	11	7	11	25	147	1017	△	杯	群1a	—	10.5	—	—	/	—	/	—	—	11P	2.13B	口・体高内外面十字に手取。底径不足
30	11	7	11	26	148	489	△	高台笠形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11P	2.13B	高台部分のみ

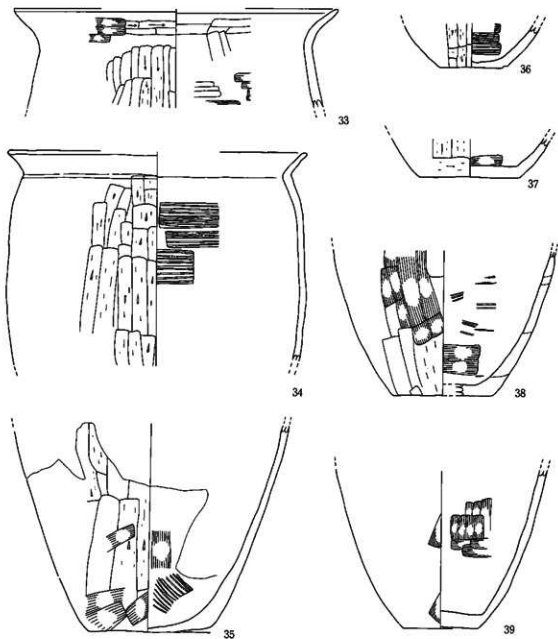
第34図 II-7号住居跡出土遺物(3)



土器観察表

式群別	写尺	口径	体高	口径	分類	土質			外面装飾			内面装飾			成刻	底面	その他	
						11	12	13	14	15	16	17	18	19				20
10	17	18	27	149	116	紅	黄	赤 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17	18	29	196	113	紅	黄	赤 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17	18	20	154	106	紅	黄	赤 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17	18	30	132	108	紅	黄	赤 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17	18	31	133	109	紅	黄	赤 1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	17	18	32	154	104	紅	黄	赤 1.0	10.7	6.4	22.9	—	—	—	—	—	—	—

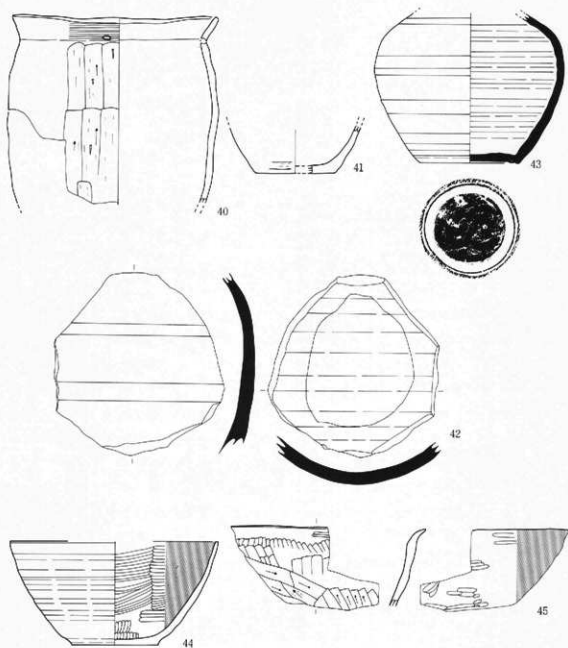
第35図 II-7号住居跡出土遺物(4)



土器観察表

実測図	写真図	種類	形状	分属	法量		外面測定		内面測定		成形	色澤	その他					
					口径	底径	口縁高	体高(下腹)	底径	口縁高				体高				
35	7	33	155	412	耳	壺	A 1 a	24.8	-	20.2	h	-	20.7	-	1.57R			
36	7	34	156	427	耳	壺	A 1 a	24.8	-	20.2	h	-	20.7	-	1.57R	II-5 位出土遺物と結合		
37	7	35	157	426	耳	壺	A 1 a	-	5.2	-	h	-	h=2.8	h	20.7	1.57R		
38	7	36	158	449	耳	壺	A	-	2.5	-	h	-	A	h	20.7	1.57R		
39	7	37	159	432	耳	壺	A 1 a	-	3.8	-	h	-	n	-	n	20.7	1.57R	
38	7	38	160	438	耳	壺	A 1 a	-	4.0	-	a2.4	h	-	A	n	20.7	1.57R	輪縁部
39	7	39	161	427	耳	壺	A 1 a	-	3.8	-	n	h	-	n	n	20.7	1.57R	

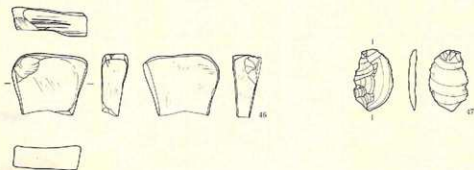
第38図 II-7号住居跡出土遺物(5)



土器観察表

実測深	写真	図録	種類	器種	分類	器量	外面調整			内面調整			成形	造器時期	色調	その他		
							口縁調整	底面	口縁部(下部)	底面	口縁部	底面						
27	17	41	352	422	II	器	A 1 b	13.4	—	20	8	—	20	10	—	20	口縁部・頸部に4個の孔	
27	17	41	352	422	II	器	—	16.2	—	—	—	—	27	17	—	27	口縁部	
27	17	42	364	390	S	器	器口	—	—	1	—	—	2	—	27	17	2次製用板	
27	17	43	363	392	S	器口縁	—	8.8	—	1	—	—	2	—	27	17	口縁部	
27	17	44	366	430	II	器	—	16.0	4.8	8.2	1	1	2	20	20	20	20	内面、口縁部土遺物と結合
27	17	45	367	431	II	器	—	12.0	—	20	8	—	20	20	—	20	内面、口縁部土遺物と結合	

第37図 II-7号住居跡出土遺物(6)



第38図 II-7号住居跡出土遺物(7)

### II-8号竪穴住居跡

〈遺構〉(第39図、写真図版9)

調査区西部に集中する竪穴住居跡群の東側に位置し、II-9・12・15号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土が方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構は水道管理設により北西部が切られている。

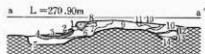
遺構の形態と規模は北西—南東方向の長軸が420cm以上、短軸が402cmのほぼ方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から28度北偏する。壁高は北東壁16cm、南東壁23cm、南西壁24cmである。壁は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、黒褐色土、黒褐色土、極暗褐色土の4層に大別される。埋土下部に木炭・土器片を多く含み、焼失廃棄されたものである。2層と3層の間に火山灰を含む。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層でほぼ平坦であるが、北から南へ6~10cmほど傾斜する。主柱穴は4本検出され、2本が南壁に接する。床面からの深さは42~72cmである。周溝や貼床は認められない。

カマド脇床面に土坑が検出されている。平面形は開口部が84cm×72cmの楕円形、底部が60cm×44cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大25cmである。底面は中央が凹み、壁は外傾して立ち上がる。埋土には炭化材や焼土粒、土器を多量に含む。

カマドは東壁中央の南寄りに構築され、遺存状態は良好である。規模は袖部から煙出し部まで208cm前後で、煙道の幅が最大40cm、袖部の幅が112cmである。袖部には袖材の一部として使用されたと推測される礎が残っている。燃焼部は径62cm×50cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚10cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は中央付近を頂点として緩やかに上昇した後下降し、煙出し部で垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径42cmの円筒形で、検出面からの深さは



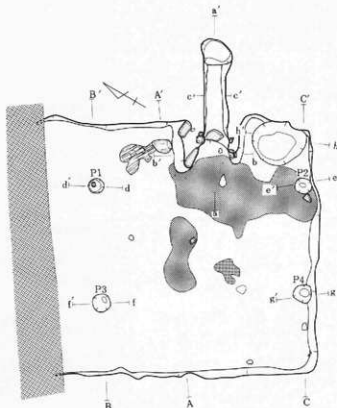
- |              |      |       |               |
|--------------|------|-------|---------------|
| 1. 7.5YR 7/2 | 黒色   | 砂質シルト | 焼成をうけている      |
| 2. 5YR 7/2   | 赤褐色  | 砂質シルト | 焼土            |
| 3. 7.5YR 7/2 | 黒褐色  | 砂質シルト | 焼土や木炭が多量に混じる。 |
| 4. 5YR 7/2   | 暗褐色  | 砂質シルト | 焼土や木炭が少量混じる   |
| 5. 10YR 7/2  | 暗褐色  | 砂質シルト |               |
| 6. 7.5YR 7/2 | 暗褐色  | シルト   | 焼土を微量含む       |
| 7. 10YR 7/2  | 暗褐色  | シルト   |               |
| 8. 10YR 7/2  | 黒褐色  | シルト   |               |
| 9. 5YR 7/2   | こげ茶色 | 砂質シルト | 強く焼成をうけている    |
| 10. 10YR 7/2 | 褐色   | 砂質シルト |               |
| 11. 10YR 7/2 | 黒褐色  | シルト   | 焼土を少量含む       |
| 12. 10YR 7/2 | 赤色   | シルト   |               |
| 13. 10YR 7/2 | 暗褐色  | シルト   |               |
| 14. 10YR 7/2 | 黄褐色  | シルト   |               |



- |              |      |       |          |
|--------------|------|-------|----------|
| 1. 5YR 7/2   | 暗赤褐色 | シルト   | 焼土       |
| 2. 10YR 7/2  | 暗褐色  | シルト   | 焼土を含む    |
| 3. 10YR 7/2  | 黄褐色  | シルト   |          |
| 4. 10YR 7/2  | 黒褐色  | シルト   | 焼土や砂を含む  |
| 5. 5YR 7/2   | こげ茶色 | 砂質シルト |          |
| 6. 7.5YR 7/2 | 暗褐色  | シルト   |          |
| 7. 7.5YR 7/2 | 暗褐色  | 砂質シルト | 焼土を多量に含む |

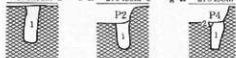


- |              |      |       |          |
|--------------|------|-------|----------|
| 1. 5YR 7/2   | 暗赤褐色 | シルト   | 焼土       |
| 2. 10YR 7/2  | 暗褐色  | シルト   | 焼土を含む    |
| 3. 10YR 7/2  | 黄褐色  | シルト   |          |
| 4. 10YR 7/2  | 黒褐色  | シルト   | 焼土や砂を含む  |
| 5. 5YR 7/2   | こげ茶色 | 砂質シルト |          |
| 6. 7.5YR 7/2 | 暗褐色  | シルト   |          |
| 7. 7.5YR 7/2 | 暗褐色  | 砂質シルト | 焼土を多量に含む |



0 1 2 m

d L=270.60m d' e L=270.90m e' g L=270.90m g'



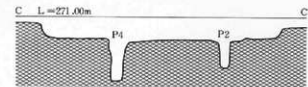
f L=270.70m f'



- |     |              |     |       |             |
|-----|--------------|-----|-------|-------------|
| P 1 | 1. 7.5YR 7/2 | 黒褐色 | シルト   | 粘性がある       |
| P 2 | 1. 10YR 7/2  | 暗褐色 | シルト   |             |
| P 3 | 1. 10YR 7/2  | 黒褐色 | シルト   | 粘性がある       |
|     | 2. 10YR 7/2  | 暗褐色 | シルト   | 粘性がある       |
| P 4 | 1. 10YR 7/2  | 暗褐色 | シルト   |             |
| P 5 | 1. 10YR 7/2  | 黒褐色 | シルト   | 木炭を含む       |
|     | 2. 10YR 7/2  | 暗褐色 | シルト   | 焼土を含む       |
|     | 3. 10YR 7/2  | 黒褐色 | シルト   | 木炭や焼土を多量に含む |
|     | 4. 10YR 7/2  | 褐色  | 砂質シルト |             |



- |              |     |       |                  |
|--------------|-----|-------|------------------|
| 1. 7.5YR 7/2 | 黒褐色 | シルト   | 固くしまる            |
| 2. 7.5YR 7/2 | 黒褐色 | シルト   | 木炭を含む            |
| 3. 7.5YR 7/2 | 黒褐色 | シルト   | 全体に砂がちらばる。土層片が混入 |
| 4. 7.5YR 7/2 | 暗褐色 | 砂質シルト | 木炭を含む。しまりが無い     |
| 5. 5YR 7/2   | 淡黄色 |       | 火山灰              |



第39図 II-8号住居跡



23cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

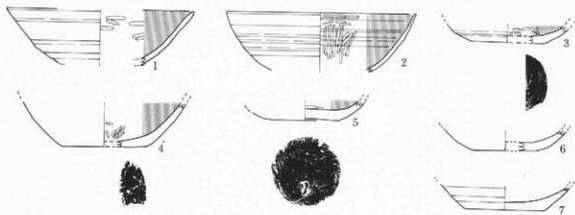
〈出土遺物〉(第40~42図、写真図版69・70)

遺物は床直、カマド、埋土、貯蔵穴から出土する。器種は坏、甕、壺で構成され、坏と甕が主体である。II-9・10・13・14号竪穴住居跡からの出土遺物と接合する土器が3点ある。土器以外では鉄製品がある。

坏形土器はすべてロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りが主体である。5(BI 1b類)と7(BI 2c類)などわずかであるが、体部下端及び底部全面あるいは一部底部に手持ち鏡削りによる再調整が認められる。土師器は内面黒色処理が施され、4(BI 1a類)が二次的加熱をうけている。6(BI 2a類)・7はあかやき土器の坏で、7は再調整が認められる。

壺形土器は須恵器だけにみられ、すべてロクロ使用成形である。20は張り付け高台である。

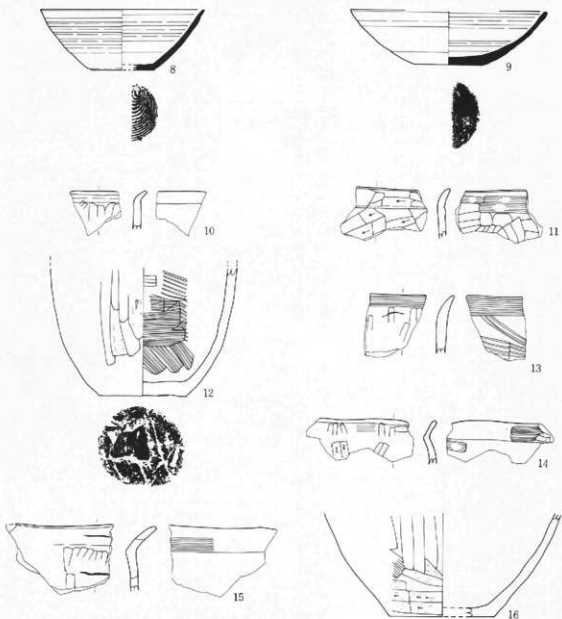
土器以外では床面から出土する両端を欠く刀子21がある。現存長5.8cm、身の長さ4.8cm、茎1.0cm、身幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ5.25gである。22は床面から出土するほぼ完形の釘である。現存長6.7cm、重さ7.0g、断面は10.8cm×0.6cmの長方形を呈し、末端を平らに伸ばして頭部とする。



土器観察表

文相図	写真図版掲載	器種	分類	口縁		外面調整		内面調整		底面	底面	その他								
				口径	口径	144度	体部(下部)	底面	174度				体部	底面						
01	8	1	182	1044	坏	坏	11	11.00	-	14.00	/	/	-	ae	ae	-	0770	-	307	内底
02	8	2	180	1028	坏	坏	11	11.00	-	/	/	-	-	ae	ae	-	0770	-	313	内底、赤子
03	8	3	189	1045	土師	土師	11	11.00	-	0.00	-	-	-	-	ae	0770	600	55	内底	
04	8	4	180	1013	土師	土師	11	11.00	-	4.00	-	/	-	ae	ae	0770	600	51	内底(二次的加熱)	
05	8	5	181	1038	土師	土師	11	11.00	-	2.00	-	-	-	ae	0770	600	2	319	内底、一環透子輪→少研	
06	8	6	192	1044	土師	土師	11	11.00	-	0.00	-	-	-	/	0770	600	2	313	内底	
07	8	7	183	1045	土師	土師	11	11.00	-	0.00	-	/	/	/	0770	600	55	55	底面全面手輪→少研	

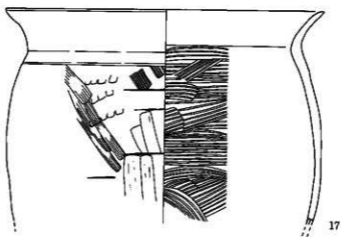
第40図 II-8号住居跡出土遺物(1)



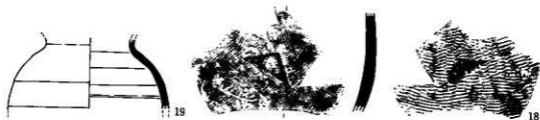
土器観察表

発掘区	写真番号	種類	器形	分類	口径		外口直径		内口直径			底径	高さ	色調	その他		
					口径	高さ	口径	口径	口径	口径	口径						
41	8	8	254	2654	Ⅱ	碗	8.5	13.5	4.8	7	7	7	7	7	7	7	7
41	8	9	186	1864	S	碗	8.5	13.5	4.2	7	7	7	7	7	7	7	7
42	11	8	199	1932	Ⅱ	A15	—	—	20	8	—	20	8	—	2070	—	Ⅱ
43	11	8	117	1531	Ⅱ	A15	—	—	8	8	—	8	8	—	2070	—	Ⅱ
43	11	8	126	1277	Ⅱ	A15	—	7.6	—	8	8	—	8	8	2070	—	Ⅱ
43	11	8	139	1296	Ⅱ	A15	—	—	30	8	—	20	8	—	2070	—	Ⅱ
44	11	8	141	2001	Ⅱ	A15	—	—	20	8	—	20	8	—	2070	—	Ⅱ
44	11	8	151	2013	Ⅱ	A15	—	—	20	8	—	20	8	—	2070	—	Ⅱ
44	11	8	161	2017	Ⅱ	A15	—	—	20	8	—	20	8	—	2070	—	Ⅱ

第41図 II-8住居跡出土遺物(2)



17

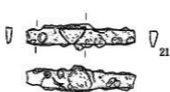


19

18



20



21



22

## 土器観察表

天目調	厚尺	口径	口径	胎	種類	注	外周調査			内面調査			形状	底形	色調	その他			
							口縁	口縁	口縁	底	口縁	底					底		
42	8	10	17	202	1007	5	変	口1a	25.6	--	/	3+n	--	1~4	h	--	ロクニ	--	2.5YR 動物皮、11-14程黄土混雑と褐色
42	8	10	18	204	1044	5	変	口1b	--	--	/	--	--	/	--	--	ロクニ	--	
42	8	10	19	205	1050	5	変	--	--	--	/	--	--	/	--	--	ロクニ	--	IT
42	8	10	20	206	1052	5	変	--	4.8	--	/	/	--	/	/	--	ロクニ	SCV	粘土混雑台

第42図 II-8号住居跡出土遺物(3)

## II-9号竪穴住居跡

### 〈遺構〉(第43図、写真図版10)

調査区西部に集中する竪穴住居跡群のほぼ中央に位置し、II-8・10・12・13号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土が方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構は水道管理設により北西壁を切られている。

遺構の形態と規模は北西-南東方向の長軸が476cm、短軸が468cmでほぼ方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から32度北偏する。壁高は北東壁29cm、南東壁5cm、南西壁17cmである。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土の3層に大別される。本遺構は各層とも堅くしまり、炭化材が混入する。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層で、平坦である。主柱穴は2本検出され、床面からの深さは30-35cmである。その他柱穴が2本検出されている。床面は堅くしまっており、一部に貼床が認められる。周溝は南西壁を巡り、床面からの深さが最大23cmである。埋土は2層に大別される。

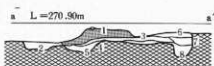
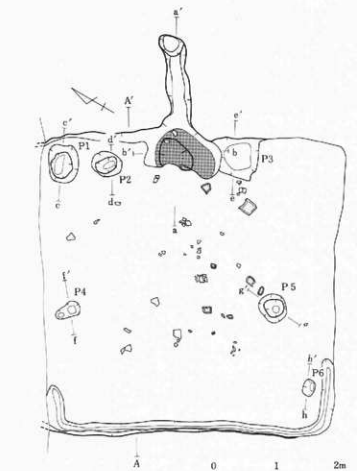
カマド脇北側と南側床面から土坑が検出されている。北側の土坑は開口部が60cm×58cmの不定方形、底部が42cm×42cmの歪んだ円形を呈する。床面からの深さは最大11cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。埋土は上部に焼土粒や灰を含む。南側の土坑は開口部が50cm×40cmの楕円形、底部が25cm×10cmの長楕円形を呈する。床面からの深さは最大17cmである。底部は凹んでおり、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は1層に焼土が混入し投げ込まれたものと推定される。

カマドは東壁のほぼ中央に構築され、遺存状態はやや良好である。規模は袖部から煙出し部まで235cm前後で、煙道の幅が最大38cm、袖部の幅が122cmである。袖部はシルト質土を堅めて構築している。燃焼部は径40cm×60cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚12cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は平坦であるが、煙出し部で下降した後垂直に立ち上がる。煙道底部は強く焼成をうけ赤色変化している。煙出し部の掘り込みは径32cmの円筒形で、検出面からの深さが40cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

### 〈出土遺物〉(第44・45図、写真図版70・71)

遺物は床面と埋土から出土する。器種は環、高台付環、甕、鉢で構成され、環と甕が主体である。II-9・14号竪穴住居跡、II-1号溝跡出土遺物と接合する土器が2点ある。本遺構は遺物量が少ないため、全体の傾向をつかむことは困難である。

環形土器はすべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りと推定される。3(B II b類)1点のみであるが、一部底部に手持ち篋削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面



1. 10YR 〓 黒褐色 シルト 焼土や木炭がブロック状に混じる
2. 10YR 〓 黄褐色 砂
3. 5YR 〓 暗赤褐色 焼成を強くうけ固くしまる
4. 10YR 〓 赤褐色 砂質シルト
5. 10YR 〓 暗黄褐色 粘質シルト
6. 5YR 〓 暗赤褐色 シルト 木炭を含む。しまりがある
7. 10YR 〓 黒褐色 シルト しまりがある
8. 10YR 〓 黄褐色 シルト しまりがある



1. 5YR 〓 暗赤褐色 焼土
2. 10YR 〓 黄褐色 粘土 固くしまる
3. 10YR 〓 黄褐色 砂質シルト
4. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト
5. 10YR 〓 暗黄褐色 粘質シルト



1. 10YR 〓 黒褐色 シルト 木炭を多量に含む。しまりがある
2. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト 木炭を含む。しまりがある
3. 10YR 〓 暗褐色 シルト 粘性がある
4. 10YR 〓 暗褐色 シルト 粘性がある。木炭や焼土を含む
5. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト しまりがある。粘り床
6. 10YR 〓 黒色 砂質シルト



- P 1
1. 10YR 〓 黄褐色 砂 しまりがある
  2. 10YR 〓 黒褐色 シルト しまりがある
  3. 10YR 〓 にい黄褐色 砂 しまりがある
- P 2
1. 5YR 〓 暗褐色 灰がブロック状に混じる。焼土
  2. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト
  3. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト 木炭が少量混じる。焼土と灰を含む
  2. 10YR 〓 黒色 砂質シルト
  3. 10YR 〓 黒色 砂 2層より明るい



- P 4
1. 10YR 〓 黒色 シルト
  2. 10YR 〓 にい黄褐色 シルト 粘性がある
- P 5
1. 10YR 〓 黒褐色 シルト 木炭を微量含む
  2. 10YR 〓 黒褐色 シルト しまりがある
  3. 10YR 〓 にい黄褐色 砂 しまりがある
  4. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト しまりがある
- P 6
1. 10YR 〓 暗褐色 砂質シルト
  2. 10YR 〓 にい黄褐色 砂 しまりがある

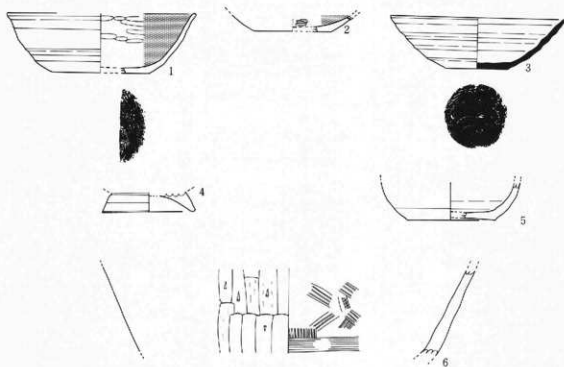


第43図 II-9号住居跡

黒色処理が施され、1 (B I 7 a 類) が二次的加熱をうけている。

高台付環は高台部のみで埋土から出土する。

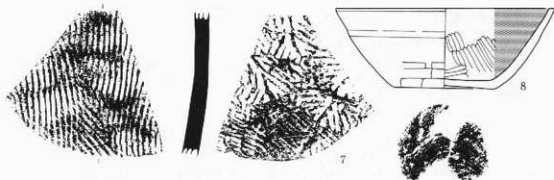
甕形土器は土師器と須恵器がほぼ同数である。5 (B I b 類) は一部底部に手持ち篋削りの再調整が認められる。



土器観察表

実測値	写真記録番号	器種	分類	法量		外面調整			内面調整			成形	色調	その他						
				口縁底径(器高)	口縁底径(下部)	造形	口縁削	縁面	底面	口縁削	縁面				底面					
44	II	9	器1	209	1060	皿	杯	B I 7 a	22.9	47.51	4.2	/	/	/	/	/	ロアコ	素灰	内黒(2次灼)内赤	
44	II	9	器2	210	1064	皿	杯	B I 7 a	—	—	—	—	—	—	—	—	ロアコ	素灰	内黒	
44	II	9	器3	211	1076	皿	杯	須恵器	11.9	5.6	1.1	/	/	—	/	/	ロアコ	素灰	内赤	口縁削、口縁底に遺物と接合
44	II	9	器4	212	1087	甕	高台付甕	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ロアコ	素灰	7.5% 褐色部のみ	
44	II	9	器5	213	1058	皿	盤	B I 5	—	—	—	/	/	—	/	/	ロアコ	素灰	内赤	一深黒部平削へナリ
44	II	9	器6	214	1064	皿	盤	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10% 内赤	

第44図 II-9号住居跡出土遺物(1)



土器観察表

実測図	写真色	色別	種類	分類	法量		外面調整		内面調整		成形	底面	色調	その他	
					口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面					
45	9	7	213	1000	S	腰	瓦片	—	—	—	—	—	—	—	—
45	9	8	216	1000	S	皿	瓦片	—	—	—	—	—	—	—	—

第45図 II-9号住居跡出土遺物(2)

### II-10号竪穴住居跡

〈遺構〉(第46図、写真図版11)

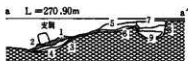
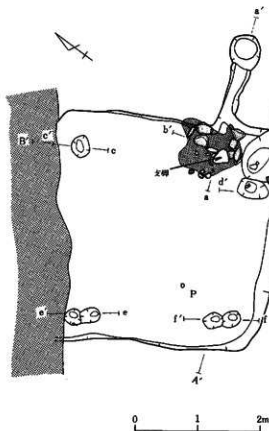
調査区西部に集中する竪穴住居跡群の西側に位置し、II-9・13号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構は水道管理設により中央部を切られている。

遺構の形態と規模は北西-南東方向の長軸が358cm、短軸が350cmの隅丸方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から21度北偏する。壁高は北東壁24cm、南東壁18cm、南西壁9cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

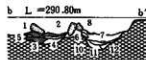
埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土の3層に大別される。各層とも堅くしまり、土器片を多く含む。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層で黄色砂層である。平坦であるが、北西から南東へ6-8cmほど傾斜する。主柱穴は4本検出され、床面からの深さは21-31cmといずれも浅い。南西側の2本は建て替えられたものと推定される。周溝や貼床は認められない。

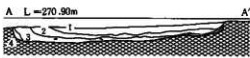
カマド脇南側床面から土坑が検出されている。平面形は開口部が96cm×64cmの楕円形、底部が50cm×26cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大31cmである。底面は平坦で、壁は緩や



- |              |      |       |    |
|--------------|------|-------|----|
| 1. 5YR 7/6   | 暗赤褐色 | 粘土    | 支脚 |
| 2. 7.5YR 7/6 | 暗褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 3. 5YR 7/6   | 暗褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 4. 10YR 7/6  | 黄褐色  | シルト   | 支脚 |
| 5. 10YR 7/6  | 黄褐色  | シルト   | 支脚 |
| 6. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 7. 10YR 7/6  | 暗褐色  | シルト   | 支脚 |
| 8. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 9. 10YR 7/6  | 黄褐色  | シルト   | 支脚 |



- |              |      |       |    |
|--------------|------|-------|----|
| 1. 5YR 7/6   | 暗赤褐色 | シルト   | 支脚 |
| 2. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 3. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 4. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 5. 10YR 7/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 6. 5YR 7/6   | 暗赤褐色 | シルト   | 支脚 |
| 7. 7.5YR 7/6 | 暗褐色  | シルト   | 支脚 |
| 8. 5YR 7/6   | 暗赤褐色 | シルト   | 支脚 |
| 9. 5YR 7/6   | 暗赤褐色 | シルト   | 支脚 |
| 10. 10YR 7/6 | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 11. 10YR 7/6 | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |
| 12. 10YR 7/6 | 黄褐色  | 砂質シルト | 支脚 |



- |              |     |       |    |
|--------------|-----|-------|----|
| 1. 7.5YR 7/6 | 暗褐色 | シルト   | 支脚 |
| 2. 7.5YR 7/6 | 暗褐色 | シルト   | 支脚 |
| 3. 10YR 7/6  | 暗褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
| 4. 10YR 7/6  | 黄褐色 | 砂質シルト | 支脚 |

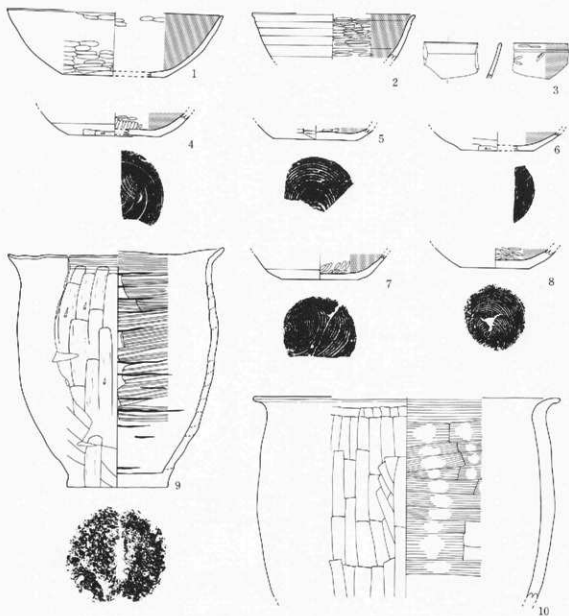


- |    |              |     |       |    |
|----|--------------|-----|-------|----|
| P1 | 1. 10YR 7/6  | 暗褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
|    | 2. 10YR 7/6  | 黄褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
| P2 | 1. 7.5YR 7/6 | 暗褐色 | シルト   | 支脚 |
|    | 2. 10YR 7/6  | 暗褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
|    | 3. 10YR 7/6  | 黄褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
| P3 | 1. 10YR 7/6  | 暗褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
|    | 2. 10YR 7/6  | 黄褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
| P4 | 1. 10YR 7/6  | 暗褐色 | 砂質シルト | 支脚 |
|    | 2. 10YR 7/6  | 黄褐色 | 砂質シルト | 支脚 |



第46图 II-10号住居跡

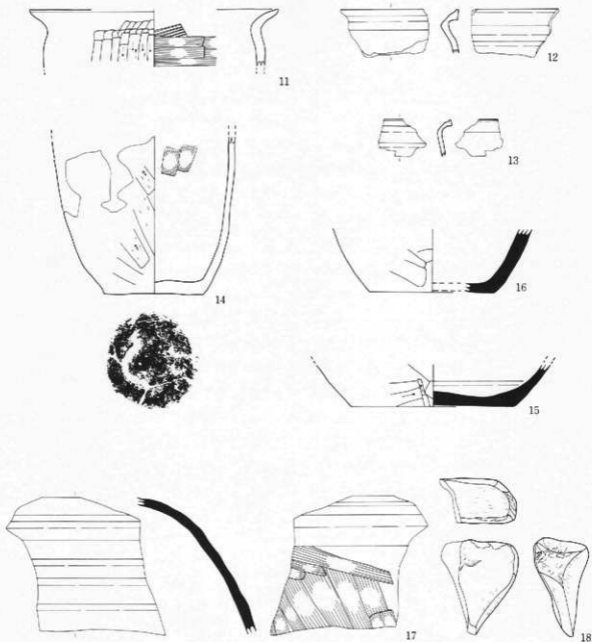




土器観察表

実測図	写真図	種類	目録	分類	法		外面調整			内面調整			成形	底形	底面	包圍	その他		
					法	目録	目録	目録	目録	目録	目録	目録							
42	10	1	217	1090	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面(1次彫刻部)→底縁部→口縁	
43	10	2	218	1090	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面	
44	10	3	219	1090	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面、口縁部	
45	10	4	220	1104	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面、体部下部→口縁部	
47	10	5	221	1104	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面(2次彫刻部)	
47	10	6	222	1105	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面(2次彫刻部)	
47	10	7	223	1095	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面	
47	10	8	224	1102	杯	口縁底厚	底高	口縁高	口径(下部)	底径	口縁径	体径	底径	口	底	底	底	内面	
47	10	9	225	1070	器	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	縦彫	
47	10	10	226	1070	器	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	縦彫

第47図 II-10号住居跡出土遺物(1)



土器観察表

実測図	写真図	種類	器種	数量	外面調整			内面調整			底形	底径	色別	その他			
					口縁調整	器底	口縁部(下部)	底面	縁部	器底							
48-10-10-01	11	227	0919	片	素	A 1 a	23.0	-	A	A	-	0.07 a	-	193			
48-10-10-01	12	228	0961	片	素	B 1 b	-	-	f	f	-	0.07 a	-	193			
48-10-10-01	13	229	0967	片	素	B 1 b	-	-	f	-	-	0.07 a	-	1,338	片		
48-10-10-01	14	230	433	片	素	A 1 a	-	0.8	-	A	B	-	w	0.07 a	片 : 溝内・遺物と結合		
48-10-10-01	15	231	1943	片	素	B 1 c	-	11.0	-	-	B	-	f	0	0.07 a	1,338	
48-10-10-01	16	232	1966	片	素	B 1 c	-	10.0	-	-	B	-	w	0	0	1,338	
48-10-10-01	17	233	1164	片	素	B 1 c	-	-	-	f	-	-	f	0.07 a	-	193	片 : 溝内・遺物と結合

第48図 II-10号住居跡出土遺物(2)

かに外傾して立ち上がる。埋土は焼成をうけ、焼土が堆積する。本土坑は貯蔵穴と推定される。

カマドは東壁の中央南寄りに構築され、遺存状態は良好である。規模は袖部から煙出し部まで200cm前後で、煙道の幅が最大30cm、袖部の幅が72cmである。袖部には芯材の一部として使用されたと推定される礎が残っている。燃焼部は径が58cm×64cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚10cmでレンズ状に赤色変化している。煙道は緩やかに上昇した後、煙出し部で垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径48cmの円筒形で、検出面からの深さは29cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第47・48図、写真図版71・72)

遺物は床直、カマド、埋土、貯蔵穴から出土する。器種は坏、甕のみである。II-1号溝跡出土遺物と接合する土器が2点ある。土器以外では砥石が埋土から出土する。

坏形土器はほとんどB I I類である。すべてロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りが主体である。1・4 (B I I b類)、6 (B I I c類) など約3分の1が体部下端及び底部全面あるいは一部底部に回転寛削りや手持ち寛削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面黒色処理が施され、1 (B I I b類)・5 (B I I a類)・6が二次的加熱をうけている。墨底が認められるものは2点であるがいずれも読めるものはない。あかやき土器の坏が1点出土する。

甕形土器では土師器はロクロ不使用が3分の2を占め大型のものが大半で、ロクロ使用のものはほとんど小型である。須恵器は体部片と寛削りが施される底部片である。

土器以外では埋土から砥石18

が出土する。

表7 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
48II10住18	234	砥石	7.4	6.1	3.4	150	流紋岩	奥羽山地 前第三系	使用面3 大平大塚 敷瓦及び磁器陶器

## II-12号竪穴住居跡

〈遺構〉(第49図、写真図版12)

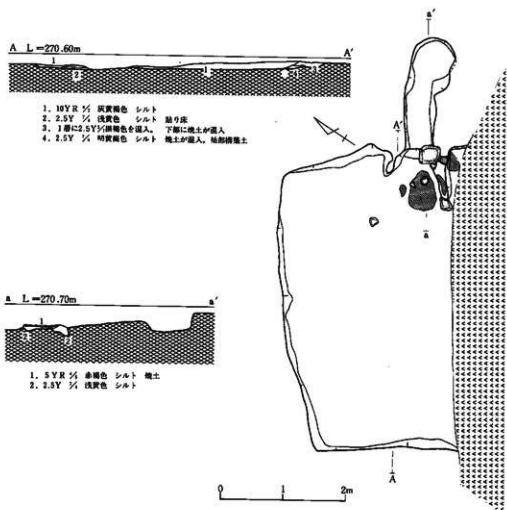
調査区西部に集中する竪穴住居跡群のほぼ中央に位置し、II-8・9・13・15号竪穴住居跡と隣接する。南東側約3分の1が調査区外にあり、遠野市教育委員会によってカマドを含めた南東部が調査されている。II-14号陥し穴状遺構と重複し、本遺構がII-14号陥し穴状遺構の東側上半を切って構築されている。

遺構の形態と規模は北東-南西方向の長軸が456cm、短軸が310cm以上である。カマドの長軸方向は真東から30度北偏する。壁高は北東壁10cm、南西壁3cm、北西壁8cmである。壁は床面から緩やかに立ち上がり、南西壁はきわめてなだらかである。

埋土は灰黄褐色土の単層である。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層で、ほぼ平坦である。柱穴や周溝は認められないが、貼床は一部に認められる。

カマドは東壁に構築され、遺存状態はやや不良である。規模は袖部から煙出し部まで260cm前後で、煙道の幅が最大50cm、袖部の幅が108cmである。袖部には芯材の一部として使用されたと推測される礫が残っている。燃烧部は径44cm×63cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚3cmでレン



ズ状に赤色変化している。煙道は緩やかに上昇した後、煙出し部で垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径70cmの円筒形で、検出面からの深さは30cmである。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

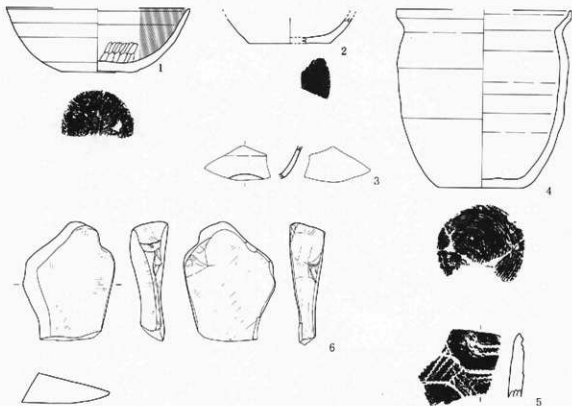
〈出土遺物〉(第50図、写真図版72)

遺物は床面と埋土から出土する。他の住居跡と比べ遺物の出土量が少ない。環、甕のほかに縄文土器がある。土器以外では

表8 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
50-II-12住6	242	礫石	9.5	7.1	1.8	160	流紋岩	高岡山地 新第三系	使用面4 表面凹凸 片立鋭る直内三角形



土器観察表

実測図	写真	器種	分類	法量			外面測定			内面測定			収縮	色調	その他	
				口縁径	口径	器高	口縁径	口径	器高	口縁径	口径	器高				
50-II-12住1	232	1116	H	牙	0.12x	24.8	5.1	1	1							
50-II-12住2	236	1131	A	牙	0.12x	-	-	-	1							
50-II-12住3	239	1122	A	牙	0.12x	-	-	-	1	1	1					
50-II-12住4	240	1114	H	甕	口13	24.8	5.1	1	1	1	1					
50-II-12住5	241	1120	縄文	深鉢												

第50図 II-12号住居跡出土遺物

砥石 6 が埋土から出土する。

坏形土器はすべてロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りが主体である。再調整が認められず、すべて内面黒色処理でミガキ調整が施され、B I I a 類が主体である。あかやき土器の坏はB I 2 a 類の糸切りで無調整である。

甕形土器は少なく全体の傾向をつかめないが、小型のものが多い。ロクロ使用と不使用の両者があり、ロクロ使用のものが若干うまわる。

縄文土器 5 は深鉢の口縁部片である。外面が貝殻沈線文、内面はミガキが施されている。早期の物見台式に比定される。

## II-13号竪穴住居跡

〈遺構〉(第51図、写真図版13)

調査区西部に集中する竪穴住居跡群の南側に位置し、II-9・13号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ黄色砂層に焼土が露呈し、褐色土が方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

遺構の形態と規模は南北の長軸方向が292cm、短軸が276cmで、南辺が北辺に比して短く歪んだ方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から14度北偏する。壁高は東壁7cm、南壁8cm、西壁10cm、北壁10cmである。壁は床面から緩やかに立ち上がる。

埋土は褐色土の単層で、焼土及び焼成をうけた砂質土が混入する。本遺構は焼失廃棄されたものと推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層で、平坦である。主柱穴や周溝、貼床は認められない。

カマド臨北側の床面から土坑が検出されている。平面形は開口部が97cm×83cmの歪んだ円形、底部が36cm×30cmの円形を呈する。床面からの深さは最大21cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土には焼土や炭化材が少量混入し、土器が出土する。

カマドは東壁の中央南寄りに構築され、遺存状態は不良である。規模は不明であるが、袖部には芯材の一部として使用されたと推定される礎が残存している。燃焼部は径54cm×46cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚6cmでレンズ状に赤色変化している。カマドには甕形土器が倒立して口縁部が水平に置かれている。底部は欠損しているものの堅められている状況などから支脚と推測される。支脚は焼土の断面から、燃焼部の中央やや後方に置かれたものと推定される。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

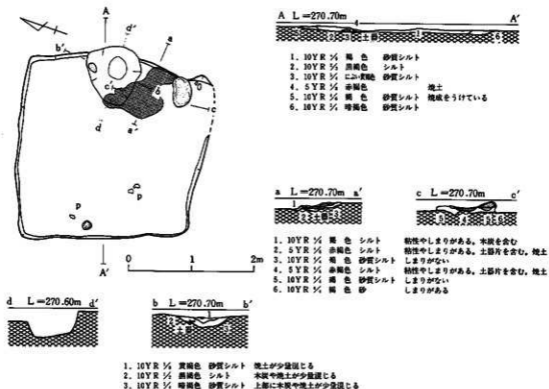
〈出土遺物〉(第52図、写真図版73)

遺物は床面、埋土、カマドから出土する。器種は坏、甕で構成され、坏が主体である。土器以外では床面から鉄製品が出土する。

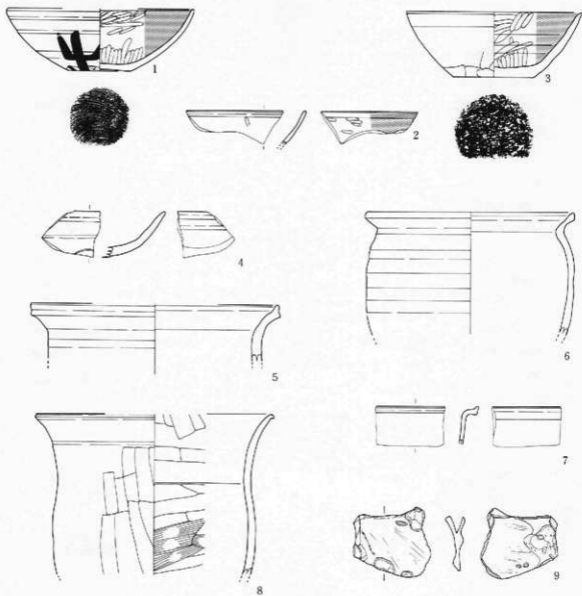
環形土器は全体の60%を占め、すべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りと推定される。1 (B I I b類)、3 (B I I c類) などわずかであるが、体部下端及び底部に手持ち筥削りと回転筥削りによる再調整が認められる。土師器はすべて内面黒色処理が施され、2 は内外面共に黒色処理が施されている。墨書が認められるものが1点あり、1「平」(B I I b類)が読める。

環形土器では土師器はロクロ使用が大半で、ロクロ不使用は1点のみである。ロクロ使用は大型と小型のものがほぼ同数である。6 (B I b類) はカマドの燃焼部のほぼ中央から出土し支脚と推定される。

土器以外では鋤先9の破片がまとまって出土する。錆化が進みある程度の現状をとどめるものは一部刃部のみで全容が明らかでない。重さは30g、全体で200gである。



第51図 II-13号住居跡



土器観察表

実測図	写真登録番号	種類	分類	込 量		外面調査			内面調査			使用 状態	埋蔵 状態	色調	その他		
				(1種単位)	(2種単位)	(1種単位)	形状	材質	形状	材質							
12-11-13-1	242	鉢	年	1.1	1.9	2.9	4.3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-2	243	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-3	244	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-4	245	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-5	246	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-6	247	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-7	248	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→
12-11-13-8	249	鉢	年	1.1	1.1	1.1	1.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内面、黒色、外、赤褐色、外縁下部に紅い→

第52図 II-13号住居跡出土遺物



## II-14号竪穴住居跡

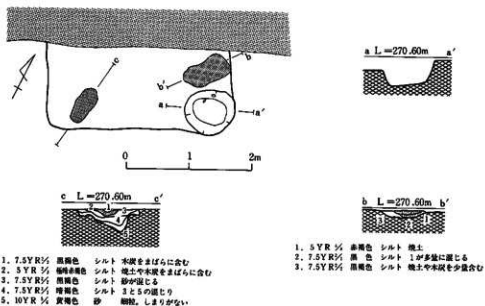
〈遺構〉(第53図、写真図版14)

調査区西部に集中する竪穴住居跡群の西端に位置し、II-10号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土が長方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。II-12号陥し穴状遺構と重複し、本遺構がII-12号陥し穴状遺構の西端を切って構築されている。

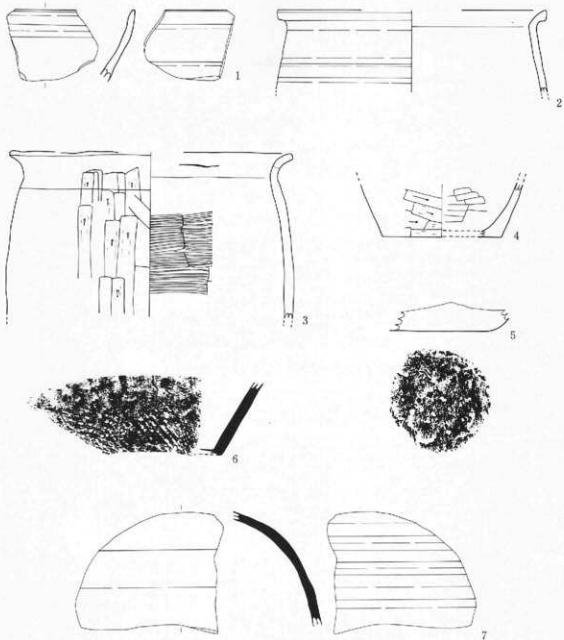
遺構の形態と規模は北東-南西の長軸方向が270cm、短軸が140cm以上である。カマドの長軸方向は真東から22度北偏する。カマドの焼土が露呈し床面からの検出であるため、壁及び埋土については不明である。

床面は基本層序第III層の黄褐色シルト質層で、ほぼ平坦である。主柱穴や周溝、貼床は認められない。

カマド臨南側と南西床面から土坑と焼土が検出されている。土坑の平面形は開口部が80cm×72cmの円形、底部が54cm×40cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大25cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土から土師器が出土し貯蔵穴と推定される。焼土は径20cm×30cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚8cmでレンズ状に赤色変化している。



第53図 II-14号住居跡



土器観察表

実測図	写真記録時期	器種	分類	土質		外面装飾			内面装飾			底野	底野	色調	その他	
				11種保存品	11種品	体部(下部)	表部	11種品	体部	表部						
54-II-14-01	1 232	1196	A 碗	B 1 2	-	f	f	-	f	f	-	ロゾク	-	373		
54-II-14-02	2 253	1193	H 盤	B 1 a	22.4	-	f	f	-	f	f	-	ロゾク	-	7.373	
54-II-14-03	3 254	1146	H 盤	A 1 a	22.6	-	a	b	-	a	b	-	オゾク	-	373	菊柄取
54-II-14-04	4 255	1147	H 盤	A	- 9.6	-	a	a	-	a	a	-	オゾク	-	373	
54-II-14-05	5 256	1148	H 盤	A 1 a	-	-	-	-	-	a	a	-	オゾク	-	7.373	
54-II-14-06	6 257	1150	S 壺	B 1 1	-	-	f	b	-	c	a	-	7.57	7.57	横目の中目ノキ目取	
54-II-14-07	7 258	1157	S 壺	-	-	-	f	-	-	f	-	ロゾク	-	373		

第54図 II-14号居住跡出土遺物

カマドは東壁に構築され、遺存状態は不良である。燃焼部は径36cm×72cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚10cmでレンズ状に赤色変化している。その他については不明である。本遺構は出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第54図、写真図版73・74)

遺物は床面と埋土から出土する。器種は坏、甕、甍で構成される。

坏形土器はあかやき土器の坏1が1点のみである。

甕形土器では土師器はロクロ不使用が大半で大型であり、ロクロ使用が2(BI a類)1点のみである。須恵器はタタキ目をもつもので、6には体部下半に縄目の平行タタキ目底が認められる。

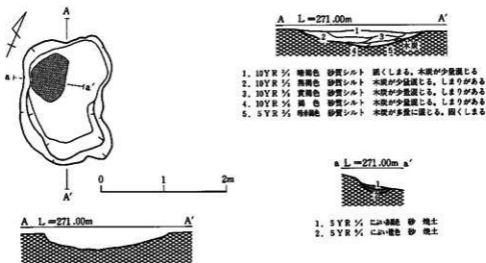
## II-16号竪穴住居跡

〈遺構〉(第55図、写真図版12)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の北側に位置し、II-6号竪穴住居跡と隣接する。

II-7号竪穴住居跡の精査中に北西床面下に暗褐色土が歪んだ長方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。本遺構の南半壁面がII-7号竪穴住居跡に切られている。

遺構の形態と規模は南北の長軸方向が170cm、短軸が122cmで、西辺が東辺に比して短く歪ん



第55図 II-16号住居跡

だ隅丸長方形である。カマドの長軸方向は真北から25度西偏する。壁高は北東壁12cm、南東壁12cm、南西壁14cm、北西壁8cmである。壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土の3層に大別される。本遺構は埋土各層に炭化材が混入し、しまりがある。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層である。平坦であるが、中央部がやや凹む。柱穴や周溝、貼床は認められない。

カマドは北西壁に構築されているが、僅かに燃焼部だけが残存する。燃焼部は径55cm×70cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚10cmでレンズ状に赤色変化している。出土する遺物から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第56図、写真図版74)

土器は埋土から出土するロクロ不使用の環形土器1点で、内外共に篋ミガキが施された内黒の体部片である。

土器以外では埋土から砥石が出土する。

表9 石器計測表

単位：cm、g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)		重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅 厚さ				
56日16位2	260	砥石	5.9	4.3 1.7	60	流紋岩	奥羽山地 新第三系	使用跡? 表面に V字跡に凹んでいる



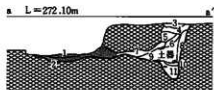
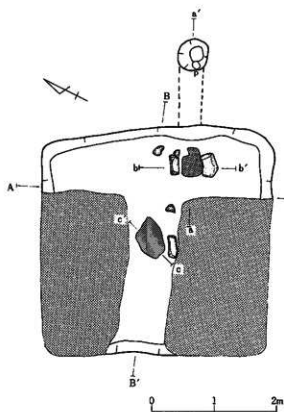
第56図 II-16号住居跡出土遺物

I-1号竪穴住居跡

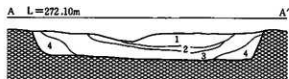
〈遺構〉(第57図、写真図版15)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の東側に位置し、I-3号住居跡遺構、II-2号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。近・現代の墓塚と重複し、本遺構の南壁と北壁の大部分が近・現代の墓塚に切られて構築されている。

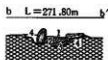
遺構の形態と規模は北西-南東の長軸方向が332cm、短軸が328cmの隅丸方形を呈する。カマ



- |               |      |       |             |
|---------------|------|-------|-------------|
| 1. 5Y R 5/6   | 明赤褐色 | 砂質シルト | 焼土          |
| 2. 5Y R 5/6   | 暗赤褐色 | 砂質シルト | 焼土          |
| 3. 7.5Y R 5/6 | 黒褐色  | シルト   |             |
| 4. 7.5Y R 5/6 | 暗褐色  | シルト   | 焼成をうけている    |
| 5. 7.5Y R 5/6 | 暗褐色  | 砂質シルト | 焼成をうけている    |
| 6. 5Y R 5/6   | 黒褐色  | 砂質シルト | 焼成をうけている    |
| 7. 10Y R 5/6  | 黄褐色  | 砂質シルト | 下部に焼土がちらばる  |
| 8. 5Y R 5/6   | 暗赤褐色 | シルト   | 焼成をうけている    |
| 9. 5Y R 5/6   | 黒褐色  | シルト   | 遺物を含む       |
| 10. 10Y R 5/6 | 黄褐色  | 砂質シルト |             |
| 11. 5Y R 5/6  | 暗赤褐色 | 砂質シルト | 焼成をうけ焼土が混じる |



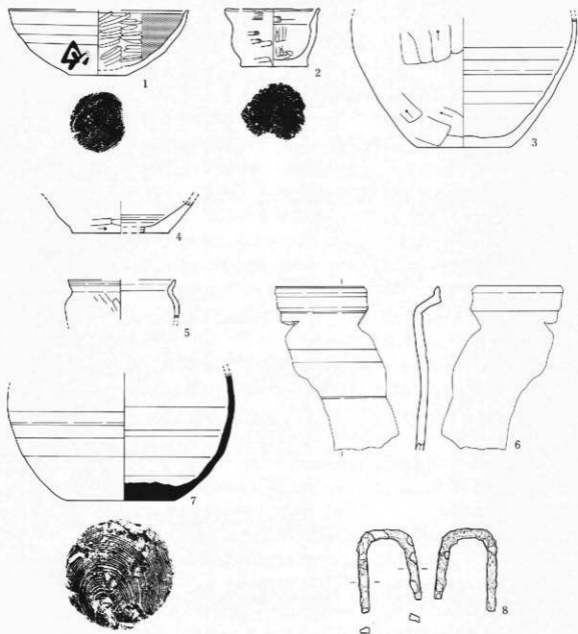
- |              |     |     |                |
|--------------|-----|-----|----------------|
| 1. 10Y R 5/6 | 黒色  | シルト | ややしまりがある       |
| 2. 10Y R 5/6 | 黒褐色 | シルト | 火山灰を含む         |
| 3. 10Y R 5/6 | 黒褐色 | シルト | 砂を微量含む         |
| 4. 10Y R 5/6 | 黒褐色 | シルト | 下部に黄褐色の砂を多量に含む |



- |               |     |       |              |
|---------------|-----|-------|--------------|
| 1. 5Y R 5/6   | 黒褐色 | 砂質シルト | 焼土がブロック状に混じる |
| 2. 5Y R 5/6   | 赤褐色 | 砂質シルト | 焼土           |
| 3. 5Y R 5/6   | 暗褐色 | 砂質シルト | 焼土           |
| 4. 7.5Y R 5/6 | 黒褐色 | 砂質シルト | 焼土が混じる       |



第57図 I-1号住居跡



土器観察表

実測図	写真番号	種類	器種	分類	法 量				外面調整			内面調整			収貯	場所	色調	その他			
					口徑	口径	高さ	口径(下地)	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部					底部		
56	1-1-11	1	263	1363	皿	厚	1.1	1.0	4.5	3.3	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	373	内装、遺骨「内」	
56	1-1-11	2	262	1366	皿	小鉢	1.1	1.1	4.7	4	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	7.133	手付の上	
56	1-1-11	3	263	1356	皿	鉢	口径	—	7.2	—	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	2.133		
56	1-1-11	4	264	1374	皿	鉢	口径	—	7.6	—	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	7.133	一部底が手付へ手割	
56	1-1-11	5	266	1393	皿	鉢	口径	—	7.3	0.0	—	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	—	7.133
56	1-1-11	6	266	1356	皿	鉢	口径	—	—	—	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	—	373	
56	1-1-11	7	267	1362	S	壺	—	—	—	—	1	1		ss	ss	ss	0700	6000	1033		

第58図 I-1号住居跡出土遺物

ドの長軸方向は真東から21度北偏する。壁高は北東壁35cm、南東壁39cm、南西壁23cm、北西壁37cmである。壁は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、黒褐色土、黒褐色土の3層に大別される。埋土上部に焼土が混入し、2層下部に火山灰を含み、ややしまりがある。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第Ⅲ層の黄褐色シルト層で、平坦である。

中央床面に焼土が検出されている。径40cm×54cmで、最大層厚6cmである。柱穴や周溝、貼床は認められない。

カマドは東壁の中央南寄りに構築され、遺存状態はやや良好である。袖部から煙出し部まで208cm前後で、煙道の幅が最大37cm、袖部の幅が70cmである。袖部には芯材の一部として使用したと推定される礫が残っている。燃焼部は径31cm×46cmの範囲に焼成をうけ、最大層厚12cmで台形状に赤色変化している。煙道は割り貫き式で煙出し部に向かって緩やかに下降した後、垂直に立ち上がる。煙出し部の掘り込みは径45cmの円筒形で、検出面からの深さは88cmである。本遺構は出土する遺物や降下火山灰から平安時代に属するものと推定される。

#### 〈出土遺物〉(第58図、写真図版74)

遺物は埋土、カマド、煙出し部から出土する。器種は坏、甕、壺、手捏ねの小鉢2で構成され、甕が主体である。

土器以外では鉄製品が出土する。

坏形土器はすべてBⅠI類のロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りと推定される。再調整はみられず、内面は黒色処理が施されている。墨書が認められるものは1点あり、I「内」(BⅠaⅠ類)が読める。

甕形土器では土師器はロクロ使用成形が大半で大型である。3(BⅠa類)は一部底部に手持ち筥削りによる再調整が認められる。須恵器はロクロ使用成形で、底部切り離しは回転糸切りである。

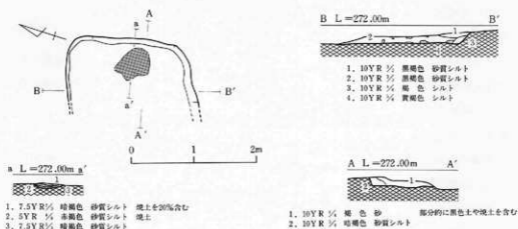
壺形土器はロクロ使用成形の須恵器で、底部切り離しは回転糸切りである。

土器以外では煙出し部から性格不明の「コ」字状鉄製品8が完形で出土する。現存長6.2cm、幅4.8cm、重さ20.37gで、断面は0.7cm×0.4cmの長方形を呈する。素材幅は0.8cm、厚さ0.5cmの板を屈曲させたものと推定される。

#### I-2号壘穴住居跡

##### 〈遺構〉(第59図、写真図版16)

調査区東部に位置し、I-6・12土坑と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に焼土が現れ、褐色土が長方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。I-1号焼土遺構と



第59図 I-2号住居跡

重複し、本遺構の南東部がI-1号焼土遺構に切られて構築されている。

遺構の形態と規模は南北の長軸方向が200cm、短軸が100cm以上の垂んだ隅丸長方形を呈する。カマドの長軸方向は真東から13.5度北偏する。壁高は東壁14cm、南壁24cm、北壁4cmである。壁は床面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から褐色土、暗褐色土の2層に大別される。本遺構は埋土に焼土粒や火山灰が混入する。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第III層の黄褐色シルト層で、ほぼ平坦である。柱穴や間溝、貼床は認められない。

カマドは東壁中央南寄りに構築され、遺存状態は不良である。規模は不明であるが、燃焼部の焼土は径40cm×20cm、最大層厚5cmでレンズ状に赤色変化している。出土する遺物や降下火山灰から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第60図、写真図版75)

遺物は埋土からあかやき土器の坏1(BI2a類)の1点が出土し、糸切り無調整である。底径は6.0cmである。



第60図 I-2号住居跡出土遺物



### Ⅲ-1号竪穴住居跡

〈遺構〉(第61図、写真図版16)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の西側に位置し、Ⅱ-5号竪穴住居跡と隣接する。初年度に西壁と主柱穴1本が検出されている。次年度は表土を除いたところ、近世以降の墓塚に大きく攪乱をうけて構築されていることが確認された。本遺構はⅢ-1・2・3・4号墓塚と重複し、本遺構の西壁の一部及び東壁から南壁にかけて攪乱をうけている。

遺構の形態と規模は長軸が600cm以上、短軸が494cmの歪んだ長方形状を呈する。壁高は西壁36cm、北壁43cmで、その他は不明である。壁は床面から直立気味に立ち上がる。

埋土は暗褐色土の単層である。

床面は基本層序第Ⅳ層の黄色砂層で、ほぼ平坦である。柱穴は1個検出され、床面からの深さは16cmである。周溝や貼床は認められない。

カマドは検出されず、東壁あるいは南壁に構築されていたものと推定される。埋土状況が他の住居跡と類似していることから平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第61図、写真図版75)

遺物は埋土から須恵器の甕の体部片が出土する。大半が墓塚によって攪乱をうけ、遺物量は少ない。土器以外では土製品や鉄製品、木製品が出土する。土製品3はかなり強い焼成をうけたものと思われ、支脚と推測される。上、下面とも欠損部があるものの、表面は5.5cm×6.5cmの円形と推定され、断面は「工」字状を呈する。高さ6.5cm、支柱幅3.5cm、重さ140gである。両端を欠く刀子の刃部と推測される鉄製品1は現存長7.9cm、身幅2.3cm、厚さ0.6cm、重さ13.2gである。鋸歯状の刃物で両端を切った木製品の破片2は縦8.5cm、横4.4cm、厚さ2.7cm、重さ26.8gで、表面が焦げた杉材である。

## 2. 住居状遺構

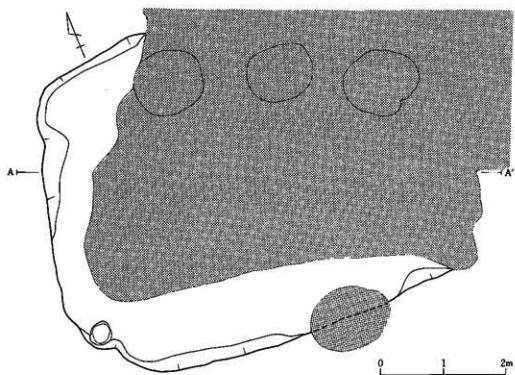
### Ⅱ-17号住居状遺構

〈遺構〉(第62図、写真図版17)

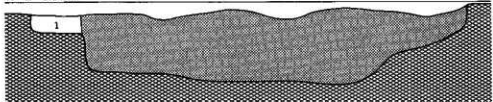
調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の南側に位置し、Ⅱ-4、Ⅲ-1号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土がほぼ方形に広がっていたことから、遺構の存在を確認した。

遺構の形態と規模は216cm×212cmの方形を呈する。壁高は東壁27cm、南壁24cm、西壁19cm、北壁19cmである。壁は床面から外傾するが、北壁は垂直気味に立ち上がる。

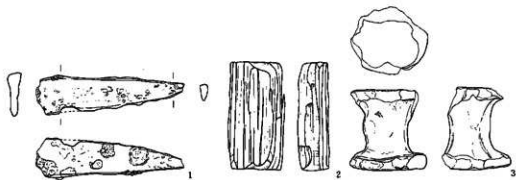
埋土は上部から黒色土、明黄褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。埋土上部に若干の遺物が混入する。層位状況から自然堆積と推定される。



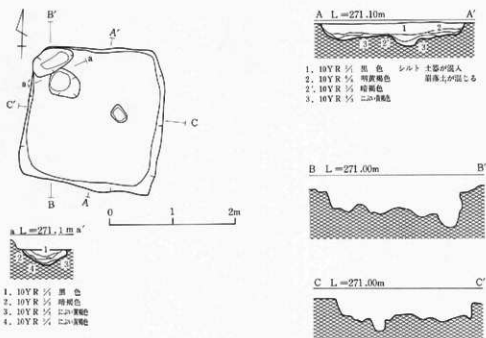
A L=271.00m



1. 10YR 5/ 暗褐色 シルト



第61図 III-1号住居跡及び出土遺物



第62図 II-17号住居状遺構

床面は基本層序第III層の黄褐色シルト層で、平坦である。支柱穴は1個検出されている。床面からの深さは41cmである。貼床や周溝及びカマドは認められない。

西側床面から土坑が検出されている。開口部が68cm×37cmの楕円形、底部が45cm×16cmの楕円形を呈する。床面からの深さは最大59cmである。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がる。埋土には遺物を含まない。用途は不明である。本遺構は埋土状況から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第63図、写真図版75)

遺物は埋土から出土する甕形土器のみである。土師器は体部上半のみで、1(A I b類)が口径13.0cmである。須恵器はロクロ使用成形の体部片である。

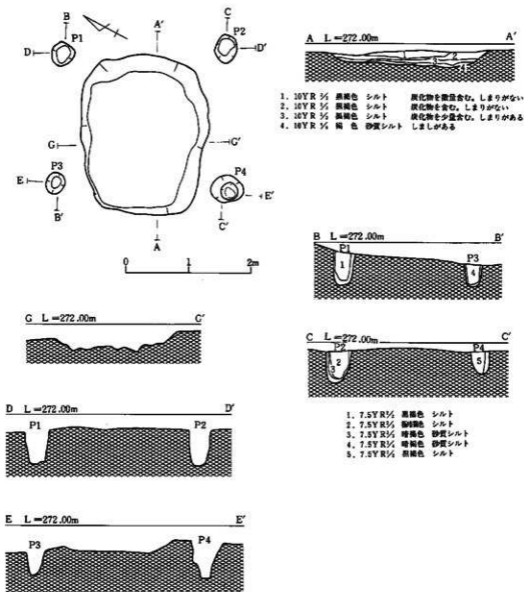


第63図 II-17号住居状遺構出土遺物

### I-3号住居状遺構

〈遺構〉(第64図、写真図版18)

調査区中央部に集中する竪穴住居跡群の北東側に位置し、I-1、II-2号竪穴住居跡と隣接する。表土を除いたところ褐色土面に黒褐色土が長方形に広がっていたことから、遺構の存



第64図 I-3号住居状遺構

在を確認した。

遺構の形態と規模は北東—南西の長軸方向が217cm、短軸が172cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向は真東から28度北偏する。壁高は北東壁27cm、南東壁21cm、南西壁17cm、北西壁20cmである。壁は床面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。1層はしまりがなく、2・3層はしまりがある。2層の黒褐色土は貼床と推測される。本遺構は埋土に炭化材や土器を含む。層位状況から自然堆積と推定される。

床面は基本層序第IV層の黄色砂層で、平坦である。周溝やカマドなどは認められない。

外郭に柱穴が4本検出されている。平面形は開口部が33～44cm、底部が17～28cmの円形を呈し、検出面からの深さは34～60cmである。柱間寸法は長軸方向（北東—南西）が260～275cm、短軸方向が203～230cmである。埋土は上部から黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土の3層である。出土する遺物や埋土状況から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉（第65図、写真図版75）

遺物は埋土から出土し、土師器の環Ⅰ（B I 2 a 類）が1点のみである。内面は篋ミガキで二次的加熱を受けている。底部全面に手持ち篋削りによる再調整が施されている。口径12.8cm、底径5.0cm、器高4.5cmである。



第65図 I—3号住居状遺構出土遺物

### 3. 堀立柱建物跡

#### II—1号堀立柱建物跡

〈遺構〉（第67・68図、写真図版19）

調査区中央部に位置し、II—2号堀立柱建物跡、II—8・III—1号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構の柱穴P4、P8がII—9・19号陥し穴状遺構とそれぞれ重複し、いずれも本遺構の柱穴が陥し穴状遺構を切って構築されている。また、柱穴P3、P6、P9の北西端が水道管埋設によって切られている。

2間×2間の総柱建物で、平面形はほぼ方形を呈する。梁行柱間寸法は、北側柱列が東から174cm+162cm、中央柱列が東から176cm+156cm、南側柱列が東から173cm+183cmである。桁行柱間寸法は、東側柱列が北から156cm+152cm、中央柱列が北から162cm+156cm、西側柱列が北から164cm+156cmである。

柱穴の掘り方は9本に検出され、8本の柱穴からは柱据え方が確認された。掘り方はほぼ円筒形で、柱据え方もほぼ円形を呈する。

掘り方径は50cm台、底部径は20cm台が主体である。検出面からの深さは46～76cmと幅があり、底面のレベルからみると最大16cmの差でほぼ水平と推測される。柱の径は15～20cm強で、検出面からの深さはP1がやや浅いものの30cm台を主体とする。

埋土はII-2号掘立柱建物跡の柱据え方と共におおむね黒褐色シルトである。

軸方向はII-2号掘立柱建物跡とほぼ同一方向で真北から28度西偏する。遺物は出土しないが、埋土状況などから平安時代に属するものと推定される。

## II-2号掘立柱建物跡

〈遺構〉(第67・68図、写真図版19)

調査区中央部に位置し、II-1号掘立柱建物跡、II-4・8、III-1号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層で、重複関係は認められない。

2間×2間の総柱建物で四隅に庇の柱穴を伴い、平面形はほぼ方形を呈する。見捨の梁行の柱間寸法は、北側柱列が東から100cm+115cm、中央柱列が東から102cm+110cm、南側柱列が東から116cm+118cmである。桁行の柱間寸法は、東側柱列が北から125cm+150cm、中央柱列が北から130cm+144cm、西側柱列が北から138cm+143cmである。庇の柱間寸法は、東側420cm、南側433cm、西側453cm、北側452cmである。

柱穴の掘り方は13本に、そのうち4本に柱据え方が確認された。掘り方はほぼ円筒形で、底部が円形と楕円形を呈する。

四隅の掘り方径は50～60cm台、検出面からの深さは40～60cm台で他の柱穴より比較的大きい。他の5本の掘り方径は20～31cm、検出面からの深さは13～26cmである。庇の掘り方径は20cm弱が主体で、検出面からの深さは16～30cmである。

埋土はII-1号掘立柱建物跡の柱据え方と共におおむね黒褐色シルトである。

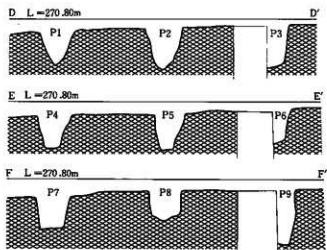
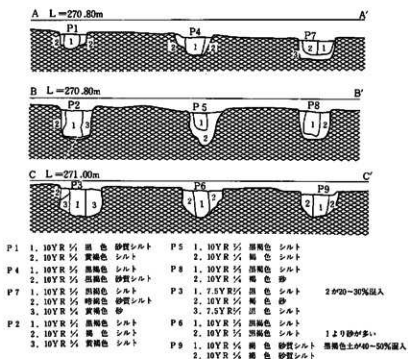
軸方向はII-1号掘立柱建物跡とほぼ同一方向で真北から30度西偏する。遺物は須恵器の坏が1点出土し、埋土状況などから平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第66図、写真図版75)

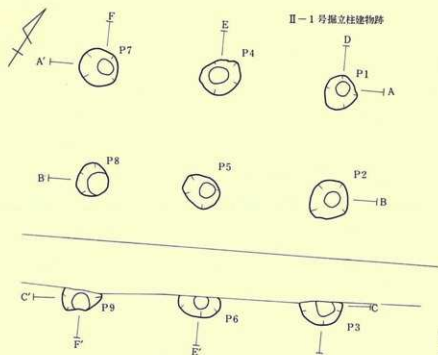
遺物はP1の埋土から出土した須恵器の坏(BII類)1点のみである。



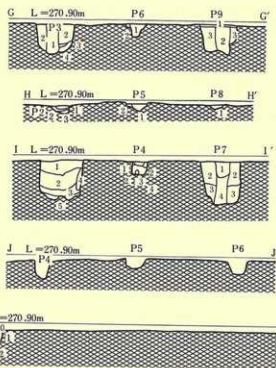
第66図 II-2号掘立柱建物跡出土遺物



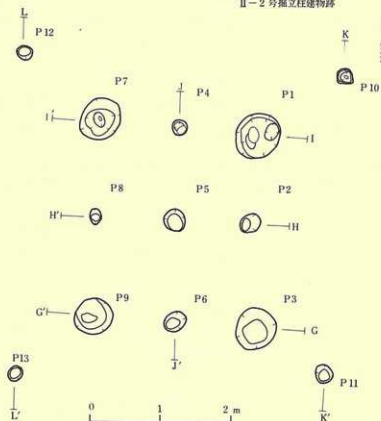
第87図 II-1・2号掘立建物跡(1)



II-1号掘立柱建物跡



II-2号掘立柱建物跡



- P3 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
3. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
4. 10YR 5/1 黄褐色 シルト
- P6 1. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 地山
- P9 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
3. 10YR 5/1 黄褐色 砂質シルト
- P2 1. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト  
3. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト
- P5 1. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト
- P8 1. 7.5YR 5/1 黄褐色 砂質シルト
- P1 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
3. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
4. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
5. 地山

- P4 1. 7.5YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 7.5YR 5/1 黄褐色 砂質シルト  
3. 7.5YR 5/1 黄褐色 砂質シルト  
4. 1と2がプロック状に混じる。
- P7 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
3. 10YR 5/1 黄褐色 砂質シルト  
4. 10YR 5/1 黄褐色 砂
- P10 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 1と黄褐色土の混じり
- P11 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 1と黄褐色土の混じり
- P12 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 10YR 5/1 黄褐色 砂質シルト
- P13 1. 10YR 5/1 黄褐色 シルト  
2. 黄褐色土に1のしみこみ

砂を多量に含む

砂と褐色シルトを含む。

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を含む

砂を含む

砂を多量含む

砂を含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

砂を多量含む

第68図 II-1・2号掘立柱建物跡(2)



表10 II-1号掘立柱建物跡 規模・形態表

単位：cm

	平面形		柱 穴 掘 り 方			柱 据 え 方		
	開 口 部	底 部	開口部の径	底部の径	検出面から の深さ	P1の底部レベ ルを0として	中間部の幅 検出面から の深さ	
P1	ほ ほ 円 形		45×48	19×20	46	0	14	23
P2			53×55	22×22	66	-6	16~22	44
P3			60×32以上	25×21以上	63	-3	22	42
P4			57×49	28×23	47	-1	18~24	30
P5			52×47	22×21	55	-2	11~12	32
P6			60×28以上	20×17以上	52	+2	21	38
P7			56×52	22×21	45	-3		
P8			44×47	30×32	47	+1	21~24	37
P9			58×28以上	25×24	76	-14	22	36

表11 II-2号掘立柱建物跡 規模・形態表

単位：cm

	平面形		柱 穴 掘 り 方			柱 据 え 方		
	開 口 部	底 部	開口部の径	底部の径	検出面から の深さ	P1の底部レベ ルを0として	中間部の幅 検出面から の深さ	
P1	円 形	円形	62×61	53×56	56	0	13	52
P2		楕円型	28×24	12×18	14	+44		
P3		不整円形	56×60	34×34	42	+16	16	41
P4		楕円型	20×22	13×11	26	+37		
P5		楕円型	31×30	22×24	13	+48		
P6		楕円型	30×28	20×15	20	+40		
P7		楕円型	56×58	42×36	62	-6	19	62
P8		円形	18×22	13×12	7	+52		
P9		円形	54×50	42×44	42	+18		
P10		不整円形	20×21	14×15	30	+24		
P11		不整円形	24×26	15×16	25	+30		
P12		楕円型	22×20	16×13	17	+32		
P13		楕円型	21×22	16×14	16	+40	17	11

## 4. 土坑

### II-4号土坑

〈遺構〉(第69図、写真図版20)

調査区中央部に位置し、II-4・5号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が径150cm、底部が長軸(南-北)76cm、短軸66cmで、検出面からの深さは最大81cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がった後、緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土する遺物から平安時代の土坑と推定される。

出土遺物は土師器の甕5点と坏3点、須恵器の甕と坏各1点である。土師器の坏はロクロ使用成形で、土師器の甕にはロクロ不使用のものも含まれる。

### II-5号土坑

〈遺構〉(第69図、写真図版20)

調査区中央部に位置し、II-2・3号竪穴住居跡、II-6号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面はほぼ円形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が径100cm前後、底部が径80cm前後で、検出面からの深さは最大36cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

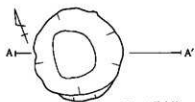
### II-6号土坑

〈遺構〉(第69図、写真図版20)

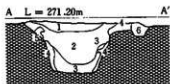
調査区中央部に位置し、II-1・6号竪穴住居跡、II-5号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は不整形を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)131cm、短軸109cm、底部が長軸120cm、短軸98cmで、検出面からの深さは最大44cmである。

底面は中央が凹む。壁は底面から直立気味に立ち上がり、西壁は内弯しながら立ち上がる。



II-4号土坑



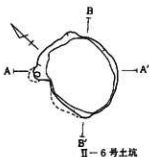
1. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
2. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
3. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
4. 10YR 5/6 褐色 シルト
5. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 黒褐色 シルト



II-5号土坑



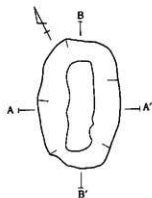
1. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
2. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
3. 10YR 5/6 褐色 シルト
4. 10YR 5/6 黒褐色 シルト
5. 10YR 5/6 褐色 粘質シルト



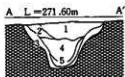
II-6号土坑



1. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
2. 10YR 5/6 黄褐色 シルト
3. 10YR 5/6 褐色 粘質シルト
4. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
5. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト



II-7号土坑



1. 10YR 5/6 黒色 シルト
2. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
3. 10YR 5/6 黄褐色 砂
4. 10YR 5/6 黒褐色 シルト
5. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト

第69圖 II-4～7号土坑

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土の5層に大別される。層位状況から人為的埋め戻しが繰り返されたものと推定される。出土する遺物から平安時代の土坑と推定される。

〈出土遺物〉(第70図、写真図版75)

土師器の甕8点と坏12点、須恵器の壺1点が出土する。1(B I Ia類)は糸切り無調整の土師器の坏で内面黒色処理が施されている。口径14.0cm、底径5.4cm、器高4.8cmである。



第70図 II-6号土坑出土遺物

II-7号土坑

〈遺構〉(第69図、写真図版21)

調査区中央部に位置し、II-1号焼土、II-8号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)205cm、短軸133cm、底部が長軸144cm、短軸43cmで、検出面からの深さは最大74cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土、黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

II-8号土坑

〈遺構〉(第71図、写真図版22)

調査区中央部に位置し、II-2号竪穴住居跡、II-7号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は不整形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)140cm、短軸100cm、底部が径56cmの円形で、検出面からの深さは最大37cmである。

底面は中央が凹む。壁は緩やかに外傾し、北東壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、暗褐色土、黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

II-9号土坑

〈遺構〉(第71図、写真図版23)

調査区中央部に位置し、II-7号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。II-1号

焼土と重複し、本遺構がII-1号焼土の直下に構築されている。

平面は不整な円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が径75cm前後、底部が長軸(南-北)32cm、短軸27cmの円形で、検出面からの深さは最大29cmである。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

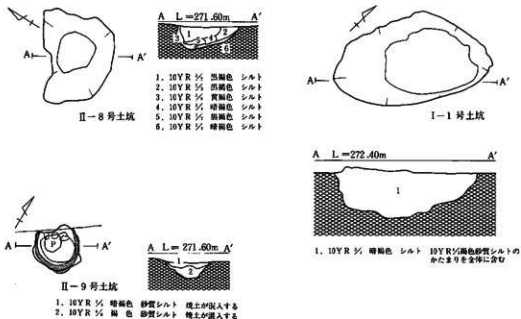
埋土は上部から暗褐色土、褐色土の2層に大別され、1・2層とも焼土を含む。埋土に黄褐色土がブロック状に含まれることから、人為堆積が何度か繰り返されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

### I-1号土坑

〈遺構〉(第71図、写真図版35)

調査区東部に位置し、I-2・9・14号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)254cm、短軸140cm、底部が径128cmの不整円形で、検出面からの深さは最大72cmである。



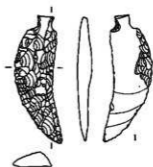
第71図 II-8・9、I-1号土坑

底面は凹む。壁は底面はから外傾し、北壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は暗褐色土の単層である。層位状況から人為堆積で一氣に埋め戻されたものと推測される。埋土状況から平安時代の土坑と推定される。

〈出土遺物〉(第72図、写真図版75)

土師器の甕と石匙がそれぞれ1点ずつ出土する。甕は小片である。



第72図 I-1号土坑出土遺物

表12 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	形 類	大きさ(最大)			重さ	石 質	産 地	備 考
			長さ	幅	厚さ				
72 I 1 坑1	278	石匙	5.7	2.1	0.8	30.6	埴質泥岩	奥羽山地新第三系 中新統	有蓋 甕型石匙

#### I-2号土坑

〈遺構〉(第73図、写真図版37)

調査区東部に位置し、I-9号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は不整な楕円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)216cm、短軸86cm、底部が長軸204cm、短軸72cmで、検出面からの深さは最大24cmである。

底面はほぼ平坦で、南側に54cm×32cmほどのビット状の凹みを伴う。壁は底面から直立気味に立ち上がるが、東壁は底面から緩やかに外傾する。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積後、上部一層に褐色土がブロック状に含まれることから、人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### I-4号土坑

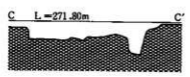
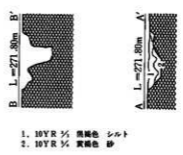
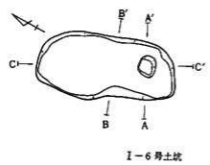
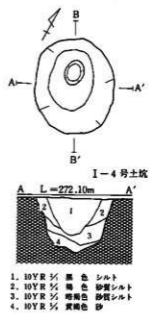
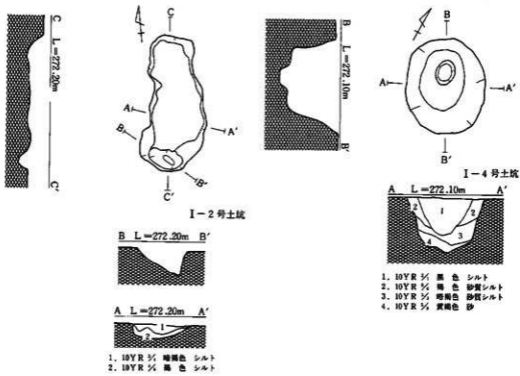
〈遺構〉(第73図、写真図版35)

調査区東部に位置し、I-11号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)150cm、短軸127cm、底部が長軸96cm、短軸70cmで、検出面からの深さは最大88cmである。

底面中央には開口部40cm×30cm、深さ15cmのビットを伴う。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自



第73図 I-2・4・6号土坑

然堆積と推定される。本遺構から縄文時代早期の深鉢の体部片が出土し、I-1号陥し穴状遺構と埋土状況が類似していることから、縄文時代の土坑と推定される。

#### I-6号土坑

〈遺構〉(第73図、写真図版38)

調査区北東部に位置し、I-10・12号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面は不整な隅丸長方形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)220cm、短軸207cm、底部が長軸96cm、短軸75cmで、検出面からの深さは最大21である。

底面はほぼ平坦で、南側に開口部が径30cmほどのピットを伴う。底面からの深さは最大21cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、黄褐色土の2層に大別される。上部1層に黄褐色土がブロック状に含まれることから、自然堆積の後、人為的に埋め戻されたものと推定される。遺物は1点のみの出土であるが、時期の不明である。

〈出土遺物〉(第74図、写真図版75)

1は縄文時代早期の物見台式に比定される深鉢の口縁部片で、波状の沈線が施されている。



第74図 I-6号土坑出土遺物

#### I-7号土坑

〈遺構〉(第76図、写真図版35)

調査区北部に位置し、I-8号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)206cm、短軸169cm、底部が長軸170cm、短軸144cmで、検出面からの深さは最大80cmである。

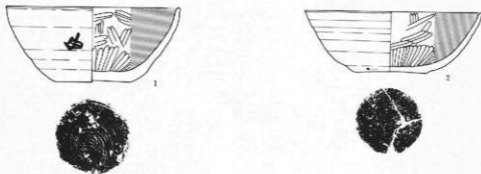
底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がるが、南西壁は削平されている。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土の4層に大別される。2層の暗褐色土には十和田a降下火山灰がブロック状に混入し、完形土器も含まれる。また、炭化材も混入する。層位状況から自然堆積と推定される。本遺構は平安時代の土坑と推定される。



〈出土遺物〉（第75図、写真図版75）

遺物は土師器の坏5点、須恵器の甕1点、縄文時代早期の物見台式に比定される2点が出土する。1は黒書「甲」が読める。2は丁寧な再調整が施されている。



土器観察表

調査区	写真登録	種類	器種	分形	法			外面調整			内面調整			成形	断面切撃	色調	その他	
					口径	胴径	器高	口縁部	体部下端	底部	口縁部	体部下端	底部					
Ⅰ-7区1	289	140	H	坏	Ⅱa	11.0	6.9	6.0	f	f	.....	f	m	m	m	ロ7コ	赤褐色	内面、黒書「甲」
Ⅱ-17区2	281	141	H	坏	Ⅱc	14.2	5.6	4.8	f	f	y y	m	m	m	ロ7コ	10YR	内面、体部下端・底部全面同様に9割	

第75図 Ⅰ-7号土坑出土遺物

Ⅰ-8号土坑

〈遺構〉（第76図）

調査区北部に位置し、Ⅰ-2・7号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面は不整な円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が径65cm、底部が長軸(南-北)44cm、短軸34cmの円形で、検出面からの深さは最大21cmである。

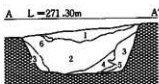
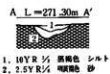
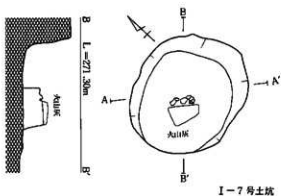
底面は凹む。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から褐色土、明黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。埋土の上部から土師器の甕1点が出土するが、時期は不明である。

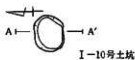
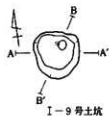
Ⅰ-9号土坑

〈遺構〉（第76図、写真図版36）

調査区東部に位置し、Ⅰ-2号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。



1. 10YR 7/4 黒色 砂質シルト
  2. 10YR 7/4 暗褐色 砂質シルト
  3. 10YR 7/4 黄褐色 砂質シルト
  4. 10YR 7/4 黄褐色 砂質シルト
  5. 10YR 7/4 暗褐色 砂質シルト
  6. 10YR 7/4 濃い黄褐色 砂
- 木炭、土器片が混入



第76図 I-7~11号土坑

平面は不整形で、断面は傾いたピットを伴う船底状を呈する。規模は開口部が径68cm、底部も径52cmの円形で、検出面からの深さは最大28cmである。

底面は中央が凹み、北側寄りに開口部が径14cm、深さ46cmのピットを伴う。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### I-10号土坑

〈遺構〉(第76図)

調査区北東部に位置し、I-6・12号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面はほぼ円形に近く、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)58cm、短軸46cm、底部が長軸50cm、短軸40cmで、検出面からの深さは最大16cmである。

底面は凹む。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がるが、南壁は直立気味である。

埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土の状況からそれほど古い時期のものではないと推定される。

#### I-11号土坑

〈遺構〉(第76図、写真図版36)

調査区東部に位置し、I-1号土坑、I-1号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)83cm、短軸70cm、底部が径48cmの円形で、検出面からの深さは最大32cmである。

底面はほぼ平坦で、北東から南西方向へ13cmほど傾斜する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は褐色土の単層である。時期は遺物の出土状況から縄文時代と推定される。

〈出土遺物〉(第77図、写真図版76)

1と2は縄文時代早期の物見台式に比定される深鉢で、それぞれ口縁部片と体部片である。1は沈線の下に貝殻文が施されている。



第77図 I-11号土坑出土遺物

### I-12号土坑

〈遺構〉(第78図、写真図版38)

調査区北東部に位置し、I-6・10号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は不整な隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)272cm、短軸104cm、底部が長軸253cm、短軸88cmで、検出面からの深さは最大18cmである。

底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、明黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積の後、上部1層に明黄褐色土がブロック状に含まれることから、人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

### III-1号土坑

〈遺構〉(第78図、写真図版21)

調査区西部に位置し、III-1号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面は不整な楕円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)244cm、短軸194cm、底部が長軸125cm、短軸84cmで、検出面からの深さは最大70cmである。

底面はほぼ平坦である。中央に開口部が径43cm×22cm、深さ41cmのフラスコ状のピットを伴う。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から極暗褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、明黄褐色土、にぶい褐色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。土師器の甕の体部片1点と埋土の状況から平安時代の土坑と推定される。

### III-3号土坑

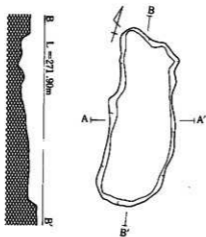
〈遺構〉(第78図、写真図版21)

調査区西部に位置し、III-1号竪穴住居跡、III-1号土坑と隣接する。検出面は基本層序第IV層である。III-3号陥し穴状遺構と重複し、本遺構がIII-3号陥し穴状遺構を切って構築されている。

平面はほぼ隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)198cm、短軸62cm、底部が長軸152cm、短軸35cmで、検出面からの深さは最大58cmである。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がるが、北壁は内湾した後、直立気味である。

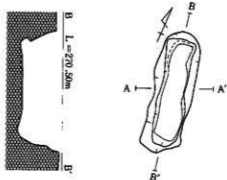
埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、暗褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はないものの、埋土状況は他の平安時代の土坑と類似してい



I-12号土坑



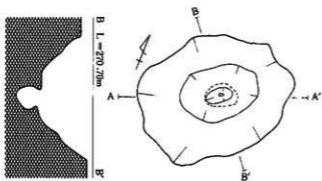
1. 10YR 7/2 暗褐色 砂質シルト
2. 10YR 6/2 暗褐色 砂



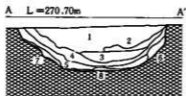
III-3号土坑



1. 10YR 7/2 暗褐色 シルト
2. 10YR 6/2 暗褐色 砂質シルト
3. 10YR 7/2 暗褐色 砂質シルト
4. 10YR 6/2 暗褐色 砂質シルト



III-1号土坑



1. 7.5YR 7/2 暗褐色 炭化物が混入する
2. 7.5YR 6/2 暗褐色 地山の小ブロックが混じる
3. 7.5YR 6/2 暗褐色 炭化物が混入する
4. 7.5YR 6/2 暗褐色
5. 7.5YR 6/2 暗褐色
6. 7.5YR 6/2 暗褐色 地山が混入したもの
7. 10YR 6/2 暗褐色 地山の砂が混じる
8. 2.5YR 7/2 暗褐色 白色に近い砂混じりの粘土

第78図 I-12、III-1・3号土坑

る。

### Ⅲ-4号土坑

〈遺構〉(第79図、写真図版23)

調査区西部に位置し、Ⅲ-5号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅳ層である。Ⅲ-6号陥し穴状遺構と重複し、本遺構がⅢ-6号陥し穴状遺構を切って構築されている。

平面は不整な楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)112cm、短軸65cm、底部が長軸84cm、短軸41cmで、検出面からの深さは最大22cmである。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がるが、東西壁は南北壁に比して緩やかである。

埋土は上部から黒褐色土、にぶい黄橙色土の2層に大別される。層位状況からしばらく放置された後、人為的に一気に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

### Ⅲ-5号土坑

〈遺構〉(第79図、写真図版23)

調査区西部に位置し、Ⅲ-4号土坑と隣接する。検出面は基本層序第Ⅳ層である。

平面は楕円形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)146cm、短軸100cm、底部が長軸108cm、短軸44cmで、検出面からの深さは最大72cmである。

底面はほぼ平坦であるが、10cmほど北東方向へ傾斜する。壁は底面からフラスコ状に内弯した後、外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄橙色土、にぶい黄褐色土、褐色土、灰黄褐色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

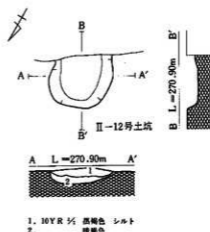
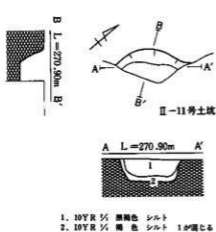
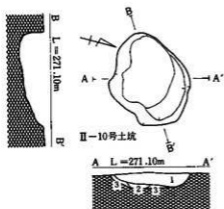
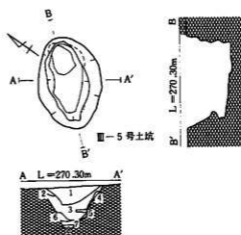
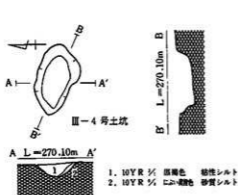
### Ⅱ-10号土坑

〈遺構〉(第79図、写真図版24)

調査区中央部に位置し、Ⅱ-17号住居状遺構と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面は不整な隅丸長方形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)138cm、短軸114cm、底部が長軸92cm、短軸99cmで、検出面からの深さは最大40cmである。

底面は平坦であるが、やや南西方面へ傾斜する。壁は底面から外傾するが、南西壁は底面から垂直に立ち上がる。



第79図 III-4・5、II-10~12号土坑

埋土は上部から暗褐色土、暗褐色土、黄褐色土の3層に大別される。層位状況からしばらく放置された後、1層が人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

### II-11号土坑

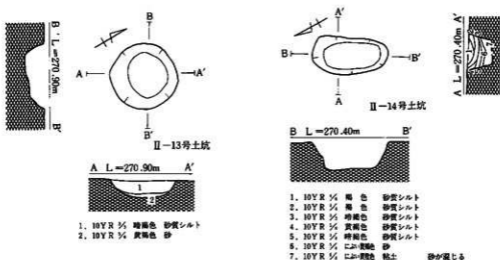
〈遺構〉(第79図、写真図版24)

調査区中央部に位置し、II-17号住居状遺構、II-12号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。水道管の埋設により南側と東側の大半を切られ、また本遺構がII-7号陥し穴状遺構を切って構築されている。

平面は不整形形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)120cm以上、短軸50cm以上、底部が長軸85cm以上、短軸31cm以上で、検出面からの深さは最大40cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上る。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土の2層に大別される。層位状況からしばらく放置された後人為的に埋め戻されたものと推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。



第80図 II-13・14号土坑



## II-12号土坑

〈遺構〉(第79図、写真図版24)

調査区中央部に位置し、II-1号掘立柱建物跡、II-11号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は水道管理設により南側を切られている。

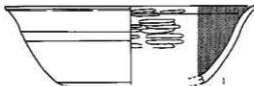
平面は隅丸長方形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)90cm以上、短軸100cm、底部が長軸74cm以上、短軸64cmで、検出面からの深さは最大23cmである。

底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物から平安時代の土坑と推定される。

〈出土遺物〉(第81図、写真図版76)

1は土師器のロクロ使用成形の鉢で、内面は篋ミガキで黒色処理が施されている。口径19.7cm、器高6.3cmである。



第81図 II-12号土坑出土遺物

## II-13土坑

〈遺構〉(第80図、写真図版25)

調査区中央部に位置し、II-2号掘立柱建物跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が径102cm、底部が径62cmで、検出面からの深さは最大30cmである。

底面は中央部が凹む。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-14号土坑

〈遺構〉(第80図、写真図版25)

調査区西部に位置し、II-2号溝跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸（北東—南西）122cm、短軸58cm、底部が長軸90cm、短軸41cmで、検出面からの深さは最大44cmである。

底面は平坦であるが、北東方向へやや傾斜する。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から褐色土、暗褐色土、黄褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい黄橙色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-15号土坑

〈遺構〉（第82図、写真図版26）

調査区西部に位置し、II-22・29号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸（北西—南東）95cm、短軸50cm、底部が長軸75cm、短軸35cmで、検出面からの深さは最大50cmである。

底面は平坦である。壁は底面から垂直に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、黄褐色土、黄褐色土、明黄褐色土、にぶい黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-16号土坑

〈遺構〉（第82図、写真図版25）

調査区西部に位置し、II-8・9・12号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸（北西—南東）106cm、短軸85cm、底部が長軸74cm、短軸50cmで、検出面からの深さは最大41cmである。

底面は平坦である。壁は底面から垂直に立ち上がるが、北西壁は底面から外傾する。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、褐色土の3層に大別される。層位状況から人為堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-17号土坑

〈遺構〉（第82図、写真図版26）

調査区西部に位置し、II-15・31号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は南半が調査区外に延びる。

平面は長楕円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸（南—北）80cm、短軸60cm、

底部が長軸72cm、短軸34cmで、検出面からの深さは最大24cmである。

底面は平坦である。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

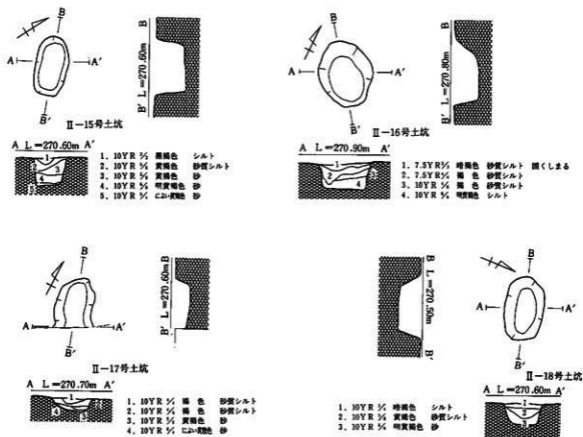
埋土は上部から褐色土、黄褐色土、にぶい黄橙色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-18土坑

〈遺構〉(第82図、写真図版27)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-21・29・30号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)102cm、短軸64cm、底部が長軸72cm、短軸33cmで、検出面からの深さは最大34cmである。



第82図 II-15~18号土坑

底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### II-18号土坑

〈遺構〉(第84図、写真図版27)

調査区西部に位置し、II-26号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

本遺構はII-13号陥し穴状遺構を切って構築されている。

平面は不整な隅丸方形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)138cm、短軸100cm、底部が長軸100cm、短軸75cmの楕円形で、検出面からの深さは最大30cmである。

底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黄褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、黄褐色土の4層に大別される。層位状況から人為堆積と推定される。埋土から土師器が出土するが、堆積状況から新しい時期のものと推定される。

#### II-20号土坑

〈遺構〉(第84図、写真図版27)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

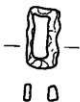
平面は歪んだ楕円形で、断面はフラスコ状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)90cm、短軸52cm、底部が一辺90cm前後の不整な三角形状を呈する。検出面からの深さは最大80cmである。

底面は平坦である。壁は底面から内湾して立ち上がり、検出面付近で外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、黄褐色土、にぶい黄色土、明黄褐色土、にぶい黄色土、黄褐色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。本遺構は埋土状況から平安時代の土坑と推定される。

〈出土遺物〉(第83図、写真図版76)

鉄器1が1点出土する。長方形の環状鉄製品で完形である。現存長は1.5cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.6g、素材幅は0.1cmで断面が長方形を呈する。



第83図 II-20号土坑出土遺物

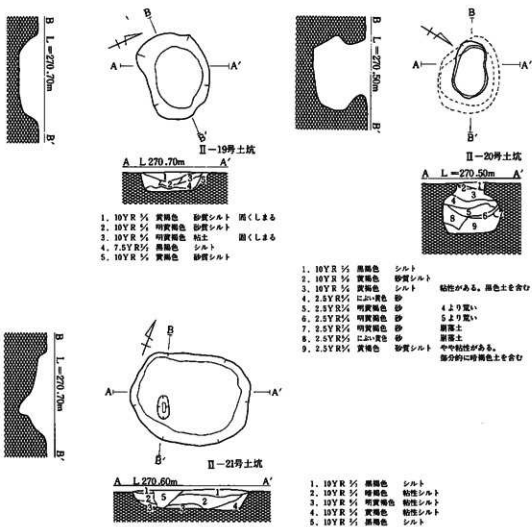
## II-21号土坑

〈遺構〉(第84図、写真図版29)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-18号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は隅丸長方形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)190cm、短軸147cm、底部が長軸165cm、短軸118cmで、検出面からの深さは最大32cmである。

底面は平坦で、ピットを伴う。ピットの平面は楕円形で、底面からの深さは20cmである。壁は



第84図 II-19~21号土坑

底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### II-22号土坑

〈遺構〉(第85図、写真図版29)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-15・29号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は不整な楕円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)146cm、短軸90cm、底部が長軸110cm、短軸53cmで、検出面からの深さは最大46cmである。

底面は平坦であるが、やや南西方向へ傾斜する。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

#### II-23号土坑

〈遺構〉(第85図、写真図版28)

調査区中央部南側に位置し、II-8・15号竪穴住居跡、II-27号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は北東端が調査区外に延びる。

平面は長楕円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)254cm以上、短軸86cm、底部が長軸200cm以上、短軸36cmで、検出面からの深さは最大48cmである。

底面は中央が凹む。壁は底面から緩やかに外傾し、南西壁は直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土、黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

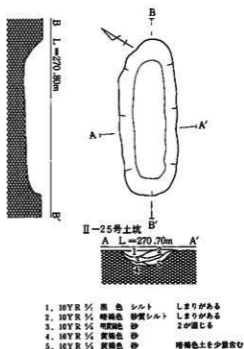
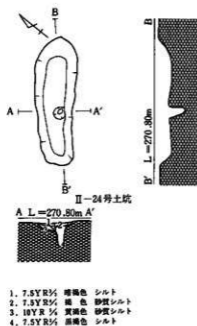
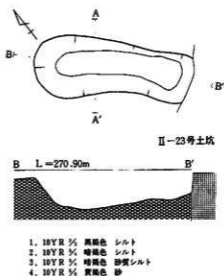
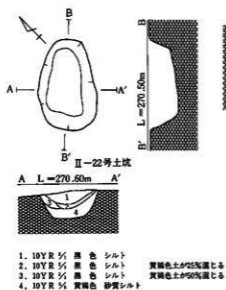
#### II-24号土坑

〈遺構〉(第85図、写真図版28)

調査区中央部南側に位置し、II-8号竪穴住居跡、II-1・2号掘立柱建物跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は長楕円形で、断面はピットを伴う船底状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)206cm、短軸56cm、底部が長軸160cm、短軸32cmで、検出面からの深さは最大22cmである。ピットの平面は径20cmの円形で、底面からの深さは26cmである。

底面は周囲が凹む。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。



第85図 II-22~25号土坑

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-25土坑

〈遺構〉(第85図、写真図版29)

調査区西部に位置し、II-10号竪穴住居跡、II-26・28号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は長楕円形で、断面は船底状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)250cm、短軸92cm、底部が長軸188cm、短軸52cmで、検出面からの深さは最大30cmである。

底面は中央部がやや凹み、南西方向へ傾斜する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は上部から黒色土、暗褐色土、明黄褐色土、黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-28土坑

〈遺構〉(第86図、写真図版30)

調査区西部に位置し、II-19・25・28号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)126cm以上、短軸96cm、底部が長軸86cm、短軸65cmで、検出面からの深さは最大42cmである。

底面は平坦であるが、中央部がやや凹む。壁は底面から外傾して立ち上がるが、北西壁と南東壁は直立気味である。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-27号土坑

〈遺構〉(第86図、写真図版30)

調査区中央部南側に位置し、II-8・15号竪穴住居跡、II-2号掘立柱建物跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-15号陥し穴状遺構の北西上端部を切って構築されている。

平面は長楕円形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)166cm、短軸110cm、底部が長軸115cm、短軸92cmで、検出面からの深さは最大44cmである。

底面は平坦である。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土、黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と



推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-28号土坑

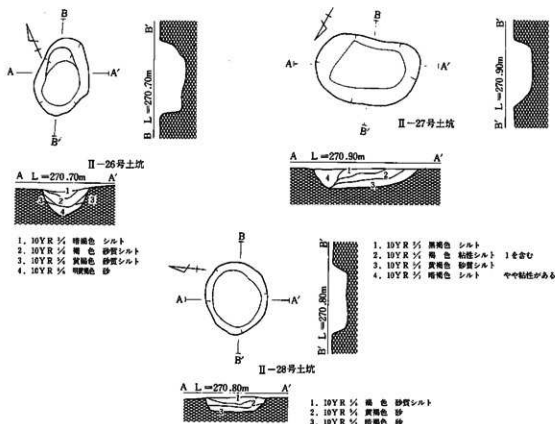
〈遺構〉(第86図、写真図版30)

調査区西部に位置し、II-10号竪穴住居跡、II-19・25・26号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が径99cm、底部が径76cmで、検出面からの深さは最大24cmである。

底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。土師器の甕の小片が1点出土しているが時期は不明である。



第86図 II-26~28号土坑

## II-29号土坑

〈遺構〉(第87図、写真図版31)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-30・31号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は隅丸長方形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)100cm、短軸76cm、底部が径58cm前後の不整な円形で、検出面からの深さは最大45cmである。

底面は平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がるが、南西壁は直立気味である。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-30号土坑

〈遺構〉(第87図、写真図版31)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-29・31号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は隅丸長方形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)220cm、短軸135cm、底部が長軸200cm、短軸106cmで、検出面からの深さは最大34cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から褐色土、黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-31号土坑

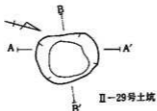
〈遺構〉(第87図、写真図版31)

調査区西部に位置し、II-14号竪穴住居跡、II-29・30号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は円形で、断面は長方形を呈する。規模は開口部が径94cm、底部が径73cmで、検出面からの深さは最大37cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立する。

埋土は上部から褐色土、黄褐色土、明黄褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

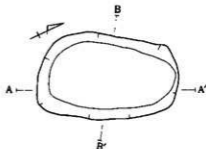


II-29号土坑

A L=270.70m A'



1. 10YR 7/4 暗褐色 砂質シルト
2. 10YR 8/4 褐色 砂
3. 10YR 9/4 黄褐色 砂
4. 10YR 10/4 明褐色 砂

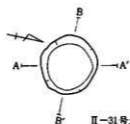


II-30号土坑

A L=270.70m A'

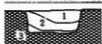


1. 10YR 7/4 褐色 砂
2. 10YR 9/4 黄褐色 砂



II-31号土坑

A L=270.70m A'



1. 10YR 7/4 褐色 砂質シルト
2. 10YR 9/4 黄褐色 砂
3. 10YR 10/4 黄褐色 砂

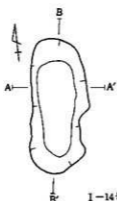


II-32号土坑

A L=271.80m A'



1. 10YR 7/4 黄褐色 シルト
2. 7.5YR 7/4 暗褐色 シルト
3. 7.5YR 8/4 暗褐色 シルト 黄褐色土を含む
4. 7.5YR 9/4 褐色 シルト 砂質性



I-14号土坑

A L=271.80m A'



1. 7.5YR 7/4 暗褐色 砂質シルト しまりがある
2. 7.5YR 8/4 暗褐色 砂質シルト しまりがある
3. 10YR 9/4 褐色 砂 しまりがある

第87図 II-29~32、I-14号土坑

## II-32号土坑

〈遺構〉(第87図、写真図版36)

調査区東部に位置し、II-2・I-1号竪穴住居跡、I-3号住居状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は楕円形で、断面は不整な逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)124cm、短軸(北西-南東)81cm、底部が長軸100cm、短軸53cmで、検出面からの深さは最大50cmである。

底面は平坦である。壁は底面から直立する。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## I-14号土坑

〈遺構〉(第87図、写真図版37)

調査区東部に位置し、I-1・2号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面は長楕円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)216cm、短軸87cm、底部が長軸154cm、短軸60cmで、検出面からの深さは最大48cmである。

底面は平坦であるが、やや北方向へ傾斜する。壁は底面から外傾するが、南北壁は底面から緩やかに立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。出土遺物はなく、時期は不明である。

## II-33~58号土坑

〈遺構〉(第88図)

本遺構群は調査区中央部に位置し、II-1・2・4・5・6・7号竪穴住居跡を結ぶ内側に隣接する。これらの大部分は平面形が円形を呈する柱穴状の土坑である。検出面からの深さは浅く、5~39cmで15cm前後が主体である。

所属時期は出土する遺物や埋土状況からII-37・39・41・45・53号土坑が平安時代と推定され、他は不明である。

〈出土遺物〉(第89図、写真図版76)

遺物はII-45号土坑の埋土から出土する環形土器と鉄製品がある。1(BI2a類)はあかやき土器の環で底径が6.0cmである。2は性格不明の鉄製品で、現存長3.3cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm、重さ4.25gである。

表13 Ⅱ区中央部土坑群 規模・形態表

単位: cm

土坑名	平面形		断面	規模			底面の状況	壁	埋土の主な土色	時期	遺物
	開口部	底部		開口部	底部	深さ					
33号	不整形	不整形	「U」字状	44×54	30×32	20	平坦	外傾	黒褐色土砂質シルト	不明	無
34号	円形	楕円形	不定形	45×47	28×38	8	凹	外傾	黒褐色土砂質シルト	不明	無
35号	隅丸長方	不整形	不定形	34×48	18×20	14	傾斜	外傾	暗褐色土砂質シルト	不明	無
36号	楕円形	楕円形	逆台形	47×60	29×43	10	傾斜	直立気味	暗褐色土砂質シルト	不明	無
37号	円形	不整形	レンズ状	68×64	48×46	14	凹	外傾	暗褐色土砂質シルト	平安	無
38号	円形	円形		48×46	40×40					不明	有
39号	円形	円形	長方形	73×68	62×62	39	平坦	直立	黒褐色土砂質シルト	平安	有
40号	円形	円形	逆台形	68×64	50×46	16	凹凸	外傾	暗褐色土シルト	不明	無
41号	円形	円形	「U」字状	32×32	17×19	24	凹	直立気味	黒褐色土シルト	平安	有
42号	楕円形	楕円形	レンズ状	46×60	30×46	14	凹凸	外傾	暗褐色土シルト	不明	無
43号	楕円形	楕円形	不定形	50×82	39×66	8	凹	外傾	暗褐色土砂質シルト	不明	無
44号			不定形	58×36	50×27	23	凹凸	直立	黒褐色土シルト	不明	無
45号	円形	不整形	レンズ状	61×63	46×59	16	凹	外傾	黒褐色土シルト	平安	有
46号	隅丸長方	隅丸長方	不定形	60×50	41×45	20	凹凸	外傾	黒褐色土シルト	不明	無
47号	楕円形	楕円形	「U」字状	55×64	38×49	30	凹	直立気味	黒褐色土シルト	不明	無
48号	不整形	楕円形	レンズ状	60×76	46×57	15	凹凸	外傾	暗褐色土砂質シルト	不明	無
49号	隅丸長方	隅丸長方	逆台形	47×95	42×78	25	平坦	直立気味	黒褐色土シルト	不明	有
50号	隅丸長方	楕円形	レンズ状	60×74	42×50	8	平坦	外傾	暗褐色土シルト	不明	無
51号	円形	円形	レンズ状	57×55	40×38	13	平坦	外傾	黒褐色土シルト	不明	無
52号	円形	円形	不定形	64×58	56×51	34	凹	直立気味	褐色土シルト	不明	無
53号	円形	隅丸長方	レンズ状	52×52	31×40	5	平坦		黒褐色土砂質シルト	平安	有
54号	楕円形	楕円形	レンズ状	59×68	42×56	14	凹	外傾	褐色土シルト	不明	無
55号	円形	楕円形	レンズ状	53×52	31×38	12	凹凸	外傾	褐色土砂質シルト	不明	無
56号	隅丸長方	隅丸長方	「U」字状	40×44	21×21	35	凹	直立気味	黒褐色土シルト	不明	無
57号	不整形	不整形	不定形	54×65	44×52	16	凹凸	直立気味	暗褐色土シルト	不明	無
58号	隅丸長方	楕円形	「U」字状	36×58	22×46	18	凹凸	直立気味	暗褐色土シルト	不明	無

II-59~72号土坑

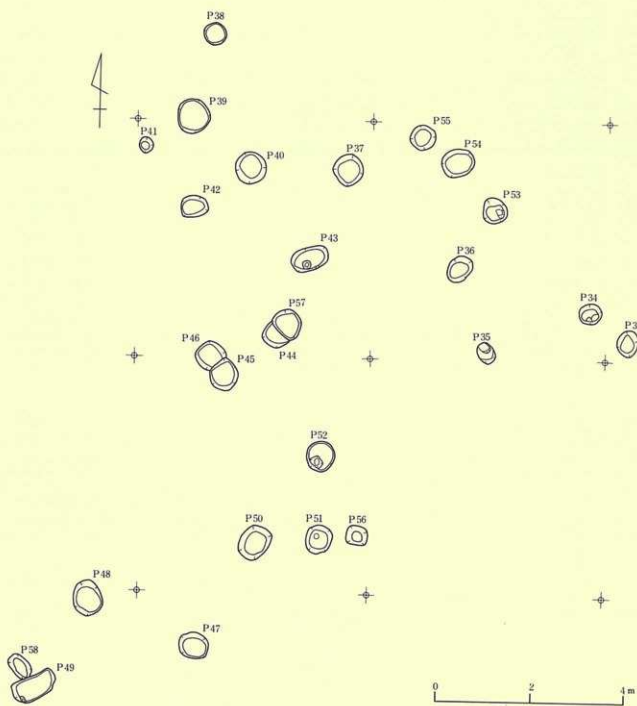
〈遺構〉(第90図、写真図版22・32~34)

本遺構群は調査区西端部に位置し、II-2号溝跡の東側でII-10・14号竪穴住居跡を結ぶ南側に隣接する。これらの平面形は円形が主体で楕円形のものも含まれる。断面形は逆台形、長方形、「V」字状を呈するもので平面形との関連は認められない。検出面からの深さは14~55cmで30cm前後が主体である。出土遺物はなく、時期は不明である。

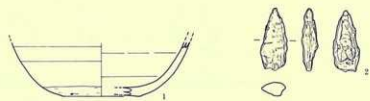
表14 II区西部土坑群 規模・形態表

単位：cm

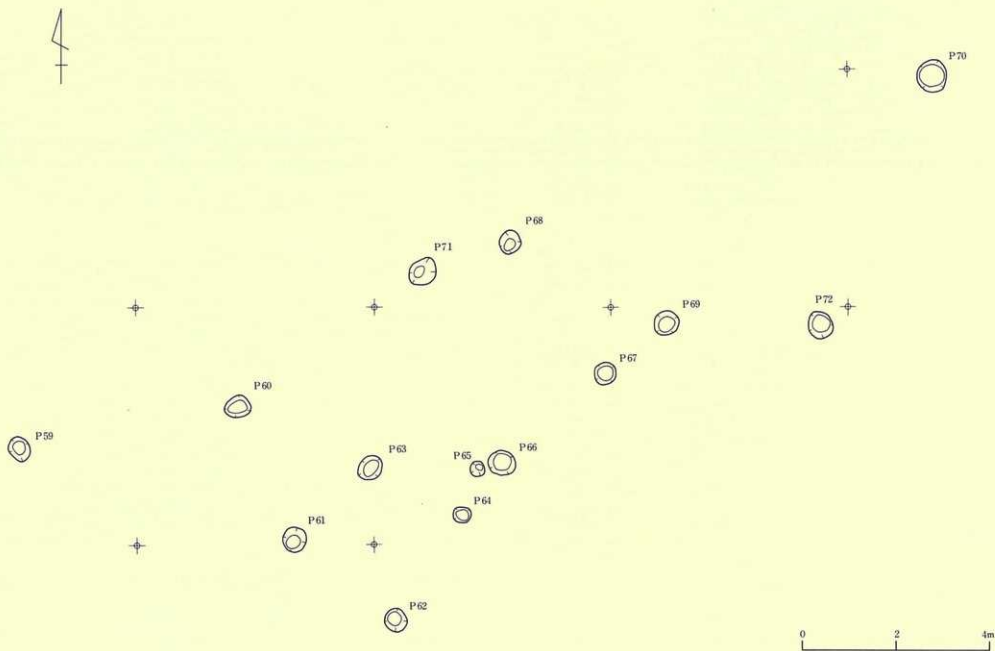
土坑名	平面形		断面	規模			底面の状況	壁	埋土の主な土色	時期	遺物
	開口部	底部		開口部	底部	深さ					
59号	楕円形	円形	逆台形	51×42	29×26	26	凹	外傾	黄褐色土 シルト	不明	無
60号	楕円形	楕円形	「U」字状	54×46	41×26	30	凹	直立	暗褐色土 砂	不明	無
61号	円形	円形	逆台形	50×52	30×29	36	凹	直立気味	褐色土 シルト	不明	無
62号	楕円形	円形	長方形	43×50	28×28	26	平坦	直立	褐色土 砂	不明	無
63号									黄褐色土		
	円形	楕円形	逆台形	48×52	28×40	38	平坦	直立気味	砂質シルト	不明	無
64号	円形	円形	長方形	36×38	24×26	16	平坦	直立	褐色土砂質シルト	不明	無
65号	楕円形	楕円形	長方形	47×54	28×40	46	平坦	直立	黄褐色土 砂	不明	無
66号									褐色土砂質シルト		
	円形	円形	長方形	54×56	35×38	41	平坦	直立	黄褐色土 砂	不明	無
67号	円形	円形	逆台形	44×46	31×33	55	傾斜	直立	黄褐色土 砂	不明	無
68号									暗褐色土 シルト		
	円形	円形	「U」字状	45×46	26×24	36	凹	直立気味	明黄褐色土 砂	不明	無
69号	円形	円形	「U」字状	51×50	33×34	14	平坦	外傾	褐色土 シルト	不明	無
70号	円形	円形	逆台形	62×68	50×49	14	平坦	外傾	暗褐色土 シルト	不明	無
71号	楕円形	楕円形	「U」字状	54×62	22×26	38	凹	外傾	褐色土砂質シルト	不明	無
72号	円形	円形	「U」字状	52×58	38×35	21	凹凸	直立気味		不明	無



第88图 II-33~58号土坑



第89图 II-45号土坑出土遗物



第80图 II-59~72号土坑



## 5. 陥し穴状遺構

### II-1号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第91図、写真図版39)

調査区中央部に位置し、II-2号陥し穴状遺構と1.3mの間隔をおいて並列し、II-3号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。II-1号竪穴住居跡と重複し、本遺構の北端がII-1号竪穴住居跡に切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)約330cm、短軸53cm、底部が長軸183cm、短軸12cmで、検出面からの深さは最大103cmである。長軸方向は真北から22度西偏する。

底面はほぼ平坦で中央部がやや凹む。壁は底面から外傾して立ち上がり、南東壁は中位で内弯した後、直立気味である。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、黄褐色土の3層に大別され、埋土下部の黄褐色土層は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### II-2号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第91図、写真図版39)

調査区中央部に位置し、II-1号陥し穴状遺構と1.3mの間隔をおいて並列する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)254cm、短軸48cm、底部が長軸230cm、短軸10cmで、検出面からの深さは最大91cmである。長軸方向は真北から38度西偏する。

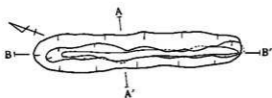
底面はほぼ平坦で中央部がやや凹む。壁は底面から直立気味に立ち上がった後、中位で外傾し、長軸の北東端は内弯した後、中位で外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土・オリーブ褐色土の7層に大別され、埋土上部と下部の黄褐色土は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と推定される。

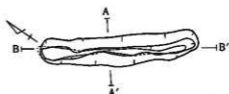
遺物は出土しない。

### II-3号陥し穴状遺構

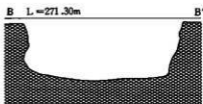
〈遺構〉(第91図、写真図版39)



II-1号陥し穴状遺構



II-2号陥し穴状遺構



A L=271.40m A'

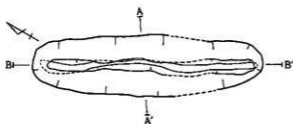


1. 10Y R 1/4 暗褐色 シルト
2. 10Y R 1/4 黄褐色 粘性シルト
3. 10Y R 1/4 褐色 シルト
4. 10Y R 1/4 暗褐色 砂質シルト
5. 10Y R 1/4 暗褐色 シルト
6. 10Y R 1/4 褐色 砂
7. 10Y R 1/4 黄褐色 砂
8. 2.5Y R 1/4 に近い黄色 砂
9. 2.5Y R 1/4 黄褐色 砂
10. 2.5Y R 1/4 明黄褐色 砂

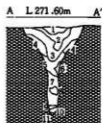
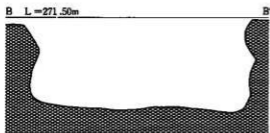
A L=271.30m A'



1. 10Y R 1/4 黄褐色 シルト
2. 10Y R 1/4 暗褐色 シルト
3. 10Y R 1/4 褐色 粘性シルト
4. 10Y R 1/4 黄褐色 砂質シルト
5. 10Y R 1/4 褐色 砂質シルト
6. 10Y R 1/4 暗褐色 砂質シルト
7. 10Y R 1/4 に近い褐色 砂
8. 2.5Y R 1/4 に近い黄色 砂
9. 2.5Y R 1/4 オリーブ褐色 砂



II-3号陥し穴状遺構



1. 10Y R 1/4 黄褐色 シルト
2. 10Y R 1/4 暗褐色 シルト
3. 10Y R 1/4 暗褐色 砂質シルト
4. 10Y R 1/4 褐色 粘性シルト
5. 10Y R 1/4 暗褐色 砂質シルト
6. 10Y R 1/4 黄褐色 砂質シルト
7. 10Y R 1/4 黄褐色 砂
8. 10Y R 1/4 黄褐色 シルト
9. 10Y R 1/4 暗褐色 砂
10. 10Y R 1/4 に近い褐色 砂
11. 10Y R 1/4 褐色 砂

第91図 II-1~3号陥し穴状遺構

調査区中央部に位置し、II-4号陥し穴状遺構と3.9mの間隔を置いて並列し、II-1号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は水道管の埋設により中央部を切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)367cm、短軸96cm、底部が長軸330cm、短軸8cmで、検出面からの深さは最大144cmである。長軸方向は真北から30度西偏する。

底面は起伏があり、全体として16cmほど南東に傾斜する。壁は底面からフラスコ状に内弯し、中位で大きく外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、褐色土の4層に大別される。黄褐色土と暗褐色土の互層がみられ、黄褐色土は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と推定される。

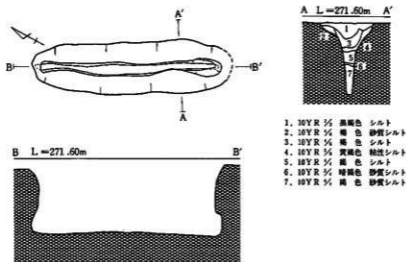
遺物は出土していない。

#### II-4号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第92図、写真図版40)

調査区中央部に位置し、II-3号陥し穴状遺構と3.9mの間隔を置いて並列する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は水道管の埋設により南端を切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は開口部が大きく開く「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)約320cm、短軸79cm、底部が長軸288cm、短軸7cmで、検出面からの深さは最大114cmである。長軸方向は真北から28度西偏する。



第92図 II-4号陥し穴状遺構

底面は平坦であるが中央部がやや高くなる。壁は底面から直立気味に立ち上がった後、開口部で大きく外傾する。南東壁と北東壁は底面から内弯した後、直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土、黄褐色土、褐色土、暗褐色土、褐色土の6層に大別され、埋土下部の褐色土は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### I-1号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第94図、写真図版48)

調査区東端部に位置し、縄文時代に属するI-1・11号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に不整な楕円形で、短軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)224cm、短軸186cm、底部が長軸120cm、短軸70cmで、検出面からの深さは最大92cmである。長軸方向は真北から28度西偏する。

底面はほぼ平坦で中央部が凹み、小穴を1個伴う。小穴の平面形は円形で、径15cm、底面からの深さは17cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がるが、北東壁はやや内弯した後、外傾する。

埋土は上部から黒色土、暗褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土、明黄褐色土の6層に大別され、埋土上部が粘土で堅く覆われている。層位状況から自然堆積と推定され、平安時代に攪乱を受け、埋土「1」から土師器の破片が出土する。

〈出土遺物〉(第93図、写真図版76)

縄文時代早期の物見台式に比定される深鉢の体部片3点と石鏃1点のほか土師器2点がある。深鉢の1点はキャリバー形を呈する。

表15 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
93/1陥1	208	石鏃	2.4	1.5	0.3	0.9	埴黄泥岩	奥羽山地新第三系 中新統	光形 平基 無基



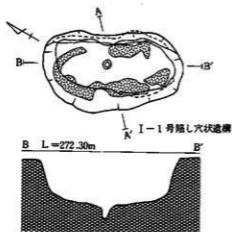
第93図

I-1号陥し穴状遺構出土遺物

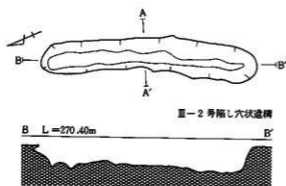
### III-1号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第94図、写真図版40)

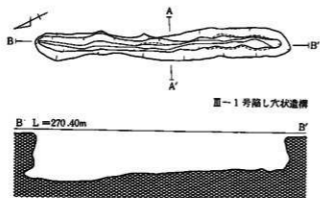
調査区西部に位置し、III-2号陥し穴状遺構と1.1mの間隔をおいて並列する。検出面は基本層序第IV層である。



1. 10YR 5/6 黒色 シルト
2. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
3. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
4. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 黒褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト



1. 10YR 5/6 黄褐色
2. 10YR 5/6 黄褐色
3. 10YR 5/6 褐色
4. 10YR 5/6 にごり地 褐色土が混じる
5. 10YR 5/6 明黄褐色 目が細かい砂
6. 10YR 5/6 にごり地 目が細かい砂
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質(地山) 白っぽい



1. 10YR 5/6 暗褐色 褐色土に砂が混じる
2. 10YR 5/6 黄褐色 崩落土
3. 10YR 5/6 にごり地 1より砂が多い
4. 10YR 5/6 にごり地 褐色土が混じっている
5. 10YR 5/6 黄褐色 砂(地山)

第94図 I-1、III-1・2号陥し穴状遺構

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は開口部が開く「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸（北東-南西）406cm、短軸40cm、底部が長軸386cm、短軸7cmで、検出面からの深さは最大78cmである。長軸方向は真北から27度東偏する。

底面は起伏があり、24cmほど北東へ傾斜する。壁は、北西壁が底面から内傾して中位で外傾する。南東壁と南西壁は底面から内湾して立ち上がり開口部で開く。北東壁は底面から大きく内湾して中位から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、黄褐色土、にぶい黄橙色土、にぶい黄褐色土、黄褐色土の5層に大別され、埋土上部と上部側面の黄褐色土層は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### Ⅲ-2号陥し穴状遺構

〈遺構〉（第94図、写真図版40）

調査区西部に位置し、Ⅲ-1号陥し穴状遺構と1.1mの間隔をおいて並列し、Ⅲ-3号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸（北東-南西）344cm、短軸50cm、底部が長軸314cm、短軸15cmで、検出面からの深さは最大39cmである。長軸方向は真北から24度東偏する。

底面は起伏があり、10cmほど南西へ傾斜する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がるが、北西壁は底面から直立気味である。

埋土は上部から黄褐色土、褐色土、明黄褐色土、にぶい黄橙色土、黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### Ⅲ-3号陥し穴状遺構

〈遺構〉（第95図、写真図版49）

調査区西部に位置し、Ⅲ-2・4・5号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第IV層である。本遺構はⅢ-3号土坑と重複し、切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸（北東-南西）352cm、短軸37cm、底部が長軸339cm、短軸6cmで、検出面からの深さは最大78cmである。長軸方向は真北から60度東偏する。

底面はほぼ平坦で、16cmほど南西へ傾斜する。壁は底面から外傾して立ち上がり、中位で内

弯する。南西壁は底面から軽く内弯しながら立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土の3層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### Ⅲ-4号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第95図、写真図版49)

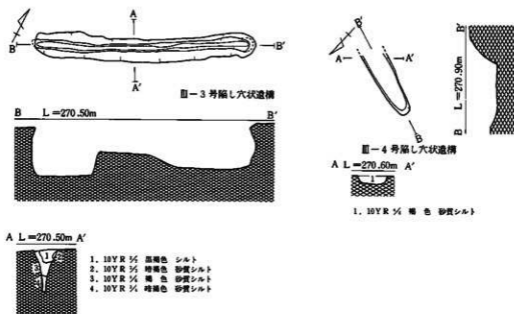
調査区西部に位置し、Ⅱ-9号陥し穴状遺構と5.3mの間隔をおいて並列し、Ⅲ-5号陥し穴状遺構と2.6m、Ⅱ-6号陥し穴状遺構と6.5mの間隔をおいて斜位に並列し、Ⅲ-3号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第Ⅳ層である。本遺構は2ヶ年継続調査を予定した遺構であるが、次年度には残存部を発見することができなかった。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は浅い「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)120cm以上、短軸36cm、底部が長軸108cm以上、短軸30cmで、検出面からの深さは最大40cmである。長軸方向は真北から70度西偏する。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は褐色土の単層である。

遺物は出土しない。



第95図 Ⅲ-3・4号陥し穴状遺構

### Ⅲ-5号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第96図、写真図版49)

調査区西部に位置し、Ⅲ-4号陥し穴状遺構と2.6mの間隔をおいて斜位に並列し、Ⅲ-6号陥し穴状遺構と4.8mの間隔をおいて直列し、Ⅲ-3号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は開口部、底部共に不整な溝状で、短軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)346cm、短軸50cm、底部が長軸319cm、短軸12cmで、検出面からの深さは最大35cmである。長軸方向は真北から88度西偏する。

底面はほぼ平坦で、8cmほど西へ傾斜する。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は褐色土の単層である。

遺物は出土しない。

### Ⅲ-6号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第96図、写真図版45)

調査区西部に位置し、Ⅲ-5号陥し穴状遺構と4.8mの間隔をおいて直列する。検出面は基本層序第IV層である。Ⅲ-4号土坑と重複し、開口部が切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)305cm、短軸28cm、底部が長軸268cm、短軸6cmで、検出面からの深さは最大94cmである。長軸方向は真北から86度西偏する。

底面はほぼ平坦で14cmほど西へ傾斜する。壁は底面から直立気味に立ち上がった後、中位で内湾する。

埋土は上部から黒色土、にぶい黄褐色土、黒褐色土、灰黄褐色土、明黄褐色土の5層に大別され、埋土下部と上部側面の黄褐色土は崩落土を主体とする。層位状況から自然堆積と堆定される。

遺物は出土しない。

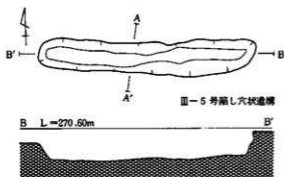
### Ⅱ-5号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第96図、写真図版41)

調査区中央部に位置し、Ⅱ-2・6号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は水道管の埋設により中央上半部を切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸



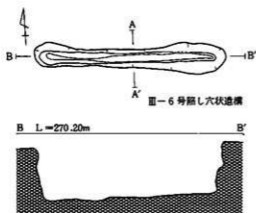


III-5 号陥し穴状遺構

A L=270.50m A'



1. 10YR 5/6 褐色 褐色土にやや砂が混じる
2. 10YR 5/6 明黄褐色 褐色土に砂が混じる
3. 10YR 5/6 明黄褐色 褐色土に砂が混じる
4. 10YR 5/6 黄褐色 やや粒子が混い
5. 10YR 5/6 明黄褐色 やや粒子が混い

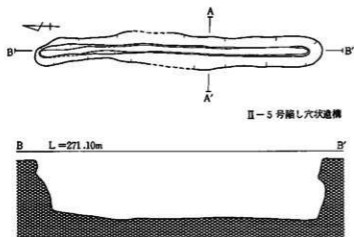


III-6 号陥し穴状遺構

A L=270.10m A'



1. 10YR 5/6 褐色
2. 10YR 5/6 ほぼ白色 シルト
3. 10YR 5/6 ほぼ白色 褐色土が混じる砂
4. 10YR 5/6 黒褐色 やや粒性がある
5. 10YR 5/6 灰黄褐色 褐色土が混じる砂
6. 10YR 5/6 明黄褐色 粒子が混い砂(地山)



II-5 号陥し穴状遺構

A L=271.00m A'



1. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト
2. 10YR 5/6 黄褐色 シルト
3. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト
4. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
6. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
8. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
9. 10YR 5/6 明黄褐色 砂質シルト
10. 10YR 5/6 明黄褐色 砂質シルト
11. 10YR 5/6 灰黄褐色 砂質シルト

第96図 III-5・6、II-5号陥し穴状遺構

(南-北)456cm、短軸52cm、底部が長軸426cm、短軸8cmで、検出面からの深さは最大98cmである。長軸方向は真北から2度西偏する。

底面は北端から中央にかけて平坦であるが、南から中央部にかけて15cmほど傾斜する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がるが、北壁は内弯した後、外傾する。

埋土は上部から暗褐色土、黄褐色土、黄褐色土、黒褐色土、褐色土、明黄褐色土、灰黄褐色土の7層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-6号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第97図、写真図版41)

調査区中央部に位置し、III-4号陥し穴状遺構と6.5mの間隔をおいて斜位に並列し、II-5・7号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構は水道管の埋設により東端部を切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)約304cm、短軸約74cm、底部が長軸約268cm、短軸約18cmで、検出面からの深さは最大116cmである。長軸方向は真北から90度西偏する。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土の4層に大別される。層位状況から崩落土を伴う自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-7号陥し穴状遺構

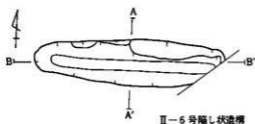
〈遺構〉(第97図、写真図版41)

調査区中央部に位置し、II-6号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-11号土坑に南上半部を、II-12号土坑に西上半部を切られている。

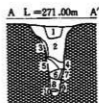
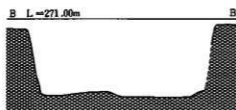
平面形は開口部が隅丸長方形、底部が溝状で、短軸の断面は残存部だけで逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)224cm、短軸54cm、底部が長軸272cm、短軸20cmで、検出面からの深さは最大102cmである。長軸方向は真北から48度東偏する。

底面は平坦で、南西から北西へ10cmほど傾斜する。壁は北西壁と南東壁が底面から緩やかに外傾して立ち上がり、北東壁と南西壁は底面から内弯した後、直立気味である。

埋土は残存部だけで暗褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土の3層に大別される。層位状況か



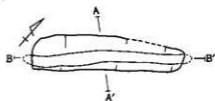
II-6号隔し状遺構



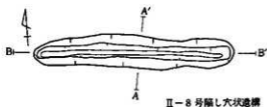
1. 7.5YR 5/6 黒褐色 シルト
2. 7.5YR 2/6 黒色 砂質シルト
3. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
4. 10YR 5/6 黒色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 黒色 砂
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
8. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
9. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
10. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト



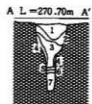
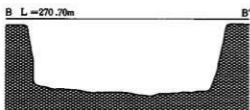
1. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
2. 10YR 5/6 黄褐色 シルト
3. 10YR 5/6 ニシト黄褐色 砂 粒程小さい
4. 10YR 5/6 ニシト黄褐色 砂 粒程小さい



II-7号隔し穴状遺構



II-8号隔し穴状遺構



1. 10YR 5/6 黒褐色 シルト
2. 10YR 5/6 黒色 砂質シルト
3. 10YR 5/6 黒褐色 砂質シルト
4. 10YR 5/6 明黄褐色 砂質シルト 腐葉土
5. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
7. 10YR 5/6 ニシト黄褐色 砂質シルト

第97図 II-6～8号隔し穴状遺構

ら自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-11号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第97図、写真図版42)

調査区西端部に位置し、II-13号陥し穴状遺構と0.8mの間隔をおいて並列し、II-10・12号陥し穴状遺構とそれぞれ3.9m、1.4mの間隔をおいて斜位に並列し、II-22号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「Y」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)318cm、短軸50cm、底部が長軸288cm、短軸6cmで、検出面からの深さは最大114cmである。長軸方向は真北から80度西偏する。

底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや低くなる。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土、黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の5層に大別される。層位状況から崩落土を伴う自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-9号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第98図、写真図版42)

調査区中央部に位置し、III-4号陥し穴状遺構と5.3mの間隔をおいて並列し、II-19・20号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-1号掘立柱建物跡と重複し、本遺構の中央北端部がII-1号掘立柱建物跡の柱穴P8に切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)約286cm、短軸36cm、底部が長軸約276cm、短軸10cmで、検出面からの深さは最大84cmである。長軸方向は真北から76度西偏する。

底面は平坦であるが、西側へ16cmほど傾斜する。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-10号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第98図、写真図版42)

調査区西端部に位置し、II-8・12号陥し穴状遺構とそれぞれ3.9m、5.9mの間隔をおいて

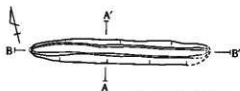
斜位に並列し、II-21号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部が長楕円形、底部が溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)330cm、短軸104cm、底部が長軸298cm、短軸14cmで、検出面からの深さは最大111cmである。長軸方向は真北から80度西偏する。

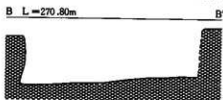
底面は全体として東側へやや傾斜する。壁は南壁と北壁が底面から緩やかに外傾して立ち上がり、東壁が底面から内湾した後、外傾する。西壁は底面から内湾と外傾を繰り返して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、暗褐色土、明黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

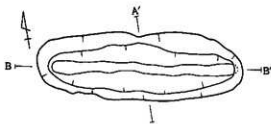
遺物は出土しない。



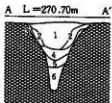
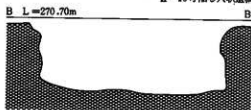
II-9号陥し穴状遺構



1. 7.5Y R 5/6 黒褐色 シルト
2. 7.5Y R 5/6 暗褐色 砂質シルト
3. 10Y R 5/6 褐色 砂
4. 10Y R 5/6 暗褐色 砂



II-10号陥し穴状遺構



1. 7.5Y R 5/6 黒褐色 シルト
2. 7.5Y R 5/6 暗褐色 シルト
3. 10Y R 5/6 褐色 砂質シルト
4. 7.5Y R 5/6 褐色 シルト
5. 10Y R 5/6 暗褐色 砂質シルト
6. 10Y R 5/6 暗褐色 砂質シルト

第98図 II-9・10号陥し穴状遺構

## II-11号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第100図、写真図版43)

調査区西端部に位置する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に隅丸長方形で、短軸の断面は歪んだ逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)260cm、短軸111cm、底部が長軸202cm、短軸36cmで、検出面からの深さは最大116cmである。長軸方向は真北から36度東偏する。

底面は平坦で、長軸方向に小穴を4個伴う。小穴の平面形はすべて円形で、径11~16cm、底面からの深さは14~38cmである。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄橙色土の7層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

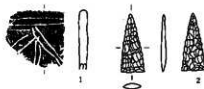
〈出土遺物〉(第99図、写真図版76)

遺物は埋土から出土し、上部から縄文時代後期前葉の深鉢土器の口縁部片1とその下層から石鏃2が出土する。

表16 石器計測表

単位: cm, g

遺物番号	写真	器種	大きさ(最大)			重さ	石質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
99II11陥1	290	石鏃	3.0	1.2	0.2	1.0	燧石 チャート	北上山地 古生帯	先端部や穴痕 平基 無茎



第99図 II-11号陥し穴状遺構出土遺物

## II-12号陥し穴状遺構

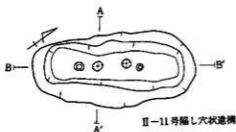
〈遺構〉(第100図、写真図版43)

調査区西端部に位置し、II-8・10号陥し穴状遺構とそれぞれ1.4m、5.9mの間隔をにおいて斜位に並列し、II-13号陥し穴状遺構と2.8mの間隔をにおいて並列する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-14号竪穴住居跡と重複し、本遺構の西半上部が切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)335cm、短軸68cm、底部が長軸348cm、短軸9cmで、検出面からの深さは最大133cmである。長軸方向は真北から85度東偏する。

底面は中央部に向かって下降する。壁は東壁と西壁が底面から内弯した後、直立気味に、南壁と北壁が底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

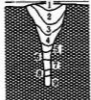


II-11号陥し穴状遺構

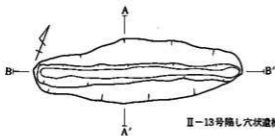
B L=270.50m B'



A L=270.60m A'



- |             |     |     |                  |
|-------------|-----|-----|------------------|
| 1. 10YR 5/6 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色土が部分的に混じる     |
| 2. 10YR 5/6 | 黒褐色 | シルト | 2より黄褐色土のかたまりが大きい |
| 3. 10YR 5/6 | 黒褐色 | シルト |                  |
| 4. 10YR 5/6 | 黄褐色 | 砂   | 4がやや混じる          |
| 5. 10YR 5/6 | 黒褐色 | シルト | 5より4の量が多い        |
| 6. 10YR 5/6 | 黒褐色 | シルト | 4より細かい粒          |
| 7. 10YR 5/6 | 黒褐色 | 砂   | 黒色土をまじ           |
| 8. 10YR 5/6 | 黒褐色 | 砂   |                  |
| 9. 10YR 5/6 | 黒褐色 | 砂   |                  |

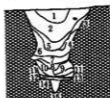


II-13号陥し穴状遺構

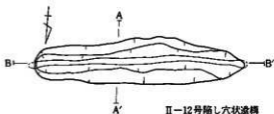
B L=270.70m B'



A L=270.60m A'



- |               |      |       |           |
|---------------|------|-------|-----------|
| 1. 10YR 5/6   | 黒色   | シルト   |           |
| 2. 10YR 5/6   | 黒色   | シルト   |           |
| 3. 10YR 5/6   | 褐色   | 砂質シルト |           |
| 4. 10YR 5/6   | 暗褐色  | シルト   | やや粘性がある   |
| 5. 10YR 5/6   | 黒褐色  | 粘性シルト |           |
| 6. 10YR 5/6   | 黄褐色  | 砂     | 細粒        |
| 7. 10YR 5/6   | 暗褐色  | 砂質シルト | やや粘性がある   |
| 8. 10YR 5/6   | 明黄褐色 | 砂     | 粒が大きい     |
| 9. 10YR 5/6   | 明黄褐色 | 砂質シルト |           |
| 10. 7.5YR 5/6 | 褐色   | シルト   |           |
| 11. 10YR 5/6  | 明黄褐色 | 砂     | 黒色土がやや混じる |
| 12. 10YR 5/6  | 黒褐色  | 砂質シルト |           |
| 13. 10YR 5/6  | 褐色   | 砂質シルト |           |
| 14. 10YR 5/6  | 黒褐色  | 砂質シルト |           |
| 15. 10YR 5/6  | 灰黄褐色 | 粘土    |           |



II-12号陥し穴状遺構

B L=270.70m B'



A L=270.70m A'



- |              |     |       |
|--------------|-----|-------|
| 1. 7.5YR 5/6 | 黒褐色 | シルト   |
| 2. 7.5YR 5/6 | 暗褐色 | シルト   |
| 3. 10YR 5/6  | 黄褐色 | 砂質シルト |
| 4. 10YR 5/6  | 暗褐色 | 砂質シルト |
| 5. 10YR 5/6  | 暗褐色 | 砂質シルト |
| 6. 10YR 5/6  | 黄褐色 | 砂質シルト |
| 7. 10YR 5/6  | 黒褐色 | 砂質シルト |

第100図 II-11~13号陥し穴状遺構

遺物は出土しない。

#### II-13号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第100図、写真図版43)

調査区西端部に位置し、II-8・12号陥し穴状遺構とそれぞれ0.8m、2.8mの間隔をおいて並列し、II-10・21・22号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-19号土坑と重複し、本遺構の南東上半部が切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)330cm、短軸102cm、底部が長軸314cm、短軸17cmで、検出面からの深さは最大140cmである。長軸方向は真北から69度東偏する。

底面はほぼ平坦であるが、東端がやや低くなる。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

#### II-14号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第101図、写真図版44)

調査区中央部に位置する。検出面は基本層序第IV層で、II-12号竪穴住居跡を精査中に検出された。本遺構の東上半部がII-12号竪穴住居跡に切られている。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)321cm、短軸34cm、底部が長軸298cm、短軸10cmで、検出面からの深さは最大90cmである。長軸方向は真北から83度東偏する。

底面は中央部に向かってやや高くなる。壁は東壁と西壁が底面から内湾した後、直立気味に立ち上がり、南壁と北壁は底面から直立気味に立ち上がる。埋土は上部から黒褐色土、明黄褐色土、黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

#### II-15号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第101図、写真図版44)

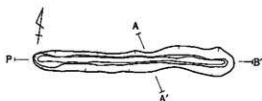
調査区中央部に位置する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-27号土坑と重複し、北西上半部が切られている。



平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(東-西)360cm、短軸78cm、底部が長軸292cm、短軸16cmで、検出面からの深さは最大94cmである。長軸方向は真北から79度東偏する。

底面は平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

不注意により埋土などは不明である。



II-14号陥し穴状遺構



A L=270.70m A'



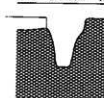
- |          |   |     |       |         |
|----------|---|-----|-------|---------|
| 1. 10YR  | △ | 淡褐色 | 砂質シルト |         |
| 2. 10YR  | △ | 褐色  | 砂     |         |
| 3. 10YR  | △ | 黄褐色 | 砂     | 礫粒      |
| 4. 10YR  | △ | 暗褐色 | 砂     | 2が混じる   |
| 5. 10YR  | △ | 暗褐色 | 砂     |         |
| 6. 10YR  | △ | 暗褐色 | 砂質シルト |         |
| 7. 10YR  | △ | 黒褐色 | シルト   | Sを含む    |
| 8. 10YR  | △ | 黒色  | シルト   | 粘性がある   |
| 9. 10YR  | △ | 黄褐色 | 砂     |         |
| 10. 10YR | △ | 暗褐色 | 砂     |         |
| 11. 10YR | △ | 黒色  | シルト   | やや粘性がある |



II-15号陥し穴状遺構



A L=270.90m A'



第101図 II-14・15号陥し穴状遺構

## II-16号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第102図、写真図版44)

調査区中央部に位置し、II-18号陥し穴状遺構と2.1mの間隔を置いて斜位に並列し、II-25号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第IV層である。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)350cm、短軸34cm、底部が長軸330cm、短軸13cmで、検出面からの深さは最大66cmである。長軸方向は真北から3度西偏する。

底面は全体として北に傾斜し、中央部がやや低い。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から暗褐色土、褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土、黒褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-17号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第102図、写真図版45)

調査区中央部に位置する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「V」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)324cm、短軸42cm、底部が長軸304cm、短軸14cmで、検出面からの深さは最大114cmである。長軸方向は真北から62度西偏する。

底面は平坦であるが、北西へ向かって傾斜する。壁は、東壁と西壁が底面から内湾した後、直立気味に立ち上がり、南壁と北壁が底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

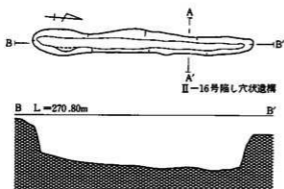
遺物は出土しない。

## II-18号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第102図、写真図版45)

調査区中央部に位置し、II-16号陥し穴状遺構と2.1mの間隔を置いて斜位に並列し、II-25号陥し穴状遺構とも隣接する。検出面は基本層序第III層で、II-7号竪穴住居跡を精査中に検出された。本遺構の南上半部がII-7号竪穴住居跡に切られている。

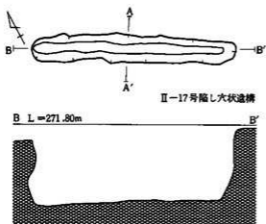
平面形は開口部、底部共に溝状で、短軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)260cm以上330cm以内、短軸30cm、底部が長軸230cm以上325cm以内、短軸18cmで、検出面からの深さは最大104cmである。長軸方向は真北から3度東偏する。



A L = 270.60m A'



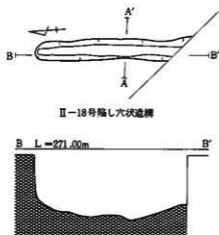
1. 10YR 5/6 暗褐色 砂
2. 10YR 5/6 黄褐色 砂
3. 10YR 5/6 褐色 砂
4. 10YR 5/6 暗褐色 砂
5. 10YR 5/6 褐色 砂



A L = 272.90m A'



1. 10YR 5/6 黄褐色 シルト
  2. 10YR 5/6 黄褐色 シルト
  3. 10YR 5/6 暗褐色 シルト
  4. 10YR 5/6 褐色 シルト
  5. 10YR 5/6 褐色 砂
- 1より明るい



A L = 271.00m A'



1. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
2. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
3. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
4. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
5. 10YR 5/6 黄褐色 粘土

第102図 II-16~18号陥し穴状遺構

底面は中央部が凹み、壁は底面から直立する。

埋土は上部から褐色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

#### II-19号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第103図、写真図版46)

調査区中央部に位置し、II-9、III-4・5号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-1号掘立柱建物跡と重複し、本遺構の北西端部がII-1号掘立柱建物跡の柱穴P4に切られている。

平面形は開口部が歪んだ円形、底部が隅丸長方形で短軸の断面は長方形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)136cm、短軸112cm、底部が長軸102cm、短軸76cmで、検出面からの深さは最大82cmである。長軸方向は真北から69度東偏する。

底面は平坦で、中央に小穴を1個伴う。小穴の平面形は円形で、径22cm、底面からの深さは53cmである。壁は底面から直立気味に立ち上がる。

埋土は上部から黒色土、黒褐色土、黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

#### II-20号陥し穴状遺構

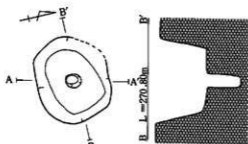
〈遺構〉(第103図、写真図版46)

調査区西部に位置し、II-9、III-5号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

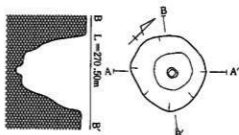
平面形は開口部、底部共に円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が径112cm、底部が径64cmで、検出面からの深さは最大98cmである。底面は平坦で、中央に小穴を1個伴う。小穴の平面形は円形で、径16cm、底面からの深さは10cmである。壁は底面から直立気味に立ち上がるが、東壁はやや外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土、明黄褐色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

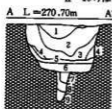
遺物は出土しない。



II-19号隔し穴状遺構

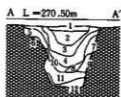


II-20号隔し穴状遺構

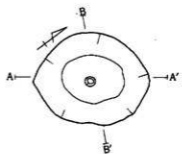


1. 10YR 5/6 黒色 シルト
2. 10YR 5/6 黒褐色 シルト
3. 10YR 5/6 黒褐色 シルト
4. 10YR 5/6 黄褐色 砂
5. 10YR 5/6 黒褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 灰色黄褐色 粘土
7. 10YR 5/6 褐色 砂
8. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂
9. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂

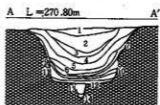
1. 7.5YR 5/6 黒色 シルト
2. 7.5YR 5/6 黒褐色 シルト
3. 7.5YR 5/6 黒褐色 シルト
4. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト
5. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 明黄褐色 砂
7. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂
8. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂質シルト
9. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂
10. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
11. 7.5YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
12. 10YR 5/6 明黄褐色 砂



1. 7.5YR 5/6 黒褐色 シルト 細くしまる
2. 7.5YR 5/6 黒褐色 シルト 細くしまる
3. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト 細くしまる
4. 7.5YR 5/6 暗褐色 シルト
5. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
6. 10YR 5/6 暗褐色 砂質シルト
7. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
8. 10YR 5/6 明黄褐色 砂質シルト
9. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
10. 10YR 5/6 黄褐色 砂質シルト
11. 10YR 5/6 褐色 砂質シルト
12. 10YR 5/6 灰色黄褐色 砂質シルト
13. 10YR 5/6 灰色黄褐色 シルト しまりがある
14. 10YR 5/6 灰色黄褐色 シルト 粘性やしまりがある



II-21号隔し穴状遺構



第103図 II-19~21号隔し穴状遺構

## II-21号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第103図、写真図版46)

調査区西端部に位置し、II-10・13・22号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部、底部共に楕円形で、長軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)186cm、短軸143cm、底部が長軸100cm、短軸76cmで、検出面からの深さは最大95cmである。長軸方向は真北から37度東偏する。

底面は平坦で、中央に小穴を1個伴う。小穴の平面形は円形で、径15cm、底面からの深さは15cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、褐色土、暗褐色土、黄褐色土、暗褐色土、褐色土の6層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## II-22号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第104図、写真図版47)

調査区西端部に位置し、II-8・13・21号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形は開口部が楕円形、底部が歪んだ楕円形で、長軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)260cm、短軸176cm、底部が長軸178cm、短軸92cmで、検出面からの深さは最大96cmである。長軸方向は真北から38度東偏する。

底面は平坦で、長軸方向に並ぶ2個の小穴を伴う。小穴の平面形はいずれも円形で、径25-30cm、底面からの深さは40-52cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。東壁の砂地は地盤が弱く、自然崩落を繰り返したものと推定される。

埋土は上部から安家火山灰、黒褐色土、黒褐色土、黄褐色土、黒褐色土の5層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。埋土1層の安家火山灰は径100cm×80cm、厚さ10cmで、円盤状に堆積する。

遺物は出土しない。

## II-23号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第104図、写真図版47)

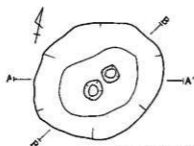
調査区西端部に位置し、II-24号陥し穴状遺構と1.7mの間隔をおいて直列する。検出面は基本層序第III層である。本遺構はII-2号溝跡と重複し、北東上半部が切られている。

平面形は開口部、底部共に楕円形で、短軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)160cm、短軸100cm、底部が長軸124cm、短軸60cmで、検出面からの深さは最大64cmである。長軸方向は真北から54度東偏する。

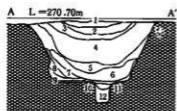
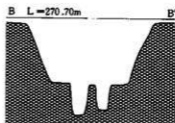
底面は平坦で、長軸方向に並ぶ3個の小穴を伴う。小穴の平面形はいずれも円形で、径17~20cm、底面からの深さは40~48cmである。壁は南壁と北壁が底面から直立気味に、東壁と西壁が底面から外傾して立ち上がる。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土の4層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

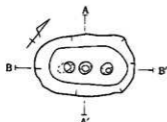
遺物は出土しない。



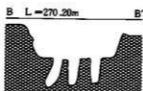
II-22号陥し穴状遺構



- |              |         |                 |
|--------------|---------|-----------------|
| 1. 10YR 7/4  | 暗褐色土    | 安家火山灰。かなりしまっている |
| 2. 10YR 7/4  | 黒褐色土    | しまりがある          |
| 3. 10YR 7/4  | 暗褐色土    | しまりがない          |
| 4. 10YR 7/4  | 褐色土     | しまりがない          |
| 5. 10YR 7/4  | 黒褐色土    | 褐色土を含む          |
| 6. 10YR 7/4  | 黒褐色土    | シルト             |
| 7. 10YR 7/4  | 黒褐色土    | 砂質シルト           |
| 8. 10YR 7/4  | 黄褐色土    | 砂               |
| 9. 10YR 7/4  | 暗褐色土    | 砂質シルト           |
| 10. 10YR 7/4 | 褐色土     | 砂質シルト           |
| 11. 10YR 7/4 | 黄褐色土    | 砂質シルト           |
| 12. 10YR 7/4 | にぶい黄褐色土 | 砂質シルト           |



II-23号陥し穴状遺構



- |             |         |       |
|-------------|---------|-------|
| 1. 10YR 7/4 | 黒褐色土    | シルト   |
| 2. 10YR 7/4 | 暗褐色土    | 砂質シルト |
| 3. 10YR 7/4 | 褐色土     | 砂質シルト |
| 4. 10YR 7/4 | 暗褐色土    | 砂質シルト |
| 5. 10YR 7/4 | にぶい黄褐色土 | 砂     |
| 6. 10YR 7/4 | にぶい黄褐色土 | 砂     |

第104図 II-22・23号陥し穴状遺構

## II-24号陥し穴状遺構

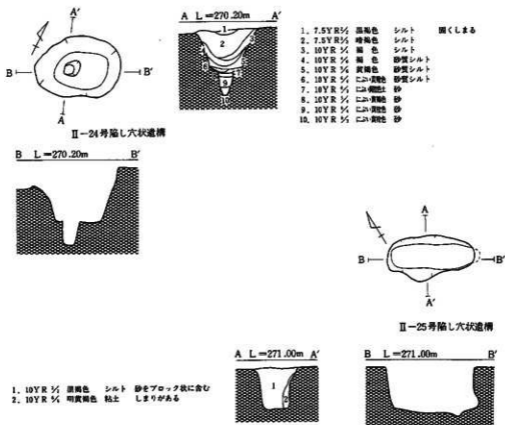
〈遺構〉(第105図、写真図版47)

調査区西端部に位置し、II-23号陥し穴状遺構と1.7mの間隔をおいて直列する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。本遺構はII-3号溝跡と重複し、本遺構の北東上半部が切られている。

平面形は開口部、底部共に楕円形で、短軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)138cm、短軸95cm、底部が長軸88cm、短軸60cmで、検出面からの深さは最大88cmである。長軸方向は真北から61度東偏する。

底面は平坦で、中央部やや西側に小穴を1個伴う。小穴の平面形は歪んだ楕円形で、径22~28cm、底面からの深さは40cmである。壁は底面から直立気味に立ち上がるが、西壁はやや外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、にぶい黄橙色土の5層に大別され



第105図 II-24・25号陥し穴状遺構



る。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

### II-25号陥し穴状遺構

〈遺構〉(第105図、写真図版48)

調査区中央部に位置し、II-16・18号陥し穴状遺構と隣接する。検出面は基本層序第III層で、II-7号堅穴住居跡の精査中に検出された。本遺構の東端上部がII-7号堅穴住居跡に切られている。

平面形は開口部、底部共に隅丸長方形で、短軸の断面は逆台形を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)140cm、短軸55cm、底部が長軸142cm、短軸40cmで、検出面からの深さは最大80cmである。長軸方向は真北から58度西偏する。

底面はほぼ平坦である。壁は底面から直立気味に立ち上がるが、南東壁は底面から内湾した後、直立する。

埋土は上部から黒褐色土、明黄褐色土の2層に大別される。層位状況から自然堆積と推定される。

遺物は出土しない。

## 6. 焼土遺構

### II-1号焼土

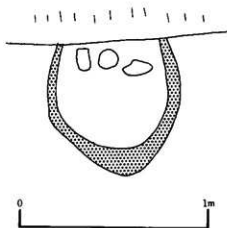
〈遺構〉(第106図、写真図版50)

調査区中央部に位置し、II-1・2・4号堅穴住居跡と隣接する。検出面は基本層序第III層である。本焼土はII-9号土坑の直上にあたる。また、水道管の埋設により北西部を切られている。

形態と規模は平面形が楕円状を呈し、径100cm×70cmの範囲に広がる。

堆積状況は黒色土中に焼土が小ブロックごとに混じり、上部に焼土ブロックが多く、下部に行くにしたがって黒色土が多くなる。層位的な堆積は認められず、土師器や須恵器と共に投げ込まれたものと推定される。

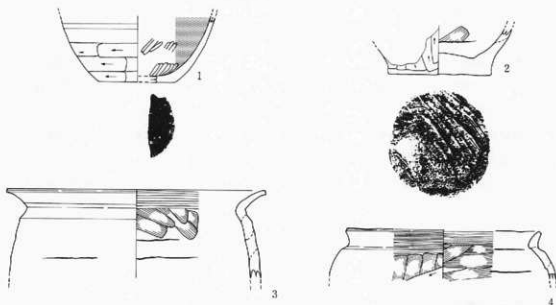
本焼土は平安時代に属するものと推定される。



第106図 II-1号焼土遺構

〈出土遺物〉(第107図、写真図版76)

遺物は坏と甕で構成され、甕はすべて輪積痕が認められ、ロクロ使用成形のものが多い。坏は土師器と須恵器が各1点ずつで、1はB1Ic類である。須恵器はII-6号土坑出土遺物と接合する。



土器観察表

実測図	写真図	種類	器種	分類	造 製				外 面 装 飾			内 面 装 飾			成 形	灰白 灰黒	色調	その他	
					1段成形	総高	1線器	外底(下地)	縦線	1線器	横線	点刻	1線器	横線					点刻
011	1	204	206	II	坏	B1Ic	-	0.45	-	-	f	h	-	h	h	0.75	-	1973	内底、体底(下地-法面土面)跡(→)
011	1	202	204	II	甕	A1a	-	0.2	-	-	f	h	-	h	h	0.75	-	1973	輪積痕・本底痕
011	1	203	202	II	甕	B1a	23.6	-	-	f	h	-	f	h	-	0.75	-	1973	輪積痕
011	1	204	203	II	甕	B1b	15.6	-	-	f	h	-	f	h	-	0.75	-	1973	輪積痕

第107図 II-1号焼土出土遺物

I-1号焼土

〈遺構〉(第108図、写真図版50)

調査区東部に位置し、I-6・12号土坑と隣接する。検出面は基本層序第III層である。I-2号竪穴住居跡と重複し、本焼土がI-2号竪穴住居跡の南東部の壁を切っている。

形態と規模は平面形が不整な楕円状を呈し、60cm×44cmの範囲に広がる。厚さは13cmで焼成は良好である。

埋土にはふい赤褐色土が2層になり、中間にふい黄褐色土（火山灰？）が挟まれて層をなして堆積する。

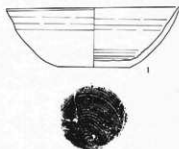
本焼土は平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉（第109図、写真図版75）

遺物はあかやき土器の完形の坏1（B I 2 a類）1点のみである。内外面に汁痕が付着する。口径13.9cm、底径5.7cm、器高4.9cmである。



第108図 I-1号焼土



第109図 I-1号焼土出土遺物

## 7. 溝跡

### II-1号溝跡

〈遺構〉（第111図、写真図版50）

調査区北部に位置し、猿ヶ石川の流路と平行する。本遺構はII-4・5号溝跡と隣接する。検出面は基本層序第II層で、他の多くの遺構検出面と2mほどの標高差がある。

北東-南西方向へ走り、直線的で両端がやや蛇行しながら幅広となり、それぞれ北東、北西の調査区外へ延びる。長さは32.4mである。上幅は88-170cm、底部幅は38-70cmで、深さは9-29cmである。断面は浅い「U」字状を呈する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

埋土は上部から褐色土（中間に黒ボクを挟む）、黒ボク（中間にふい黄色土を挟む）、にふい黄色土の3層に大別される。堆積状況は2期に渡って砂の流れ込みが認められ、自然堆積と推定される。

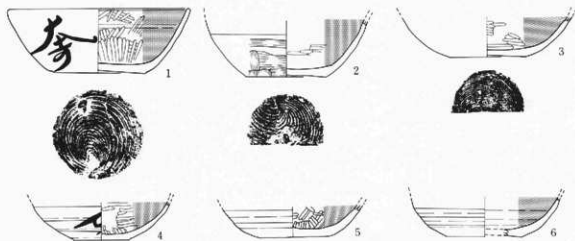
底部は基本層序第II層を切り、流水の痕跡が認められる。北東から南西へ8cmほど傾斜する。埋土から多くの遺物が出土する。

本遺構は出土遺物から平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第110・112～114図、写真図版76～79)

遺物は溝の底部と壁面から出土する。遺物量はⅡ-5・7号竪穴住居跡と並び大量である。しかし、これらの性格は住居跡のように生活に密着するというより廃棄あるいは流れ込みといった現象が推測される。器種は坏と甕のみで構成され、平安時代の土器以外は認められない。本遺構出土遺物は、Ⅱ-6・5・9・10号竪穴住居跡からの出土遺物と接合する。

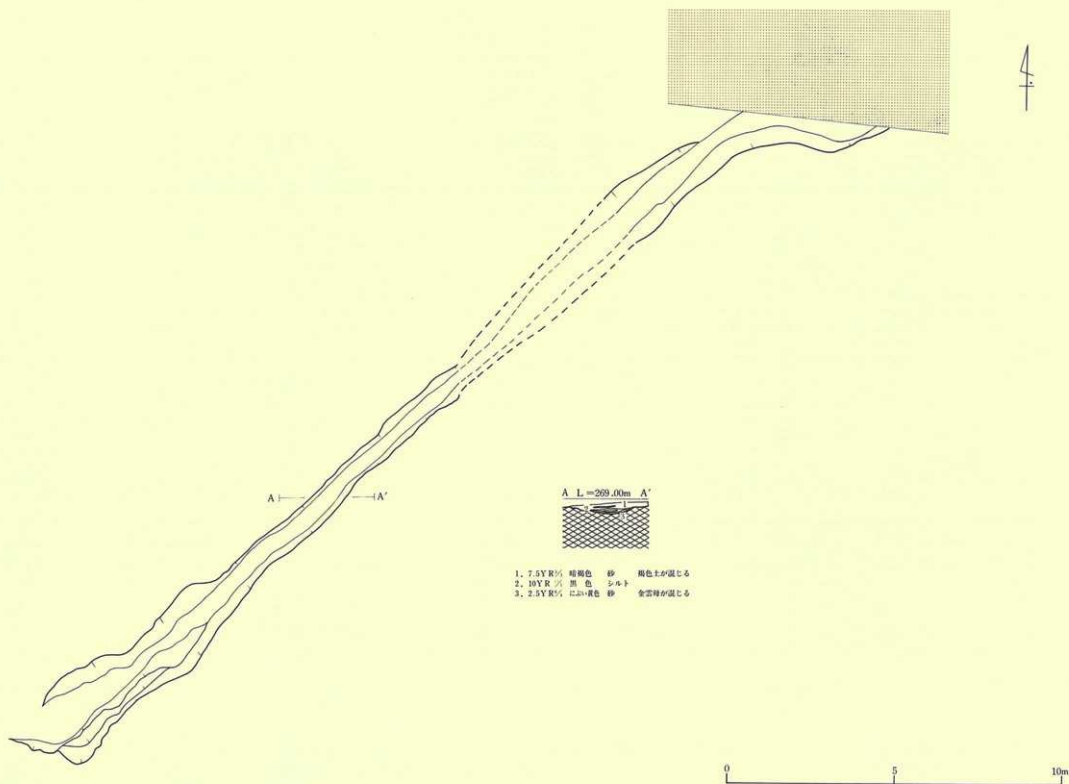
坏形土器は全体の79%を占めすべてクロク使用成形である。土師器79%、あかやき土器10%、須恵器17%で土師器が圧倒する。土師器はすべて内面黒色処理が施され、大半は口縁部片のため特定できないもののB I 1 a類13点、B I 1 b類3点、B I 1 c類9点で、糸切り無調整と再調整はほぼ同数と推測される。再調整の部位は体部下端もみられるが、底部全体が主体で、回転篋削りと手持ち篋削り技法は同率である。二次的加熱をうけているもの14点と墨書あるいは墨痕が認められるもの14点がある。あかやき土器はほとんどB I 2 a類の糸切り無調整と推測される。墨書が認められるものが2点ある。須恵器は還元不足が混じるもののB II a類の糸切り無調整が主体的である。墨書が認められるものが3点ある。読める墨書には1「卒万」、17「卒?」、「卒」、20「甲部」、「甲」(B I 1 a類)と「林」(B I 1 c類)と23「林」(B I 2 a類)



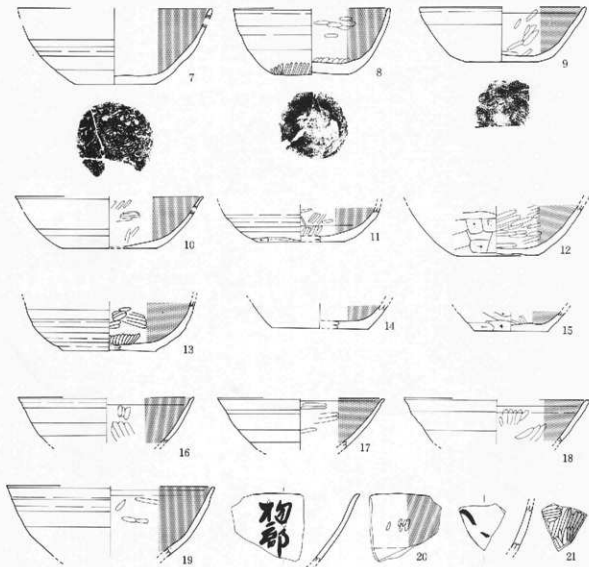
土器観察表

大塚田	方角	口径	高さ	形状	口径	調整			外面調整			内面調整			成形	泥質	色調	その他	
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部					
110-11	1	285	125	Ⅱ	甕	B I 1 a	10.0	7.4	1.1	?	?	?	?	?	?	?	?	?	内面、墨書「卒」
110-11	1	280	1300	Ⅱ	甕	B I 1 a	-	6.1	-	?	?	-	?	?	?	?	?	?	内面(2次調整)
110-11	1	285	1214	Ⅱ	甕	B I 1 a	-	6.9	-	?	?	-	?	?	?	?	?	?	内面
110-11	1	280	1270	Ⅱ	甕	B I 1 a	-	6.1	-	?	?	-	?	?	?	?	?	?	内面、墨痕
110-11	1	280	1270	Ⅱ	甕	B I 1 a	-	6.2	-	?	?	-	?	?	?	?	?	?	内面
110-11	1	280	1268	Ⅱ	甕	B I 1 a	-	6.0	-	?	?	-	?	?	?	?	?	?	内面

第110図 Ⅱ-1号溝跡出土遺物(1)



第111図 II-1号溝跡



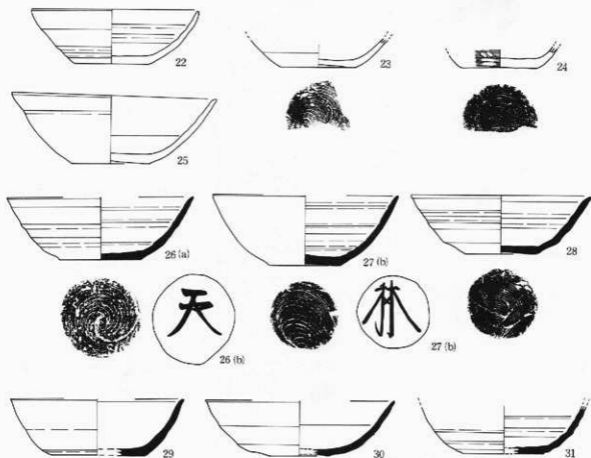
土器観察表

実測寸	厚	底径	口径	全高	口縁		外底調整		内底調整		成形	底面	色料	その他		
					内径	外径	内径	外径	内径	外径						
112-11	1	107	1254	33	81.1.10	83.5	8.4	10.5	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、外底調整、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1215	33	81.1.10	82.5	5.7	5.3	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、外底調整へラで押除けへラ削
112-11	1	108	1216	33	81.1.10	83.0	8.9	1.1	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1246	33	81.1.10	81.2	7.0	11.5	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、外底調整、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1209	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、外底調整、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1266	33	81.1.10	—	—	—	0	0	0	0	0	0	2.030	内底、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1207	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1262	33	81.1.10	—	—	—	0	0	0	0	0	0	2.030	内底、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1266	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、外底調整、底面全面手付へラ削
112-11	1	108	1229	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底調整、底面調整、手付
112-11	1	108	1251	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、底面
112-11	1	108	1238	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底
112-11	1	108	1247	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底
112-11	1	108	1225	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、底面調整、手付
112-11	1	108	1201	33	81.1.10	—	—	—	/	/	0	0	0	0	2.030	内底、底面

第112図 II-1号溝跡出土遺物(2)

と27「林」、28「林」(B II a類)と26「天」(B II b類)があり、他の7点は不明である。

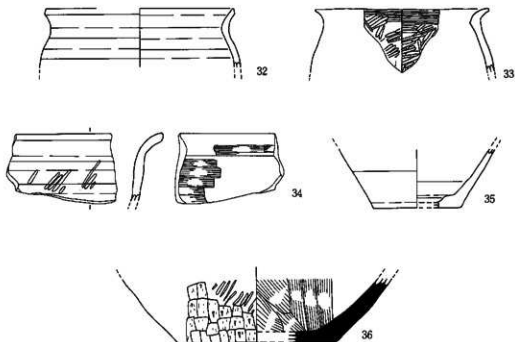
甕形土器は全体の21%を占め、土師器と須恵器はほぼ同数で、あかやき土器が1点認められる。ロクロ使用成形によるものが多く、須恵器を除いて小型のものが多い。



土器観察表

実測図	写真	種類	器形	分類	胎土		外面調査			内面調査			成形	胎土	色澤	その他		
					成分	硬度	凹凸	線画	線画	線画	線画	線画						
113-01	1	溝	22	280	A	埴	D12a	D1	6.3	4.4	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	25	267	A	埴	D12a	-	6.3	-	-	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	24	268	A	埴	D12a	-	6.3	-	/	-	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	25	289	A	埴	D12a	H2	6.3	5.4	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	26	290	S	埴	D18b	H1	6.3	5.8	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	27	291	S	埴	D18a	H4	7.2	5.6	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	28	292	S	埴	D18a	H4	5.5	4.7	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	29	293	S	埴	D18a	H2	6.2	5.9	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	30	294	S	埴	D18a	H1	6.0	6.0	/	/	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R
113-01	1	溝	31	295	S	埴	D18a	-	5.9	-	/	-	/	/	/	ロクロ	赤褐色	37R

第113図 II-1号溝跡出土遺物(3)



土器観察表

実測図	写真番号	種類	器種	分層	法量		外壁調査			内壁調査			底部	色調	その他		
					口縁底径	器高	口縁高	厚部(下腹)	底径	口縁部	体部	底部					
32	116	226	豆	表	B 1 b	15.0	-	/	/	-	/	/	-	コアロ	-	STR	付属録巻
33	116	227	豆	表	A 1 b	13.0	-	卍	卍	-	卍	卍	-	黒クマ	-	STR	
34	116	228	豆	表	B 1 a	-	-	/	/	-	/?	卍	-	コアロ	-	STR	
34	117	229	A	裏	-	17.1	-	-	/	-	-	/	/	コアロ	黒ク	STR	
34	117	230	B	裏	B 2	22.0	-	-	/	-	-	卍	卍	-	STR		

第114図 II-1号溝跡出土遺物(4)

II-2号溝跡

<遺構> (第116図、写真図版51)

調査区西端部に位置する。本遺構はII-3号溝跡と110~260cmの間隔をおいて並列し、猿ヶ石川と直交する。検出面は基本層序第III層である。II-23号陥し穴状遺構と重複し、その北東上半部を切っている。

平面形は直線的で北西に進むに従って幅も深さも減少し、北西端は猿ヶ石川に、南東端は調査区外に延びる。南東-北西方向へ走り、長さは17.1mである。上幅は78~190cm、底部幅は26~110cmで、深さは42~116cmである。断面は「U」字状を呈する。壁は底面から直立気味に立ち上がる。



埋土は上部から黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黒褐色土、暗褐色土、黒褐色土、褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土の9層に大別され、上部ほどしまりがある。堆積状況は流水による混じりが多く、自然堆積と推定される。

底部は基本層序第V層を切り、流水の痕跡が認められる。底面は中央部がやや高くなるものの、南東から北西方向へ7cmほど傾斜する。

本遺構は平安時代に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第115図、写真図版79)

遺物は埋土から出土し、坏、甕、縄文土器がある。

坏形土器はあかやき土器(BI2類)1点で、甕形土器は土師器1(BIb類)でロクロ使用成形の口縁部片である。

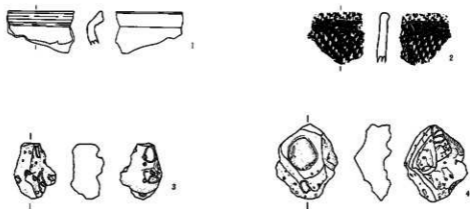
土器以外では鉄滓2個がある。3は重さ80g、4は30.2gである。

### II-3号溝跡

〈遺構〉(第116図、写真図版51)

調査区西端部に位置する。本遺構はII-2号溝跡と110-260cmの間隔をおいて並列し、猿ヶ石川と直交する。検出面は基本層序第III層である。II-24号陥し穴状遺構と重複し、その北東上半部を切っている。

直線的で幅がほぼ一定し、北西端は猿ヶ石川へ南東端は調査区外へ延び、南東-北西方向へ走り、長さは16.6mである。上幅は32-42cm、底部幅は8-14cmで、深さは46-70cmである。断面は長方形状または「U」字状を呈する。壁は底面から直立するものと直立気味に立ち上がるものがある。



第115図 II-2号溝跡出土遺物

D L=270.50m D'



E L=270.40m E'



F L=270.20m F'



G L=269.70m G'



1. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
2. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
3. 10Y R 5% 黄褐色 砂
4. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
5. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
6. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
7. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
8. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト

9. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
10. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
11. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
12. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
13. 10Y R 5% 黄褐色 砂
14. 10Y R 5% 黄褐色 粘土

15. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
16. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
17. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
18. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
19. 10Y R 5% 黄褐色 砂

G G'

A A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

A' A'

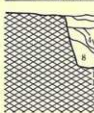
A' A'

A' A'

C L=270.50m C'



B L=270.50m B'



A L=269.80m A'



1. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
2. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
3. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
4. 7.5Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
5. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
6. 10Y R 5% 黄褐色 粘質シルト

しまりがある

1. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
2. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
3. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
4. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
5. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
6. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
7. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
8. 10Y R 5% 黄褐色 粘質シルト
9. 7.5Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
10. 10Y R 5% 黄褐色 砂質シルト
11. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
12. 10Y R 5% 黄褐色 シルト
13. 7.5Y R 5% 黄褐色 シルト
14. 10Y R 5% 黄褐色 粘質シルト
15. 10Y R 5% 黄褐色 砂

しまりがある

細くしまっている

しまりがある



第116図 II-2・3号溝跡

埋土はおおよそ褐色土、暗褐色土、にぶい黄橙色土、黒褐色土の4層に大別される。各層にしまりが認められ、上部ほど堅い。堆積状況は攪乱をうけたところもあり、一気に埋まった状態である。

底部は基本層序第IV層を切り、流水の痕跡は認められない。南東から北西へ75cmほど傾斜する。遺物は認められない。

本遺構は埋土状況から平安時代に属するものと推定される。

#### II-4号溝跡

〈遺構〉(第119図、写真図版52)

調査区北部に位置し、II-5号溝跡と5~28cmの間隔をおいて並列する。検出面は基本層序第II層である。

平面形は直線的で南西に進むに従って幅が狭くなる。北東-南西方向へ走り、長さは12mである。上幅は42~106cm、底部幅は18~34cmで、深さは6~39cmである。北東から南西へ3cmほど傾斜する。断面は開口部が開く「U」字状を呈する。壁は底面から直立気味に立ち上がった後、緩やかに外傾する。

埋土は上部から黒褐色土、黒褐色土、黒褐色土の3層に大別され、各層にしまりが認められる。層位状況から自然堆積と推定される。

底部は基本層序第II層を切り、流水の痕跡は不明である。遺物は出土しないが、本遺構は平安時代以降に属するものと推定される。

#### II-5号溝跡

〈遺構〉(第119図、写真図版52)

調査区北部に位置し、II-4号溝跡と5~28cmの間隔をおいて並列する。検出面は基本層序第II層である。

平面形は直線的である。北東-南西方向へ走り、長さは8.6mである。上幅は52~60cm、底部幅は26~30cmで、深さは4~26cmである。断面はレンズ状を呈する。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

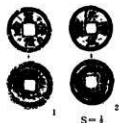
埋土は上部から黒褐色土、黒色土の2層に大別され、各層にしまりが認められる。層位状況から自然堆積と推定される。

底部は基本層序第II層を切り、流水の痕跡は不明である。底面はほぼ水平で傾斜の有無及び副穴は認められない。本遺構は平安時代以降に属するものと推定される。

〈出土遺物〉(第117図、写真図版80)

遺物は溝の検出面と埋土から出土し、土師器の甕の小片と古銭2枚がある。

1は1101年初鑄の北宋銭「聖宋元寶」であり、径2.56cm、重さ1.5gである。2は「洪武通寶」で1,368年初鑄の明銭である。径2.33cm、重さ2.6gである。



第117図 II-5号溝出土遺物

## 8. 墓墳

### I-1号墓墳

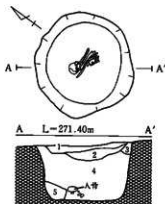
〈遺構〉(第118図、写真図版53)

調査区東部に位置し、I-2・3号墓墳と隣接する。検出面は基本層序第III層である。

平面形はほぼ円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が径160cm、底部が径125cm前後で、検出面からの深さは最大92cmである。地表面と底面との比高差は約130cmである。

本墓墳は座棺による埋葬墓で、人骨は後頭部が北に向き横臥状態で検出され、大腿骨と頭骨が重なるように出土する。人骨の遺存状態は良好である。

埋土からは土師器の甕の口縁部片1点が出土するが、埋葬時に粉れ込んだものと推定される。本遺構の時期を決定する副葬品の出土はないものの、I-2・3号墓墳と時期差がないと推測され、近世以降に属するものと推定される。



- I-1号墓  
 1 10YR 5% 褐色土 黒褐色との混り  
 2 10YR 5% 明黄褐色土 砂質シルト  
 3 10YR 5% 黒褐色土 黒ボク  
 4 10YR 5% 暗褐色土 2・3層の混合土層  
 5 10YR 5% 明黄褐色土 砂

第118図 I-1号墓墳

### I-2号墓墳

〈遺構〉(第122図、写真図版53)

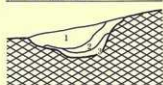
調査区東部に位置し、I-1・3号墓墳と隣接する。検出面は基本層序第III層である。平面形は隅丸長方形で、長軸の断面は浅い「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北西-南東)158cm、短軸138cm、底部が長軸142cm前後、短軸101cmで、検出面からの深さは最大49cmである。地表面と底面との比高差は約100cmである。

B L=209.30m B'

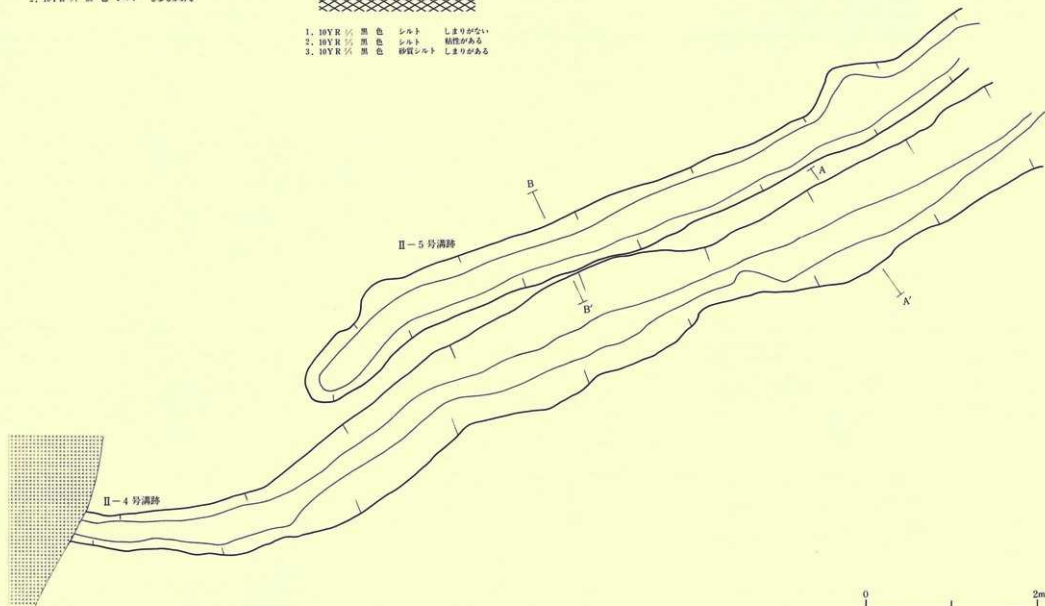


1. 10YR 5/ 黒褐色 シルト しまりがある  
 2. 10YR 5/ 黒 色 シルト しまりがある

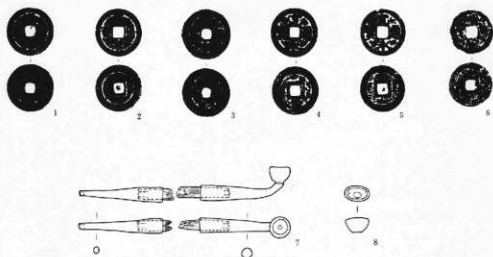
A L=209.60m A'



1. 10YR 5/ 黒 色 シルト しまりがない  
 2. 10YR 5/ 黒 色 シルト 粘性がある  
 3. 10YR 5/ 黒 色 砂質シルト しまりがある



第119図 II-4・5号溝跡



第120図 I-2号墓出土遺物

本墓は座棺による埋葬墓で、後頭部が北壁寄りにうつ伏せ状態で検出されている。人骨は軟らかく朽ちかけており、遺存状態は不良である。本遺構の所属時期は副葬品などから近世以降のものと推定される。

〈出土遺物〉(第120図、写真図版80)

遺物はいずれも副葬品で寛永通寶6枚とキセル2本である。寛永通寶は六道銭として埋葬されたものと推定される。

### I-3号墓

〈遺構〉(第122図、写真図版54)

調査区東部に位置し、I-1・2号墓と隣接する。検出面は基本層序第Ⅲ層である。

平面形は楕円形で、長軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(南-北)178cm、短軸156cm、底部が長軸136cm、短軸126cmで、検出面からの深さは最大54cmである。地表面と底面との比高差は約90cmである。

本墓から人骨の出土はないが、隣接する墓と形状や埋土など類似する点が認められる。埋土からは木炭、木片、ももの種子5個が出土する。

### Ⅲ-1号墓墳

〈遺構〉(第122図、写真図版54)

調査区西部に位置し、Ⅲ-2・3・4号墓墳と隣接する。Ⅲ-1号竪穴住居跡の精査中に検出され、これと重複し、その床面を切っている。

平面は楕円形で、長軸の断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が長軸(北東-南西)108cm、短軸100cm、底部が長軸81cm、短軸66cmで、検出面からの深さは最大39cmである。地表面と底面との比高差は約130cmである。

本墓墳は座棺による埋葬墓で、後頭部が北に向きうつ伏せ状態で検出されている。人骨の遺存状態は良好である。

本遺構の所属時期は副葬品などから近世以降のものと推定される。

〈出土遺物〉(第121図、写真図版80)

遺物は副葬品と推測され寛永通寶1枚である。



第121図 Ⅲ-1号墓墳出土遺物

### Ⅲ-2号墓墳

〈遺構〉(第122図)

調査区西部に位置し、Ⅲ-1・3・4号墓墳と隣接する。Ⅲ-1号竪穴住居跡の精査中に検出され、これと重複し、その床面を切っている。

平面は円形で、断面は逆台形を呈する。規模は開口部が径100cm強、底部が径79cmで、検出面からの深さは最大70cmである。地表面と底面との比高差は約140cmである。

人骨の遺存状態は良好である。副葬品として古沂寛永通寶や木製の櫛が出土する。本遺構の所属時期は近世以降のものと推定される。

### Ⅲ-3号墓墳

〈遺構〉(第122図)

調査区西部に位置し、Ⅲ-1・2・4号墓墳と隣接する。Ⅲ-1号竪穴住居跡の精査中に検出され、これと重複し、その床面を切っている。

平面は円形で、断面は「U」字状を呈する。規模は開口部が径105cm前後、底部が径80cmで、検出面からの深さは最大52cmである。地表面と底面との比高差は152cmである。人骨の遺存状態はやや良好であり、近世以降のものと推定される。

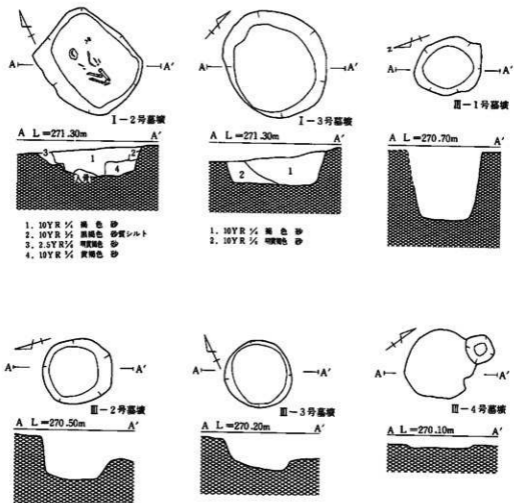
### Ⅲ-4号墓墳

#### 〈遺構〉(第122図)

調査区西部に位置し、Ⅲ-1・2・3号墓墳と隣接する。Ⅲ-1号竪穴住居跡の精査中に検出され、これと重複し、その床面を切っている。

平面は円形である。規模は開口部が径107~112cm、底部が径90cm前後で、検出面からの深さは最大5cmである。地表面と底面との比高差は121cmである。

人骨の遺存状態は不良で骨片のみである。本遺構の所属時期は近世以降と推定される。



第122図 I-2・3、Ⅲ-1~4号墓墳



## V. 遺構外の出土遺物

遺構外の遺物はⅡ区からの出土が大半で、Ⅱ-1号溝跡付近と平坦部に集中する。Ⅰ区及びⅢ区は水田造成時に削平をうけ、表土の移動が大きく遺物は微量である。全体の量は大コンテナ3箱ほどで実測可能なものが少ない。遺物の時期は大きく縄文時代、平安時代、中世以降に区分できる。中でも平安時代の遺物が多く全体の80%を越える。

### 1. 古代の遺物 (第123~126図、写真図版81~83)

器種は坏、高台付坏、甕、鉢、壺、長頸壺で構成される。土器以外では鉄製品が認められる。

坏形土器は平安時代の遺物の約5割を占め、その中で土師器は7割近くで須恵器、あかやき土器がこれに続く。坏形土器はすべてロクロ使用成形で底部切り離しは回転糸切りと推定される。土師器は内面がすべて黒色処理され、篋ミガキ調整が施されている。分類上、口縁部片が大半であることからBⅠⅠ類が多いということになるが、底部が存在するものの中でみるとBⅠⅠc類が顕著である。再調整が認められるものは3割を占め、墨書あるいは墨痕が認められるものが約半数である。再調整の部位は体部下端と底部全面で、技法は回転篋削りがほとんどで手持ち篋削りが1点である。墨書あるいは墨痕が認められるものは17点である。11「㊦」(BⅠⅠ類)と7「林」・6「勿」(BⅠⅠc類)と2「林」(BⅠⅠa類)が読め、他は不明である。あかやき土器はロクロ痕が内面で確認されるものが多い。BⅠⅠb類とBⅠⅠc類が各1点ずつ認められる。須恵器は大半が口縁部片である。底部が存在するものをみると糸切り無調整が主体的である。墨痕の認められるものが1点あるが不明である。

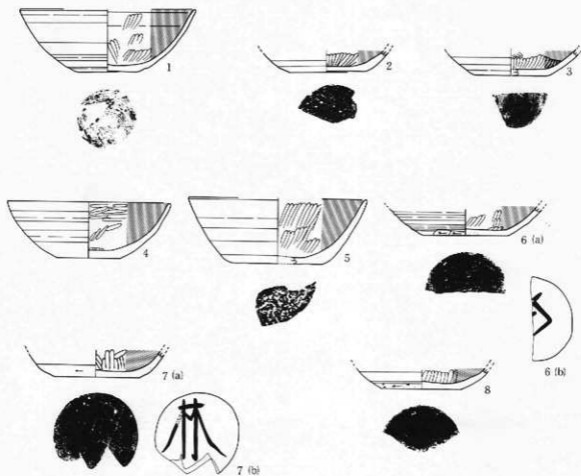
高台付坏は完形品1点である。土師器のロクロ使用成形で内面は黒色処理が施されている。高台部は回転糸切り後、貼り付けられている。口縁部から高台部にかけて墨書が認められ「卒万」が読める。

甕形土器は平安時代の遺物の約4割を占め、その中で土師器4割、須恵器6割で体部片が多い。土師器はロクロ不使用がほとんどで輪積み痕や木葉痕が認められるものが多い。ロクロ使用成形によるものはわずかで大型と小型が共に認められる。須恵器は内外両面にタタキ目痕をもつものが多く大型と推測される。29は外面に山形の櫛引状の沈線が認められる。

鉢形土器は土師器が2点である。共にロクロ使用成形で、一方は内面が黒色処理され、ナデとミガキ調整が施され、他方は内面がミガキ調整で、底部切り離しが回転糸切りである。

壺形土器は長頸壺も含め須恵器のみである。長頸壺は薄手である。

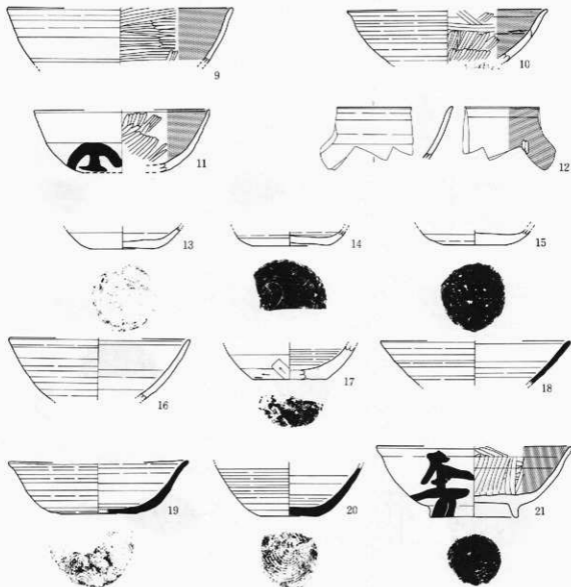
土器以外では鉄製品が3点ある。33は両端を欠く両面平造りの刀子の刃部で、現存長5.0cm、



土器観察表

天原館	写真記録番号	器種	分類	位置		外面調整			内面調整			成形	収縮	色調	その他	
				口縁部	底面	口縁部	縁部	底面	縁部	底面						
123	1 362 217	鉢	B 1 1a	14.0	1.8	2.0	f	f	f	—	—	—	—	—	—	—
123	2 362 214	鉢	B 1 1a	—	16.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒色「林」
123	3 362 244	鉢	B 1 1a	—	—	—	—	f	—	—	—	—	—	—	—	—
123	4 364 222	鉢	B 1 1c	12.25	3.9	4.4	f	f	f	—	—	—	—	—	—	—
123	5 365 238	鉢	B 1 1	14.2	1.4	3.2	f	f	f	—	—	—	—	—	—	—
123	6 366 1302	鉢	B 1 1c	—	16.45	—	—	f	f	f	—	—	—	—	—	黒色「林」
123	7 367 313	鉢	B 1 1c	—	7.6	—	—	f	f	—	—	—	—	—	—	黒色「林」
123	8 368 1496	鉢	B 1 1c	—	16.25	—	—	f	f	f	—	—	—	—	—	—

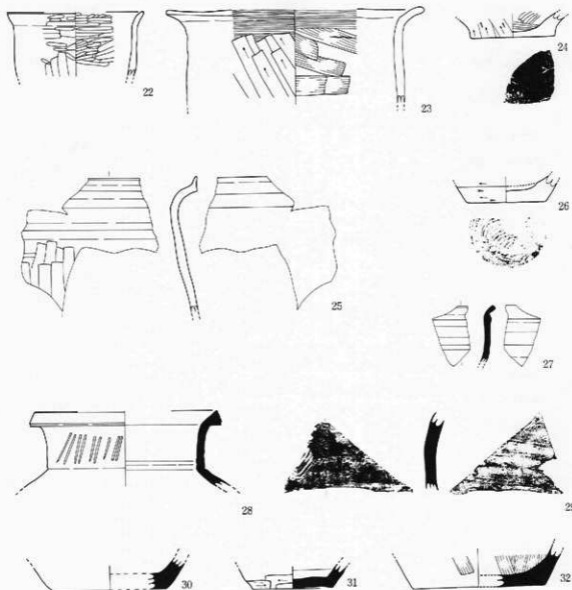
第123図 遺構外出土遺物(1)



土器観察表

完備度	写真	資料種別	器種	分類	位置				外面形状				内面形状				底形	底径	口径	その他
					1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4				
224	96-9	369	311	煎	煎	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.350	
224	96-10	376	440	煎	煎	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-11	373	339	煎	煎	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	茶色付
224	96-12	372	341	煎	煎	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-13	373	353	A	煎	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-14	374	354	A	煎	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-15	375	367	A	煎	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-16	375	332	A	煎	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-17	377	545	A	煎	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-18	378	562	S	煎	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-19	379	563	S	煎	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-20	380	564	S	煎	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.330	
224	96-21	381	630	H	高台付	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2.330	茶色付

第124図 遺構外出土遺物(2)



土器観察表

実測図	写真記録番号	器種	分層	土器				外面調整				内面調整				成割	調査 時期	出土 状況	その他					
				口縁	底	胎土	胎色(下地)	塗料	刷毛	砥石	砥加	塗料	刷毛	砥石	砥加									
22	96-22-382	1314 H	層 A 1b	11.0	—	赤	赤→赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	
23	96-23-382	532 H	層 A 1a	18.0	—	赤	赤→赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	
24	96-24-384	529 H	層 A	—	6.4	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
25	96-25-385	1312 H	層 B 1a	—	7	7.5	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
26	96-26-388	545 H	層 B 1b	—	6.4	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
27	96-27-387	1305 S	層 B 1a	—	7	7	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
28	96-28-389	520 S	層 B 1a	—	7	7	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
29	96-29-389	130 S	層 B 1a	—	7	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
30	96-30-390	138 S	層 B 1a	—	10.0	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
31	96-31-391	527 S	層 B 1a	—	6.4	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		
32	96-32-392	510 S	層 B 1a	—	11.0	—	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—	赤	赤	—		

第125図 遺構外の出土遺物(3)

幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ3.3gである。36と37は鉄滓で合計の重さが165.5gである。

## 2. 縄文時代の遺物 (第127図、写真図版82・83)

早期と前期の深鉢形土器がある。土器以外では10数点の石鏃と叩き石があり、半数以上は剝片石器である。

表17 石器計測表

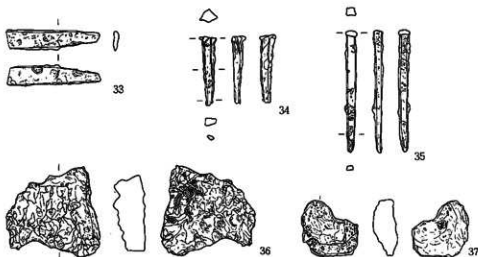
単位：cm、g

図録番号	写真	品名	大きさ (単位)			長さ	材質	産地	備考
			長さ	幅	厚さ				
120 10144	004	石鏃	1.3	1.4	0.3	0.1	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	同遺跡中
120 10145	005	石鏃	2.3	1.4	0.4	0.2	佐野地区	磯野川(佐野地区)遺跡	磯野川
120 10146	006	叩き石	1.9	1.8	0.1	1.05	磯野川地区	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10147	007	叩き石	2.3	1.6	0.25	1.3	磯野川	北ノ山(佐野地区)	
120 10148	008	叩き石	3.1	2.6	0.6	3.7	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10149	009	叩き石	3.3	1.7	0.7	1.6	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10150	010	叩き石	3.2	2.0	0.3	0.7	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10151	011	叩き石	2.8	2.0	0.3	1.35	磯野川地区	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10152	012	叩き石	2.8	2.5	0.3	0.7	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10153	013	叩き石	3.4	2.7	0.3	2.0	磯野川(佐野地区)	磯野川(佐野地区)遺跡	
120 10154	014	叩き石	3.9	2.3	0.3	0.20	磯野川	北ノ山(佐野地区)	磯野川 8-2 No.

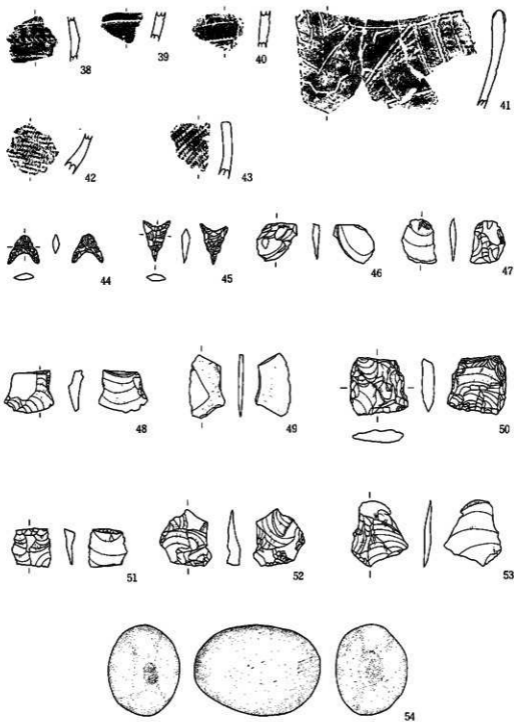
## 3. 中世以降の遺物 (第128図、写真図版82・83)

青磁55と白磁56の破片が各1点と鉄製品2点、寛永通寶57・58の2点などである。

34は先端を欠く釘で頭部は折り曲げられ、叩き出されている。現存長6.4cm、重さ7.9gである。35は頭部の一部が欠損するもののほぼ完形の釘である。現存長9.6cm、重さ10.4gで、断面が6cm×4cmの長方形を呈する。



第128図 遺構外の出土遺物(4)



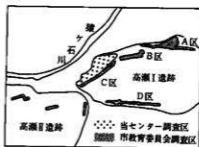
第127図 遺構外の出土遺物(5)



第128圖 遺構外の出土遺物(6)

## VI. まとめ

高瀬Ⅰ遺跡は縄文時代から中・近世に至るまで遺構と遺物が重複して発見されているが、ここでは主体となる平安時代の集落と縄文時代の陥し穴状遺構についてまとめとする。なお、本遺跡は遠野市教育委員会でも調査しているため、まとめにあたりその調査結果を参考にさせていただいた。調査範囲の模式図は、右に示す通りである。



第129図 調査範囲 模式図

### 1. 平安時代

#### (1) 遺構の分布

本遺跡は猿ヶ石川に舌状に張り出す台地に立地する。北東部に奈良時代の竪穴住居跡（以下住居跡）と墓城があり、平安時代の遺構は、遠野市教育委員会が調査した北東部の大溝（以下、大溝）を最北端として、それより東には認められない。古代の遺構の在り方から、中間部分は奈良時代と平安時代が混在するものの、ほぼ北東部と北西部に2分される。

#### (2) 竪穴住居跡

18棟の住居跡が検出され、重複関係にあるものは4棟で、切られている2棟はカマドの長軸方向が他の住居跡と極端な差を示す。また、拡張された住居跡が1棟、建て替えられた住居跡が1棟、焼失廃棄された住居跡が2棟である。

#### 〈規模・形態〉

規模は第130図となり、長辺の規模別分布は、3m未満が6棟、3～4mが3棟、4～5mが7棟、6m以上が2棟である。床面積は壁面の下端をプラン・メーターで計測したもので、周溝は内側を測定しカマドは無視している。推定値を含めた床面積をグラフにしたものが第131図で、小型や中型が主体で35㎡を超える大型のものはない。極小型の8㎡以下の3棟の中にはカマドをもたない住居状遺構2棟が含まれる。

平面形の種類は、便宜的に短辺に対する長辺の比が1.1未満を正方形、1.1以上を長方形とし、隅が丸いものに隅丸を付した。この結果、方形が6棟、長方形が2棟、隅丸方形が2棟、隅丸長方形が6棟、この他に不整形や削平が著しい形態不明な住居跡が3棟である。

カマドの長軸方位は第132図となり、北東を指向するものが圧倒的で北西方向を指す住居跡はない。北北西及び南南東を指す住居跡は重複関係にあり、整然とした並び方を示す住居跡に切られている。遠野市教育委員会が調査したものも含めて、北東カマドの住居跡が9割を占めており

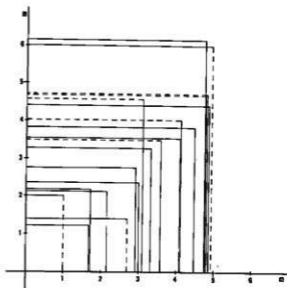


北東から東北東へ22.5度の幅がある。

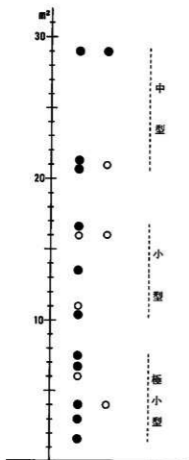
〈カマド〉

基本的にすべての住居跡にカマドが付設され、攪乱を受けながらもカマドをもつものは住居跡とした。カマドをもたないものは住居状遺構として扱っている。

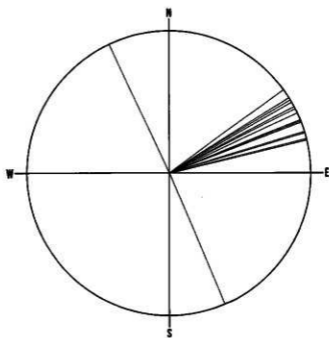
カマドのすべては構築時の原形を留めることなく上半が破壊されている。



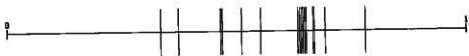
第130図 長辺の規模別分布



第131図 住居跡床面積分布



第132図 カマドの長軸方位の分布



第133図 カマドの位置分布

るが、焼土や構築材である礫及び粘土の分布によってその位置はほぼ推定できる。カマドの長軸方位の分布は第132図に示す通りで、ほとんど北東壁であるが、南壁や北壁が各1棟ずつある。カマドは1基が13棟、2基が2棟でII-7号住居跡は造り替えられ、II-5号住居跡は拡張時に造り替えられている。2基のカマドは同一壁に構築され、新旧関係においては右端に付設されているものが古く、新しいものは壁中央寄りに再構築されることが特徴的である。カマドの位置分布は壁に向かって左を0、右を1としたもので第133図に示す通りである。これによると、壁中央から右寄りに付設される場合が多く、右端に僅かに空間があるのは貯蔵穴としての施設が付随し、遺物が出土する割合も高い。床面積全体からみるカマドの空間は、住居の中心的施設でありながらその占める割合が低く、古代住居跡の特徴とも言える。

カマド本体部の構築例をみると、袖部に芯材を使用していると推測されるもの9棟、計画的に地山を削り貫いて袖部にしているもの1棟がある。燃焼部に支脚を伴うものが2棟あり、支脚材として1棟が礫、1棟が倒立した甕を使用する。煙道部を確認できるものは12棟あり、4種類に分類できる。上り勾配型4棟、水平後下り勾配型1棟、下り勾配型6棟、上り勾配後下り勾配型1棟である。このうち5棟が削り貫き式で、比較的削平の少ない調査区東側に多く、西側では燃焼部や煙道部の底部を残すのみである。

#### 〈柱穴〉

柱穴は18棟のうち11棟に認められ、4割の住居跡には確認されない。11棟の住居跡に柱穴が検出されたものの、整った4本以上の柱穴を伴う住居跡は6棟を数えるのみで、II-7号住居跡をはじめ中型で比較的大きいものに多い。

#### 〈埋土〉

十和田a降下火山灰を挟む住居跡は、I-1、II-2・4号住居跡の3棟である。調査の段階ではII-8号住居跡でも確認されたが、分析結果では汚染により十和田a降下火山灰と断定できる結果が得られなかった。これ以外にも十和田a降下火山灰が挟まれていないのはII-9・10・13・14・16号住居跡で、削平が著しいことも考慮される。十和田a降下火山灰がII-2号住居跡の埋土上部、II-4号住居跡の埋土2層に堆積していることと総合すれば、とりわけII-9・10・13・14号住居跡に十和田a降下火山灰が堆積していたことも予想され、これらの住居

跡の時間差もおおよそ推定される。I-2、II-12、III-1号住居跡は近・現代の墓塚やその他の掘乱により不明である。埋土の堆積状況は概ね自然堆積で、一部人為堆積が認められるのはII-5号住居跡が拡張時に、II-6号住居跡がII-1号住居跡の構築時に埋められた時のものと推定される。

#### 〈周溝〉

床面はすべて基本層序第IV層の黄色砂層を掘り込み、周溝は1棟にのみ認められ、他は皆無である。周溝は壁下を全周するものではなく、カマドと反対方向を約半周する。

#### 〈小結〉

住居跡の変遷は重複関係が有効な基準となるが、発見された住居跡数に比べて重複例が少ない。結果はII-1号住居跡よりII-6号住居跡が古く、II-7号住居跡よりII-16号住居跡が古い。表18に示すように住居跡や日常的に使用されたと推測されるII-1号溝跡から出土する土器の接合から住居跡相互の関係を把握することも可能である。表の結果をまとめると次のようになる。

- (a) II-5・7号住居跡は同時期に廃棄されたものと推測され、II-16号住居跡が古い。II-7・16号住居跡の新旧関係は重複関係から明らかである。
- (b) II-1・4号住居跡は同時期に廃棄されたものと推測され、II-6号住居跡が古い。II-

表18 接合遺物一覧表

発掘期	写真	壁跡	遺構	出土地点	種類	形状	部材	分類	接合遺物	備考
		303	II-1住	床底	H	甕	口縁部	B1a	II-6住	
11日1住18	18	114	*	床底カマド	S	甕	底部	B2	II-4住	
11日1住21	21	120	*	床底P6	S	網罟	底部		II-6住	
14日4住12	26	100	II-4住	床底	H	甕	口縁部	A1a	II-1住	
15日4住18	41	115	*	床底	S	甕	口縁部	B2	II-6住	内側まで具載
15日4住21	44	118	*	床底P6	S	甕	口縁-底部		II-2住	内側まで具載
17日6住7	53	122	II-6住	床底	S	埴	口縁-底部	B2a	II-5住II-1溝	
26日5住23	100	316	II-5住	床底	H	甕	口縁-底部	B1a	II-7住	
27日5住28	105	325	*	2号煙出し	H	甕	底部-底部	A1a	II-7住II-16住	木炭灰 内底
28日5住6	83	348	*	床底	H	埴	口縁-底部	B1	II-1溝	内底
28日5住31	108	383	*	埋土	S	甕	口縁-底部	B2	II-1溝	
28日7住24	156	407	II-7住	床底カマド	H	甕	口縁-底部	A1a	II-9住煙出し	
27日7住43	157	401	*	埋土	H	埴	口縁-底部		II-2住	内底
24日7住17	139	461	*	床底	A	埴	口縁-底部	B12a	II-5住	内側灯明芯?
24日7住24	146	487	*	床底	S	埴	口縁-底部	B22a	II-16住	透光不足
42日8住17	203	1605	II-8住	貯蔵穴	H	甕	口縁-底部	B12a	II-14住	輪積灰
41日8住13	198	1637	*	埋土	H	甕	底部-底部	A1a	II-10住II-13住	
41日8住9	205	1651	*	床底	S	埴	口縁-底部	B2a	II-9住	
44日9住3	211	1670	II-9住	床底	S	埴	口縁-底部	B22b	II-14住	
		1671	*	埋土	S	埴	口縁-底部	B2	II-1溝	
48日10住14	230	493	II-10住	埋土	H	甕	口縁-底部	A1a	II-1溝	
48日10住17	233	1110	*	埋土	S	甕	底部	B1	II-1溝	
		207	II-1溝		S	埴	口縁部	B2	II-6住	

1・6号住居跡の新旧関係は重複関係から明らかである。

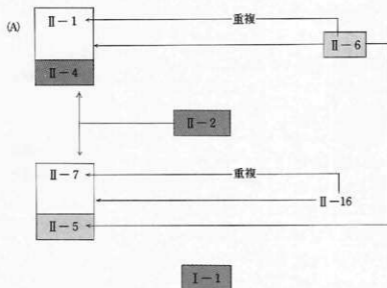
(c) II-5号住居跡よりII-6号住居跡が古い。

(d) II-4・7号住居跡よりII-2号住居跡が古い。

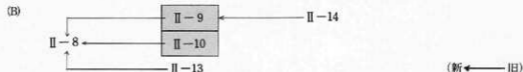
(e) II-8・9号住居跡よりII-14号住居跡が古く、II-8号住居跡よりII-9号住居跡が古い。


(f) II-8号住居跡よりII-10・13号住居跡が古い。

(a)、(b)、(c)をまとめ(d)を総合すると、II-2・6・16号住居跡の新旧関係は明確でないが以下(A)のようになる。



(e)、(f)をまとめると、以下(B)のようになる。



(A)・(B)群はそれぞれ掘立柱建物跡（以下、建物跡）の北側と南側に位置する住居跡群で、2つのグループとして把握できるが、その新旧関係を直接示すものは皆無である。II-1号溝跡から出土する遺物と接合する遺物をもつ住居跡は、印のII-5・6・9・10号住居跡で、II-1号溝跡との関連性を強調するものと推測される。

(A)・(B)群の住居跡すべての同時存在はなく、各群の中でも時期差が認められる。II-1号と

II-5号、II-6号とII-7号、II-12号とII-13号は平面立地から、II-1号とII-6号、II-7号とII-16号は切り合いから同時存在は不可能である。

埋土に十和田a降下火山灰を挟むものに<sup>25</sup>印のI-1、II-2・4・(8)号住居跡があり、II-9・10・13・14号などの住居跡にも堆積していたことが予想され、後述するように出土遺物総体からも9世紀中葉に比定されることと矛盾しない。

### (3) 掘立柱建物跡

#### 〈位置〉

検出された建物跡は2棟であるが、遠野市教育委員会が検出したC区1号建物跡が東側に隣接する。3棟の建物跡は、平安時代の住居跡や土坑との重複関係が認められず、他の遺構も含めて密集度の低い位置にある。また、南北に(A)群と(B)群の住居跡をかかえ調査区のはほぼ中央部にあたる。これらは北西から南東へ1.2~1.8mの間隔で並び、軸が順次北東へ約0.6mずつ平行移動しながら張り出し、全体として同一軸上にあり、北西-南東方向を軸方向とする。C区1号建物跡は一度建て替えられているが、位置や軸に大きな変更は認められない。

#### 〈規模・形態〉

2間×2間の総柱建物跡が2棟、2間×1間の建物跡が1棟で、これら3棟がセットと推定される。主柱穴の掘り方の平面形は、北西の建物跡から順に径50cm台、50~60cm台、50cm台の円形で、検出面からの深さが40~50cm台、40~60cm台、60~70cm台である。

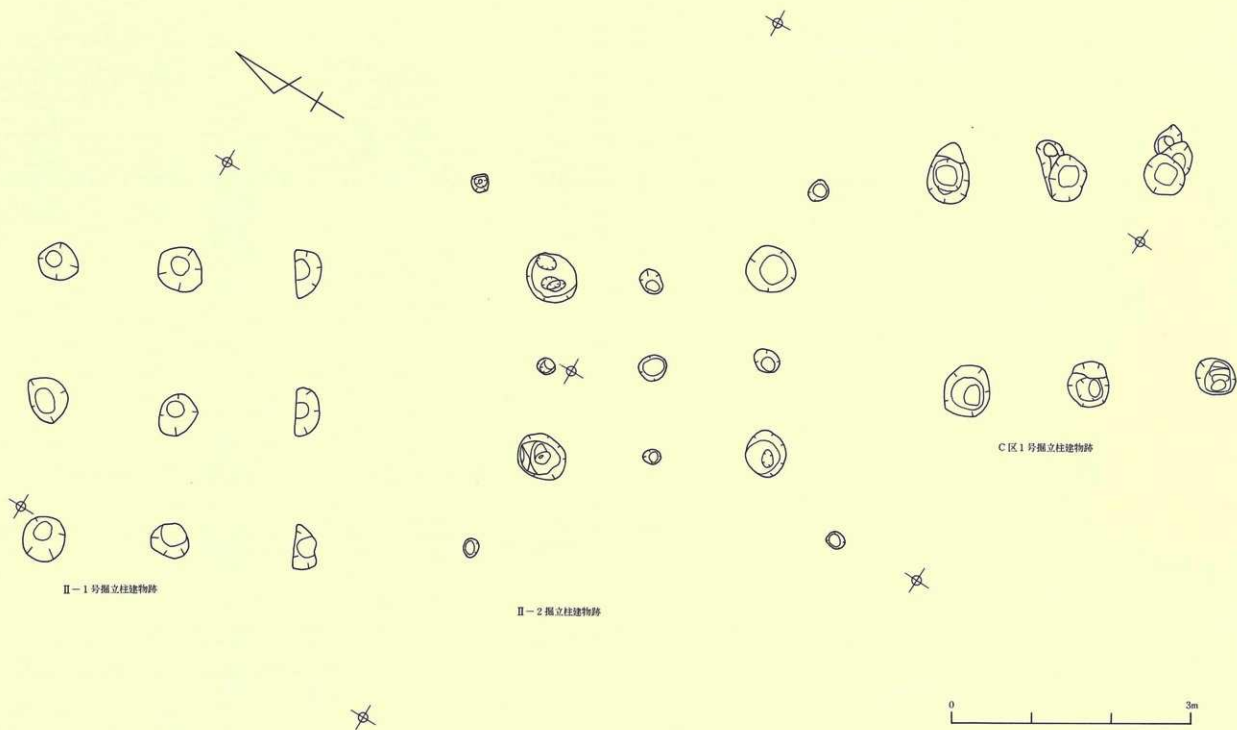
2間×2間の建物跡は、それぞれほぼ等間である。II-1号建物跡の柱間寸法は桁行152~164cm、梁行156~183cmで、II-2号建物跡は桁行125~150cm、梁行100~118cmで、C区1号建物跡は桁行124~156cm、梁行268~270cmである。

II-2号建物跡は庇を伴い、庇の柱穴の位置から総庇と推定される。総柱の四隅に主柱穴があり、その他の柱穴は主柱穴より2回りほど小さく浅いことから床面を支える補助的な役割を果たし、高床式の構造をとるものと推測される。II-2号建物跡はII-1号建物跡より小振りとなるものの、4mを超える庇の柱間寸法を総合すると、II-1号建物跡に劣らぬ上屋構造になるものと推測される。

#### 〈小結〉

住居跡が北東カマドを主体としたのに対し、建物跡の軸方向は北西-南東方向で真東から57度南偏する。住居跡のカマドの長軸方向が真東から13.5~36度北偏し、住居跡と建物跡との軸の開きは70.5~93度となる。住居跡の真東から北偏する平均値は24.75度となり、建物跡の軸方向と住居跡のカマドの長軸方向との角差は81.75度となる。建物跡と住居跡はほぼ直交することになる。

建物跡は住居跡群の中心部に位置し集落共同体が共有し、それぞれの建物跡には性格や用途



第134图 独立柱建物跡

に違いがあるものと推測される。

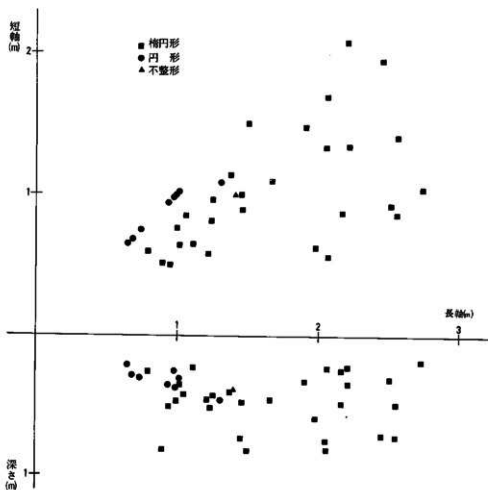
高床式で総庇の上屋構造を含む建物跡群といくつかの変遷が認められる北東カマドをもつ住居跡群は同時に存在し、占地上の意義があるものと推測される。

#### (4) 土坑

検出された土坑は総数84基で、縄文時代2基、中世以降2基及びII区中央部の柱穴状土坑26基は以下の集計から除く。

平面形は円形・隅丸方形が8基、楕円形・隅丸長方形が30基、不整形2基である。深さは20cm未満1基、20～40cm未満18基、40～60cm未満14基、60～80cm未満3基、80cm以上4基である。

平面形が円形・隅丸方形の土坑の深さは、すべて40cm未満である。径は50～150cmの範囲で1



第135図 土坑の長軸径・短軸径・深さの分布

m前後に集中する。断面形は逆台形と「U」字状を呈するものに2分される。

平面形が楕円形・隅丸長方形の土坑は深さにばらつきがあり、40～60cmを主体とする。長径は80～272cmの範囲で120～200cmに集中する。長軸の方位はまばらで傾向がつかめない。断面形は逆台形と「U」字状を呈するものに2分されるが、長方形、フラスコ状、船底状、不整形を呈するものが各1基ずつある。

平面形が不整形の土坑は、深さが40cm以下である。長径は120～140cmである。長軸の方位は北東-南西方向で、断面形は「U」字状を呈する。

#### (5) 溝跡

II-1号溝跡は遺跡の北西側縁辺部に位置し、猿ヶ石川と平行する。長さは約32mで、本調査区で標高が最も低い遺構である。遺構の外側は、猿ヶ石川の氾濫源で、猿ヶ石川まで約40mである。平安時代の住居跡が検出されるのはII-1号溝跡の内側で、旧段丘崖を越えて一段高い平坦地になってからである。出土する遺物は調査区内の4分の1の住居跡から出土する遺物と接合し、この溝跡は集落内で日常的に使用されたものと推測される。

II-2号及びII-3号溝跡は、平行して西側縁辺部を北西から南東方向へ約21m延びる。これらの溝跡の西側に小さな沢をはさんで南西側の台地に高瀬II遺跡が立地し、北西方向を主体とすつカマドをもつ住居跡群がある。

大溝は遺跡の中央北端部に位置し、北西から南東方向へ約8m延び、II-2号溝跡と規模や埋土状況が類似する。

遺跡の南側縁辺部を東から西方向へ約160m延びる溝跡(以下、D区溝状遺構)がある。D区溝状遺構は、II-3号溝跡と深さや一部底部に相違があるものの埋土状況が類似する。

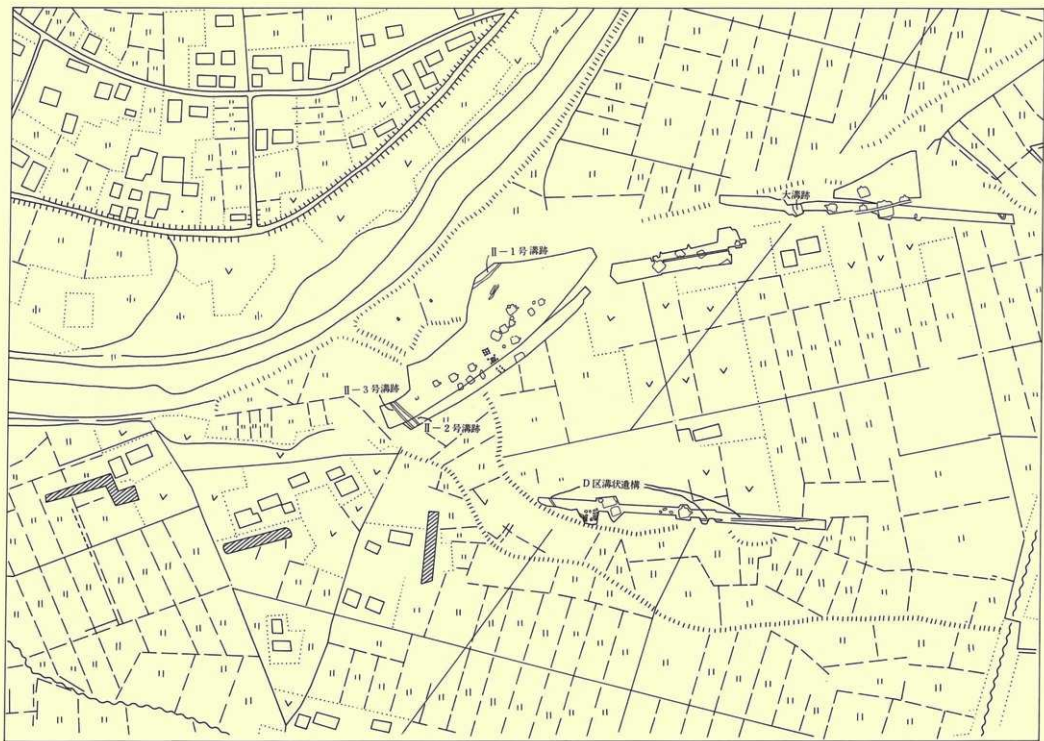
#### (6) 集落の構成

調査区における古代の遺構はすべて平安時代に属し、住居跡と建物跡及び溝跡などの遺構群が検出された。住居跡と建物跡は共に軸方向が一致しており、概ね同時代の遺構と推定される。溝跡についても遺物の接合状況からこれらが集落を形成していることが窺われ、猿ヶ石川沿いの西端に中型や小型の住居跡がみられ、南側に大型住居跡が目立つ。

集落内における遺構の配置をみると、3棟の建物跡は住居跡群のほぼ中央に位置し、これらを北東部と南西部に2分している。溝跡は、断片的な検出状況ではあるが、台地の縁辺に沿って集落を囲む形に巡らされている。

建物跡は、相互の距離が約1.5mほどで同時存在が可能であるが、住居跡群はいずれのグループも重複や相互の距離から時期差が認められる。しかし、後述のとおり出土遺物の検討からは、顕著な時期差を持たせる資料はみだせず、極短期間における遺構の造り替えと推定される。個別の遺構同士の詳細な関係は不明であるが、以上のことから推測すると、本調査区において





第136図 集落の構成

は建物跡を挟んで6-10棟前後の住居跡からなる集落の構成が推定される。

#### (7) 出土遺物

出土した遺物は、破片も含めて2000点を越える。この中から823点の登録を行い、全体の87%を占める環と甕の分類を試み、出土遺物のまとめとする。環と甕ではわずかに甕が多いものは同率である。住居跡の土器組成を検討する上で比較的割平の少ないII-1・2・4・5・7・8号住居跡を主に取り上げる。

環形土器には須恵器と土師器があり、須恵器はいずれの住居跡にも認められる。土師器はII-5号住居跡だけがロクロ使用と不使用を伴うが、II-16号住居跡はロクロ不使用1点の出土である。他の住居跡はロクロ使用のみで、再調整されたものをほぼ伴う。あかやき土器はII-5号住居跡を除いてすべてに認められる。高台付環は4点と僅少で、II-5・7・9号住居跡(いずれも高台部のみ)及びII-1号溝跡に認められる。

甕形土器は土師器のロクロ使用と不使用が共伴し偏重傾向は認められない。大小関係においては住居跡によって差異が認められる。ロクロ成形による小型の甕はI-1、II-1・2・4・5・10・12・13号住居跡の約半数に認められる。

出土する遺物の中では、土師器の壺形土器は皆無で、須恵器にのみ認められる。

鉢形土器は僅少である。鉢形土器と高台付環が共伴するII-5・7・9号住居跡とそうでない住居跡に別れる。

鉄製品は鋤、刀子、鉄鏝などの日常的な農耕・狩猟用に使用されている。鉄製品が検出された住居跡は住居状遺構を除いた16棟中9棟で、56%に達する。鉄製品は、II-1・2・4・5・7・8号住居跡の中で遺物が最も多いII-7号住居跡を除いてすべてに認められ、鉄器の所有を特定の住居跡に求めることはできない。

(2)でA群及びB群の住居跡の重複関係、平面立地、接合遺物、十和田a降下火山灰から新旧関係をみた。ここでは各住居跡の土器組成から新旧関係を検討する。

II-5・7号住居跡は遺物量が多く、平面立地上からも並存が可能で、A群の中心的住居跡と推定されることから対比する。II-5号住居跡は土師器の環にロクロ不使用を伴い、甕はロクロ使用の体部上半にタタキ目を有するものを含むなど相違が認められる。しかし、双方とも土師器の環に再調整(B I 1 b・B I 1 c類)が多く、須恵器も伴う。甕は口縁部が大きく外反あるいは外傾し古い要素が認められる。高台付環と鉢形土器が共伴し、墨書土器が認められる。II-5・7号住居跡は遺物に若干の相違が認められるものの、以上のことからほぼ同時期と推定される。

II-1号住居跡とII-5号住居跡は平面立地上並存が不可能であるが、II-1号住居跡とII-7号住居跡とは可能であることから、II-1・7号住居跡とを対比する。II-1号住居跡

の土師器の環には、底部から体部へすぼむように立ち上がる新しい要素が認められるが、再調整(B I I c類)も含まれる。須恵器の環はII-5・7号住居跡と同様に口縁部がやや外反するものがある。甕もほぼ同様であるが、ロクロ不使用の大型の甕の口縁部が横に強く外反しやや相違が認められるだけで、新旧を特定することはできない。

II-4号住居跡は土師器の環に簡単な再調整(B I I b類)が認められ、体部の立ち上がりは底部から外反し、II-5号住居跡の環と類似する。須恵器の環はII-1・5・7号住居跡と同様である。甕類は口縁部の形態などII-1号住居跡と類似する。また、II-1号住居跡と同様にロクロ成形の小型の甕を伴う。

II-6号住居跡は明らかにII-1号住居跡に切られて古いが、土師器の環ではII-4号住居跡と同様に簡単な再調整(B I I b類)が認められる。共存する須恵器の環の形態はII-5・7・1・4号住居跡と同様である。ロクロ不使用の甕の口縁部はII-5・7号住居跡と異なり、II-1・4号住居跡と類似する。

II-2・8号住居跡は床面直上からの土師器の環が認められないが、須恵器の環は口縁部がやや外反する。甕の口縁部は外反あるいは外傾する。双方はロクロ成形の小型の甕を伴う。

住居跡の新旧関係は、土器組成の面からII-16号住居跡を除いて若干の時間差が認められるものの、ほぼ同時期の住居跡と推測される。

#### ① 環

環はロクロ不使用がII-5・16号住居跡から計3点出土し、いずれも内面黒色処理が施され、ロクロ使用が破片も含めて360点登録している。これらの分類内訳は次の通りである。

A I I類：ロクロ不使用で酸化炭焼成され、内面黒色処理されているもの(3点)

(ロクロ不使用の土師器)

B I I類：ロクロ使用で酸化炭焼成され、内面黒色処理されているもの(236点)

(ロクロ使用の土師器)

B I 2類：ロクロ使用で酸化炭焼成され、内面黒色処理されていないもの(42点)

(あかやき土器)

B II類：ロクロ使用で明確に還元炭焼成されているもの(82点)

(須恵器)

そして、体部下端から底部にかけての再調整の有無によって、以下a～cを付している。

a～底部切り離しが糸切りで無調整のもの

b～底部切り離しが糸切りで再調整が認められるもの

c～底部切り離しが全面再調整のため糸切りであるか不明のもの

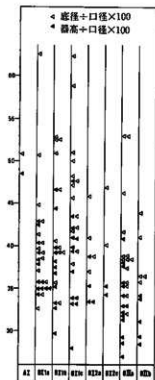
集成図中の1～13、15、21～31、33～45、51～54、60、61、64～76、78、83～87の63点の法



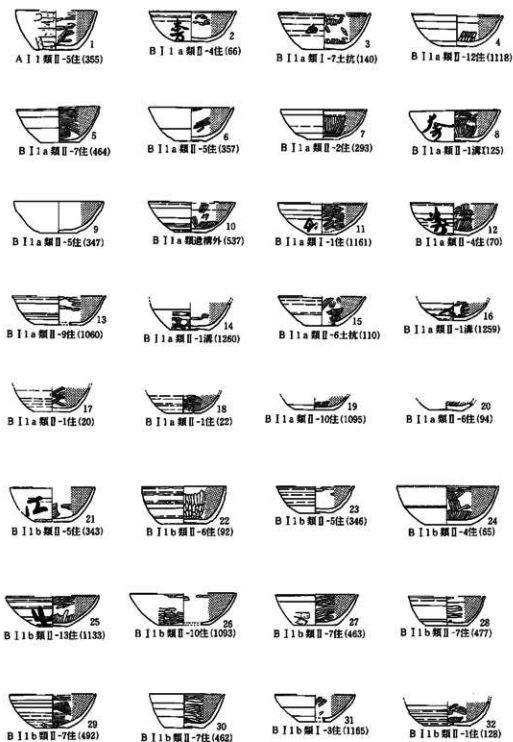
量を見ると、A I Ⅰ類は口径13.0cmの坏1点だけで傾向がつかめない。B I Ⅰ類の口径の分布は14cm台が最も多く、12cm以上15cm未満が32点で86%を占める。口径の平均値(B I Ⅰ類13.8cm)はB I Ⅰa類13.9cm、B I Ⅰb類13.9cm、B I Ⅰc類13.4cmである。B I Ⅱ類の口径の分布は13cm台が大半で、16cm台が1点である。口径の平均値(B I Ⅱ類14.1cm)はB I Ⅱa類14.3cm、B I Ⅱc類13.8cmである。B II類の口径の分布は14cm台が12点で最も多く63%を占める。口径の平均値(B II類14.4cm)はB IIa類14.3cm、B IIb類14.6cmである。口径の平均値はB I Ⅰ類、B I Ⅱ類、B II類へ行くに従って大きくなる傾向がある。B I Ⅰ類は12cm以上15cm未満が大半であるが、11~17cmの広範囲にばらつく。B I Ⅱ類とB II類はそれぞれ分類ごとに集中する。口径の平均値と再調整の関連から、B I Ⅰ・B I Ⅱ類は再調整されるほど口径が小さく、逆にB II類は大きくなる傾向がある。

口径に対する器高と底径の指数(器高÷口径×100、底径÷口径×100)分布を第137図に示した。器高指数平均はA I Ⅰ類48.5(1点のみ)、B I Ⅰ類38.4、B I Ⅱ類35.1、B II類32.9で、B I Ⅰ類、B I Ⅱ類、B II類へ行くに従って指数にして2~3低くなる。これは口径の相違というより、B II類の器高がB I Ⅰ・B I Ⅱ類より相当低く形状が皿状を呈することに起因する。さらにB I Ⅰa類37.5、B I Ⅰb類37.6、B I Ⅰc類37.9、B I Ⅱa類35.3、B I Ⅱc類34.8、B IIa類33.4、B IIb類31.4である。数値は左記のとおりであるが、個々にみるとB I Ⅰ類はばらつきがあり、B I Ⅱ・B II類はばらつきが小さく、B II類は平均値に集中する傾向がある。底径指数平均は、A I Ⅰ類50.8(1点のみ)、B I Ⅰ類44.3、B I Ⅱ類41.6、B II類39.7である。さらにB I Ⅰa類41.5、B I Ⅰb類44.2、B I Ⅰc類47.3、B I Ⅱa類40.7、B I Ⅱc類43.5、B IIa類40.1、B IIb類38.7である。B I Ⅰ・B I Ⅱ類は底部再調整が進むほど底径指数が共に高くなるが、B II類は逆の傾向を示す。B II類の逆傾向は胎土分析の結果にもみられるように他の地域から持ち込まれたことによるところが大きいものと推測される。

本遺跡出土の環形土器を概括すると、ロクロ使用の坏が99%以上占めていること、A I Ⅰ類及びB I Ⅰ類、B I Ⅱ類、B II類の割合は6 : 1 : 2となりB I Ⅱ類が1割以上あること、土師器の環形土器の中で高台付坏が2%ほどで非常に少ないこと、体部下端から底部にかけて再調整が目立つことが特徴的である。底部欠損のため不明であるものを除いて分類ごとに再調整の割合を見ると、B I Ⅰ類62%、B I Ⅱ類29%、B II類18%に再調整が施され、B I Ⅱ・B II類にも若干ながら再調整が認められ、B II類



第137図 器高・底径指数



第138圖 坏類集成圖(1)



B I 1 c 類 II - 5 住 (345)



B I 1 c 類 II - 1 溝 (1213)



B I 1 c 類 II - 5 住 (351)



B I 1 c 類 II - 5 住 (356)



B I 1 c 類 II - 1 溝 (1254)



B I 1 c 類 II - 7 土坑 (141)



B I 1 c 類 II - 13 住 (1134)



B I 1 c 類 II - 5 住 (344)



B I 1 c 類 II - 1 溝 (1215)



B I 1 c 類 II - 7 住 (465)



B I 1 c 類 II - 5 住 (342)



B I 1 c 類造構外 (1332)



B I 1 c 類 II - 1 溝 (1246)



B I 1 c 類 II - 1 燒土 (206)



B I 1 c 類 II - 1 住 (23)



B I 1 c 類 II - 10 住 (1105)



B I 1 類造構外 (539)



B I 1 類造構外 (538)



B I 2 a 類 II 溝 (1216)



B I 2 a 類 I - 6 住 (109)



B I 2 a 類 II - 1 溝 (1289)



B I 2 a 類 I - 1 燒土 (1163)



B I 2 a 類 II - 45 土坑 (235)



B I 2 a 類 I - 2 住 (1164)



B I 2 a 類 II - 1 溝 (1262)

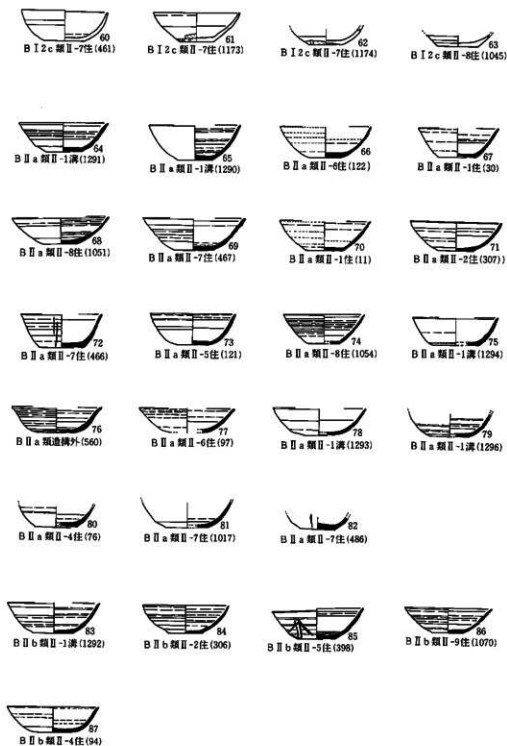


B I 2 a 類造構外 (554)



B I 2 b 類造構外 (1407)

第139圖 環類集成圖(2)



第146圖 環類集成圖(3)



に至っては一部分でごく簡単な再調整である。技法は手持ちへら削りあるいは回転へら削りに集約されるが、Ⅱ-5号住居跡からへらミガキ技法による再調整が1点出土する。

## ② 甕

甕は破片も含めて土師器のロクロ不使用が137点、ロクロ使用が89点、須恵器116点を登録している。これらの分類内訳は次の通りである。また、口径18cmを基準としたことは、分布上口径18cmの空間が希薄であることと、ロクロ成形の小型の甕が16cm以内であることによる。

A I a 類 : ロクロ不使用で酸化炭焼成され、口径18cm以上のもの (47点)

A I b 類 : ロクロ不使用で酸化炭焼成され、口径18cm未満のもの (40点)

B I a 類 : ロクロ使用で酸化炭焼成され、口径18cm以上のもの (46点)

B I b 類 : ロクロ使用で酸化炭焼成され、口径18cm未満のもの (32点)

B II 類 : ロクロ使用で還元炭焼成されているもの (116点)

集成図中の1~12はロクロ不使用の大型の甕(AIa類)である。口縁部の形態は長く外反あるいは外傾するものが大半で、横に強く外反するものも含まれる。調整は外面が縦方向のケズリを多用し、内面がナデやハケメ、口縁部は内外共にヨコナデである。

13~27はロクロ不使用の小型の甕(AIb類)である。口縁部の形態はさまざまで、外反あるいは外傾するもの、短く外反するもの、緩く外反あるいは直上するものがある。調整はロクロ不使用の大型の甕と同様である。

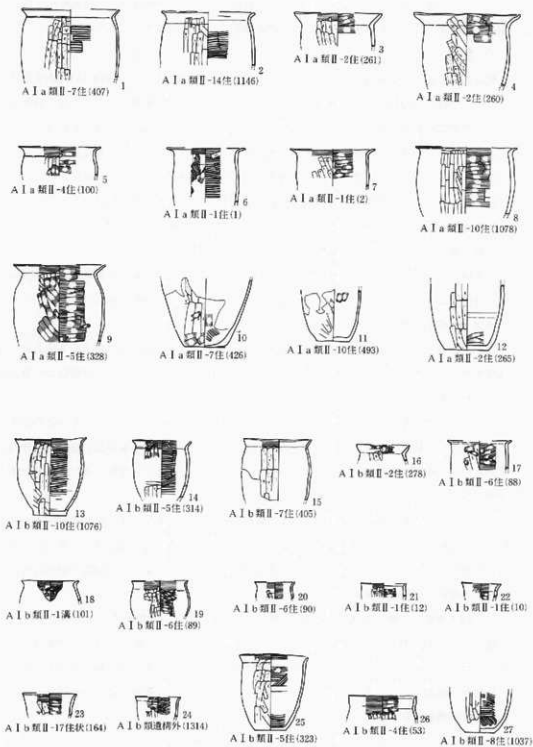
28~39はロクロ使用の大型の甕(BIa類)である。口縁部の形態は長く外反あるいは外傾するものが大半で、横に強く挽き出されているものも含まれる。ロクロの使用は口縁部から体部上半あるいは口縁部のみに限られ、下半はへら削りされる。口縁部から体部上半にかけてタタキ目痕を有するものがある。

40~49はロクロ使用の小型の甕(BIb類)である。40と41は口縁部にロクロ調整が認められるだけで、口縁部が外反し、外面に縦方向のケズリ、内面にナデ調整が施されている。42~49はロクロ成形によるもので、僅少ではあるが本遺跡の特色の一つである。口縁部の形態は外反あるいは外傾し、口唇部が挽き出される。

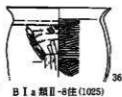
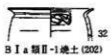
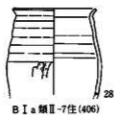
50~53は須恵器の甕(BII類)で大型が大半で、内外共にタタキ目痕を有するものが多い。

総じて、大型の甕は口縁部が長く外傾あるいは外反したり、横に強く外反するのが特徴的である。ロクロ使用の大型の甕は口縁部から体部上半がロクロで下半がへら削りである。中には口縁部から体部にかけてタタキ目痕を有するもの(Ⅱ-5住)が含まれる。調整はほとんどがケズリで内面がナデられる。

土師器ではロクロ不使用がやや多く大型のものが小型をわずかに上回り、須恵器では大型が



第141圖 變類集成圖(1)



第142圖 凳類集成圖(2)

大半である。また、比較的少なく遺存状態の良いⅡ-1・2・5・7・8号竪穴住居跡をみても、竪では土師器のクロロ使用・不使用及び大小関係、須恵器の共伴において偏重傾向は認められず、②の分類傾向がほぼ反映される。

### ③ 墨書土器

62点の墨書土器が出土する。出土遺構は表20の通りで、住居跡23点、溝跡19点、土坑1点、遺構外19点である。地区別ではⅡ区が大半で97%を占め、Ⅰ区のものもⅡ区に隣接する位置である。住居跡は8棟で全体の約2分の1にあたり、墨書土器の所有はほぼ住居跡毎に行われたものと推測される。

墨書は1字あるいは2字で構成されるもので文意を持ったものはない。特に「林」、「卒万」が多い。「卒万」に含めたものの中には「卒」、「卒?」の破片もある。それは「卒」が本県で出土例があるものの、本遺跡からの出土はないためである。「林」は全体の約3分の1、「卒万」は約5分の1で、双方を合わせると2分の1以上となり、他の文字との差は大きい。ある集落で特定の文字が出土する例はあるが、本遺跡の場合は1集落に多く出土する2種類の文字「林」と「卒万」があることになる。

62点の墨書土器を土師器、須恵器、あかやき土器に分類すると、土師器が全体の89%を占め、土師器と須恵器の比率からすると差が大きく、土師器に偏重する。墨書土器はすべてクロロ成形の環形土器で、底部のある33点のうち64%が底部あるいは下半にまで再調整が施されている。器種は、環、高台付環とすべて共輪形態で、環が98%である。こうしてみると、墨書は地元で丁寧に仕上げた共輪具に記されたものと推測される。

墨書の部位は底部と体部と体部から高台部にかけてあり、点数にしてそれぞれ21:40:1で、すべて外面に書かれ、筆跡の優れたものも含まれる。体部と体部から高台部にかけて書かれている墨書を見ると、倒立文字が数点あるものの正位に置かれた状態を意識していることが窺える。

文字の内容についてみると、数を示すものに「一」、吉祥を示すものに「神」、「天」、「示」、氏姓を示すものに「 $\times$ 部」、「勿」、「林」がある。「勿」は底部破片で傍の部分が不明であるが、遠野市教育委員会の調査区から「 $\times$ 」が出土していることから同一文字と推定される。太田亮著「姓氏家系大辞典」第三巻の「物モノ」の項で、「2陸前の物氏 多賀城より発掘されし文字瓦に物と銘せしもあり。当国に物部の族ありしは、承和七年三月紀に「宮城権大領物部己波美」の見ゆるによりて知ることを得。」とある。また、「物井モノキ」の項で「下総、下野等に此の地名あり、共に古代物部郷のありし地なれば、モノノベの訛音と考へらる。」とあり、「物江モノエ」の項で「これも物部の訛音なるべし。」とある。「 $\times$ 」、「井」、「江」の墨書土器を氏姓を示すものに含めることが可能であろうか。

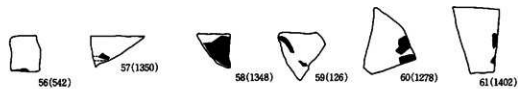
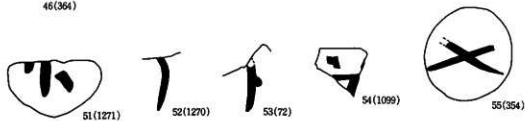
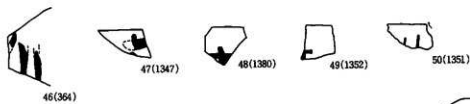
表20 墨書土器一覽表

\*印: 写真のみ掲載

番号	実測図	写真	登録番号	遺構名	墨書名	種類	形種	分類	墨書部位	備考
24	13Ⅱ 4住 6	29	65	Ⅱ-4住	一	H	坏	B17b	底部	
5	13Ⅱ 4住 2	25	66	々	今	H	坏	B17a	体部	
1	13Ⅱ 4住 1	24	70	々	今	H	坏	B17a	体部	
53	13Ⅱ 4住 3	26	72	々	不明	H	坏	B17c	底部	
15	20Ⅱ 2住 4	62	298	Ⅱ-2住	井	H	坏	B17	体部	
30	Ⅱ 2住	77	* 301	々	不明	H	坏	B17	体部	
35	25Ⅱ 5住 10	87	342	Ⅱ-5住	林	H	坏	B17c	底部	
14	25Ⅱ 5住 8	85	343	々	江	H	坏	B17b	体部	
29	Ⅱ 5住	120	* 360	々	不明	H	坏	B17	体部	
46	Ⅱ 5住	122	* 364	々	林	H	坏	B17c	底部	
37	26Ⅱ 5住 18	95	398	々	林	S	坏	B11b	体部	
19	33Ⅱ 7住 15	137	465	Ⅱ-7住	神	H	坏	B17c	底部	
34	33Ⅱ 7住 12	134	473	々	林	H	坏	B17c	底部	
36	32Ⅱ 7住 7	129	474	々	林	H	坏	B17b	底部	
2	Ⅱ 7住	178	* 485	々	今	H	坏	B17c	体部	
33	32Ⅱ 7住 5	127	487	々	林	H	坏	B17b	底部	
44	33Ⅱ 7住 14	136	163	々	林	H	坏	B17c	底部	
16	Ⅱ10住	235	* 1089	Ⅱ-10住	不明	H	坏	B17	体部	
54	Ⅱ10住	236	* 1099	々	不明	H	坏	B17	体部	
25	52Ⅱ13住 1	243	1133	Ⅱ-13住	承	H	坏	B17b	体部	倒立文字
21	58Ⅰ 1住 1	261	1161	Ⅰ-1住	内	H	坏	B17a	体部	倒立文字
22	Ⅰ 7坑 1	280	140	Ⅰ-7坑	甲	H	坏	B17a	体部	倒立文字
10	112Ⅱ 1溝 17	311	1221	Ⅱ-1溝	号	H	坏	B17	体部	
17	112Ⅱ 1溝 20	314	1222	々	野	H	坏	B17	体部	
23	Ⅱ 1溝	332	* 1223	々	甲	H	坏	B17	体部	倒立文字
7	Ⅱ 1溝	333	* 1224	々	卒	H	坏	B17	体部	
6	Ⅱ 1溝	334	* 1225	々	季	H	坏	B17	体部	
13	Ⅱ 1溝	335	* 1226	々	不明	H	坏	B17	体部	
4	110Ⅱ 1溝 1	295	125	々	今	H	坏	B17	体部	
59	112Ⅱ 1溝 21	315	* 126	々	不明	H	坏	B17	体部	
60	Ⅱ 1溝	336	* 1278	々	不明	H	坏	B17	体部	
11	Ⅱ 1溝	337	* 1279	々	不明	H	坏	B17	体部	
28	110Ⅱ 1溝 4	298	1259	々	不明	H	坏	B17a	体部	
52	Ⅱ 1溝	341	* 1270	々	不明	H	坏	B17a	底部	
51	Ⅱ 1溝	342	* 1271	々	不明	H	坏	B17a	底部	
32	Ⅱ 1溝	343	* 1272	々	林	H	坏	B17c	底部	
45	113Ⅱ 1溝 23	317	1262	々	林	A	坏	B12a	底部	
41	Ⅱ 1溝	344	* 1309	々	林	A	坏	B12a	底部	
39	113Ⅱ 1溝 27	321	1290	々	林	S	坏	B11a	底部	
43	113Ⅱ 1溝 28	322	1291	々	林	S	坏	B11a	体部	
20	113Ⅱ 1溝 26	320	1292	々	天	S	坏	B11b	底部	
26	124Ⅱ 外 11	371	539	遺構外Ⅱ区	号	H	坏	B17	体部	
56	Ⅱ 外	419	* 542	々	不明	H	坏	B17	体部	
9	Ⅱ 外	420	* 543	々	不明	H	坏	B17	体部	
	Ⅱ 外	421	* 1346	々	不明	H	坏	B17	体部	実測図なし
47	Ⅱ 外	422	* 1347	々	不明	H	坏	B17	体部	
58	Ⅱ 外	423	* 1348	々	不明	H	坏	B17	体部	
8	Ⅱ 外	424	* 1349	々	不明	H	坏	B17	体部	
57	Ⅱ 外	425	* 1350	々	不明	H	坏	B17	体部	
50	Ⅱ 外	426	* 1351	々	不明	H	坏	B17	体部	
49	Ⅱ 外	427	* 1352	々	不明	H	坏	B17	体部	
61	Ⅱ 外	428	* 1402	々	不明	H	坏	B17	体部	
38	Ⅱ 外	429	* 512	々	林	H	坏	B17	体部	
31	123Ⅱ 外 7	367	513	々	林	H	坏	B17c	底部	
42	123Ⅱ 外 2	362	514	々	林	H	坏	B17a	底部	
40	Ⅱ 外	430	* 526	々	林	H	坏	B17c	底部	
18	123Ⅱ 外 6	366	1355	々	勿	H	坏	B17c	底部	
12	Ⅱ 外	431	* 1356	々	不明	H	坏	B17c	体部	
3	124Ⅱ 外 21	381	536	々	今	H	高台付坏	体~脚部		
48	Ⅱ 外	432	* 1380	々	不明	S	坏	B11	体部	
27	9Ⅱ 1住 2	2	25	Ⅱ-1住	乙	H	坏	B17	体部	
55	25Ⅱ 5住 9	86	354	Ⅱ-5住	不明	H	坏	B17c	底部	



第143圖 墨書土器集成圖(1)



第144图 黑陶土器集成图(2)

#### ④ 時期

今回得られた遺物の特徴として次のことがあげられる。組成面では、土師器の環、甕、須恵器の環、甕から構成され、一部に土師器の高台付環、鉢、須恵器の壺、あかやき土器の環が伴う。

土師器の環は、ほとんどがロクロ成形され、このうち全体の29%（底部欠損のため不明のものは全体の54%）が底部切り離し後に再調整が行なわれている。この技法には、ロクロを用いたものと手持ちによるものがあり、量的には後者が多い。

土師器の甕は、ロクロ使用と不使用が共伴し、偏重傾向は認められない。大小関係においては住居跡によって差異が認められる。ロクロ成形による小型の甕は住居跡の約半数に伴う。

しかし、重複などによって時間差が存在する住居跡においても、土器組成は同じで出土遺物からは時期差を認めることはできない。

これらの土器について、ほぼ同時期の遺構と遺物が検出されている江刺市愛宕地区の遺跡群と比較し、時期の検討を行いたい。当地区は、1978年度に石石Ⅱ・兎Ⅱ・落合Ⅲ・朴ノ木Ⅰ遺跡が当センターによって調査され、報告がなされている（高橋ほか1979）。この中で、高橋は平安時代の遺構を出土遺物からⅡ期a・b1・b2・c・Ⅲ期a・bの2期6群に分類する。今回の調査で得られた資料は、この内Ⅱ期b1群とb2群期の土器組成に類似する。

高橋によればb1群は、環形土器ではロクロ成形され底部に再調整が施されるものが主体を占め、甕形土器にはロクロ使用と不使用のものがあり、一部にタタキ目を有するものが残る。さらに、ロクロ成形された小型甕、高台付環、鉢などが新たに出現し、ロクロ不使用の壺型土器が消滅する。b2群は、環形土器に須恵器の割合が多くなり、底部の再調整は、ロクロを使用したものがなくなることなどが特徴とされる。時間的にはb1期をロクロ技術の定着期、b2期を地方における須恵器生産の確立・普及期として捉え、9世紀中葉の年代を与えている。

これらの土器群と当遺跡の土器群を比較すると、一部にあかやき土器を含む点や、鉢と高台付環の量が少ない点などの相違がみられるものの、その総体はほぼ一致するものと考えてよいであろう。また、須恵器の胎土分析の結果では「水沢領域」に入り、北上川中流域の影響の深さを裏付けている。以上から時間的にも、ほぼこれと同時期に比定されるものと推測される。

#### (8) まとめ

高瀬Ⅰ遺跡の範囲は、総面積約10.4万㎡に及ぶ舌状に張り出す台地全体に広がるものと推定される。遠野市教育委員会と当センターによる2年に渡る調査で台地の北端部、南端部及び西端部に当たる縁辺部約1.4万㎡が調査された。この結果、台地の西部には平安時代の集落が占地し、北東部には奈良時代の集落と古墳群が主体をなし、検出された古代の遺構は、台地の中央部やや東側を堺に時期を異にして分布していることが判明した。



台地の中央部は、未調査のため集落の全容は不明であるが、平安時代の集落は住居跡と建物跡が中心となり、これに溝を伴う。この溝跡は、遠野市教育委員会の調査区であるD区でも、その方向や埋土状況から同一の遺構と推測されるものが検出され(D区溝状遺構)、台地の縁辺部に沿って巡らされる。また、奈良時代の遺構が大半を占めるA区においても平安時代の溝跡(大溝)が検出され、これらの溝跡が集落を囲んでいる可能性がある。

溝跡によって囲まれる範囲は、約5.8万㎡と推定され、このうち、奈良時代の遺構群と重複する地帯では、平安時代の遺構は希薄になり、区画内における場の使い分けが窺える。また、住居跡には重複がみられる同時期内での造り替えが行なわれるが、建物跡にはみられないことから、建物を基準とする集落の構成が推測される。

奈良時代の集落は台地の北東部に10棟ほど検出され、北カマドを主体とする。これらの住居跡は時期差が認められず、古墳とは切り合い関係から新旧双方が認められる。10棟の住居跡の中には、一辺10mを越える大型住居跡が含まれ、遺物量も豊富である。

胆沢城周辺の古代村落の分析で伊藤は、「日本史研究」215号(1980年)の中で、概略次のように述べる。

奈良時代の村落の立地と占地の形態は、「胆沢川の兩岸の縁辺部に形成される村落と水沢段丘上の小河川沿の微高地及び沖積面を控えた段丘崖縁辺部に形成される村落」に類型化でき、景観的には散居村落の様相を示すとする。また、住居区は「1つの小グループが比較的まとまった形で、占地を異にする場合が多く」、住居の構成は平均3～6棟、村落の構造は「獨立柱建物と井戸が伴う例が皆無」で竪穴住居跡だけが村落の構成要素で、奈良時代の村落を自然村落と位置づけている。

これに対して、「考古学的にみた計画村落とは、新しい段丘への進出、竪穴祭祀の消滅、耕起具の増加をみせながら、村落構造が獨立柱建物、井戸、竪穴住居から成るものをいう」とし、平安時代の村落を位置づけている。

高瀬I遺跡と比較すると、当遺跡の平安時代の遺構に井戸跡が認められないものの、構造的には一致する点があり、平安時代の建物を基準とした住居跡に溝跡が伴う遺構配置から計画的な要素が窺われる。当遺跡は伊藤の計画村落と即断定できないものの、今後の集落研究に好資料が加えられた。

## 2. 縄文時代

### (1) 陥し穴状遺構

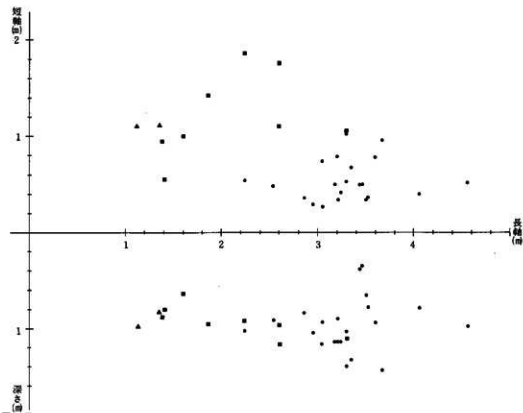
検出された陥し穴状遺構は総数32基で、平面形が溝状を呈するタイプ21基、楕円形・隅丸長方形を呈するタイプ9基と円形を呈するタイプ2基の3つに分類できる。

#### <規模・形態>

溝状を呈する陥し穴状遺構の長さは3m未満が3基、3～4mが16基、4m以上が2基で、長さの分布領域は3m未満の中型3基と、3m以上の大型18基に分類できる。

検出面からの深さは50cm未満が3基、50～100cmが9基、100cm以上が9基である。大部分の陥し穴状遺構は基本層序第III層で検出されるが、検出面からの深さが比較的浅いものや50cm未満のものは基本層序第IV層で検出されることを兼ねあわせると1m前後に集中する傾向がある。

断面形は「V」字状を呈するタイプが主体で、基本層序第IV層で検出されるものはほぼ「U」字状を呈する。少数であるが基本層序第III層で検出されるものの中には「U」字状2基と「Y」



第145図 陥し穴状遺構の長軸径・短軸径・深さの分布

字状1基が含まれる。

長軸方向を方位別にみると、おおよそ真北から60～118度東偏し河川に平行するグループと142～207度東偏し河川に直交するグループに大別される。さらに検出された地区と検出面から細分すると、前者が4グループ、後者が3グループの計7グループになる。

楕円形・隅丸長方形を呈する陥し穴状遺構は、長さが2m未満が4基、2～3mが4基、3m以上が1基である。

検出面からの深さは60～100cmが6基、100cm以上が3基である。検出面はすべて基本層序第Ⅲ層である。

断面形はほとんど逆台形で1基だけ「V」字状を呈する。

小穴は6基に確認され平面形が楕円形のはすべて小穴を伴う。小穴の数は1～4個で1個を伴うものが2基、2個が1基、3個が1基、4個が1基で、小穴を伴わないものが3基である。

円形を呈する陥し穴状遺構は径が1mをやや上回り、検出面からの深さが1mをやや下回る2基がある。

検出面が基本層序第Ⅲ層で検出された地点も近い。断面形は長方形と逆台形を呈しやや相違がみられる。

いずれも小穴を1個伴う。

#### 〈遺物〉

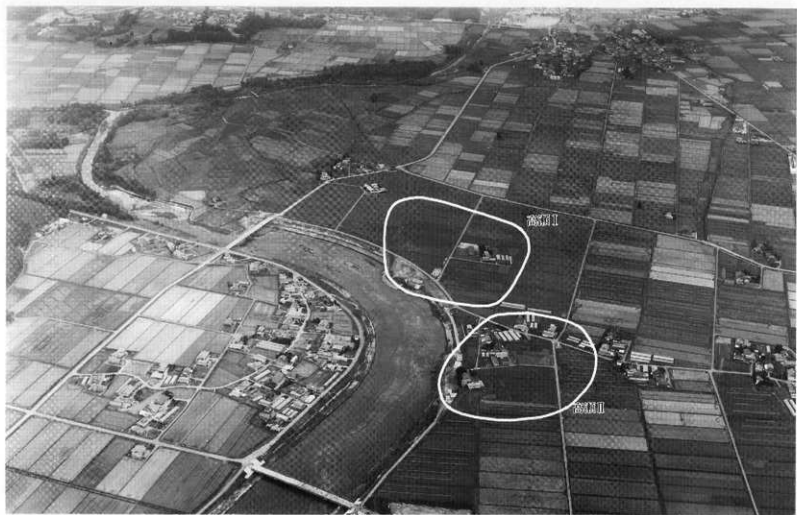
出土遺物を伴う陥し穴状遺構は、平面形が楕円形・隅丸長方形を呈する2基のみで、他の溝状及び円形を呈するタイプは皆無である。遺物は石鏃が双方から各1点ずつ出土する。土器は一方が早期の物見台式に比定される深鉢の体部片3点で、その内1点はキャリバー型を呈する。他方は、後期前葉に比定される深鉢の口縁部片1点である。

#### (2) まとめ

猿ヶ石川に舌状に張り出す台地に検出される陥し穴状遺構は、川沿に至るほど密度が高くなる。形態の違いによって占地の仕方が窺がえ、溝状を呈するタイプは調査区中央部から西側に集中する。楕円形・隅丸長方形を呈するタイプは西端部に集中しながら東側にも認められる。円形を呈するタイプは調査区中央部に認められる。

小穴は溝状を呈するタイプには認められず、他のタイプは個数にばらつきがあるものの伴わ

# 写 真 图 版



写真図版1

遺跡遺景

(南西から)



写真図版 2

遺跡近景

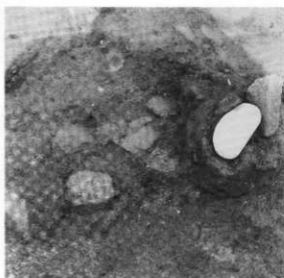
(北西から)



全景



カマド断面

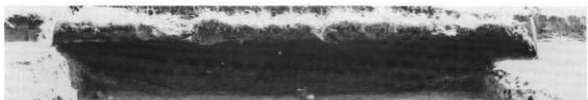


カマド遺物出土状況

写真図版3 II-1号住居跡



全景



埋土断面



カマド断面(1)



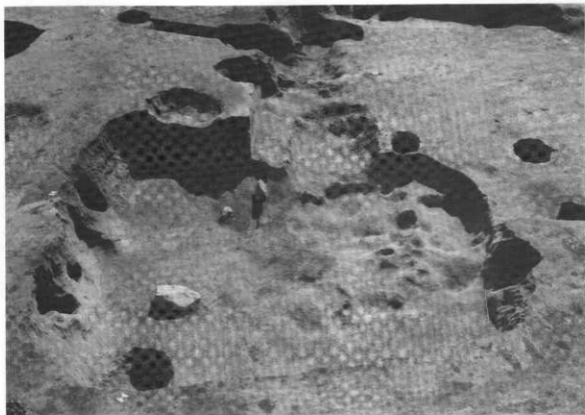
カマド断面(2)



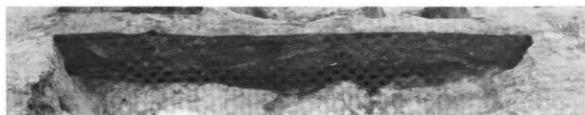
遺物出土状況

写真図版 4 II-4号住居跡

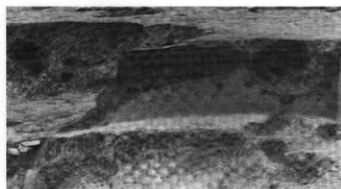




全景



埋土断面

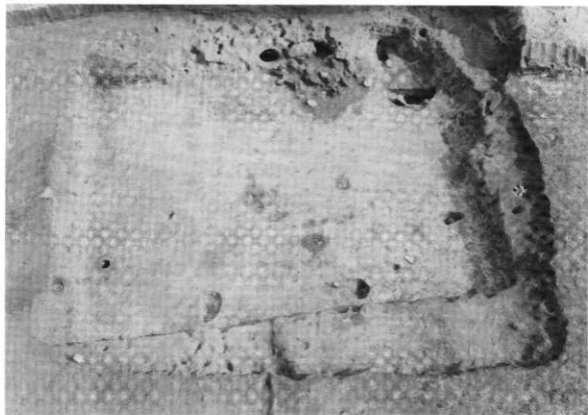


煙道断面

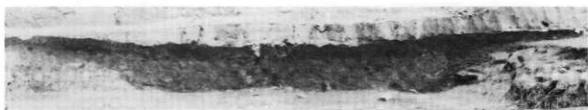


カマド

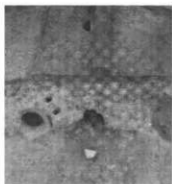
写真図版 5 II-6号住居跡



全景



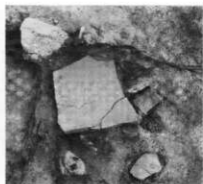
埋土断面



カマド



煙道断面

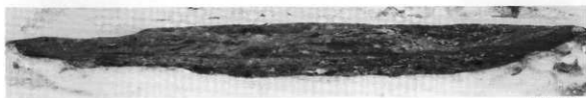


遺物出土状況

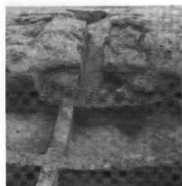
写真図版 6 II-2号住居跡



全景



埋土断面



カマド

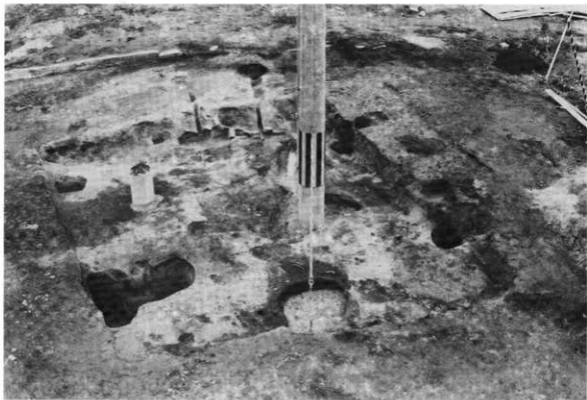


遺物出土状況

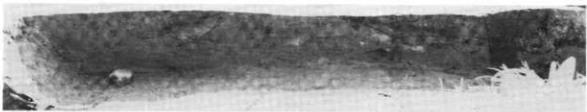


遺物出土状況

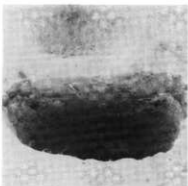
写真図版 7 II-5号住居跡



全景



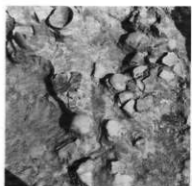
埋土断面



柱穴埋土断面



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 8 II-7号住居跡



全景



埋土断面



カマド



遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 9 II-8号住居跡



全景



埋土断面



カマド断面

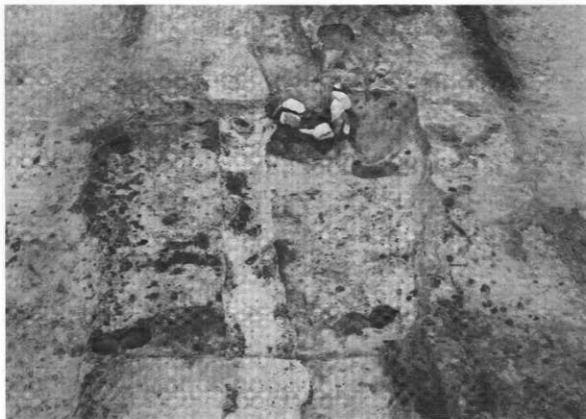


遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版10 II-9号住居跡



全景



埋土断面



煙道断面

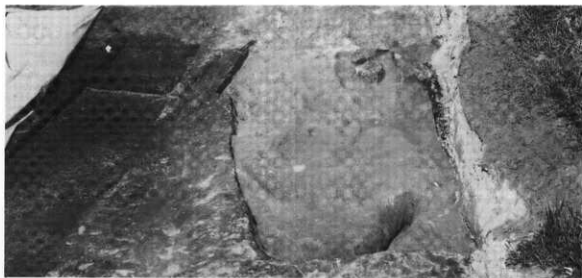


カマド断面

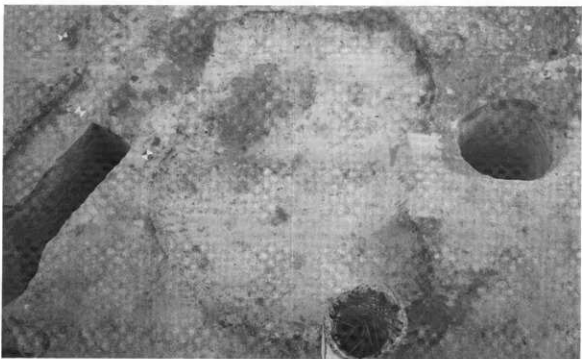


貯蔵穴

写真図版11 II-10号住居跡



II-12住 全景



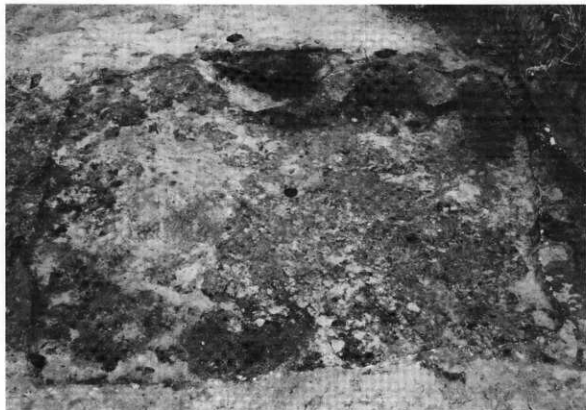
II-16住 全景



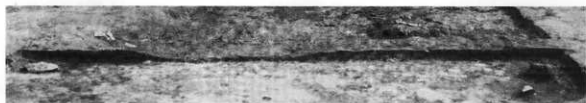
II-16住埋土断面

写真図版12 II-12・16号住居跡





全景



埋土断面



カマド断面



ビット埋土断面



遺物出土状況

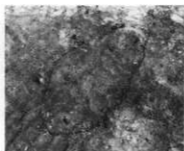
写真図版13 Ⅱ-13号住居跡



全景



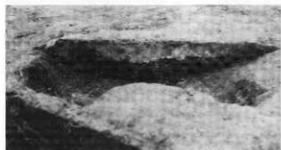
烧土1



烧土2



カマド断面



烧土1 断面



烧土2 断面

写真図版14 II-14号住居跡



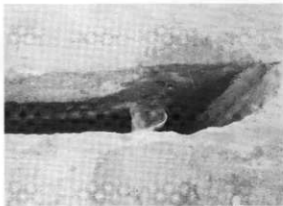
全景



埋土断面

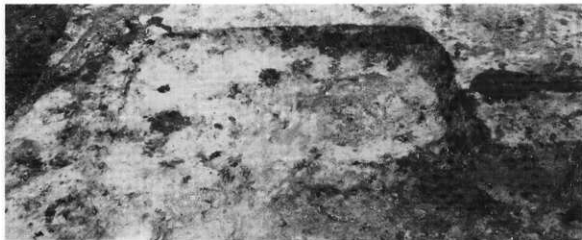


カマド

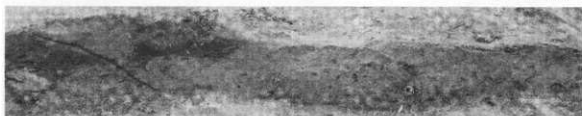


燗道断面

写真図版15 I-1号住居跡



I-2住 全景

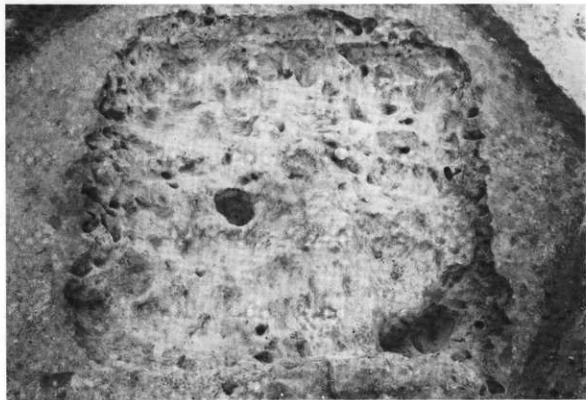


埋土断面



III-1住 全景

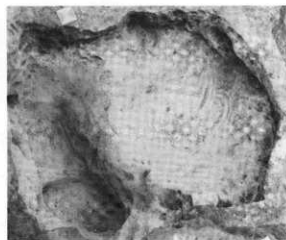
写真图版16 I-2·III-1号住居跡



全景



埴土断面

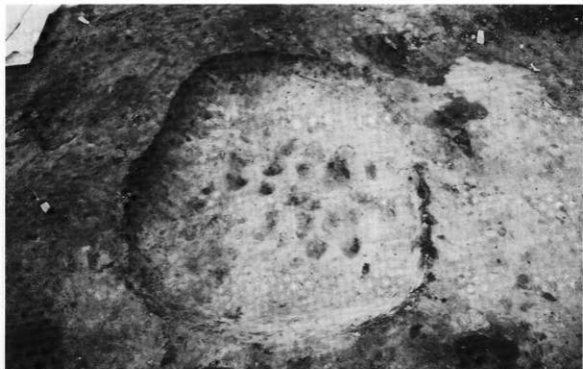


ビット



ビット断面

写真図版17 II-17号住居状遺構



全景



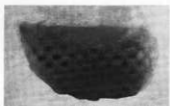
埋土断面



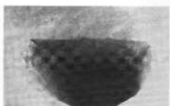
柱穴 1 埋土断面



柱穴 2 埋土断面

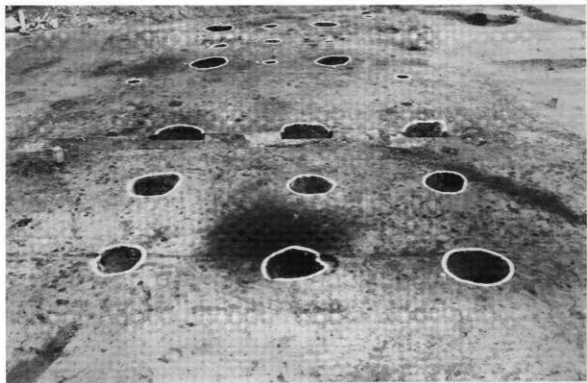


柱穴 3 埋土断面

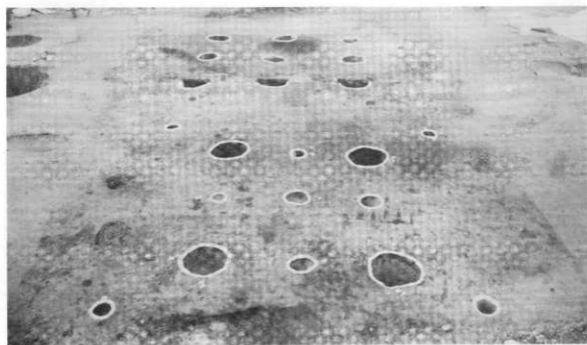


柱穴 4 埋土断面

写真图版18 I-3号住居状遺構

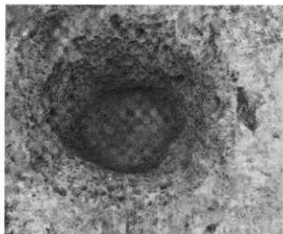


II-1

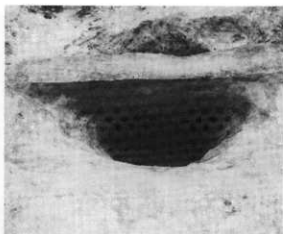


II-2

写真図版19 II-1・2号掘立柱建物跡



Ⅱ-4号土坑 全景



埋土断面



Ⅱ-5号土坑 全景



埋土断面



Ⅱ-6号土坑 全景



埋土断面

写真图版20 Ⅱ-4~6号土坑





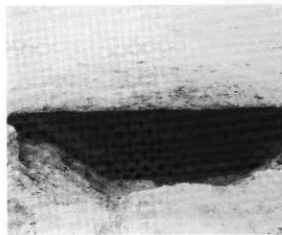
Ⅱ-7号土坑 全景



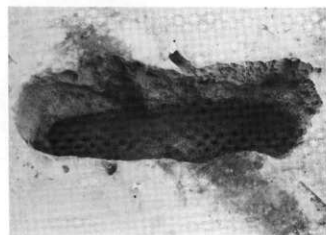
埋土断面



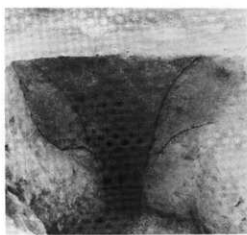
Ⅲ-1号土坑 全景



埋土断面



Ⅲ-3号土坑 全景

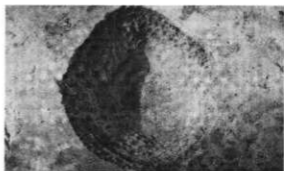


埋土断面

写真图版21 Ⅱ-7、Ⅲ-1·3号土坑



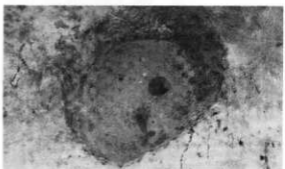
Ⅱ-8号土坑 全景



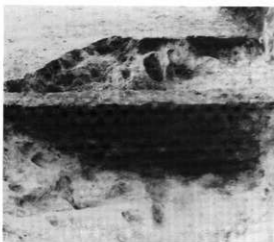
Ⅱ-71号土坑 全景



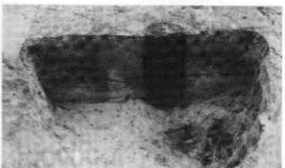
埋土断面



Ⅱ-72号土坑 全景



埋土断面



埋土断面

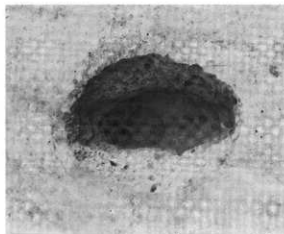
写真图版22 Ⅱ-8·71·72号土坑



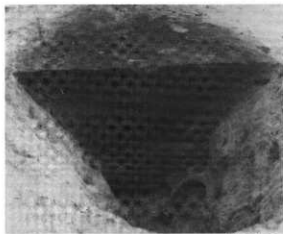
Ⅲ-4号土坑 全景



埋土断面



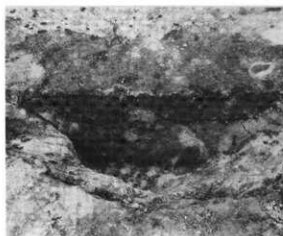
Ⅲ-5号土坑 全景



埋土断面

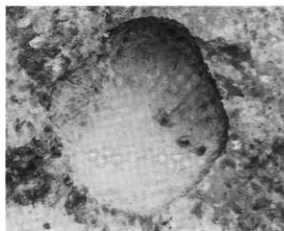


Ⅱ-9号土坑 全景

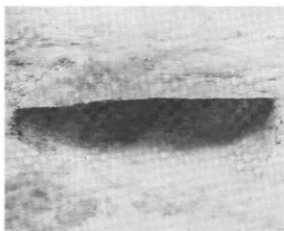


埋土断面

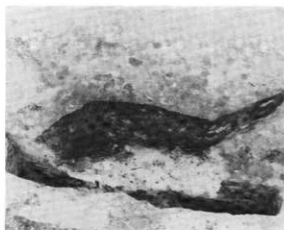
写真图版23 Ⅲ-4·5、Ⅱ-9号土坑



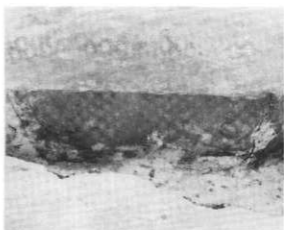
Ⅱ-10号土坑 全景



埋土断面



Ⅱ-11号土坑 全景



埋土断面

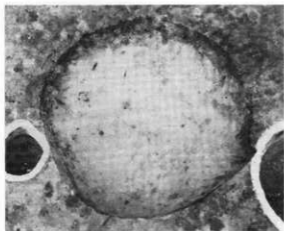


Ⅱ-12号土坑 全景



埋土断面

写真图版24 Ⅱ-10~12号土坑



Ⅱ-13号土坑 全景



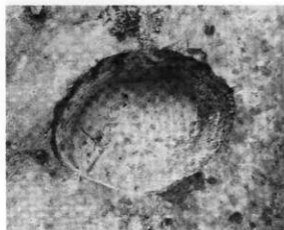
埋土断面



Ⅱ-14号土坑 全景



埋土断面

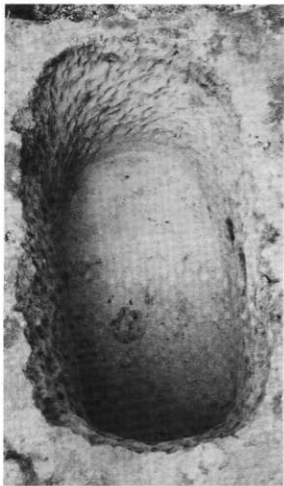


Ⅱ-16号土坑 全景



埋土断面

写真图版25 Ⅱ-13·14·16号土坑



Ⅱ-15号土坑 全景



Ⅱ-17号土坑 全景

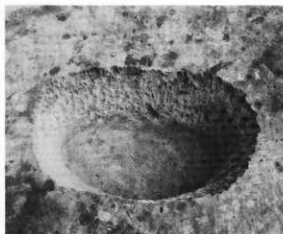


埋土断面

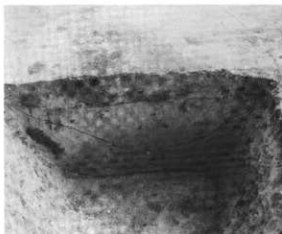


埋土断面

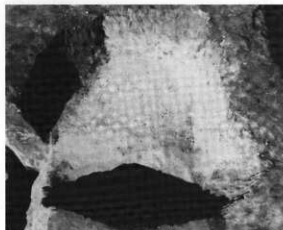
写真图版26 Ⅱ-15·17号土坑



Ⅱ-18号土坑 全景



埋土断面



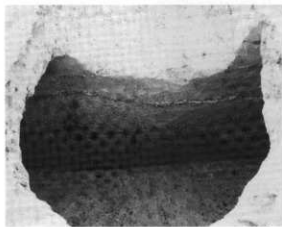
Ⅱ-19号土坑 全景



埋土断面



Ⅱ-20号土坑 全景

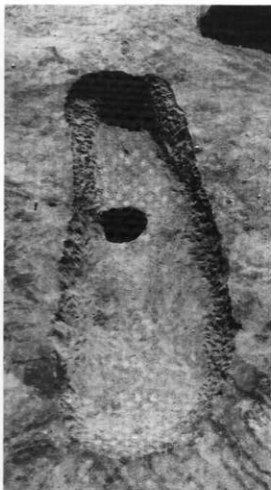


埋土断面

写真图版27 Ⅱ-18~20号土坑



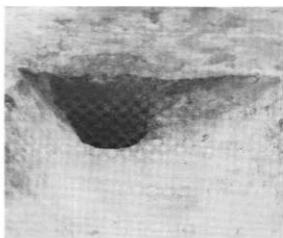
Ⅱ-23号土坑 全景



Ⅱ-24号土坑 全景



埋土断面



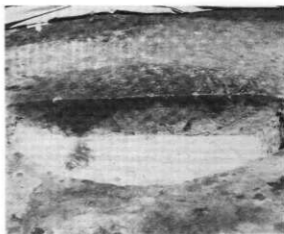
埋土断面

写真图版28 Ⅱ-23·24号土坑

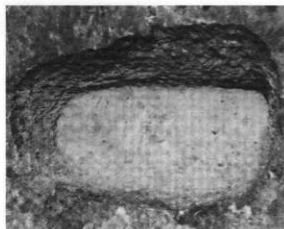




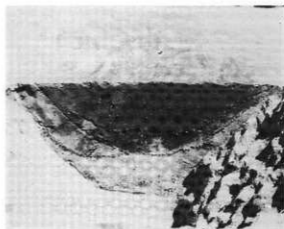
II-21号土坑 全景



埋土断面



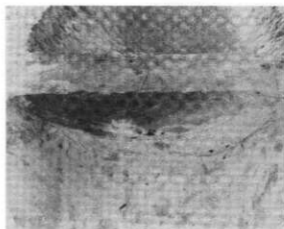
II-22号土坑 全景



埋土断面

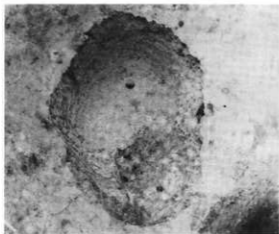


II-25号土坑 全景

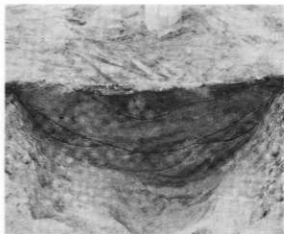


埋土断面

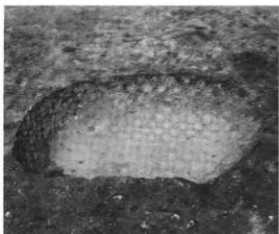
写真图版29 II-21·22·25号土坑



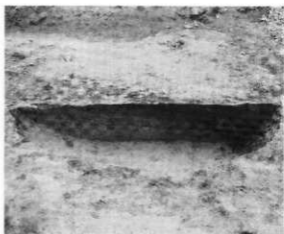
II-26号土坑 全景



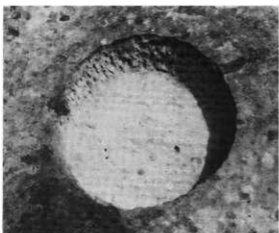
埋土断面



II-27号土坑 全景



埋土断面



II-28号土坑 全景



埋土断面

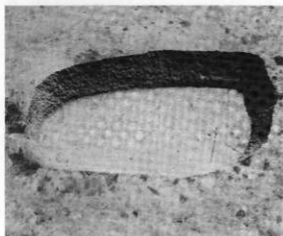
写真图版30 II-26~28号土坑



Ⅱ-29号土坑 全景



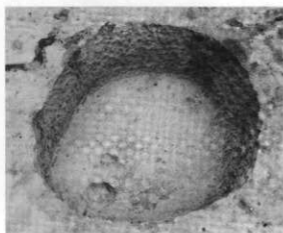
埋土断面



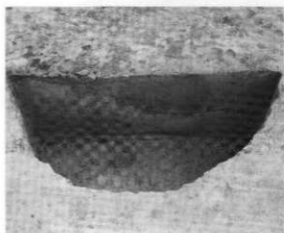
Ⅱ-30号土坑 全景



埋土断面

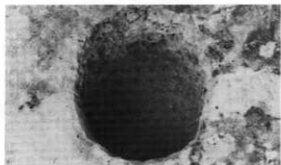


Ⅱ-31号土坑 全景



埋土断面

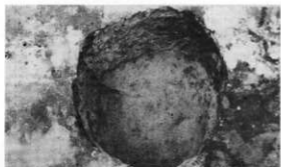
写真图版31 Ⅱ-29~31号土坑



II-59号土坑 全景



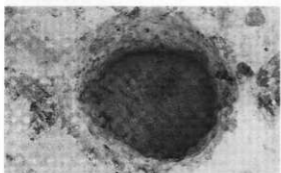
埋土断面



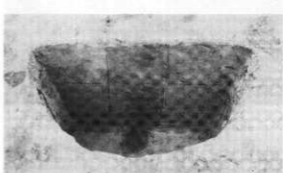
II-60号土坑 全景



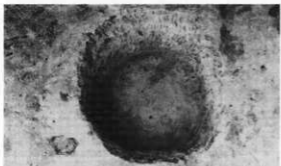
埋土断面



II-61号土坑 全景



埋土断面

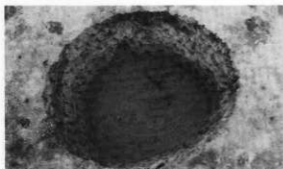


II-62号土坑 全景

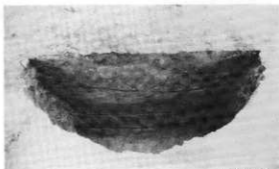


埋土断面

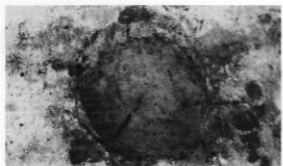
写真图版32 II-59~62号土坑



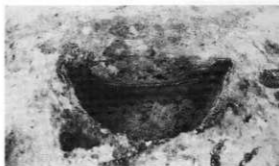
Ⅱ—63号土坑 全景



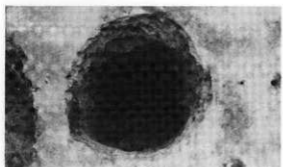
埋土断面



Ⅱ—64号土坑 全景



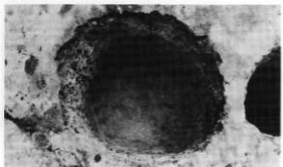
埋土断面



Ⅱ—65号土坑 全景



埋土断面

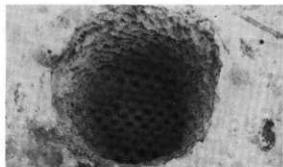


Ⅱ—66号土坑 全景



埋土断面

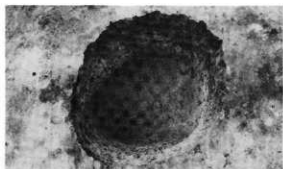
写真图版33 Ⅱ—63~66号土坑



II-67号土坑 全景



埋土断面



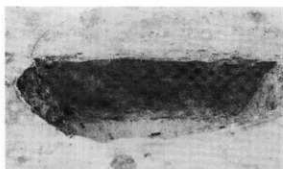
II-68号土坑 全景



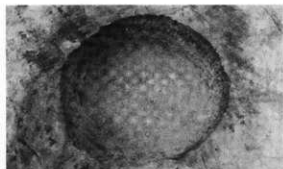
埋土断面



II-69号土坑 全景



埋土断面

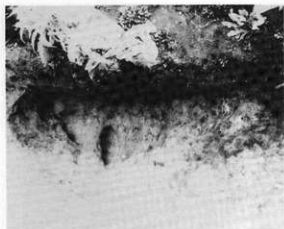


II-70号土坑 全景

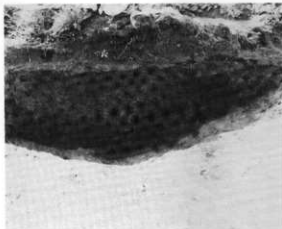


埋土断面

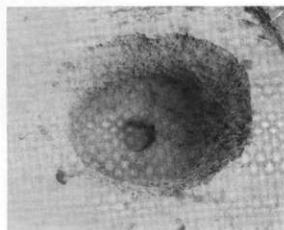
写真图版34 II-67~70号土坑



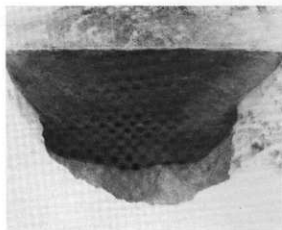
I-1号土坑 全景



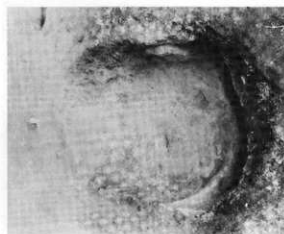
埋土断面



I-4号土坑 全景



埋土断面

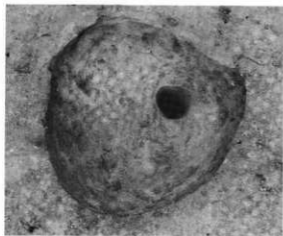


I-7号土坑 全景

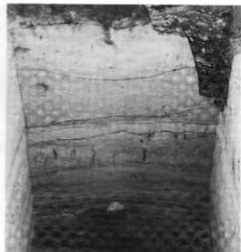


埋土断面

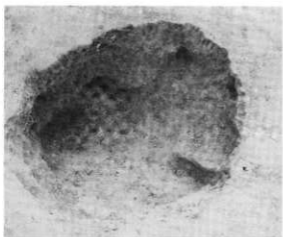
写真图版35 I-1·4·7号土坑



I-9号土坑 全景



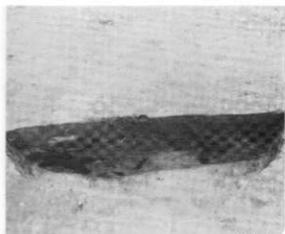
基本土层



I-11号土坑 全景



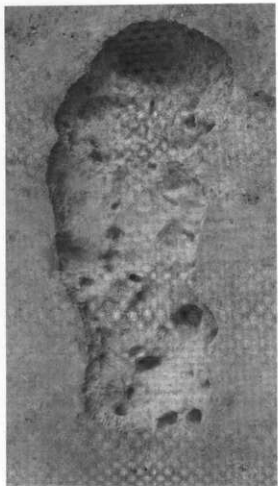
II-32号土坑 全景



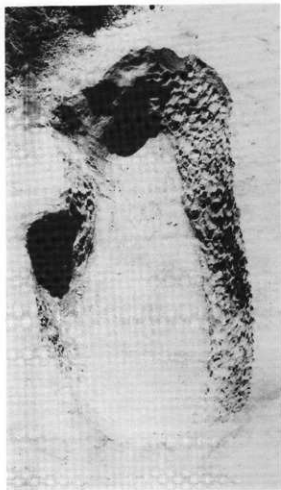
埋土断面

写真图版36 I-9·11、II-32号土坑、基本土层

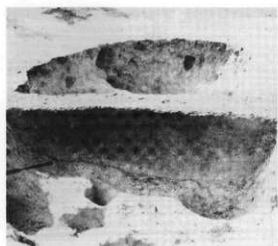




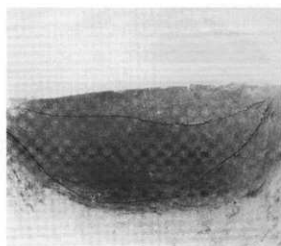
I-2号土坑 全景



I-14号土坑 全景



埋土断面



埋土断面

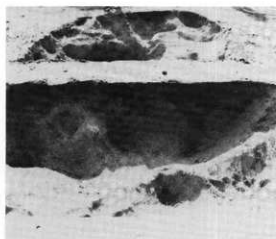
写真图版37 I-2·14号土坑



I-6号土坑 全景



I-12号土坑 全景

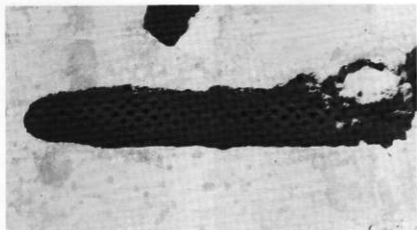


埋土断面



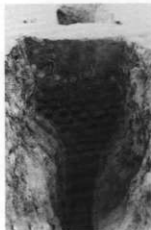
埋土断面

写真图版38 I-6·12号土坑

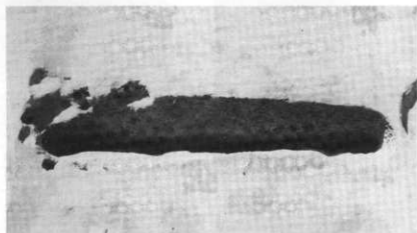


Ⅱ-1号陥し穴状遺構

全景

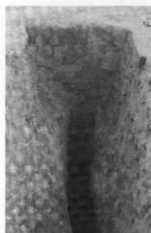


埋土断面

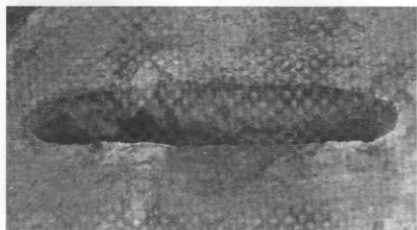


Ⅱ-2号陥し穴状遺構

全景



埋土断面



Ⅱ-3号陥し穴状遺構

全景

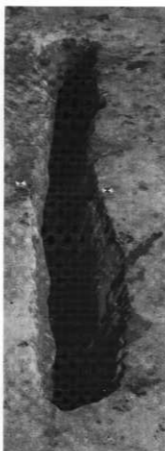


埋土断面

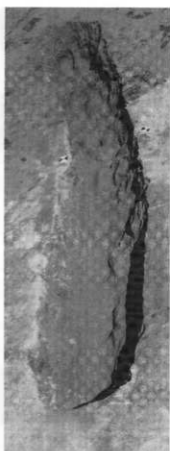
写真図版39 Ⅱ-1～3号陥し穴状遺構



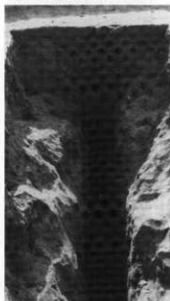
Ⅱ-4号陥し穴状遺構 全景



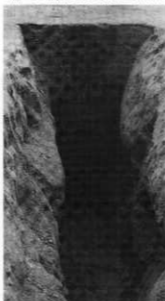
Ⅲ-1号陥し穴状遺構 全景



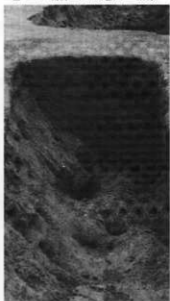
Ⅲ-2号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

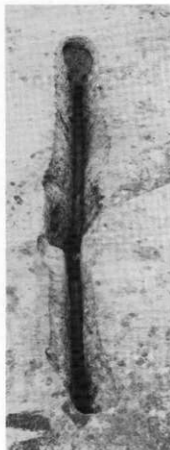


埋土断面



埋土断面

写真図版40 Ⅱ-4、Ⅲ-1・2号陥し穴状遺構



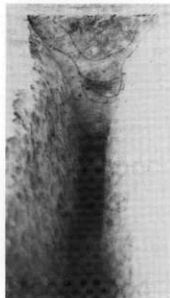
Ⅱ-5号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-6号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-7号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

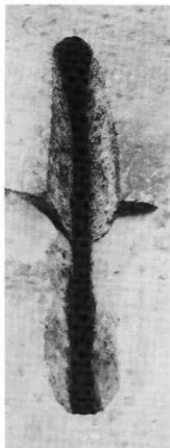


埋土断面

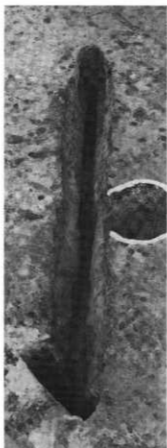


埋土断面

写真図版41 Ⅱ-5～7号陥し穴状遺構



Ⅱ-8号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-9号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-10号陥し穴状遺構 全景



埋土断面



埋土断面



埋土断面

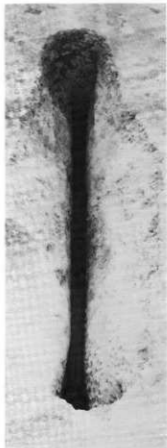
写真図版42 Ⅱ-8～10号陥し穴状遺構



Ⅱ-11号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-12号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-13号陥し穴状遺構 全景



埋土断面



埋土断面



埋土断面

写真図版43 Ⅱ-11~13号陥し穴状遺構



Ⅱ-14号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-15号陥し穴状遺構 全景



Ⅱ-16号陥し穴状遺構 全景



埋土断面



埋土断面

写真図版44 Ⅱ-14~16号陥し穴状遺構





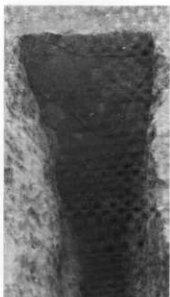
Ⅱ-17号陥し穴状遺構 全景



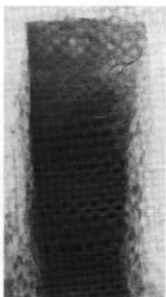
Ⅱ-18号陥し穴状遺構 全景



Ⅲ-6号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

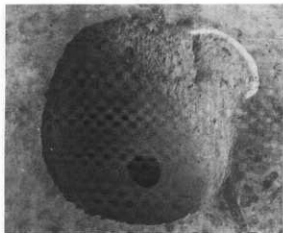


埋土断面



埋土断面

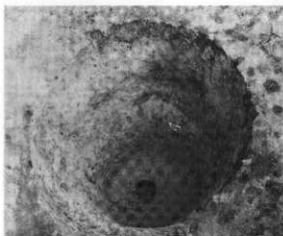
写真図版45 Ⅱ-17・18、Ⅲ-6号陥し穴状遺構



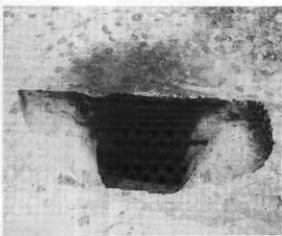
Ⅱ-19号陥し穴状遺構 全景



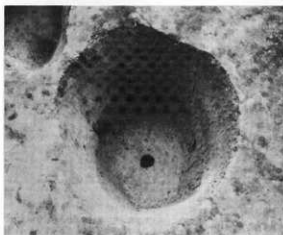
埋土断面



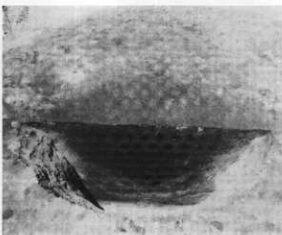
Ⅱ-20号陥し穴状遺構 全景



埋土断面



Ⅱ-21号陥し穴状遺構 全景

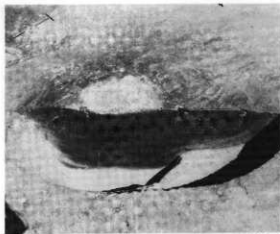


埋土断面

写真図版46 Ⅱ-19~21号陥し穴状遺構



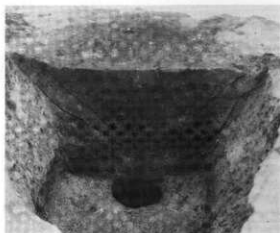
Ⅱ-22号陥し穴状遺構 全景



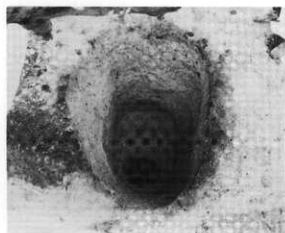
埋土断面



Ⅱ-23号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

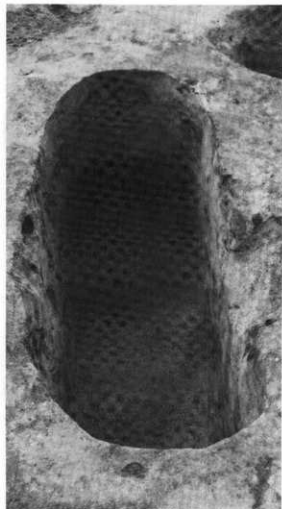


Ⅱ-24号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

写真図版47 Ⅱ-22~24号陥し穴状遺構



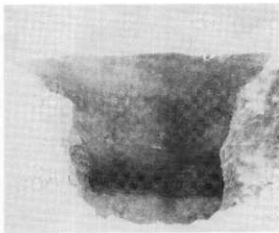
Ⅱ-25号陥し穴状遺構 全景



I-1号陥し穴状遺構 全景



埋土断面



埋土断面

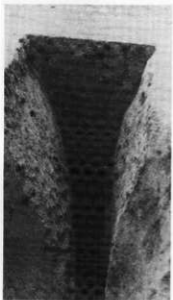
写真図版48 Ⅱ-25、I-1号陥し穴状遺構



Ⅲ-3号陥し穴状遺構 全景



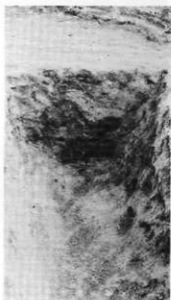
Ⅲ-5号陥し穴状遺構 全景



埋土断面

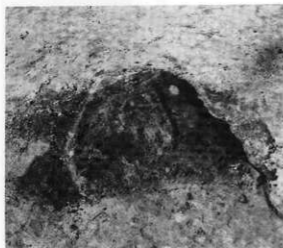


Ⅲ-4号陥し穴状遺構埋土断面



埋土断面

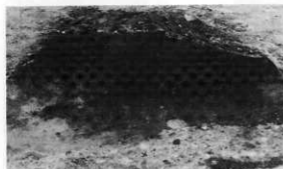
写真図版49 Ⅲ-3～5号陥し穴状遺構



II-1号烧土遗構 全景



断面



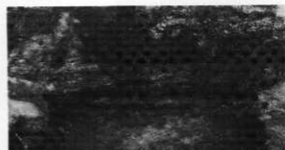
I-1号烧土遗構 全景



II-1号溝跡 全景



埋土断面(1)



埋土断面(2)

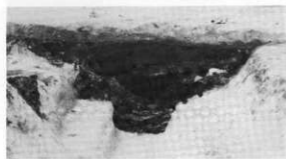
写真図版50 II-1、I-1号烧土遗構、II-1号溝跡



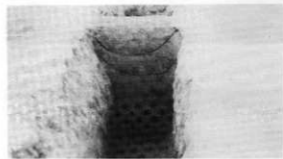
II-2号沟迹 全景



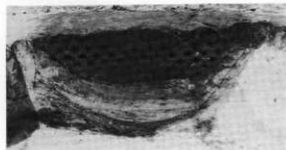
II-3号沟迹 全景



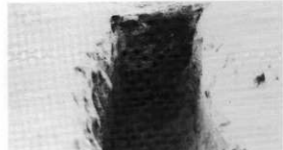
埋土断面(1)



埋土断面(1)



埋土断面(2)

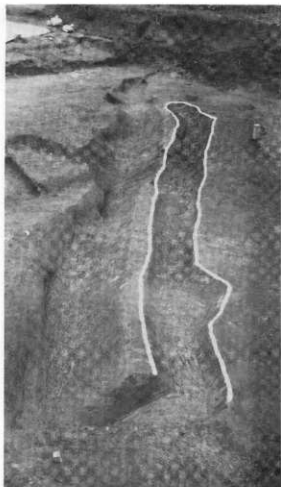


埋土断面(2)

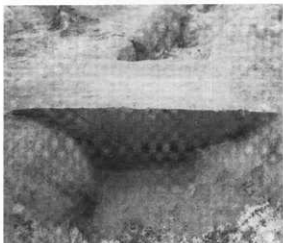
写真图版51 II-2·3号沟迹



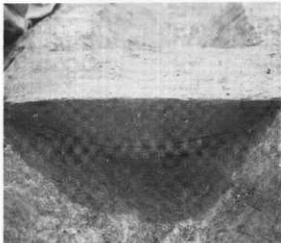
II-4号溝跡 全景



II-5号溝跡 全景



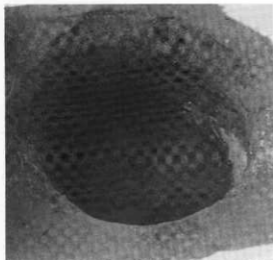
埋土断面



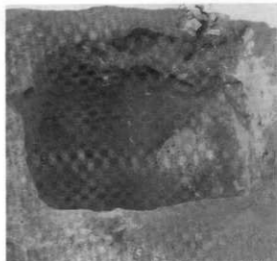
埋土断面

写真図版52 II-4・5号溝跡

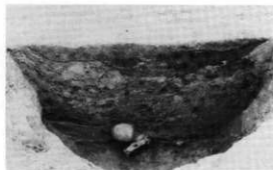




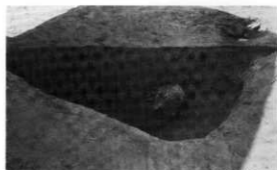
I-1 号墓坑 全景



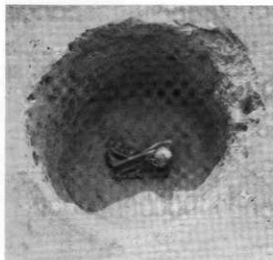
I-2 号墓坑 全景



埋土断面



埋土断面

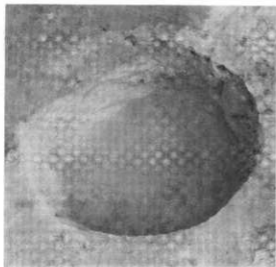


人骨出土状况

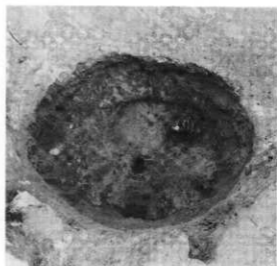


人骨出土状况

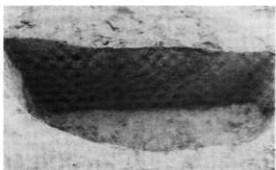
写真图版53 I-1·2号墓坑



I-3号墓坑 全景



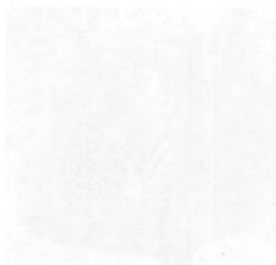
III-1号墓坑 全景



埋土断面

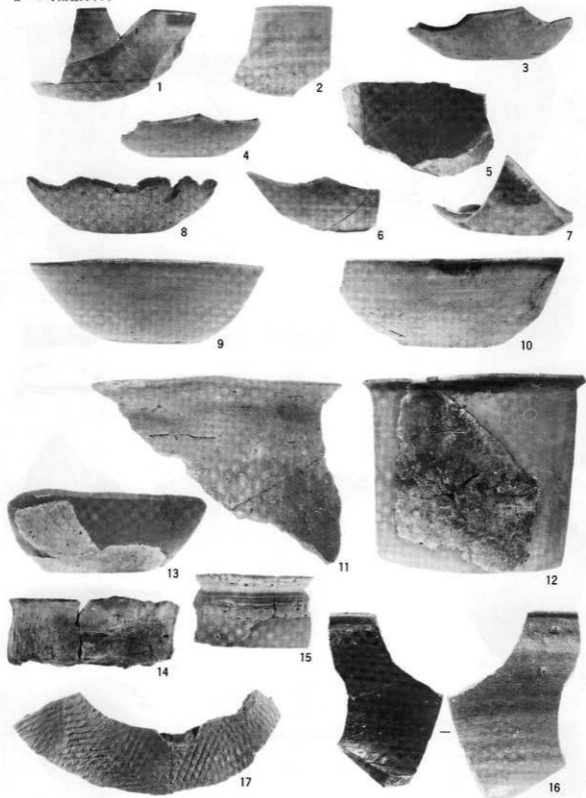


埋葬品出土状况



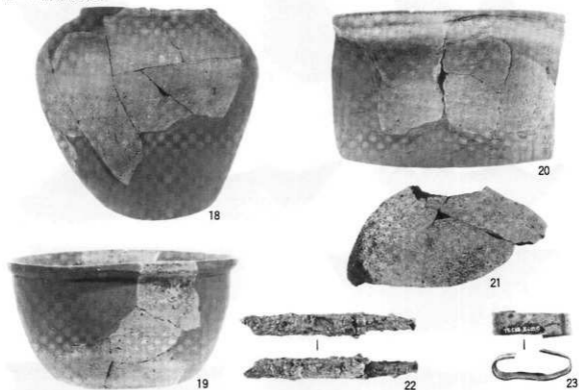
人骨出土状况

Ⅱ-1号住居跡(1)

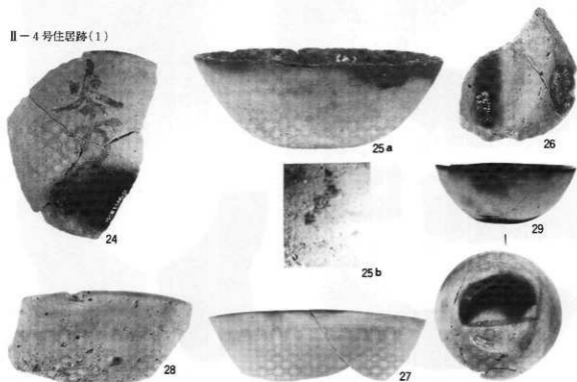


写真図版55 Ⅱ-1号住居跡出土遺物

II-1 号住居跡(2)

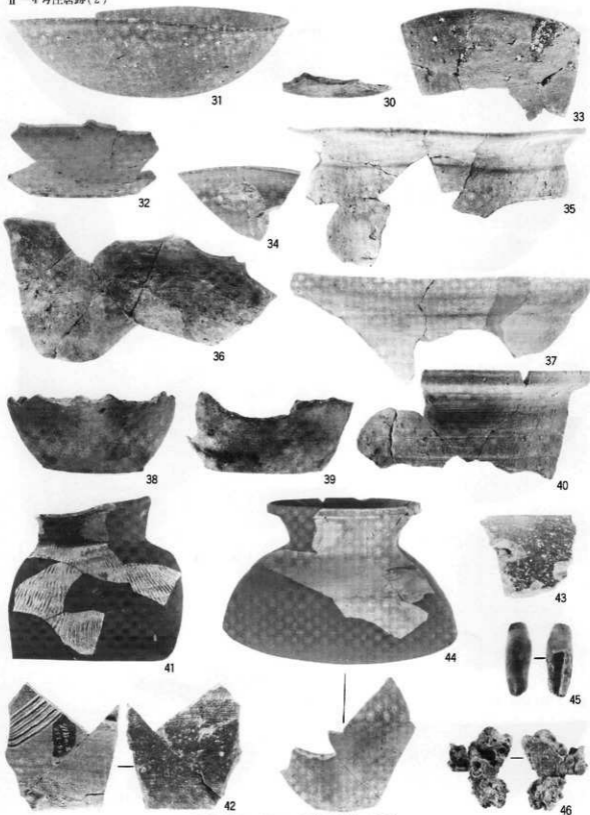


II-4 号住居跡(1)



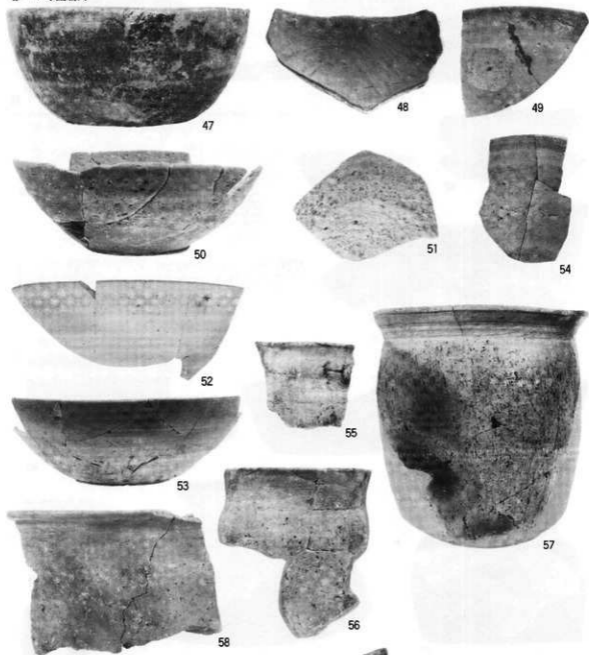
写真図版56 II-1・号住居跡出土遺物

II-4号住居跡(2)



写真図版57 II-4号住居跡出土遺物

II-6号住居跡

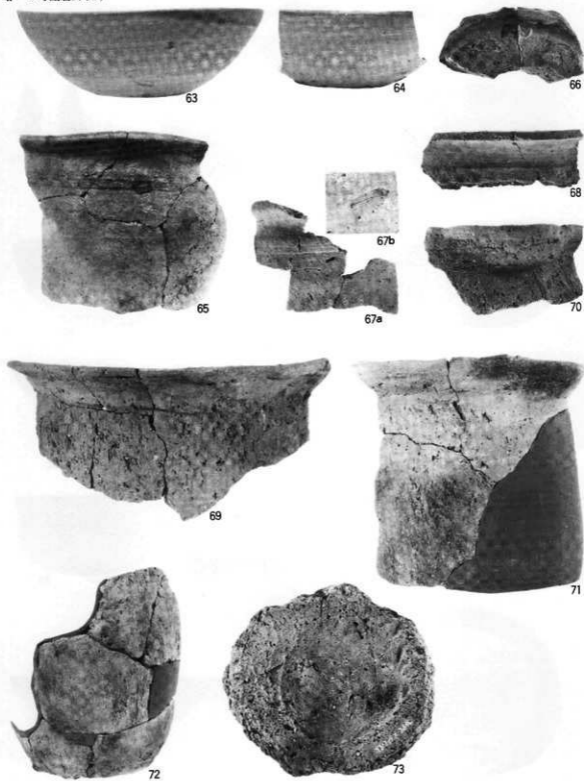


II-2号住居跡(1)



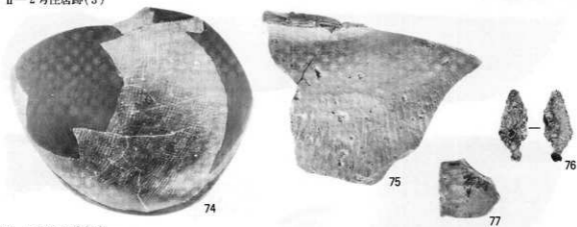
写真図版58 II-6・2号住居跡出土遺物

II-2号住居跡(2)

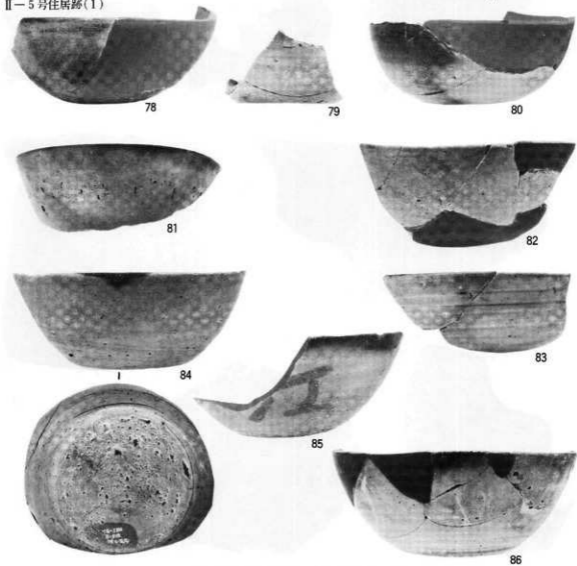


写真図版59 II-2号住居跡出土遺物

II-2号住居跡(3)



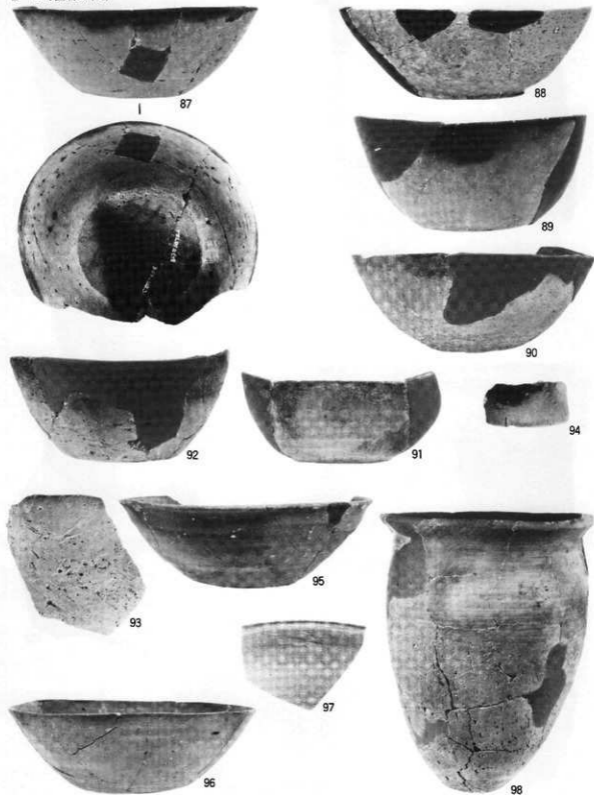
II-5号住居跡(1)



写真図版60 II-2・5号住居跡出土遺物

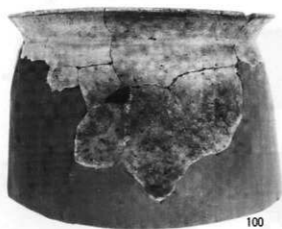


II-5号住居跡(2)



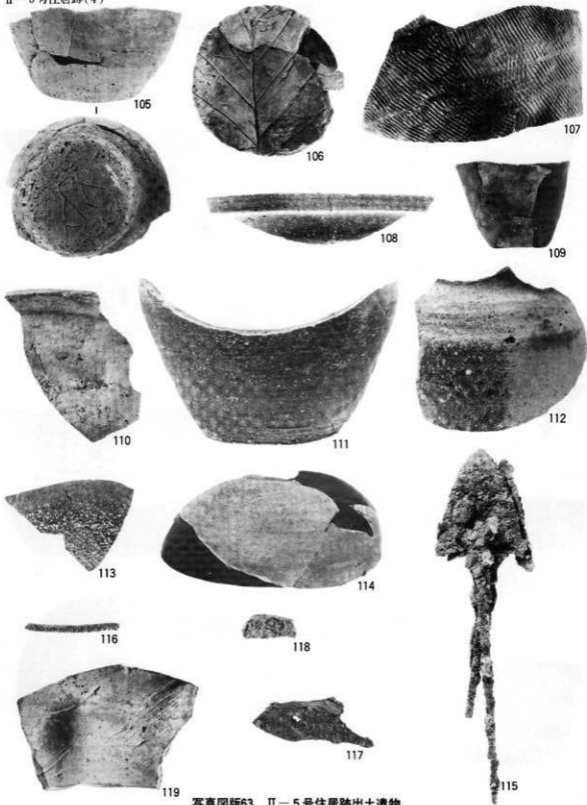
写真図版61 II-5号住居跡出土遺物

II-5号住居跡(3)



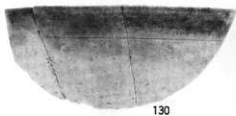
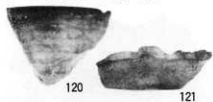
写真図版62 II-5号住居跡出土遺物

II-5 号住居跡(4)



写真図版63 II-5号住居跡出土遺物

II-5号住居跡(5) 120~122

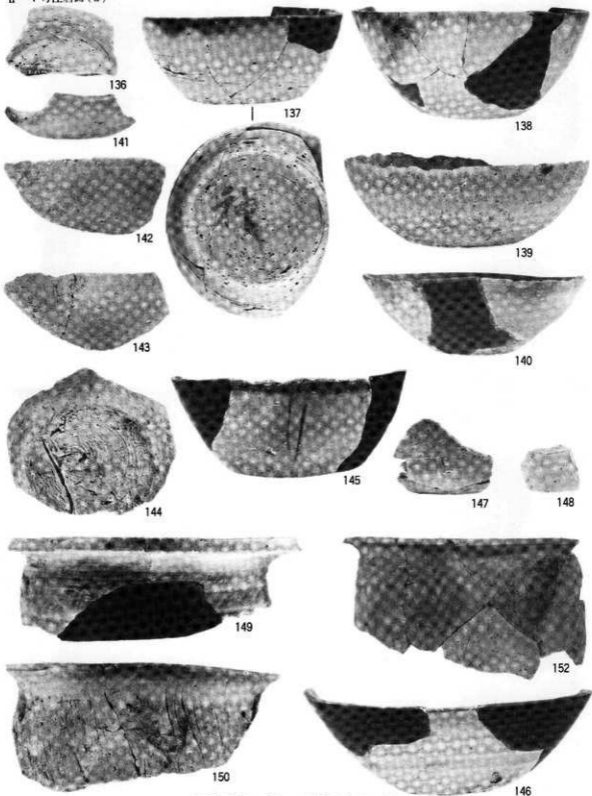


II-7号住居跡(1) 123~135



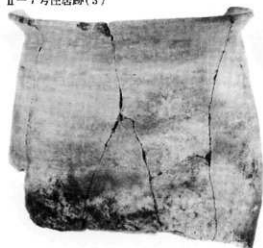
写真図版64 II-5・7号住居跡出土遺物

II-7号住居跡(2)



写真図版65 II-7号住居跡出土遺物

II-7号住居跡(3)



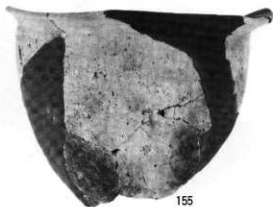
151



153



154



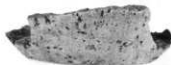
155



156



156



159

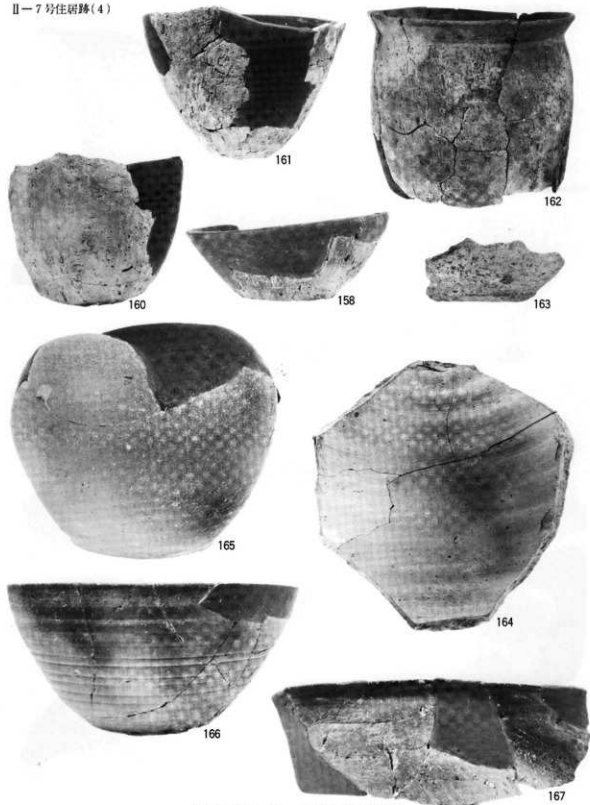


157



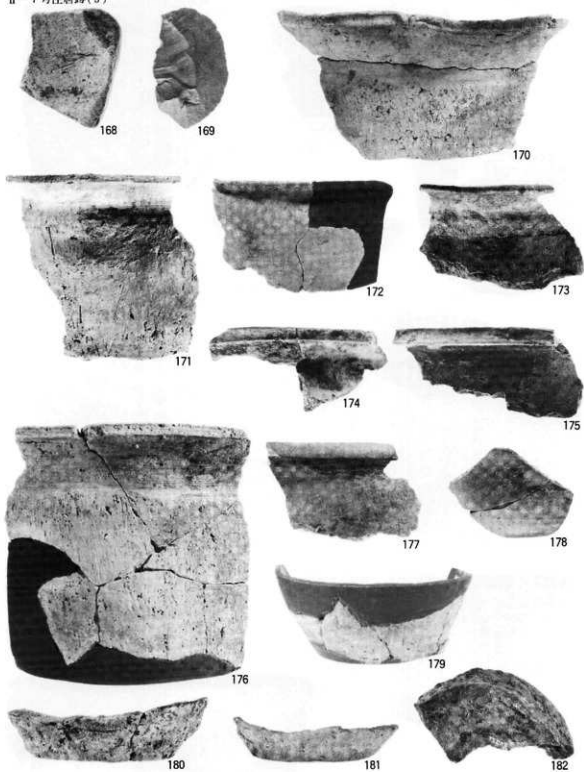
写真図版66 II-7号住居跡出土遺物

Ⅱ-7号住居跡(4)



写真図版67 Ⅱ-7号住居跡出土遺物

II-7号住居跡(5)



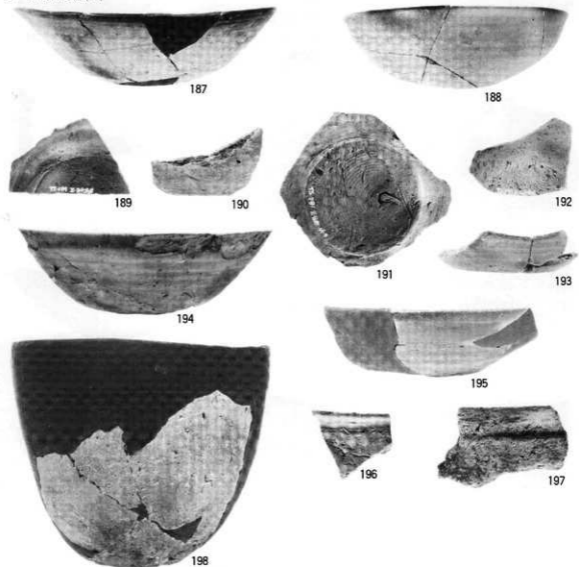
写真図版68 II-7号住居跡出土遺物



II-7号住居跡(6)

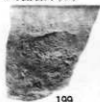


II-8号住居跡(1)

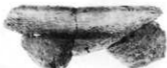


写真図版69 II-7・8号住居跡出土遺物

II-8号住居跡(2)



199



200



201



202



203



204



205



206

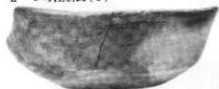


207

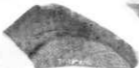


208

II-9号住居跡(1)



209



210



211



214



212



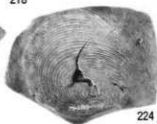
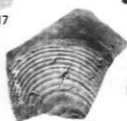
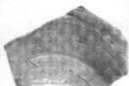
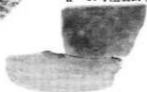
213

写真図版70 II-8・9号住居跡出土遺物

II-9号住居跡(2)



II-10号住居跡(1)



写真図版71 II-9・10号住居跡出土遺物

II-10号住居跡(2)



230



231



232



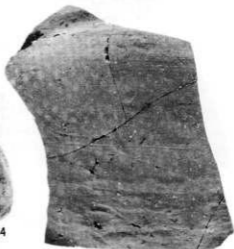
235



236



234



233

II-12号住居跡



237



238



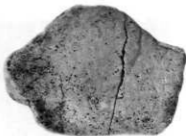
239



240



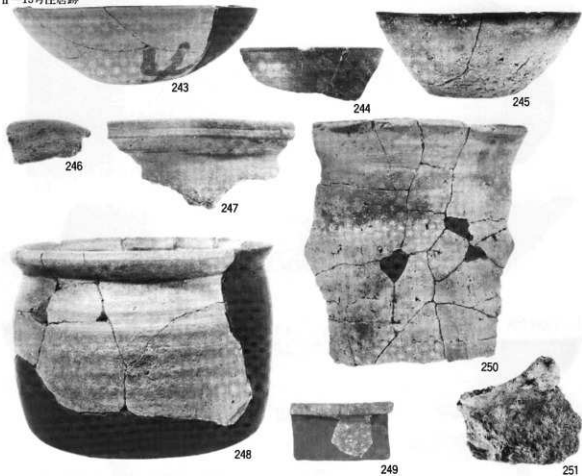
241



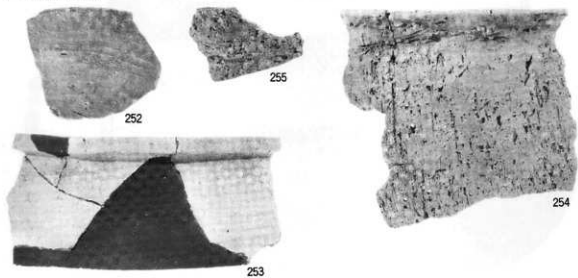
242

写真図版72 II-10・12号住居跡出土遺物

II-13号住居跡



II-14号住居跡(1)



写真図版73 II-13・14号住居跡出土遺物

II-14号住居跡(2)



256



258

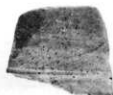


257

II-16号住居跡



259



260

I-1号住居跡



261



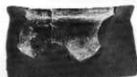
262



263



264



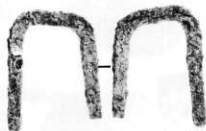
265



267



268



269

写真図版74 II-14・16、I-1号住居跡出土遺物

I-1号烧土



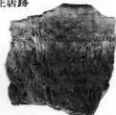
269

I-2号住居跡



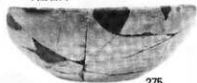
270

II-17号住居跡



274

I-3号住居跡



275

I-1号土坑



278

III-1号住居跡



271



273



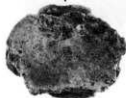
272

II-2号掘立柱建物跡



276

II-6号土坑



I-7号土坑



277

I-6号土坑



279



280



281

写真図版75 I-1号烧土、I-2・3、III-1、II-17号住居跡、II-2号掘立柱建物跡、II-6、I-1・6・7号土坑出土遺物

I-11号土坑



II-12号土坑



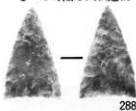
II-20号土坑



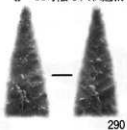
II-45号土坑



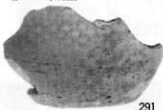
I-1号陷し穴状遺構



II-11号陷し穴状遺構



II-1号焼土



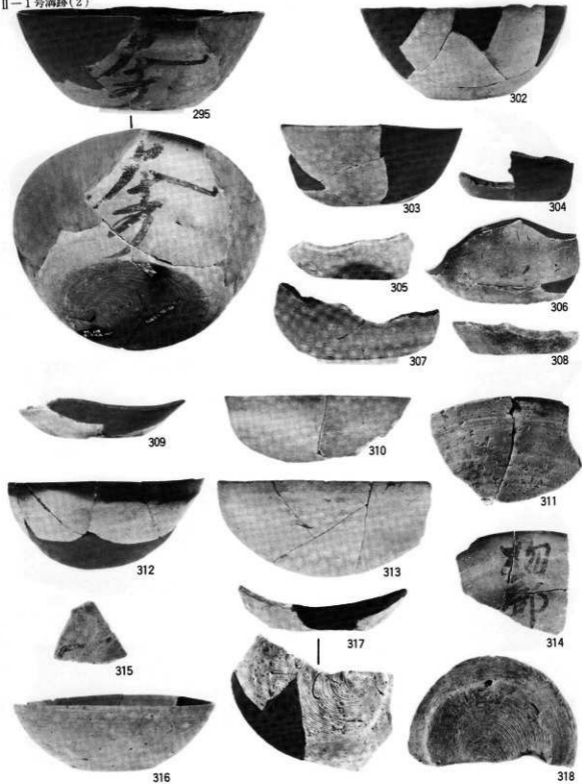
II-1号溝跡(1)



写真図版76 I-11、II-12・20・45号土坑、I-1、II-11号陷し穴状遺構  
II-1号焼土、II-1号溝跡出土遺物

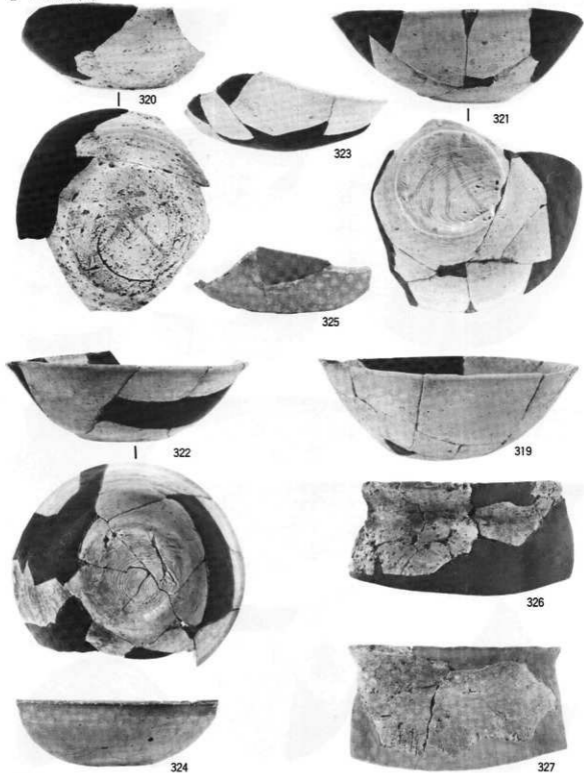


II-1号溝跡(2)



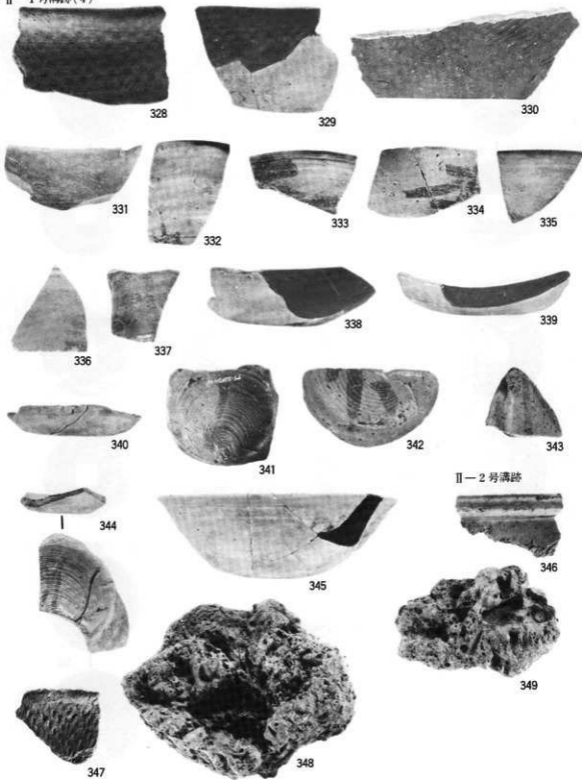
写真図版77 II-1号溝跡出土遺物

Ⅱ-1号沟跡(3)



写真図版78 Ⅱ-1号溝跡出土遺物

II-1号沟跡(4)



II-2号沟跡

写真図版79 II-1・2号溝跡出土遺物

II-5号溝跡



350



351



I-2号墓塚



352



353



354



355



356



357



358



359

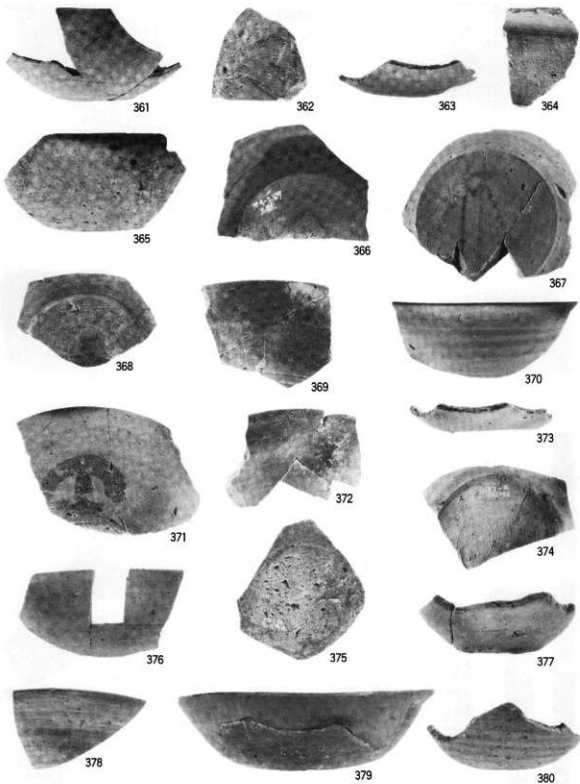
III-1号墓塚



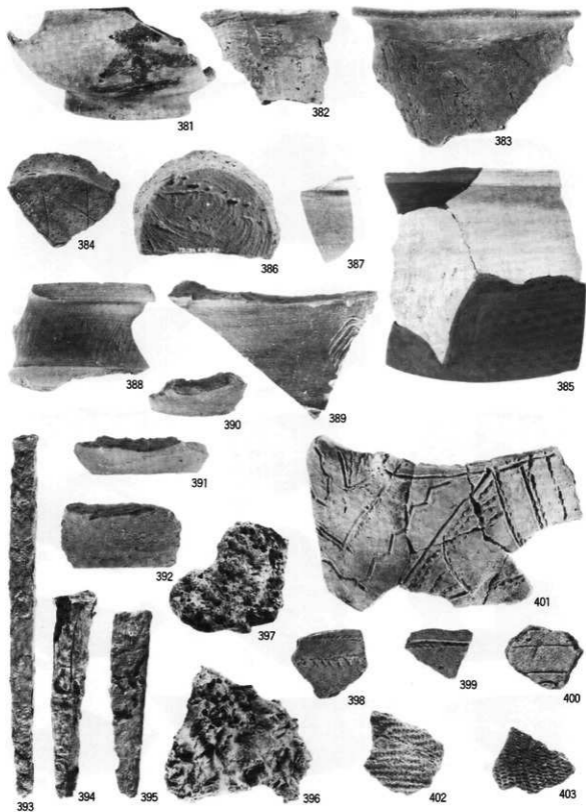
360



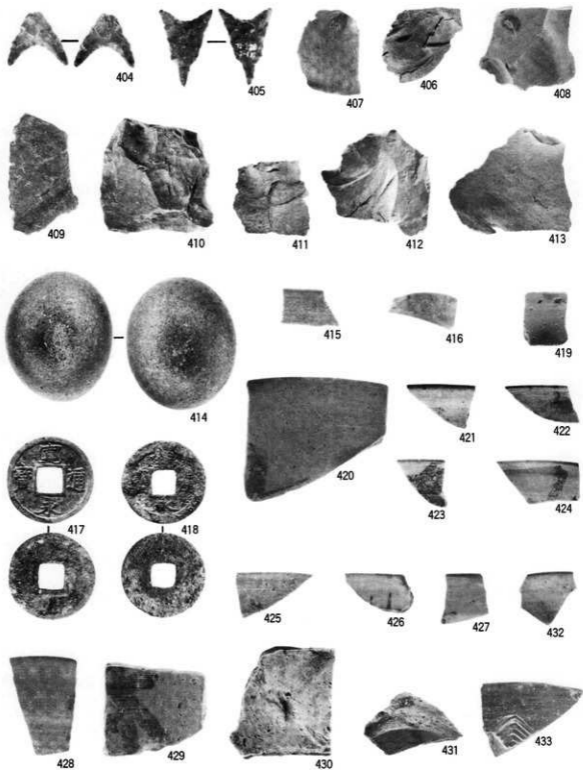
写真図版80 II-5号溝跡、I-2、III-1号墓塚出土遺物



写真図版81 遺構外出土遺物(1)



写真図版82 遺構外出土遺物(2)



写真図版83 遺構外出土遺物(3)

財団法人若手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長 小笠原 喜 一

副 所 長 米 沢 康 雄

[管理課]

管理課長(兼) 米 沢 康 雄

課長補佐 森 岡 陽 一

主 事 阿 部 隆 広

[調査課]

調 査 課 長 昆 野 靖

課長補佐 佐々木 嘉直

主任文化財  
専門調査員 小野田 哲 亨

” 三 浦 謙 一

” 工 藤 利 幸

” 高橋 与右衛門

” 平 井 進

” 中 村 良 一

” 中 川 重 紀

” 藤 村 敏 男

” 高橋 義 介

” 齋 藤 實 實

” 佐 瀬 隆

” 千 葉 孝 雄

” 斎 藤 博 司

” 東海林 隆 幹

” 佐々木 弘

” 川 村 均

” 鈴 木 貞 行

” 伊 東 格

” 遠 藤 修

” 斎 藤 邦 雄

” 神 敏 明

[資料課]

資 料 課 長 高 橋 薫

主任文化財  
専門調査員 田 鎖 壽 夫

嘱 託 吉 田 一 男

” 山 館 昇

運 転 技 師 佐 藤 春 男

兼 技 能 員

文 化 財 佐々木 信 一

專 門 調 査 員 小 原 眞 一

” 村 上 修

” 酒 井 宗 孝

” 松 本 建 速

” 金 子 昭 彦

” 濱 田 宏

” 菅 常 久

” 相 原 伸 裕

” 及 川 靖 世

” 阿 部 勝 則

” 菊 地 明 芳

” 及 川 涉

” 星 雅 之

” 森 下 宏

” 鈴 木 知 己

” 菊 地 幸 裕

” 藤 村 隆

” 千 葉 悟

” 大久保 茂

” 熊 谷 博 由



---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第155集

## 高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書

猿ヶ石川中小河川改修関連遺跡発掘調査

印刷 平成3年3月25日

発行 平成3年3月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 熊谷印刷

〒020岩手県盛岡市上田一丁目6-49

電話 (0196) 53-4151